

横 芝 町

上仁羅台遺跡・西長山野遺跡・東長山野遺跡

—横芝工業団地埋蔵文化財調査報告書—

1 9 9 2

千 葉 県 企 業 庁

財団法人 千葉県文化財センター

横 芝 町

かみ に ら だい

に し な が や ま の

ひ が し な が や ま の

上仁羅台遺跡・西長山野遺跡・東長山野遺跡

—横芝工業団地埋蔵文化財調査報告書—

1 9 9 2

千 葉 県 企 業 庁

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県東総地域は、利根川に流入する幾筋もの小河川と、太平洋に流入する栗山川や高谷川、木戸川などの小支谷によって刻まれた台地が広がっています。この地域は、昔から自然環境に恵まれ小河川沿いの台地上には多くの遺跡が所在しております。

千葉県企業庁は、千葉県が策定した「ふるさと千葉5ヵ年計画」や「千葉県工業立地振興ビジョン」の一環として千葉県の工業の高度化、雇用の促進、地域経済の活性化をはかることを目的として、臨空ゾーンの中心に位置する中核工業団地としての横芝工業団地の建設を計画しました。

そこで、千葉県教育委員会は事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、県企業庁をはじめ関係諸機関と慎重な協議を重ねてきましたが、計画変更による現状保存は不可能であり、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなり、昭和63年10月から財団法人千葉県文化財センターが上仁羅台遺跡・西長山野遺跡・東長山野遺跡について発掘調査を実施してまいりました。

調査は、平成2年3月に終了し、旧石器時代と縄文時代を中心とした遺構や遺物を多数検出しました。上仁羅台遺跡と西長山野遺跡では縄文時代後期から晩期にかけての包含層や旧石器時代の石器集中地点を検出しました。特に旧石器時代の資料は遺跡分布の比較的希薄な地域だけに注目されています。縄文時代の包含層の遺物も後期から晩期まで連続しており、これらの調査成果は当時の人々の生活を知るうえで貴重な資料になるものと思われます。このたび、調査成果を報告書として刊行する運びとなりました。本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護・普及のために広く一般の方々に活用されることを願ってやみません。

終わりに、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、種々御指導いただいた千葉県教育庁生涯学習部文化課をはじめ、千葉県企業庁、横芝町教育委員会、地元関係諸機関各位の御協力に厚くお礼申し上げますとともに、酷暑の中、調査に協力された多くの調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

平成4年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 岩瀬良三

例 言

1. 本書は、千葉県企業庁による横芝工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書で、上仁羅台遺跡・西長山野遺跡・東長山野遺跡を収録している。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが行なった。
3. 発掘調査は、確認調査を昭和63年10月20日より平成元年3月25日まで、本調査を平成元年4月5日より平成2年3月19日まで調査部長堀部昭夫、部長補佐阪田正一、班長矢戸三男、藤崎芳樹の指導のもとに主任技師小久貫隆史・技師井上哲朗が行なった。
4. 整理作業及び報告書作成作業は、平成2年4月1日より平成3年3月31日まで調査部長堀部昭夫、部長補佐阪田正一、班長藤崎芳樹の指導のもとに主任技師太田文雄、技師矢本節朗が行なった。
5. 本書の執筆は、旧石器時代と縄文時代以降の石器を矢本が、縄文時代の遺構、土器及びその他の執筆を太田が、編集は太田と矢本が共同で行なった。
6. 写真撮影のうち遺跡・遺構関係はそれぞれの発掘担当者が行ない、整理作業に伴う遺物撮影は太田・矢本が担当した。ただし、空中写真については、京業測量株式会社の撮影によるものを使用した。
7. 本書に使用した図面の方位は、座標北を示すものである。
8. 本書に使用した地形図のうち、第1図は国土地理院発行の1:25,000 多古，成東である。
9. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、各諸機関のご指導、ご協力をいただいた。深く謝意を表す次第です。

千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県企業庁、横芝町教育委員会、山武都市文化財センター

本文目次

序文 例言 目次

序章

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 各遺跡の位置と地理的環境	1
第3節 調査概要と調査方法	4
1. 各遺跡の調査概要	4
2. 調査方法	5
3. 層序	5

第1章 上仁羅台遺跡

第1節 旧石器時代	11
第2節 縄文時代	55
1. 遺構	55
2. 遺物	61
第3節 その他の遺構と遺物	88

第2章 西長山野遺跡

第1節 旧石器時代	91
第2節 縄文時代	142
1. 遺構	142
2. 遺物	149
第3節 その他の遺構と遺物	164

第3章 まとめ

第1節 旧石器時代	167
第2節 縄文時代	176

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡位置図
第2図 遺跡周辺地形図
第3図 各遺跡の土層投影図
第4図 東長山野遺跡グリッド配置図
第5図 各遺跡の基本土層図
第6図 上仁羅台遺跡ブロック配置図
第7図 ブロック・礫群分布図
第8図 第1ブロック器種別遺物分布図
第9図 第1ブロック石器実測図
第10図 第2ブロック器種別・母岩別遺物分布図
第11図 第2ブロック石器実測図
第12図 第3ブロック器種別遺物分布図
第13図 第3ブロック母岩別遺物分布図
第14図 第3ブロック石器実測図
第15図 第4ブロック器種別遺物分布図
第16図 第4ブロック石器実測図
第17図 第5ブロック器種別遺物分布図
第18図 第5ブロック石器実測図
第19図 第6ブロック器種別遺物分布図
第20図 第6ブロック石器実測図
第21図 第7ブロック器種別遺物分布図
第22図 第4～7ブロック母岩別遺物分布図
第23図 第7ブロック石器実測図(1)
第24図 第7ブロック石器実測図(2)
第25図 第8ブロック器種別遺物分布図
第26図 第8ブロック母岩別遺物分布図
第27図 第8ブロック石器実測図(1)
第28図 第8ブロック石器実測図(2)
第29図 第8ブロック石器実測図(3)
第30図 第8ブロック石器実測図(4)
第31図 第8ブロック石器実測図(5)
第32図 第8ブロック石器実測図(6)
第33図 単独出土石器実測図・分布図
第34図 表採資料石器実測図
第35図 第1～3号礫群・礫群内接合分布図
第36図 第4・5号礫群・礫群内接合分布図
第37図 第6・7号礫群・礫群内接合分布図
第38図 第8・9号礫群・礫群内接合分布図
第39図 第1～3号礫群・礫群外接合分布図
第40図 第4～9号礫群・礫群外接合分布図
第41図 第4～7号礫群・礫群外接合分布図
第42図 上仁羅台遺跡遺構配置図
第43図 001・002陥穴
第44図 グリッド別出土土器分布図1(全体)
第45図 グリッド別出土土器分布図2(後期)
第46図 グリッド別出土土器分布図3(晩期)
第47図 縄文土器拓影図(1)
第48図 縄文土器拓影図(2)
第49図 縄文土器拓影図(3)
第50図 縄文土器拓影図(4)
第51図 縄文土器拓影・実測図(5)
第52図 縄文土器拓影図(6)
第53図 縄文土器拓影図(7)
第54図 縄文土器拓影・実測図(8)
第55図 縄文土器拓影図(9)
第56図 縄文土器拓影図(10)
第57図 縄文土器拓影図(11)
第58図 縄文土器拓影・実測図(12)
第59図 縄文土器拓影・実測図(13)
第60図 縄文土器拓影図(14)
第61図 縄文土器拓影図(15)
第62図 縄文土器実測図(16)
第63図 土器片録実測図
第64図 縄文時代以降石器実測図(1)
第65図 縄文時代以降石器実測図(2)
第66図 003炭痕
第67図 出土銭貨
第68図 西山長野遺跡ブロック配置図
第69図 第1ブロック器種別分布図
第70図 第1ブロック母岩別分布図
第71図 第1ブロック石器実測図(1)
第72図 第1ブロック石器実測図(2)
第73図 第2ブロック器種別遺物分布図
第74図 第2ブロック石器実測図
第75図 第3ブロック器種別遺物分布図
第76図 第2・3ブロック母岩別遺物分布図
第77図 第3ブロック石器実測図(1)
第78図 第3ブロック石器実測図(2)
第79図 第4ブロック器種別遺物分布図
第80図 第4ブロック石器実測図
第81図 第5ブロック器種別遺物分布図
第82図 第5ブロック石器実測図
第83図 第6ブロック器種別遺物分布図
第84図 第6ブロック母岩別遺物分布図(1)

第 85 図	第 6 ブロック母岩別遺物分布図(2)	第107 図	6E-70(上)・6E-74(下)単独遺物分布図
第 86 図	第 6 ブロック母岩別遺物分布図(3)	第108 図	6E-70(左)・6E-74(右)遺物石器実測図
第 87 図	第 6 ブロック石器実測図(1)	第109 図	表採遺物石器実測図
第 88 図	第 6 ブロック石器実測図(2)	第110 図	西長山野遺跡遺構配置図
第 89 図	第 6 ブロック石器実測図(3)	第111 図	001~005・007陥穴
第 90 図	第 7 ブロック器種別遺物分布図	第112 図	008・009陥穴
第 91 図	第 7 ブロック石器実測図	第113 図	グリッド別出土石器分布図1(全体)
第 92 図	第 8 ブロック器種別遺物分布図	第114 図	グリッド別出土石器分布図2(後期)
第 93 図	第 8 ブロック石器実測図	第115 図	グリッド別出土石器分布図3(晩期)
第 94 図	第 9 ブロック器種別遺物分布図	第116 図	縄文土器拓影図・実測図(1)
第 95 図	第 8・9 ブロック母岩別遺物分布図	第117 図	縄文土器拓影図(2)
第 96 図	第 9 ブロック石器実測図(1)	第118 図	縄文土器拓影図・実測図(3)
第 97 図	第 9 ブロック石器実測図(2)	第119 図	縄文土器拓影図(4)
第 98 図	第 9 ブロック石器実測図(3)	第120 図	縄文土器拓影・実測図(5)
第 99 図	第 9 ブロック石器実測図(4)	第121 図	縄文土器拓影図(6)
第100 図	第 9 ブロック石器実測図(5)	第122 図	縄文土器拓影図・実測図(7)
第101 図	第 9 ブロック石器実測図(6)	第123 図	縄文土器実測図(8)
第102 図	第 9 ブロック石器実測図(7)	第124 図	土器片鎌実測図
第103 図	第10ブロック器種別遺物分布図	第125 図	石器実測図(1)
第104 図	第10ブロック石器実測図	第126 図	010炭窯、006土坑
第105 図	第11ブロック器種別遺物分布図	第127 図	出土銭貨
第106 図	第11ブロック石器実測図		

表 目 次

第 1 表	第 1 ブロック石器属性表	第20表	第 8 号礫群礫属性表
第 2 表	第 2 ブロック石器属性表	第21表	第 9 号礫群礫属性表
第 3 表	第 3 ブロック石器属性表	第22表	上仁羅台遺跡石器属性表
第 4 表	第 4 ブロック石器属性表	第23表	第 1 ブロック石器属性表
第 5 表	第 5 ブロック石器属性表	第24表	第 2 ブロック石器属性表
第 6 表	第 6 ブロック石器属性表	第25表	第 3 ブロック石器属性表
第 7 表	第 7 ブロック石器属性表	第26表	第 4 ブロック石器属性表
第 8 表	第 8 ブロック石器属性表	第27表	第 5 ブロック石器属性表
第 9 表	第 2 文化層器種組成表	第28表	第 6 ブロック石器属性表
第10表	第 2 文化層石材組成表	第29表	第 7 ブロック石器属性表
第11表	単独石器属性表	第30表	第 8 ブロック石器属性表
第12表	表採石器属性表	第31表	第 9 ブロック石器属性表
第13表	第 1 号礫群礫属性表	第32表	第 1 文化層器種組成表
第14表	第 2 号礫群礫属性表	第33表	第 1 文化層石材組成表
第15表	第 3 号礫群礫属性表	第34表	第10ブロック石器属性表
第16表	第 4 号礫群礫属性表	第35表	第11ブロック石器属性表
第17表	第 5 号礫群礫属性表	第36表	単独石器属性表
第18表	第 6 号礫群礫属性表	第37表	表採石器属性表
第19表	第 7 号礫群礫属性表	第38表	西長山野遺跡石器属性表

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡周辺の空中写真
(上仁羅台遺跡)
- 図版 2 第1～8ブロック遺物出土状況
縄文包含層遺物出土状況
- 図版 3 第1ブロック出土石器
第2ブロック出土石器
- 図版 4 第3ブロック出土石器
- 図版 5 第4ブロック出土石器
第5ブロック出土石器
- 図版 6 第6ブロック出土石器
第7ブロック出土石器(1)
- 図版 7 第7ブロック出土石器(2)
- 図版 8 第8ブロック出土石器(1)
- 図版 9 第8ブロック出土石器(2)
- 図版10 第8ブロック出土石器(3)
- 図版11 第8ブロック出土石器(4)
- 図版12 単独出土・表採資料石器
- 図版13 001・002陥穴、003土坑
- 図版14 包含層出土石器(1)
- 図版15 包含層出土石器(2)
- 図版16 包含層出土石器(3)
- 図版17 包含層出土石器(4)
- 図版18 包含層出土石器(5)
- 図版19 包含層出土石器(6)
- 図版20 包含層出土石器(7)
- 図版21 包含層出土石器(8)
- 図版22 包含層出土石器(9)
- 図版23 包含層出土石器(10)
- 図版24 包含層出土石器(11)
- 図版25 包含層出土石器(12)
- 図版26 包含層出土石器(13)
- 図版27 包含層出土石器(14)
- 図版28 縄文時代以降出土石器
(西長山野遺跡)
- 図版29 第1ブロック石器出土状況
第2・3ブロック石器出土状況
- 図版30 第4ブロック石器出土状況
第6ブロック石器出土状況
- 図版31 第7・8・9ブロック石器出土状況
第11ブロック石器出土状況
- 図版32 第1ブロック出土石器
- 図版33 第2ブロック出土石器
第3ブロック出土石器(1)
- 図版34 第3ブロック出土石器(2)
第4ブロック出土石器
- 図版35 第5ブロック出土石器
第6ブロック出土石器(1)
- 図版36 第6ブロック出土石器(2)
- 図版37 第6ブロック出土石器(3)
第7ブロック出土石器
- 図版38 第8ブロック出土石器
第9ブロック出土石器(1)
- 図版39 第9ブロック出土石器(2)
- 図版40 第9ブロック出土石器(3)
- 図版41 第9ブロック出土石器(4)
- 図版42 第9ブロック出土石器(5)
- 図版43 第9ブロック出土石器(6)
- 図版44 第10ブロック出土石器
第11ブロック出土石器
- 図版45 単独出土・表採資料石器
- 図版46 001～005・007陥穴
- 図版47 008・009陥穴、010炭窟、006土坑
- 図版48 縄文包含層遺物出土状況(1)
縄文包含層遺物出土状況(2)
- 図版49 包含層出土石器(1)
- 図版50 包含層出土石器(2)
- 図版51 包含層出土石器(3)
- 図版52 包含層出土石器(4)
- 図版53 包含層出土石器(5)
- 図版54 包含層出土石器(6)
- 図版55 縄文時代以降出土石器

序 章

第1節 調査に至る経緯

千葉県企業庁は、千葉県で策定した「ふるさと千葉5カ年計画」及び「千葉県工業立地振興ビジョン」に沿って臨空ゾーンの中心部に位置する中核工業団地を指向し、千葉県の工業構造の質的転換と高度化を図るとともに雇用の場を創出し、あわせて地域経済の活性化を図ることを目的に、山武郡横芝町中台地先に横芝工業団地建設を計画した。建設工事に先立ち千葉県教育委員会に対し、昭和61年10月24日付け企地建一第42号で工事予定地内における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会があり、現地調査を実施したところ用地内に縄文土器散布地が3箇所所在することが確認されたため、昭和62年3月12日付け教文第7号の689でその旨を千葉県企業庁に回答した。その後、遺跡の取扱いについて協議を重ねた結果、事業計画の変更が困難であることから、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

第2節 各遺跡の位置と地理的環境

本報告は3遺跡を取録しているが、各遺跡の所在地は上仁羅台遺跡が横芝町遠山、西・東長山野遺跡が同長倉で谷を隔てた台地上に立地している(第2図)。

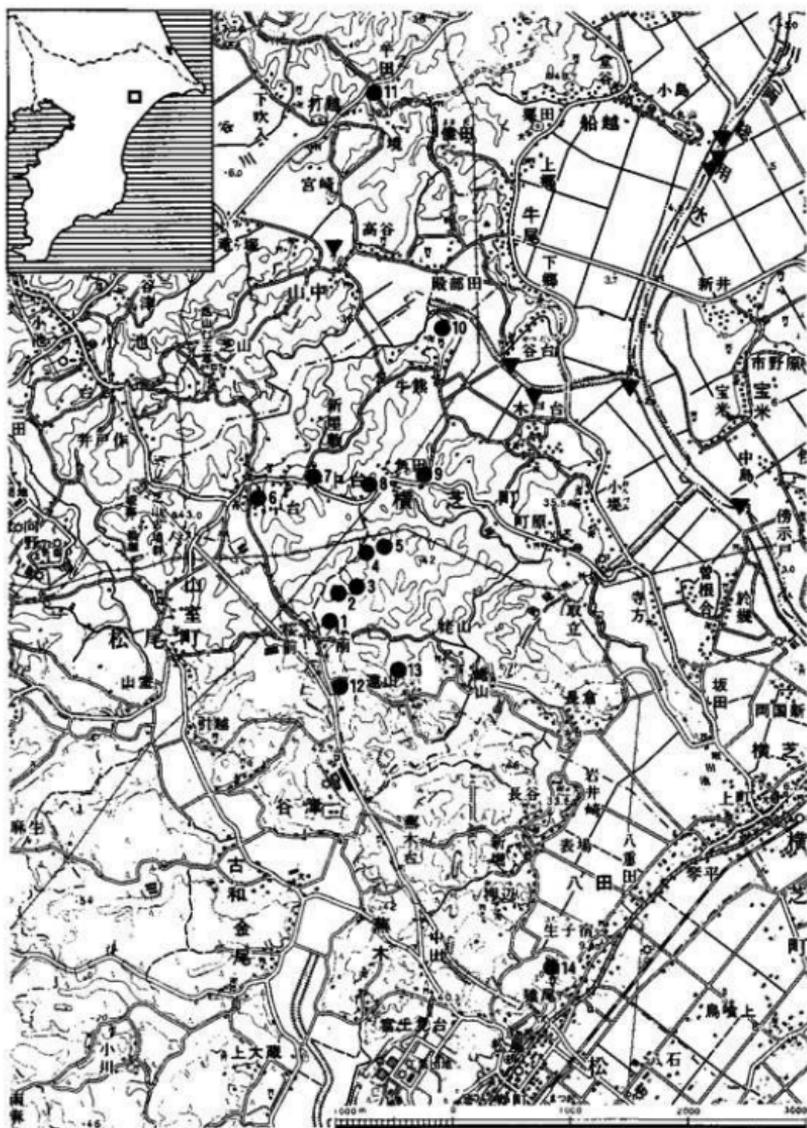
東総台地は、成田市、八街町を結ぶラインで分水嶺となり利根川に注ぐ水嶺と、九十九里平野をぬけて太平洋に直接注ぐ栗山川や高谷川、木戸川などの水嶺とに別れるが、後者の水域は県内の米所としてもよく知られている。九十九里平野は縄文海進以降隆起と堆積によって幾多の砂州を形成するが、縄文時代には現在のJR総武本線付近が海岸線であったようである。

遺跡の立地する台地は、栗山川の沖積地から町原、取立の狭い台地を隔てた坂田池から西方に入りこむ小支谷の最深部にあたり、さらに小さい谷によってそれぞれの遺跡を分けている。南側の最深部から上仁羅台遺跡、西長山野遺跡、東長山野遺跡となり、ともに標高41~42mを測る。

上仁羅台遺跡は、北側に谷が入り調査区は「Y」字状をなす。東に伸る台地は幅が狭く痩せているが、西側はテーブル状の平坦面が広がり、谷部への傾斜部は直線的な辺をつくっている。平坦面は南から西側に広がりをみせる。

西長山野遺跡は、周辺部全体に谷が迫り独立した平坦部をつくっている。遺跡南側は上仁羅台遺跡と対面している。

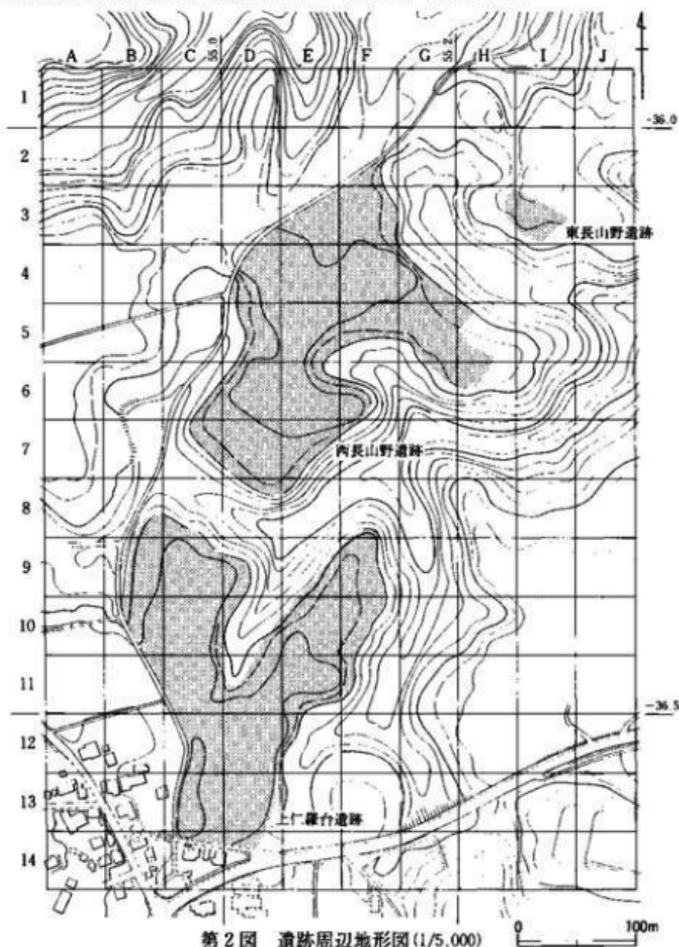
東長山野遺跡は、痩せ尾根の頂部から南西斜面にかけて所在するが、同遺跡は町教育委員会により調査が行なわれており、その東端部にあたる。平坦な部分はほとんどない。



- | | | | |
|------------|-----------|--------------|--------------|
| 1. 上仁羅台遺跡 | 2. 西長山野遺跡 | 3. 東長山野遺跡(県) | 4. 東長山野遺跡(町) |
| 5. 北長山野遺跡 | 6. 中台貝塚 | 7. 中台遺跡 | 8. 鴻巣貝塚 |
| 9. 木戸台貝塚 | 10. 牛熊貝塚 | 11. 千田貝塚 | 12. 遠山天ノ作遺跡 |
| 13. 山武總山貝塚 | 14. 猿尾貝塚 | ▼. 独木舟出土地点 | |

第1図 遺跡位置図(1/50,000)

遺跡周辺部を概観すると(第1図)、先に触れた東長山野遺跡(町教育委員会調査分)(4)、北長山野遺跡(5)が北東側に所在する。さらに坂田池から入る谷津を隔てた北側の台地上には高谷川に面する地点に貝塚が点在する。西方から中台貝塚(6)、中台遺跡(7)、鴻巣貝塚(8)、木戸台貝塚(9)が、さらに高谷川にせり出す台地上には牛熊貝塚(11)が所在している。また、栗山川を遡ると支谷に千田貝塚がある。さらに、本遺跡を南下すると、遠山天ノ作遺跡(12)、山武姥山貝塚(13)、九十九里平野に面する台地上には猿尾貝塚(14)が所在する。また、栗山川、高谷川流域には図中の▼印地点で独木舟が発見されており、この地域の遺跡を形成していった人々が水路を切り開き小河川を有効利用していた様子がうかがえる。



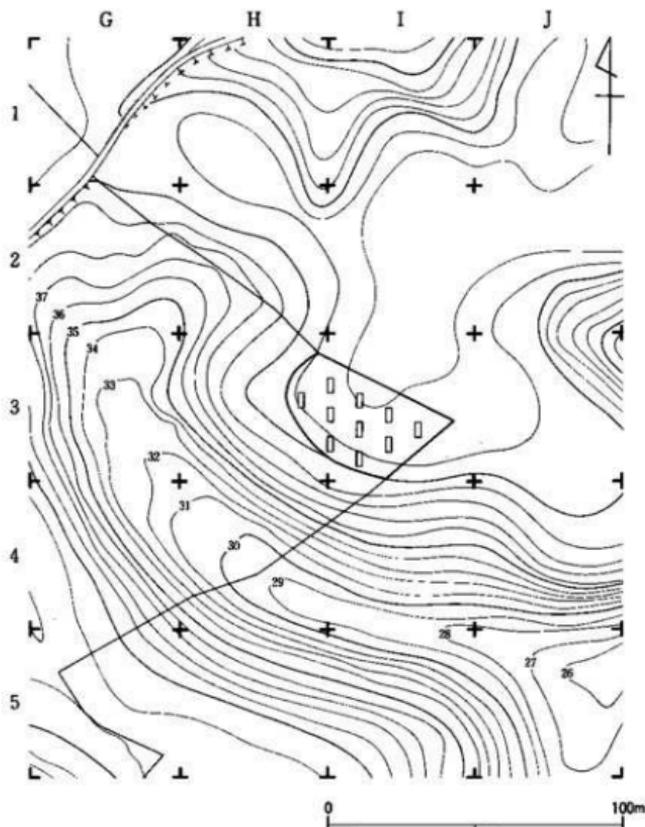
第2図 遺跡周辺地形図(1/5,000)

第3節 調査の概要と調査方法

1. 各遺跡の調査概要

横芝工業団地予定地内に所在する3遺跡の確認調査は昭和63年度の下半期に、本調査は平成元年度に実施した。

上仁羅台遺跡は、測量・調査準備等を経たのち、昭和63年10月20日より平成元年1月13日まで確認調査を実施した。調査対象面積23,500㎡のうち上層10%、下層4%の確認調査の結果、縄文土器包含層を4地点と旧石器時代の石器集中箇所1地点を検出し、平成元年8月1日より平成2年3月19日まで縄文土器包含層4地点4,700㎡と下層500㎡を本調査し、多量の縄文土器と陥穴2基、土坑1基、旧石器時代石器集中地点2箇所を検出した。



第3図 東長山野遺跡グリッド配置図(1/2,000)

西長山野遺跡は、平成元年1月17日より同年3月25日まで確認調査を実施した。調査対象面積26,000㎡のうち上層10%、下層4%の確認調査の結果、縄文土器包含層を4地点と旧石器時代の石器集中箇所6地点を検出し、平成元年4月5日より同年7月31日まで縄文包含層4地点4,150㎡と下層765㎡を本調査し、多量の縄文土器と陥穴5基、土坑4基、旧石器時代石器集中地点8箇所を検出した。

東長山野遺跡は、平成元年2月1日より同年2月7日まで確認調査を実施した。調査対象面積1,000㎡のうち上層10%、下層4%の確認調査の結果(第4図)、遺物・遺構とも検出できなかったため、本調査は不要と判断した。

2. 調査方法

発掘調査は、3遺跡の発掘区すべてを包含できるように公共座標を基準とし、50m方眼を大グリッドとし、西から東に向かって順にA・B・C……、北から南に向かって順に1・2・3……とし、1A・2Bと呼称した。さらに、大グリッドを5mごとに分割して小グリッドを設け、00から99までの番号を付した。

確認調査にあたっては、グリッド方式により2×5mのグリッドを設定して調査対象面積の10%について上層の確認を行ない、さらにその中の2×2mの範囲で調査対象面積の4%について下層の確認を行なった。本調査の範囲は、遺構が希薄であったため検出遺構の周囲及び包含層の遺物集中地点を拡張することとした。遺物の取り上げは、旧石器時代及び遺構内遺物についてはドットを取り、縄文包含層遺物については小グリッドで一括して取り上げた。

3. 層序

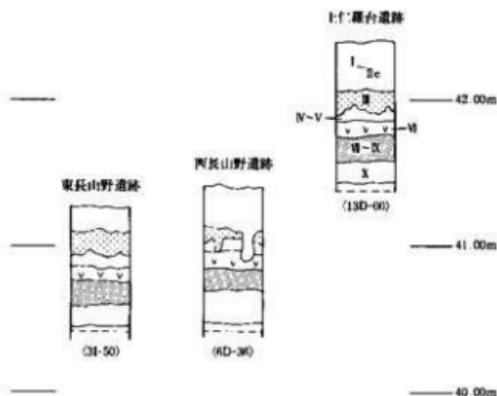
各遺跡の層序についてこの項で説明しておく。層序については本来遺跡ごとに説明を加えるべきであろうが、東長山野遺跡については確認調査で終了したので土層状況を提示するに止める。また、各遺跡は小支谷を挟んで近接し、他の2遺跡についても旧石器時代、縄文時代共に同様の時期の遺構・遺物の様相を呈するため、ここで一まとめにして比較することとした。各遺跡の位置及び土層状況を第4図に示した。各遺跡とも約2m程の標高差の範囲内に比較的安定した堆積状況を示す。当地域では一般的に観察される新期テフラを含む層(Ⅱb層)が比較的安定して確認されたが、東長山野遺跡及び西長山野遺跡の南側土層観察では一部確認されない部分があった。これは各台地の南側傾斜部では新期テフラの堆積が安定していないことが推察される。

次に各層について説明を加える。旧石器時代の基本土層は第5図に示した。

I層 表土層。黒褐色土。木の根により攪乱が及んでいる層である。

Ⅱb層 橙褐色土。いわゆる新期テフラ層である。縄文後期の包含層となっている。

- IIc層 暗褐色土。層厚30~40cmで安定して確認された。部分的に黒色化は強い。
- III層 黄褐色ローム土。いわゆるソフトローム層である。軟質化は下部が波状帯を示し、IV・V層に及び一部VI層上面にまで達している。
- IV・V層 黄褐色ローム土。いわゆるハードローム層である。III層の軟質化により層厚は薄く、IV層とV層の識別は困難で、同一の区分で把握することにした。旧石器時代の文化層の主体が、III層とIV~V層の境界或いはIV~VI層上面に産出層をもつ。
- VI層 明黄褐色ローム土。いわゆるAT層である。AT火山ガラスの散布状況については不明である。やや層厚が厚いので最近の下総台地の土層区分の認識からすれば、VI層の下部がVIIa層に相当することが考えられるが、調査時において詳細な検討を行っていないのでこの点は明確ではない。
- VII~IX層 暗褐色ローム土。第2黒色帯に相当する層である。上部に赤褐色スコリアを多く含み、下部に黒色スコリアを多く含む。上部と下部は明確に識別されない。
- X層 褐色ローム土。立川ローム最下層に相当する。VII層~IX層に比べて灰色がかって濁り、僅かに粘性を帯びる。
- XI層 淡灰褐色ローム土。武蔵野ローム最上層に相当すると思われる。粘性が非常に強い。



第5図 各遺跡の基本土層図(1/40)

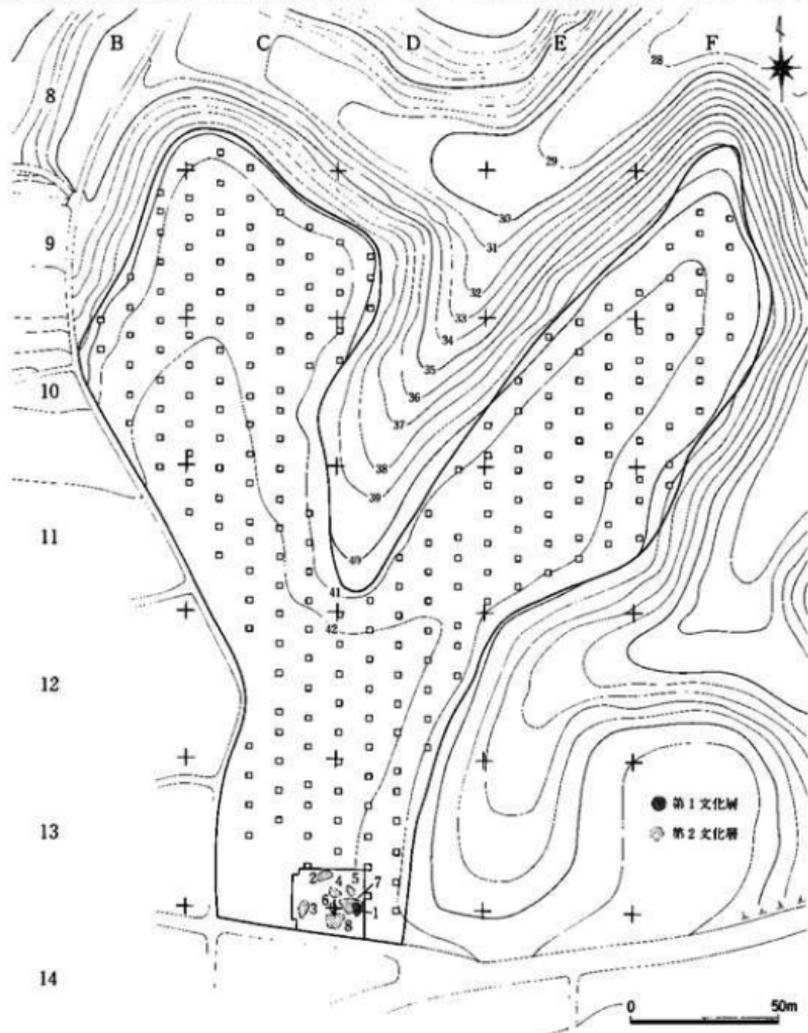
第 1 章

かみ に ら だい
上 仁 羅 台 遺 跡
遺跡コード 408-006

第1節 旧石器時代

1. 概要

遺跡の南端にまとまってブロックが検出された。地形的には北側から開析される小支谷の西側台地縁辺に位置している。調査時には2つのブロック群として把握されていたが、これを2



第6図 上仁羅台遺跡ブロック配置図 (1/2,000)

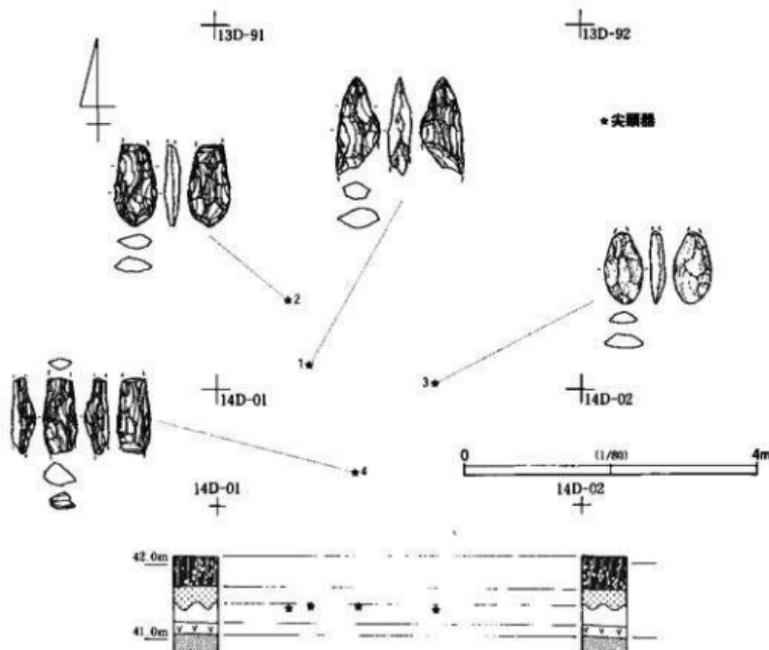
つの文化層に分離し、第1文化層(第1ブロック)、第2文化層(第2～8ブロック)とした。さらに第2文化層では礫が多量に存在していたため、これをブロックと分離して第1～9礫群の9箇所の礫群を設定した。遺跡における各ブロックの位置関係を第6図に示し、調査区における各ブロックと各礫群の位置関係の詳細図を第7図に示した。



第7図 ブロック・礫群分布図 (1/200)

2. 第1文化層

整理作業の過程で、下部の文化層と分離した文化層である。第7ブロックに4点の尖頭器が混在していた。垂直分布的に集中を見ると、第7ブロックの上部に集中し、レベルの集中域に若干の差があるため、1文化層を設定して扱うこととする。産出層準はⅢ層下部～Ⅳ層上部の波状帯であるが、周囲からの推定層位であるため、実際の出土層位を示していない可能性を指摘しておく。



第8図 第1ブロック器種別遺物分布図

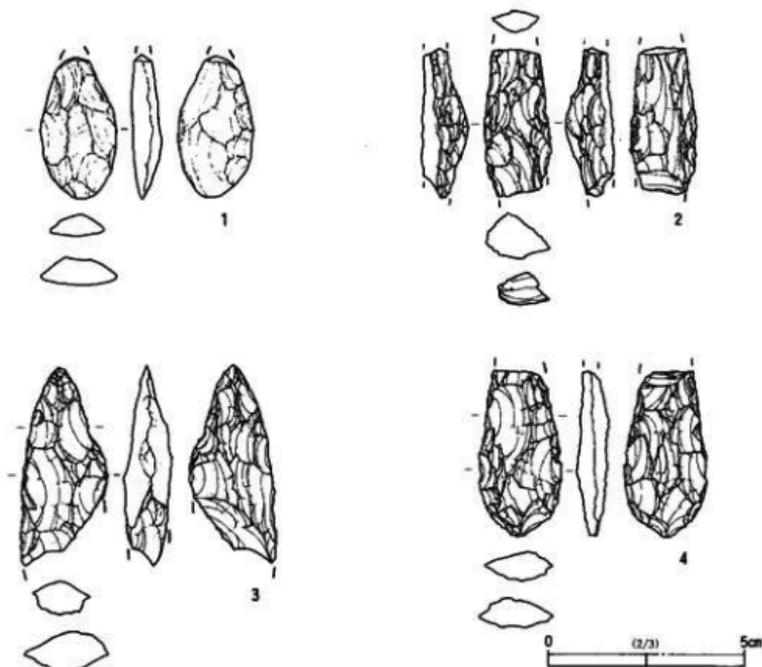
a. ブロック

第1ブロック(第8・9図、第1表、図版2・3)

状況 調査区東端から検出された。13D-91・14D-01区にまたがる南北1.2m、東西1mの範囲に4点の遺物が散在する。地形的には遺跡東側支谷の最奥肩部に位置し、層位も東方向に傾斜する。この微地形からも本来の出土層準はⅢ層下部よりも上位に設定されると考えられる。総数4点の資料からなる。器種構成は尖頭器4点ですべてであるが、本文化層の設定が尖頭器という同一器種をもって設定したため、第7ブロックの中に本文化層に帰属するものが一部含まれる可能性がある。

遺物 1～4は尖頭器である。4点とも石材は安山岩である。1は風化が激しい資料で、先端が欠損する。器体中心に最大幅を持ち、先端部が尖り、下端部は円みをもつ形状を示す。2は表面に平坦剝離、表面に階段状剝離が多用されることにより、横断面が三角形を呈している。3は大型のものと思われるが、下端部を大きく欠損する。4は比較的形状が整ったものであるが、先端を欠損している。

特徴 石器群の特徴としては、尖頭器の製品のみが集合している状況で、石器製作の痕跡を



第9図 第1ブロック石器実測図

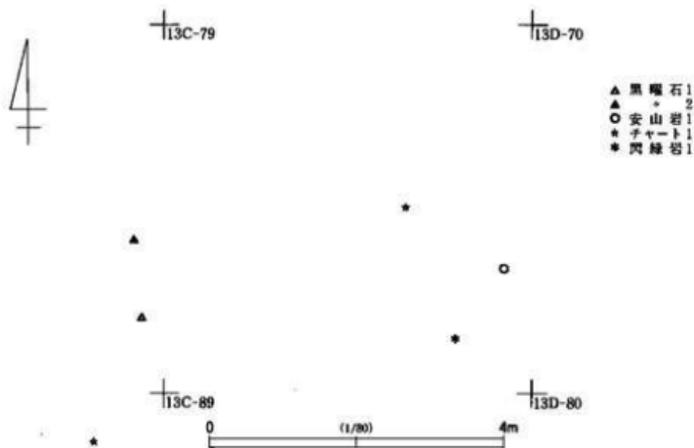
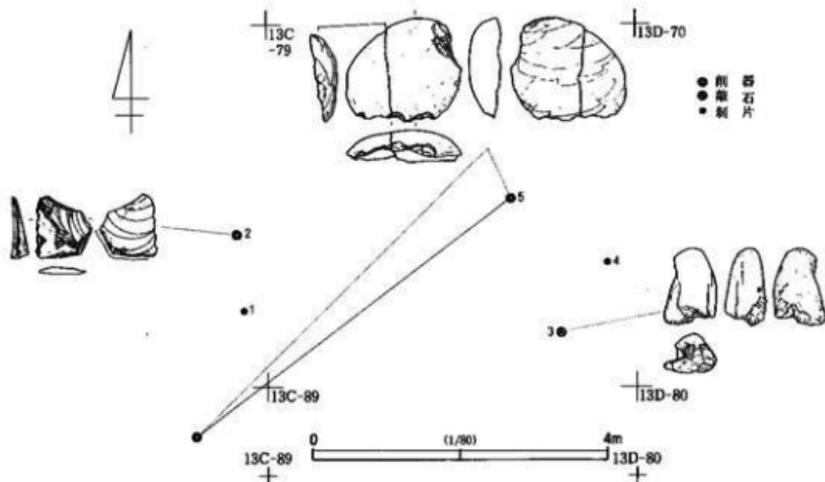
示していないブロックである。すべて器体の一部を欠損しているが、ほぼ中形から大形のもので下部部に円みをもつ形態の範疇に属している。こうした尖頭器の一群は旧石器時代終末期から縄文草創期に多出する。おそらく本ブロックの一群も当該期のものであろう。

第1表 第1号ブロック石器属性表

No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	標記 番号	打面 形状	打面 調整	背面構成	断面	母岩別資料	
1	13D-91-	6	尖頭器	安山岩	48.9×22.4×10.4	10.0	3				M-H	安山岩 1
2		9	尖頭器	安山岩	41.0×20.5×7.5	7.2	4				H	安山岩 2
3		14	尖頭器	安山岩	36.4×18.4×6.6	4.7	1					安山岩 3
4	14D-01-	8	尖頭器	安山岩	38.1×16.7×11.4	8.2	2				H, B	安山岩 4

<凡例> 石器属性表の見方

1. No ブロック単位の通し番号である。ブロック分布図の番号に対応する。2. 遺物番号 発掘調査時における遺物の取り上げ番号である。3. 標記番号 石器属性表の番号である。4. 打面形状 Cは自然面打面、Lは線状打面、Pは点状打面、Hは割離面打面でHの後の数字は割離面数を表す。Nは打面欠損である。5. 打面調整 Dは打面調整、Tは顔面調整である。6. 背面構成 自然面を持つものはN、割離面を持つものはSの記号で前の種に示した。背面の割離方向を主要割離方向を軸として時計回りに4分割し、打面方向からのもの1、右方向からのもの2、主要割離方向と反対方向からのもの3、左方向からのもの4、とローマ数字の組み合わせで示した。7. 断面 石器を主要割離方向を軸にして、打面部(H)・中間部(M)・未調整部(B)に3分割し、また右側(R)・左側(L)に分割し、その組み合わせにより示している。8. 母岩別資料 採集区単位に番号を設定した。したがって、上記層位遺跡の石器はすべて右記ごとの通し番号となるが、西比山野遺跡については各採集単位の通し番号となる。これは西比山野遺跡の各ブロックが数十m離れて数ブロックずつ分布する様相を呈しており、中には同一層位と思われる母岩も存在するが、接合資料は存在せずすべての母岩に遡光してその保証が得られなかったためである。なお、遺物の大きさと計測において、打点方向が可変であり、最大長・最大幅・最大厚がすべて5mm以下の遺物は計測から除外した。



第10図 第2ブロック器種別・母岩別遺物分布図

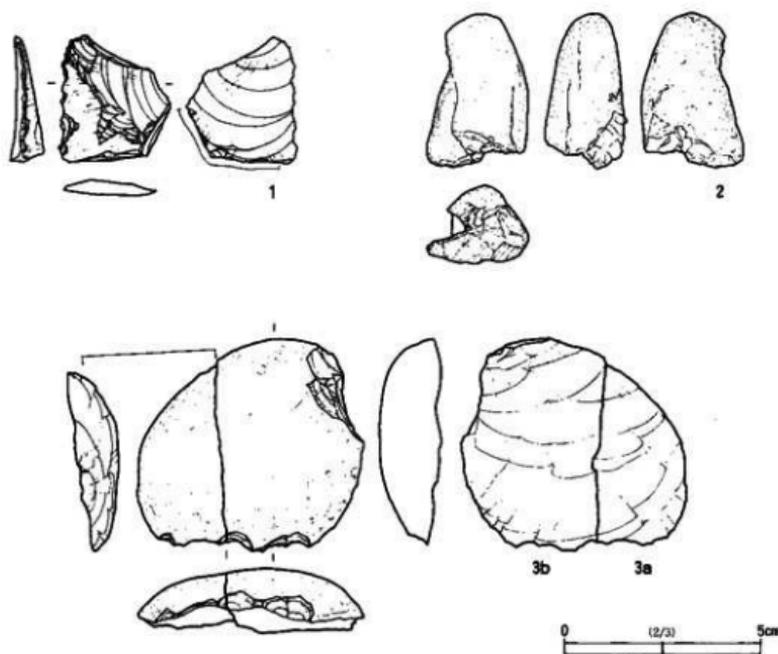
3. 第2文化層

本遺跡の中心となる文化層である。遺跡の南端部の南北20m、東西23mの範囲にまとまって分布する。地形的には北東方向に延びる小支谷によって開析される西側台地のつけ根部分に位置している。遺物の分布は円形状に散漫に分布する。調査時においては2群のブロックとして把握されていたが、整理作業の過程で礫が多量に認められたため、礫の分布状況と石器の分布状況を峻別し、母岩別分類を行った。その結果により7箇所のブロックと9箇所の礫群のまとまりとして再構成した。これらのブロック、礫群の垂直分布は微視的には差異があるが、概ね同一の傾向を呈し、産出層率はⅢ層下部～Ⅳ・Ⅴ層上部に垂直分布のピークがある。

a. ブロック

第2ブロック(第10・11図、第2表、図版2・3)

状況 ブロック群の北側に位置する。13C-78・79・88区を中心に6点で構成される。3点ずつが離れて分布する状況が窺えるが、削器2点がまたがって接合しており、同一ブロックとして設定した。出土層率はⅢ層下部～Ⅵ・Ⅴ層上面に及ぶが、Ⅳ・Ⅴ層が薄くなっており問題はなかろう。器種構成は削器2点(内1点は2点の接合)、敲石1点、剥片2点である。



第11図 第2ブロック石器実測図

遺物 1、3a・bは削器である。1は良質の黒曜石を石材として左側縁を中心に調整がある。3a・bはチャート石材の半裁礫で、下部部に鋸歯縁状の調整が認められる。2分割後の再調整は認められない。2は敲石とした。変形な端部に打痕が認められる。

特徴 削器の接合資料があるものの、石器製作の痕跡が認められないブロックである。小数の石器で構成されるブロックのため、石器組成は数量的な判断を許さない。

第2表 第2号ブロック石器属性表

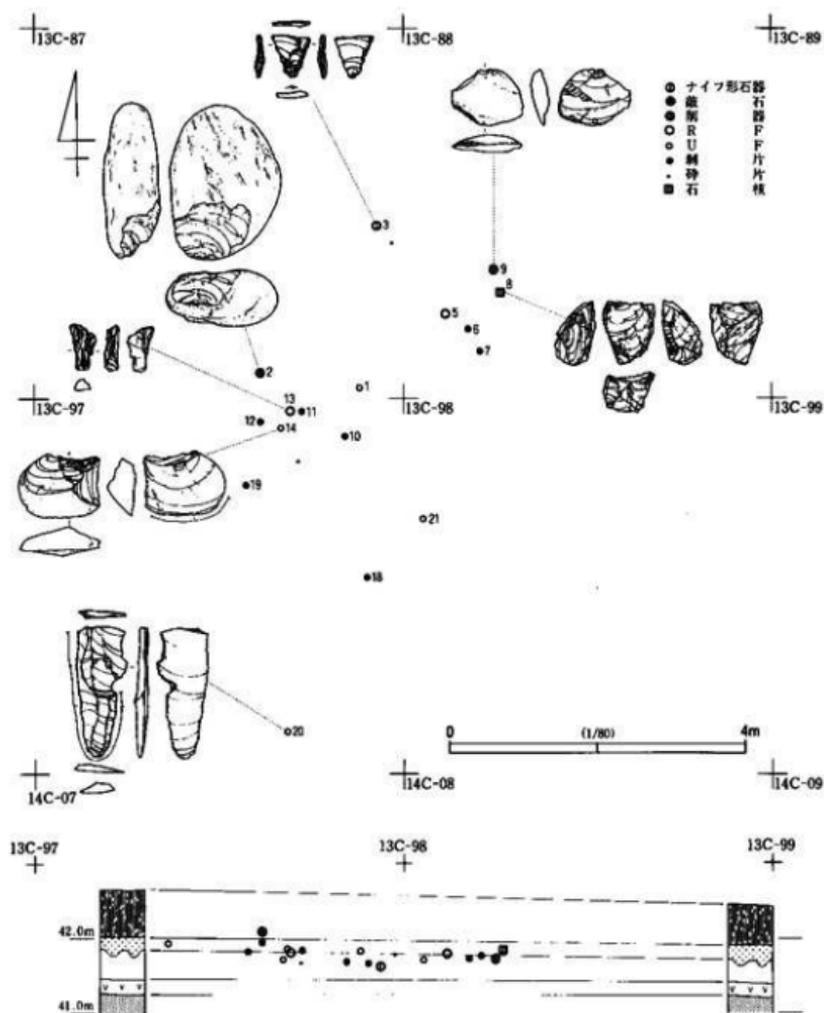
No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	検出 番号	打痕 形状	打痕 調整	背面構成	断面	母岩別資料
1	13C-78-	1	削片	黒曜石	26.4×20.1×3.9	1.0		H 1		I、II	黒曜石 2
2		2	削片	黒曜石	31.9×29.7×5.0	4.4	1	N	S	I、II	黒曜石 1
3	13C-79-	1	敲石	閃緑岩	37.3×18.7×19.8	19.2	2		N		閃緑岩 1
4		2	削片	安山岩	29.9×28.4×6.1	6.5		L	N		安山岩 1
5		3	削片	チャート	44.9×23.1×10.9	12.9	3a		S	I、II	チャート 1
6	13C-88-	22	削片	チャート	54.8×42.2×15.0	42.4	3b	B	N		チャート 1

第3ブロック(第12~14図、第3表、図版2・4)

状況 ブロック群の西側に位置する。13C-87・88・97・98区を中心に20点で構成される。南北6.8m、東西3.6mの範囲に散在する。南北に長い楕円形を呈するが、これは石刃状の縦長剥片がやや集中部を離れて分布するため、この資料を除けば、石器は均等に分布する状況が看取される。出土層はⅢ層下部～Ⅳ・Ⅴ層上部に遺物の集中が認められる。器種構成はナイフ形石器1点、削器1点、敲石1点、二次加工を有する石器2点、使用痕を有する石器4点(内1点は石刃)、剥片7点、砕片2点、石核1点である。

遺物 1は先端部を欠損するため、形状が明確ではないがナイフ形石器とした。基部に打点を残置させ、2側縁を調整する。左側縁部には対向調整が見られる。2は細部加工を有する剥片。稜上調整が行われた縦長剥片を素材として、右側縁に細部調整がある。背面構成を見ると4方向からの剥離面が認められ、素材の横断面が三角形を呈することなどから、角錐状石器を意図した製作過程の可能性がある。ブロック内に同一母岩の石核・砕片が存在する事も傍証となろう。3は削器。横長剥片の左下端部に連続的な調整がされる。4は敲石とした。メノウの原石の長軸の一端部を加撃点としており、この部分が潰れ剥離面が形成される。5・6は使用痕を有する剥片。5は良質の珪質頁岩を石材とする大形の石刃状剥片であり、使用痕が縁辺に顕著である。こうした特徴を持つ石刃は第2文化層の石器群の中では異質であり、また遺物の分布の面からも混在の可能性が高い。6は厚手の横長剥片の端部が潰れる。7は石核。90度の打面転移を基調として剥片剥離が進行するもので、多方向からの剥離作業が看取される。生産された素材は厚手の幅広剥片と思われ、2の細部加工を有する剥片と同一母岩である。

特徴 石材は黒曜石3とした個体が9点とまとまる以外、他の石材は多様のものがそれぞれ単独ないしは2点ほどで存在する。器種組成の面でも器種の偏在は認められない。石器製作は

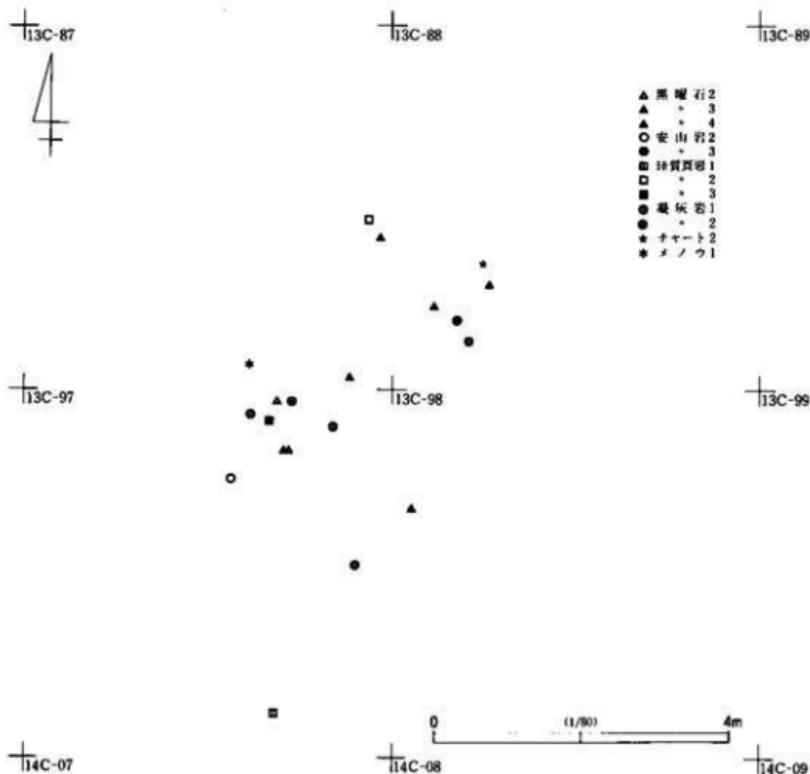


第12図 第3ブロック器種別遺物分布図

黒曜石の母岩によって細部加工を有する石器が生産されている。この資料は角錐状石器製作の一工程を示す可能性があるが、石器製作工程上のヒアタスが多く断定はできない。

第4ブロック(第15・16・22図、第4表、図版2・5)

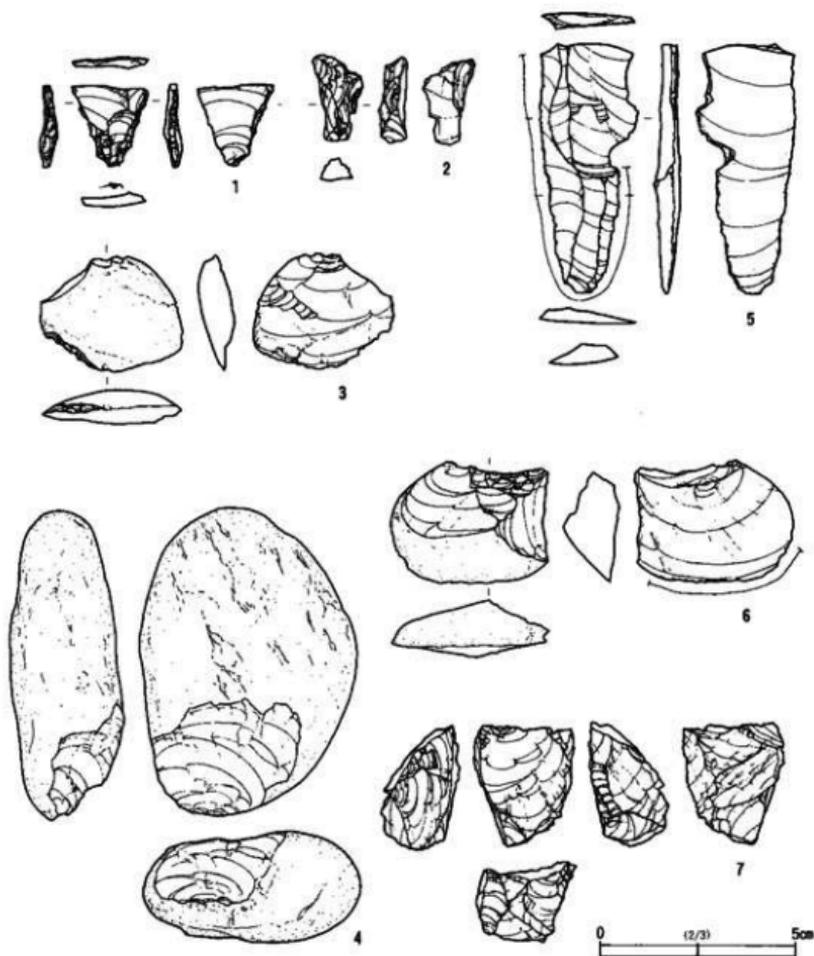
状況 ブロック群の中央部に位置する。13C-89・90区を中心に9点で構成される。南北4



第13図 第3ブロック母岩別遺物分布図

第3表 第3号ブロック石器属性表

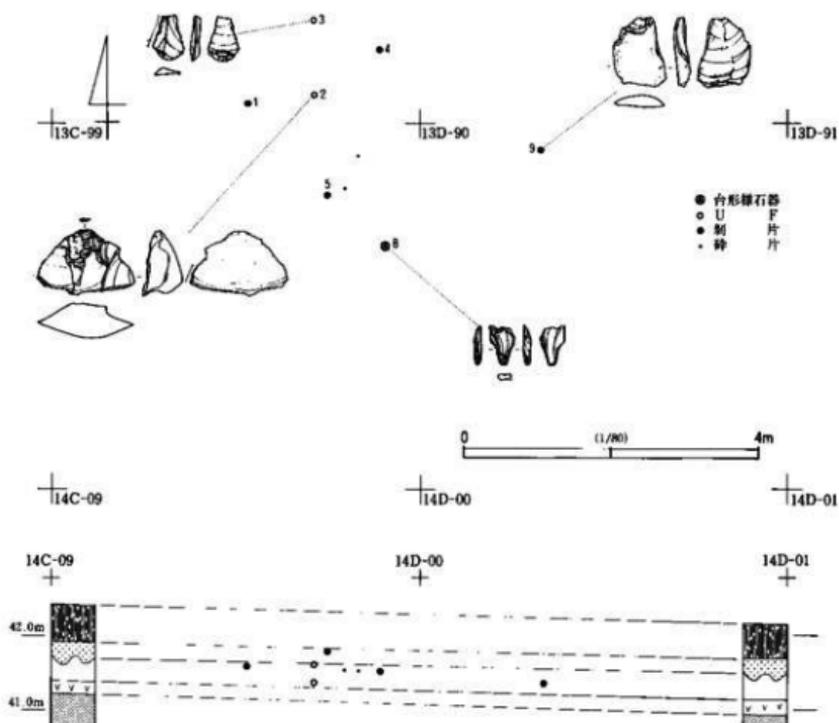
No.	遺物番号	部	種	石	材	長×幅×厚 mm	重量 g	検出 番号	打 面 形 状	打 面 調整	背 面 構成	所 置	母岩別資料
1	13C-87-	1	削片	ウ	黒曜石	17.0×25.3× 6.5	2.7		H1		I, IV		黒曜石 4
2		3	片	石	メノウ	78.8×55.2×26.3	155.2	4	H1				メノウ 1
3		7	ナイフ形石器		埴貫頁岩	20.4×19.0× 3.4	1.2	1	H1		I	M	埴貫頁岩 2
4		8	砕片	黒曜石	7.2× 3.4× 4.3	0.1		P			I, II, IV		黒曜石 3
5	13C-88-	2	削片	黒曜石	27.4×34.4×17.0	16.7		H1				M	黒曜石 3
6		4	削片	安山岩	10.4×24.8× 3.9	1.0		H1		N	I		安山岩 3
7		6	削片	凝灰岩	41.1×22.3×10.2	9.3		H1		N	I		凝灰岩 1
8		8	石	埴貫頁岩	31.1×25.9×20.0	13.2							埴貫頁岩 3
9		9	削片	チャート	29.2×35.7× 7.9	9.1	3	P		N		L	チャート 2
10	13C-97-	1	削片	凝灰岩	28.7×23.3× 7.9	4.1		C			I	R	凝灰岩 1
11		3	削片	凝灰岩	29.6×35.2× 4.7	6.3		L		N			凝灰岩 2
12		4	削片	埴貫頁岩	22.8×11.0× 6.4	1.5	2	N					埴貫頁岩 3
13		6	削片	埴貫頁岩	31.0×40.3×12.0	13.7	6	H1		N	I		埴貫頁岩 3
14		7	削片	凝灰岩	25.0×19.5× 9.5	4.6		N		N	I	K-L	凝灰岩 1
15		11a	砕片	黒曜石	6.7×11.7× 2.4	0.2		H1			I, IV		黒曜石 3
16		11b	砕片	黒曜石	12.4× 7.9× 3.1	0.3		H1			I		黒曜石 2
17		14	削片	安山岩	27.3×17.6× 7.6	3.3		N			I, IV	H-M	安山岩 3
18		15	削片	凝灰岩	15.4×26.4× 3.8	1.2		C					凝灰岩 1
19		18	削片	埴貫頁岩	64.2×25.0× 5.5	6.9	5	N			I	H-M	埴貫頁岩 1
20	13C-96-	2	削片	黒曜石	13.7×21.4× 8.3	1.7		H1			I		黒曜石 3



第14図 第3ブロック石器実測図

m、東西5mの範囲に散在する。出土層はIV・V層上部に遺物の集中が認められる。器種構成は台形様石器1点、使用痕を有する石器2点、剥片3点、碎片3点である。

遺物 1は台形様石器。幅広い横長剥片を素材とするもので、打面部を左側縁方向に設定してブランディングで除去し、対向する側縁は切断されている。形状は水平に近い刃部を持つ逆三角形状を呈している。背面に打面方向からの平坦な剥離痕が見られ、同種の幅広い横長剥片が連続して生産されたことが考えられる。2・3は使用痕を有する石器とした。2は左側縁に刃

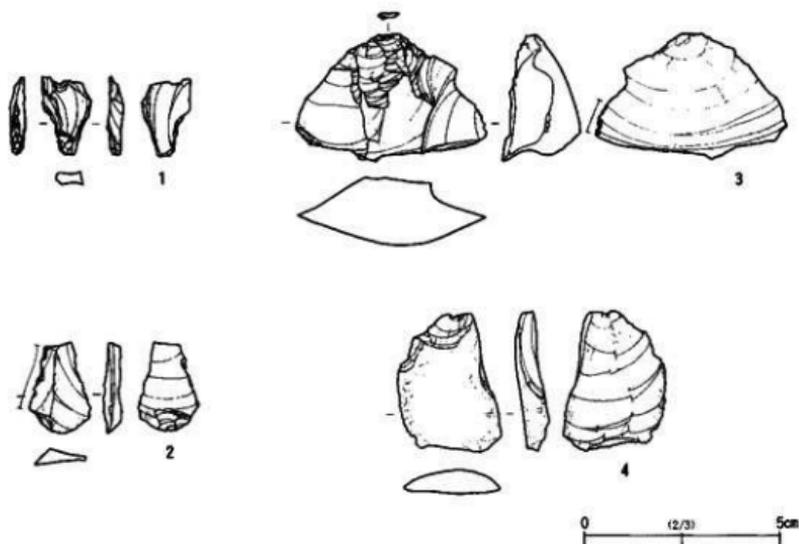


第15図 第4ブロック器種別遺物分布図

こぼれ状に微細剥離が入る。主要剥離面末端部に階段状の剥離が入り、打点部が欠損しているため判然としないが、あるいは両極技法により剥離された剥片の可能性がある。3は良質の珪質頁岩を石材として、部厚い横長剥片を素材として右側縁下端部に微細な使用痕が見られる。また頭部調整が顕著なことも注目される。4は安山岩製の剥片である。表面に自然面を広く残置する。

第4表 第4号ブロック石器属性表

No.	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	検出 番号	打痕 形状	打痕 調整	背面構成	断面	母岩質料
1	13C-89-	1	制 片	安山岩	60.9×56.7×19.9	53.2	H 1		N	I, Ⅱ	安山岩 6
2		3	制 片 U	珪質頁岩	33.8×47.1×20.5	22.7	H 1			I, Ⅱ	珪質頁岩 4
3		4	制 片 U	珪質頁岩	22.5×15.3×3.8	1.0	N			I	珪質頁岩 1
4		8	制 片	安山岩	14.6×20.7×5.2	1.9	H 1			I	安山岩 5
5	13C-99-	5	砕 片	黒曜石	21.6×25.4×9.7	3.2	C 1			I, N	LM, B
6		6	砕 片	珪質頁岩	7.4×6.9×1.1	0.1	L			I, N	珪質頁岩 6
7		7	砕 片	珪質頁岩	8.6×9.6×3.3	0.2	N			I	珪質頁岩 5
8		11	台形縁石器	珪質頁岩	19.6×11.9×3.6	0.8	N			I	珪質頁岩 5
9	13D-90-	10	制 片	安山岩	34.5×25.5×7.2	7.1	L		N	I	安山岩 4



第16図 第4ブロック石器実測図

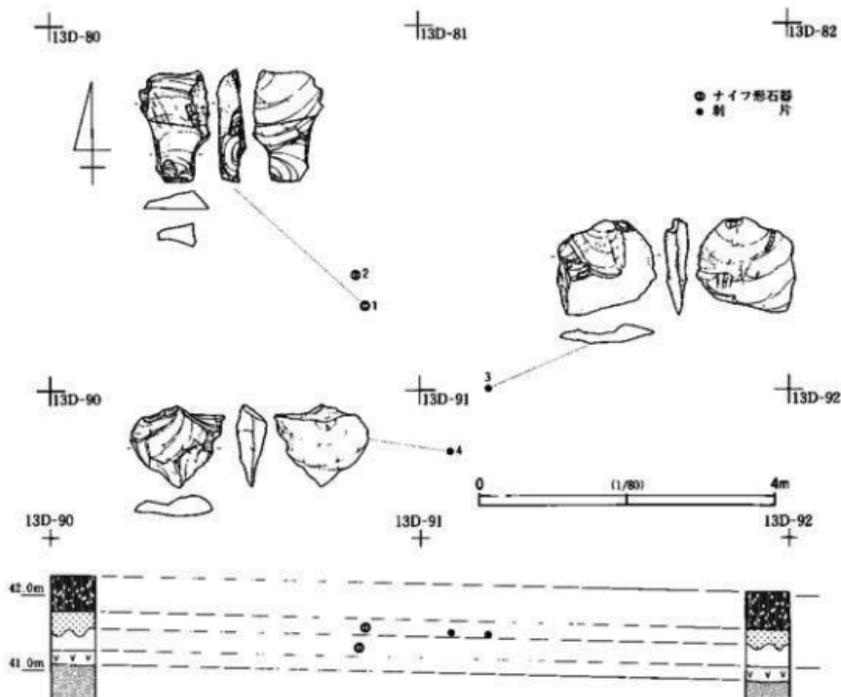
特徴 石材は珪質頁岩が過半数を占めており、他に安山岩・黒曜石の母岩が存在するが、台形様石器と同一の碎片が存在する以外はそれぞれ単独の母岩で構成される。器種構成として台形様石器が含まれており、本石器群の指標となる石器として注目される。この台形様石器は横長剥片を素材とし、打面部をブランディングし対応する端部を切断するという技術的な特徴を有している。

第5ブロック(第17・18・22図、第5表、図版2・5)

状況 ブロック群の北東側に位置する。13C-80・81、13D-91区を中心に4点で構成される小規模なブロックである。南北3.0m、東西2.5mの範囲に散在する。出土層準はⅢ層下部～Ⅳ・Ⅴ層上部に遺物の集積が認められる。器種構成は台形様石器1点、剥片2点である。

遺物 1は台形様石器とした。近接する1a・1bが接合して1器種となっている。良質の頁岩製縦長剥片を素材として、背面から両側縁を部分的に調整する。側縁には素材を切断するように背面からの剝離が看取され、底面を保持する剥片を搾取しており、石核としての機能も窺える資料である。2・3は剥片を示した。いずれも大形の幅広な剥片である。

特徴 4点の石器で構成される小規模なものであり、石器製作の痕跡が認められないブロックである。良好な器種として大形の台形様石器を含む点は注目されるが、ブロックとしての性格付けをする具体的な資料に乏しく、ブロックの形成過程において偶発的な要素を考える必要がある。



第17図 第5ブロック器種別遺物分布図

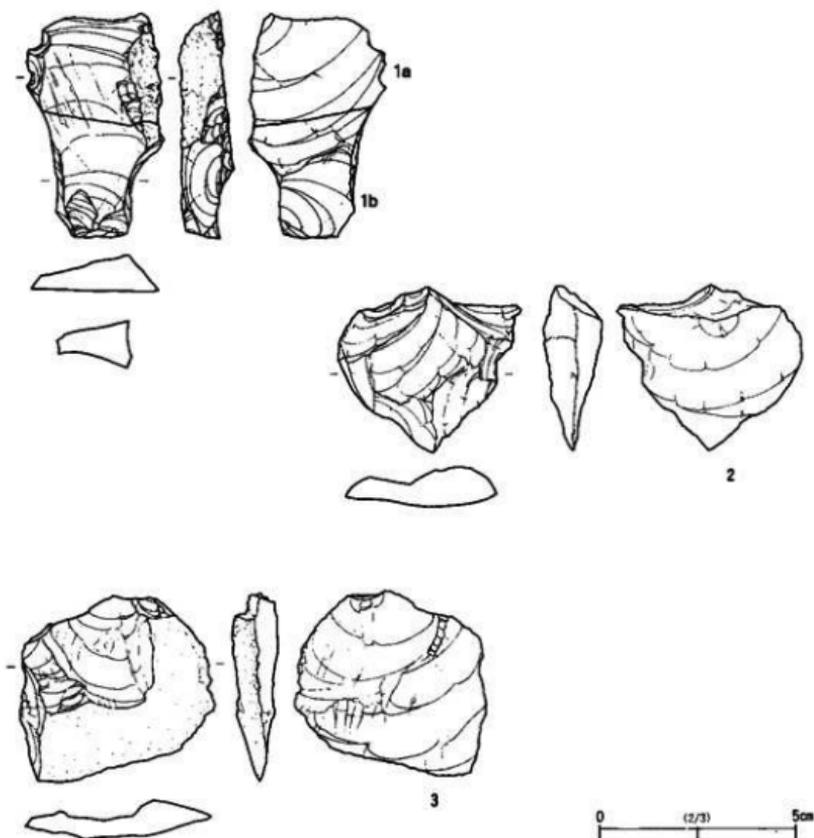
第5表 第5号ブロック石器属性表

No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	検出 番号	打製 形状	打製 調整	背面構成	折面	母岩別資料
1	13D-80-	1 台形鎌石器	頁岩	26.1×34.4×9.6	10.2	1a	N		Ⅲ, Ⅳ	H-M	頁岩 2
2		2 台形鎌石器	頁岩	34.7×28.0×9.1	11.3	1b	H 1		Ⅲ, Ⅳ		頁岩 2
3	13D-81-	1 剥片	凝灰岩	50.4×48.9×8.1	20.3	3	H 1	N	Ⅰ, Ⅳ		凝灰岩 3
4	13D-91-	12 剥片	安山岩	41.8×47.3×12.2	18.4	2	H 1		Ⅰ, Ⅲ		安山岩 7

第6ブロック(第19・20・22図、第6表、図版2・6)

状況 ブロック群の中央部に位置する。13C-99、13D-90、14C-09区を中心に5点で構成される。南北2.5m、東西1.5mの範囲にまとまる。北側の3点から離れて1点が分布する状況が窺える。これは石刃であり、本ブロックの石器群としては異質なものであり混在した可能性がある。出土層準はⅢ層下部～Ⅵ層上部に及びⅣ・Ⅴ層上部に集中が見られる。器種構成はナイフ形石器1点、使用痕を有する石器1点、剥片2点、碎片1点である。

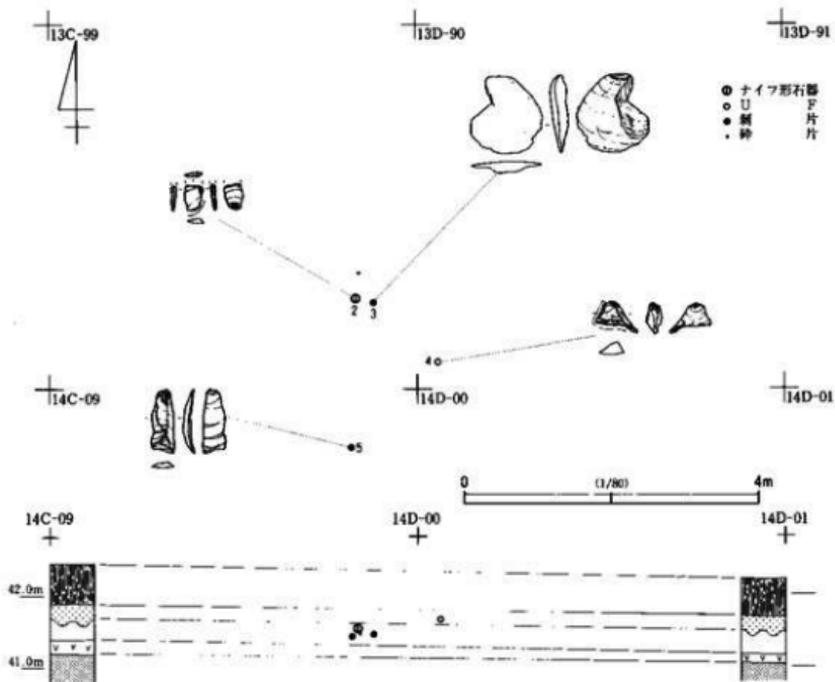
遺物 1はナイフ形石器である。石材は珪質頁岩であり、同一母岩の碎片が隣接して検出されている。上半部を欠損しているため形態は明確ではないが、1側縁に限定した調整が看取さ



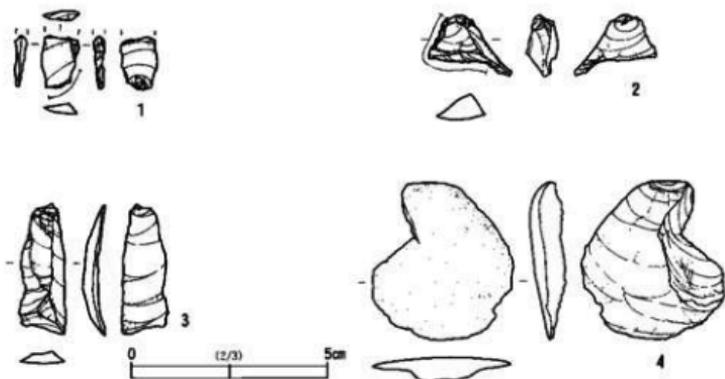
第18図 第5ブロック石器実測図

れる。調整は背面・主要剥離面両面から行われている。2は使用痕を有する石器である。右側縁から端部にかけて刃こぼれ状の傷が看取される。3は剥片であるが石刃と呼べるものであろう。本石器群では異質な剥片剥離技術により生産され混在の可能性はあるが、分離する積極的な出土状況を示していないため同一ブロックとして扱う。石材は珪質頁岩であり、点状打面を持つ。背面構成から両設打面による石刃の連続的な剥離を想定することができる。4は流紋岩を石材とした剥片である。背面が自然面で覆われるものである。

特徴 6点という小規模なブロックであり、個々の石器についても相互の結び付きは弱いですが、本ブロックでのナイフ形石器の存在には、ブロック群の中央部に本ブロックが分布することを含めて注目する必要がある。

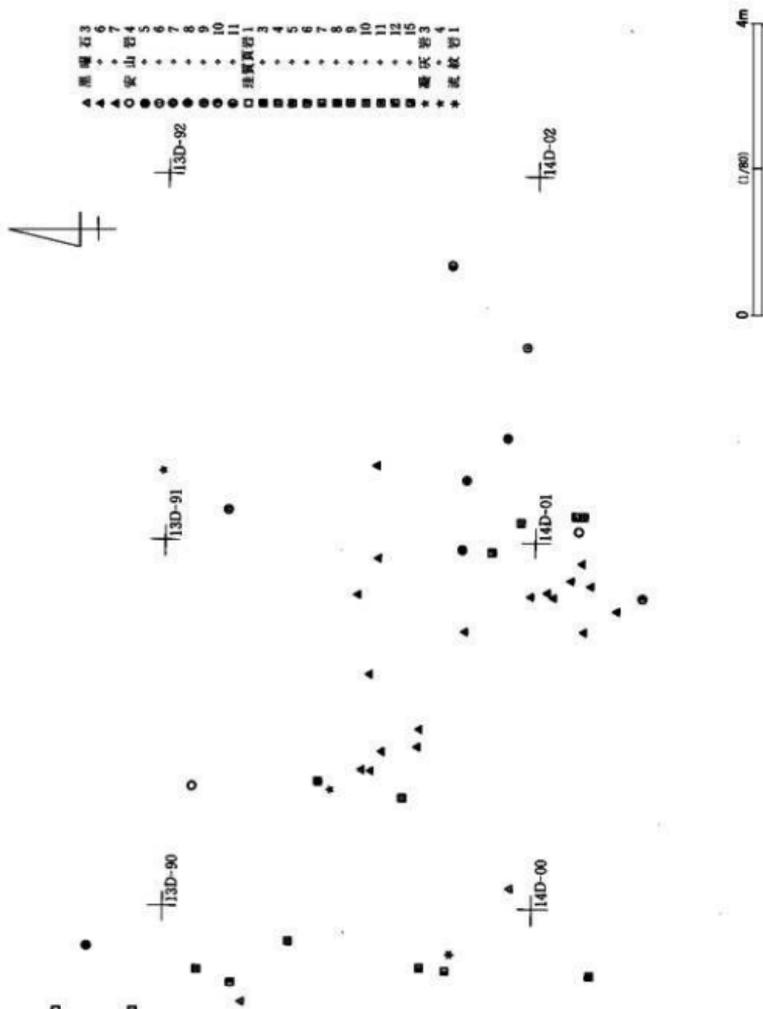


第19図 第6ブロック器種別遺物分布図



第20図 第6ブロック石器実測図

+

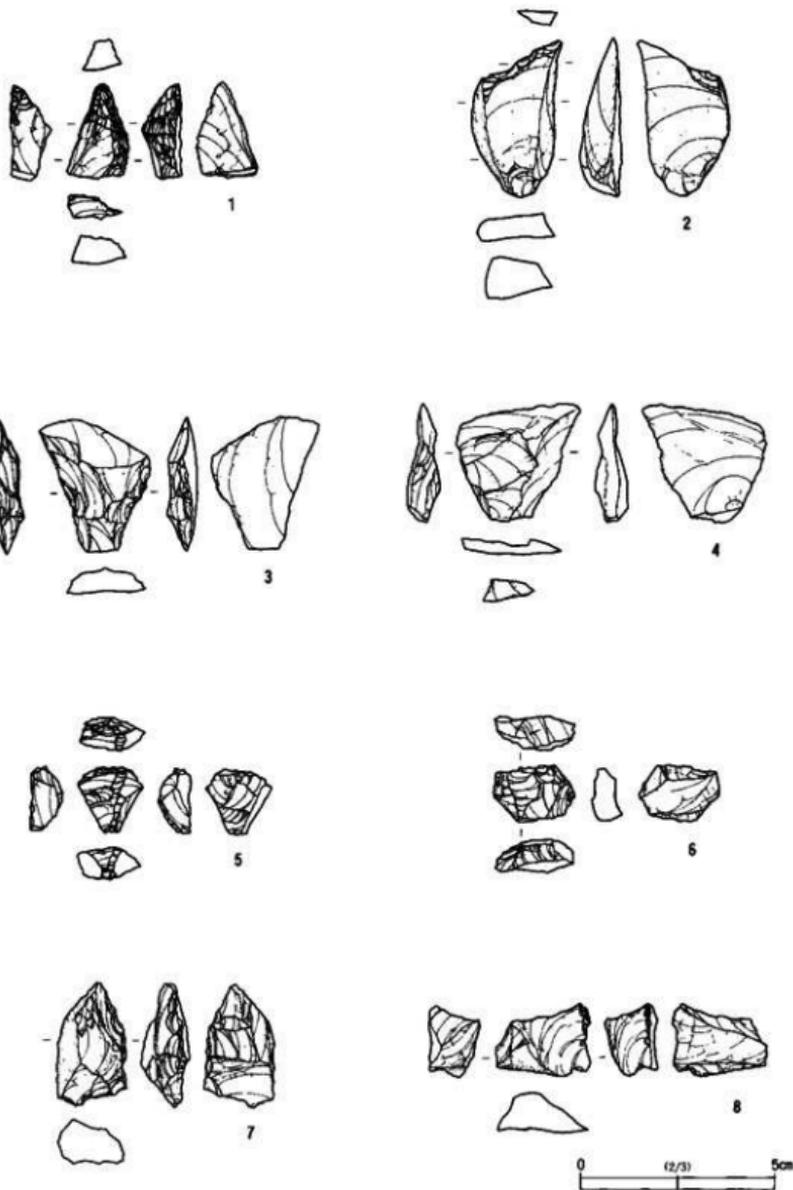


第22図 第4～7ブロック母岩別遺物分布図

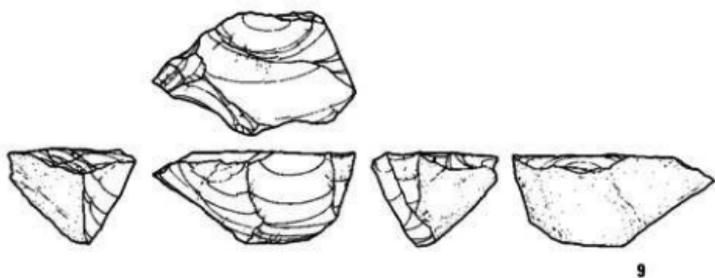
+

遺物 1・2はナイフ形石器である。乳白色の縞が入る黒曜石を石材としている。1は下半部を欠損するが、厚手の横長剥片を素材にして、右側縁に急斜角なブランディングを施すものと思われる。刃部も断面が鈍角となる特徴を有している。この種のナイフ形石器は本文化層の段階の石器群に散見されるもので、共通した技術基盤から生産されたものと思われる。2は縦長剥片をやや斜軸に用いており、先端部に荒い調整が施される。3・4は台形様石器である。2点とも安山岩を石材とするが、3のほうが良質な石材を用いて精緻な仕上がりを見せている。3は横長剥片の打面部と末端部を平坦剥離により除去した後、両側縁を平坦剥離により形状を整え先端部に刃部を設定し、さらに細部調整を施す。4も先端部に刃部を設定しているが、素材の形状を保持しており、調整は左側縁に荒く施されるだけである。5はピエス・エスキューである。素材打面部に階段状剥離と、背面に打面と末端からの細長い剥離が看取される。打面部は線状打面となり末端部は点状打面に近くなる。6・7は細部加工を有する剥片とした。6は下端に細長い剥離痕が認められ、剥片剥離の機能も持つことから、或いは残核として分類されるものかもしれない。7は右側縁に両面からの調整が顕著で、下半部欠損後さらに調整が認められる。調整のあり方からみて角錐状石器などの未成品の可能性が高い。8は使用痕を有する石器である。9・10は石核である。9は安山岩の角礫を分割して平坦な打面を設定して、左右に打面を移動して剥片剥離を行っている。剥取される剥片は幅広い縦長剥片である。10は多面体石核とされるものである。先行する剥離面を打面として、正面で2回の剥片剥離により縦長剥片を剥いだ後、その剥離面を打面として側面に剥片剥離が認められる。石核に残存する剥離面の方向構成を考慮すると、90°の打面転移を基調にして剥片剥離が進行していたと推定できる。11～15は剥片を示した。剥片全体では黒曜石製の小形の縦長剥片が多いが、11のように大形の安山岩製の縦長剥片や、12のような横幅のある打面をもつ珪質頁岩製の横長剥片や、15の安山岩製のものも組成する。13・14は1のナイフ形石器と同一母岩の剥片で、本ブロックからはこの3点のみの出土である。

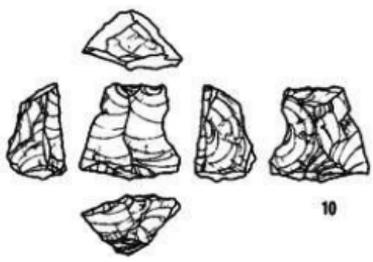
特徴 石材は、同一母岩の黒曜石6としたものが16点とまとも本ブロックの形成の中心をなす。他の石材では安山岩・珪質頁岩の存在が目立つがそれぞれ数点ずつの母岩であり母岩消費は認められない。器種構成は特徴的なナイフ形石器と台形様石器及びピエス・エスキューが組成することが注目される。またこのナイフ形石器は黒曜石製、台形様石器は安山岩製の単独母岩のものであり、石材選択の点で対峙的であり規制が推察されるが、製品として搬入されている点では共通である。この点ではピエス・エスキューは本ブロックで剥片生産＝母岩の消費によるものであり対照的である。この黒曜石6の母岩は90°打面転移を基調とする多面体石核により縦長剥片を剥離する剥片剥離技法である。生産された剥片にはナイフ形石器の素材となるようなものは存在しないが、両極技法によるピエス・エスキューの製作は1点のみで付加的なあり方を示すため、他の器種の素材生産を行ったことを想定するべきであろう。



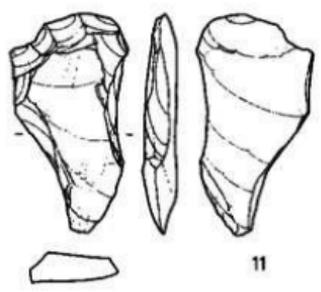
第23図 第7ブロック石器実測図(1)



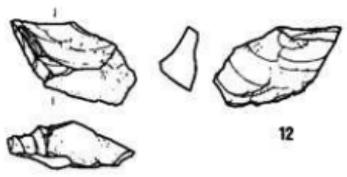
9



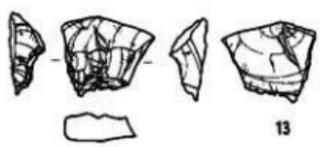
10



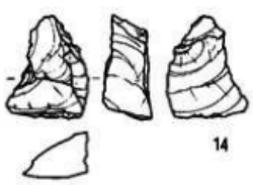
11



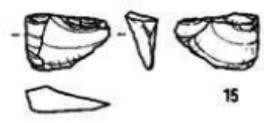
12



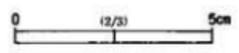
13



14



15



第24図 第7ブロック石器実測図(2)

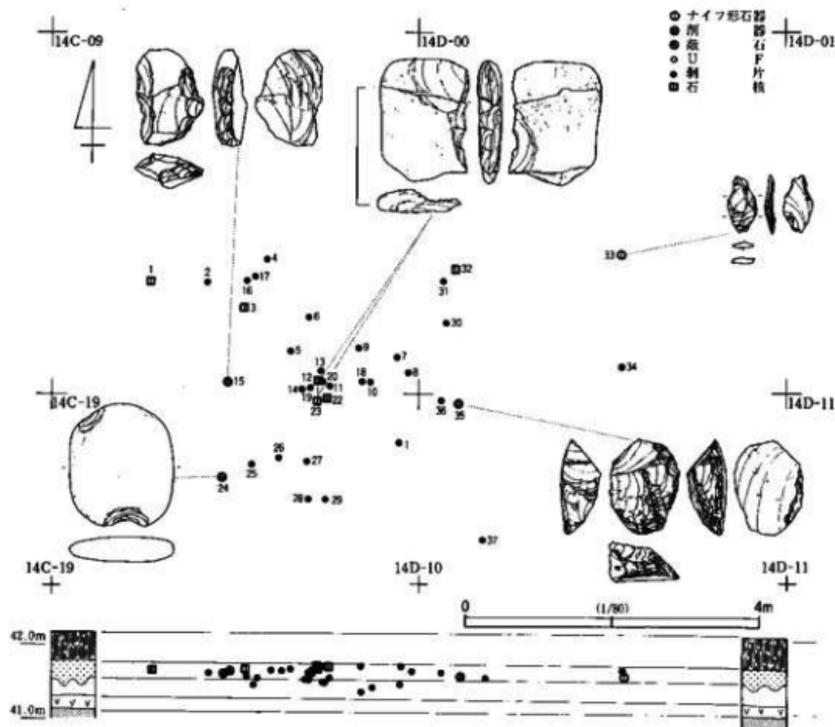
第7表 第7号ブロック石器属性表

No	遺物番号	器種	石種	材	長×幅×厚 mm	重量 g	押印 番号	打製 形状	打面 調整	背面構成	断面	母岩別資料
1	13D-90-	15	剥片	珪質頁岩	20.8×30.4×10.5	4.6	12	H1		N	I	珪質頁岩10
2		20	剥片	珪質頁岩	9.2×18.4×6.3	0.8		N		I		珪質頁岩10
3		23	砕片	黒曜石	7.0×8.5×0.9	0.1		F		I		黒曜石6
4		24	剥片	黒曜石	20.3×12.8×5.5	0.9		H1		I, N	H~R	黒曜石6
5		26	ナイフ形石器	黒曜石	23.4×13.0×8.8	2.6		N		I, N	H~R	黒曜石7
6		27	剥片	黒曜石	15.9×25.8×16.9	3.8		N		I, Ⅲ	H~R	黒曜石6
7		31	剥片	黒曜石	25.7×22.0×7.3	4.2	14	H1		I		黒曜石7
8		35	砕片	黒曜石	10.0×3.7×2.4	0.1		N		I		黒曜石6
9		36	剥片	黒曜石	15.9×11.3×9.4	1.1		N		I, Ⅲ	H	黒曜石6
10		40	石	核	20.4×55.9×32.2	32.4	9					安山岩5
11		42	剥片	黒曜石	15.0×10.4×5.6	0.7		L		Ⅳ		黒曜石6
12		44	石	核	24.0×51.3×32.0	6.2	10					黒曜石6
13		45	剥片	頁岩	13.7×10.7×4.0	0.5		H1				頁岩3
14		47	剥片	黒曜石	18.6×22.1×8.5	3.0	13	H1		Ⅱ, N		黒曜石7
15		48	剥片	凝灰岩	21.9×29.8×17.4	4.5		C		N		凝灰岩4
16	13D-91-	2	砕片	黒曜石	9.8×6.9×1.4	0.1		H1		N	I, N	黒曜石6
17		4	剥片	珪質頁岩	35.5×15.4×9.8	4.0		N		N	I	珪質頁岩11
18		5	剥片	安山岩	54.5×29.1×17.8	14.3	11	L		I, Ⅱ, N	H, MB	安山岩8
19		8	剥片	安山岩	14.5×20.6×4.5	1.6	15	H1		I	L	安山岩8
20		10	剥片	黒曜石	17.8×8.5×3.4	0.5		H1		I		黒曜石6
21		13	ナイフ形石器	安山岩	40.4×21.4×9.0	8.8	2					安山岩11
22		15	剥片	安山岩	22.4×13.5×9.7	2.2		N		I	H, B	安山岩8
23	14D-00-	5	剥片	黒曜石	14.7×9.8×4.0	0.7		H		I, Ⅱ		黒曜石6
24		6	砕片	黒曜石	4.7×7.9×1.8	0.1		L		I		黒曜石6
25		7	剥片	黒曜石	10.2×12.6×2.2	0.2		N		I		黒曜石6
26		8	剥片	東	15.0×20.9×7.0	2.3	6					黒曜石6
27		9	剥片	び	13.0×21.4×6.3	1.6		N		I, Ⅱ, Ⅲ		黒曜石6
28		10	楔形石器	黒曜石	16.5×16.7×7.9	1.7	5					黒曜石6
29		11	砕片	黒曜石	9.4×8.0×3.3	0.2		H		I		黒曜石6
30		13	台形縁石器	安山岩	34.6×30.3×7.9	5.0	4	H		N	I	安山岩10
31	14D-01-	1	台形縁石器	安山岩	33.4×27.3×6.8	5.4	3					安山岩9
32		2	剥片	珪質頁岩	17.3×28.7×10.0	5.6	7	H1	D			珪質頁岩12
33		3	剥片	珪質頁岩	7.1×25.9×1.9	0.5		H1	D	I		珪質頁岩9

第8ブロック(第25~32図、第8表、図版2・8~11)

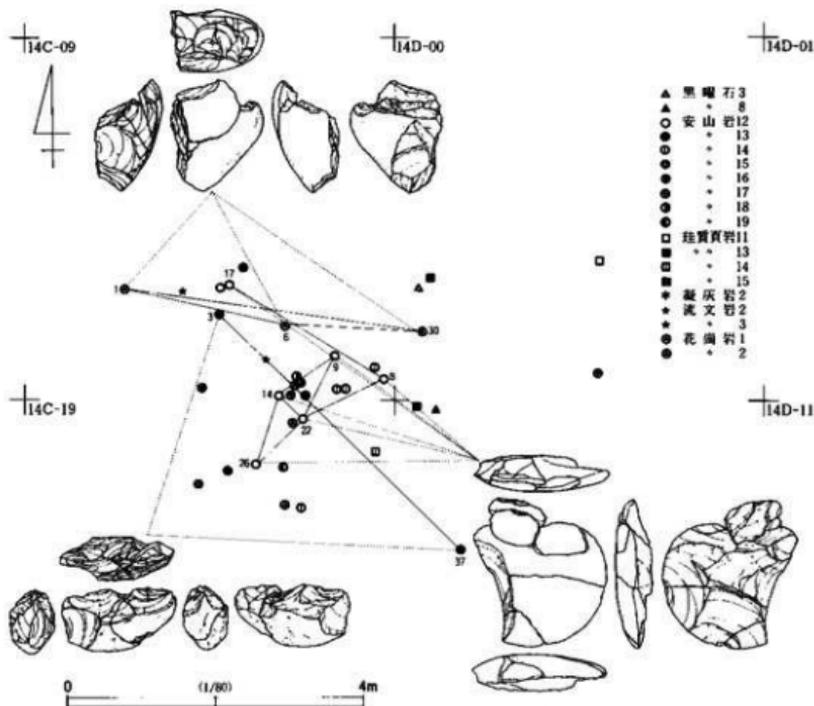
状況 ブロック群の南側に位置する。14C-09・19、14D-00・10区を中心に37点で構成される。南北4.5m、東西6.5mの楕円形状に分布し、中央部に遺物のやや密集した部分がありそこを中心として放射状に遺物が散漫になっていく分布状況が看取される。これは中央部での母岩の消費が行われていることに起因すると思われる。出土層準はⅢ層~Ⅳ・Ⅴ層に及びⅢ層下部に集中が見られる。他のブロックの産出層準よりもやや上位に設定されたが、これは、台地の最奥部に位置し微地形が南東方向に傾斜しているため遺物投影が本来の層準を示していないためと考えられ、本来の出土層準は下方になるものと思われる。器種構成はナイフ形石器1点、削器2点、敲石1点、剥片27点、石核6点である。

遺物 1はナイフ形石器である。右側縁表腹両面から細部加工されるが調整は荒い。刃部腹面に使用痕が看取される。2・3は削器とした。2は厚味のある盤状剥片を素材として、腹面からの調整により右側縁から下端部にかけて調整が施される。下端部の調整も入念に行われているので、掻器的な機能も合わせ持つものであろう。3は半裁楕円礫を素材として、腹面からの連続的な調整が右側縁に看取される。4は石核と分類した。偏平礫の表裏面を横剥ぎして、横長剥片を生産している。表面下半部の剥離痕を調整加工と見れば、削器と分類することもで



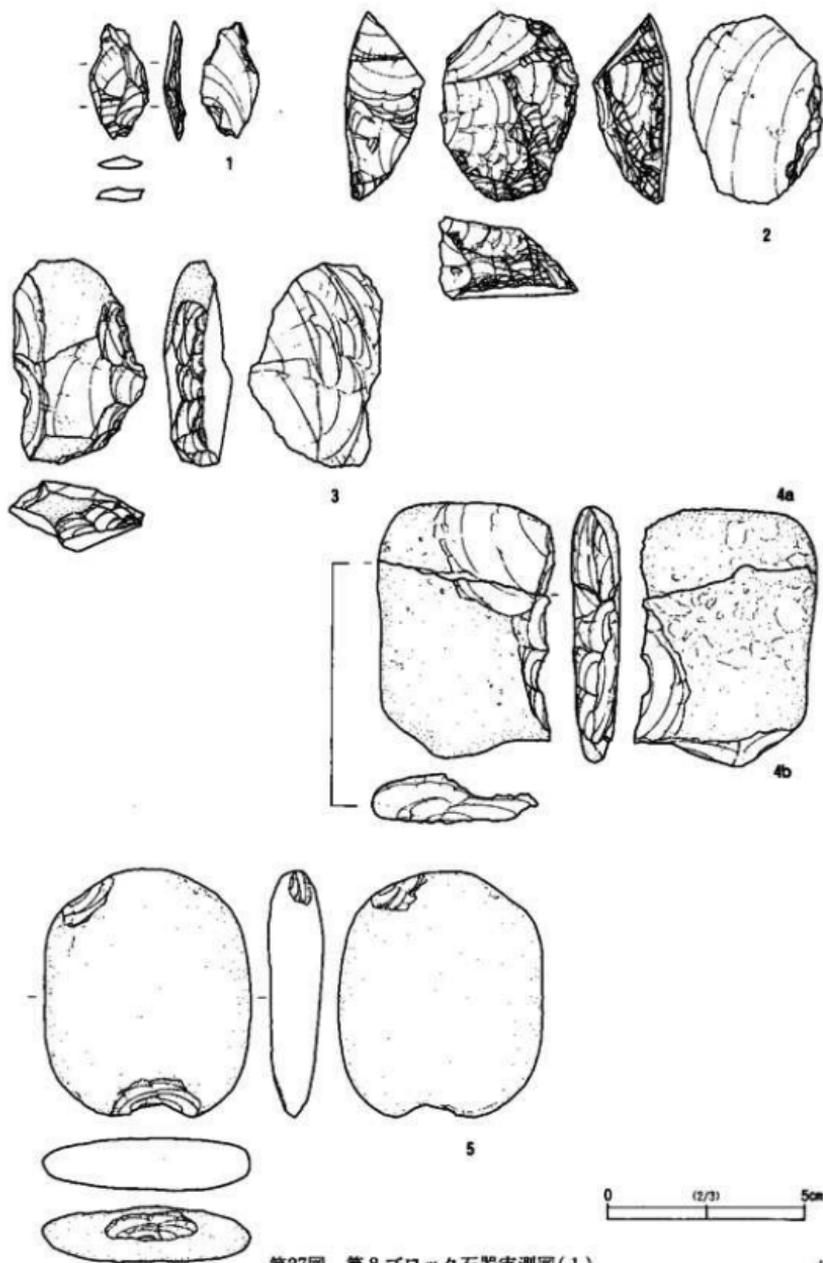
第25図 第8ブロック器種別遺物分布図

きる資料である。5は敲石。下端部に抉れたような剥離痕と潰れが認められる。6～19は剥片を示した。安山岩製の横長剥片を主体としている。6・7は異質なもので珉質頁岩を素材として、頭部調整が顕著である。8～15・18が安山岩製のもので18を除いてすべて背面に自然面を残置する横長剥片の範疇に属する。17・19は背面がすべて自然面で覆われるもの、18は縦長剥片である。20以降に接合資料を図示した。20は安山岩製の石核と剥片の接合例である。この資料の剥片剥離過程に着目すると、楕円礫の長軸の一边を打点に設定して正面右側から表面裏面の剥離を繰り返しながら左側に打点を移動している。その後再び正面右側に打点を移動して20bを剥離している。打点と作業面を交互に転換して剥片を剥取する剥離手法であり、残核はチョッパー状の形態になるものである。生産された剥片は、20bは縦長剥片であるが剥離痕の構成からは横長剥片を主体に生産していたと想定される。剥片は、打面が先行する剥離面を打面とするため、複剥離面打面となることを特徴とする。21は花崗岩製の石核と剥片2点の接合例である。石核素材は10cm弱の厚味ある楕円礫と推定され、石核上面で平坦な剥離で打面を形

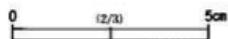
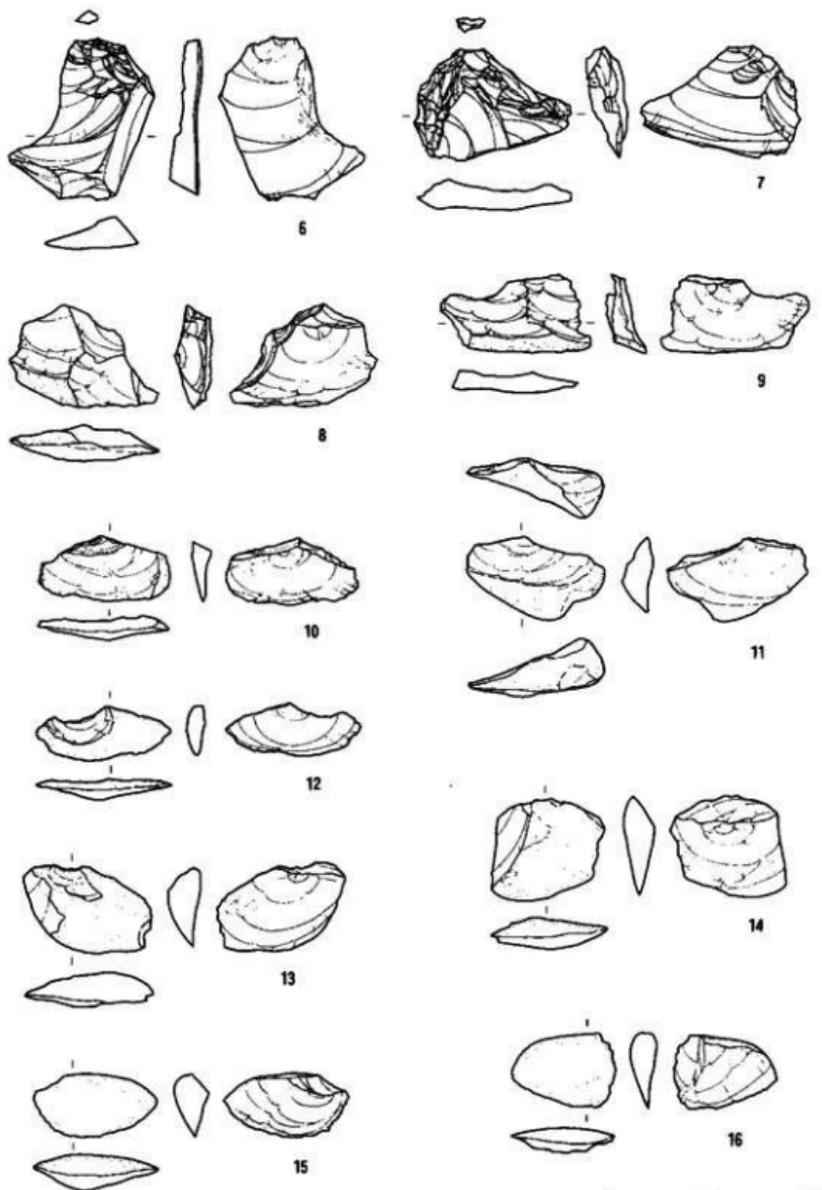


第26図 第8ブロック母岩別遺物分布図

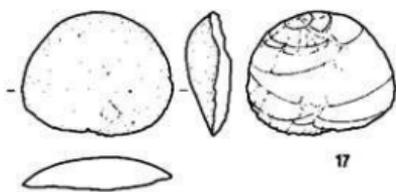
成してしているが、この剥離は左側面の作業面を打点としていることから、21cの背面に右側面方向からの平坦な剥離痕が看取されることから、21c・22bを剥離する打面形成の段階以前に上面・側面の石核整形的な作業面形成が行われていると考えられる。この資料を製作工程的に整理すると上面・側面の石核整形、左側面からの打面形成剥片剥離、上面を打面として左側面の剥片剥離、その後正面の20c・20bの剥片剥離作業が行われる。20bの剥離に先行して頭部調整的な打撃が介在する。さらに裏面からの広い剥片剥離と正面の作業面を打面に転移して上面に2回ほどの剥片剥離を行っている。これらの作業工程からこの接合資料は90度打面転移を繰り返す剥片剥離手法の典型例と考えられる。石核はまだ素材を剥ぐ許容量を残しており剥片剥離途中で廃棄されたものであろう。22は安山岩製の石核と剥片5点の接合例である。石核素材は約10cmほどの偏平楕円形で、素材作出の段階で、半裁あるいは数分割を行い素材としたものと考えられ、所謂盤状石核素材といわれるものである。まず裏面の剥離痕を観察すると中央部に分割面を残存し、22eの背面構成を見ると背面中央の剥片剥離が最も先行すると考えられ、連続して上部左右の剥片剥離が行われた後、22e横長剥片が剥離される。この剥片は約半



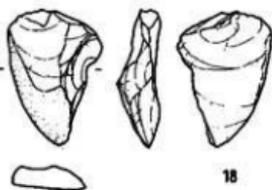
第27図 第8ブロック石器実測図(1)



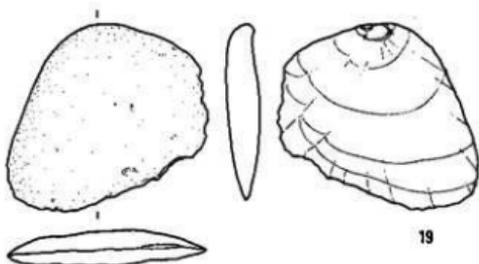
第28図 第8ブロック石器実測図(2)



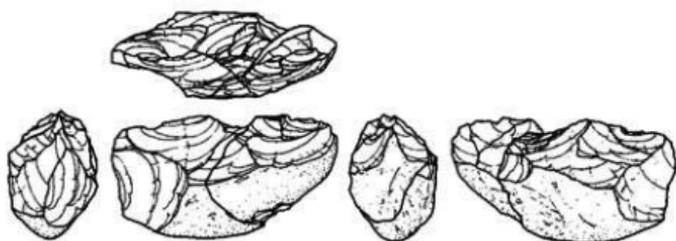
17



18



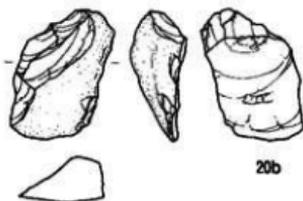
19



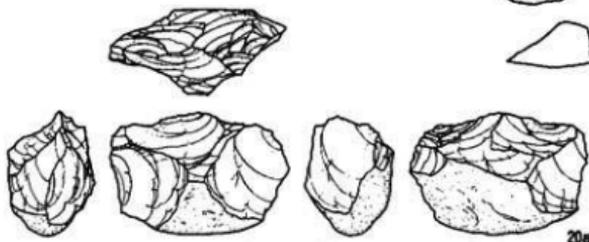
20a+b



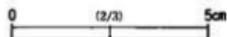
+



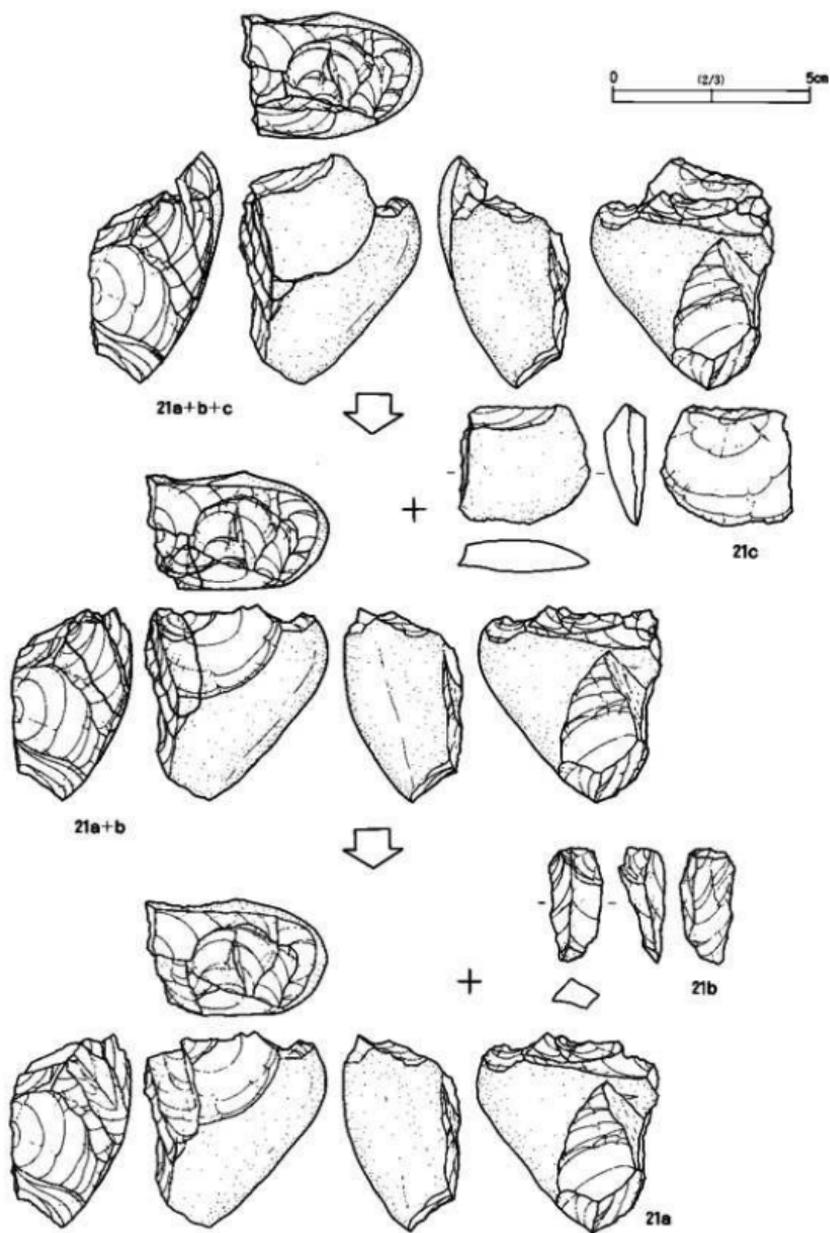
20b



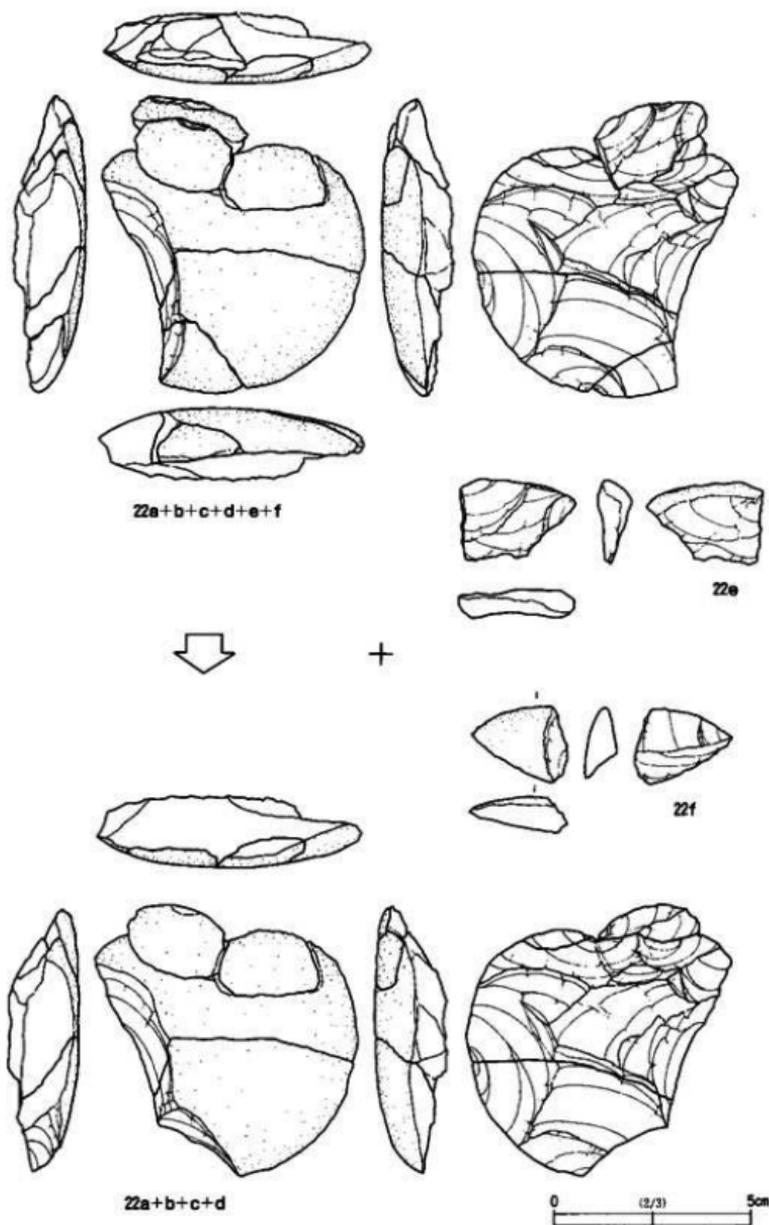
20a



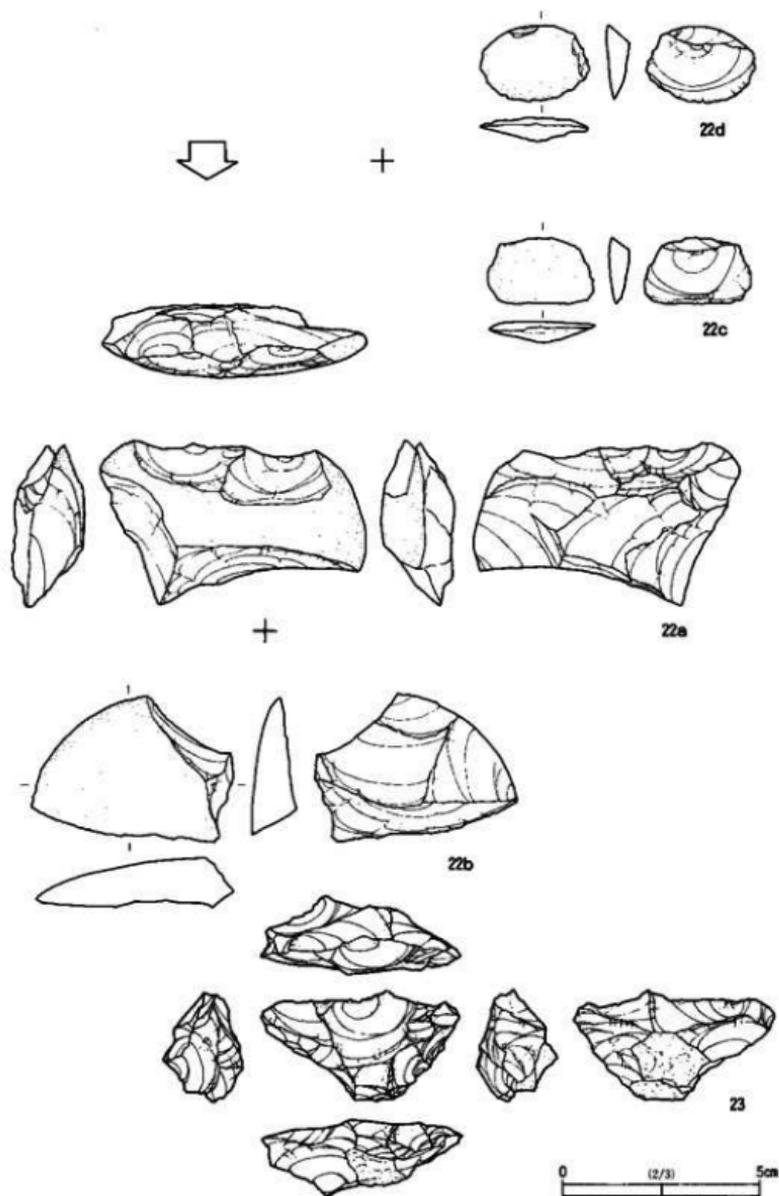
第29図 第8ブロック石器実測図(3)



第30図 第8ブロック石器実測図(4)



第31図 第8ブロック石器実測図(5)



第32図 第8ブロック石器実測図(6)

第8表 第8号ブロック石器属性表

No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	検定 番号	打製 形状	打製 調整	背面構成	刃面	母岩別資料	
1	14C-09-	5	石	花崗岩	50.1×46.0×30.0	77.5	21a				花崗岩 1	
2		6	剥	片	流紋岩	31.2×37.9×10.2	12.4	17	C 1	N		流紋岩 2
3		7	石	片	安山岩	31.3×49.5×23.0	22.4	20a				安山岩 13
4		10	剥	片	安山岩	25.6×38.4×7.1	5.6	8	B 1	N	I, II	安山岩 13
5		11	剥	片	珪質頁岩	18.5×25.0×5.7	2.5	16	C	N		流紋岩 3
6		12	剥	片	花崗岩	28.7×9.4×11.6	3.0	21b	H 1		I	花崗岩 1
7		14	剥	片	安山岩	26.6×28.0×7.1	4.2	14	H 1	N	I, N	安山岩 14
8		16	剥	片	安山岩	48.5×38.1×11.6	22.6	22b	N	N	II	安山岩 12
9		18	剥	片	安山岩	16.2×28.7×5.2	2.7	22c	H 1		IV	安山岩 12
10		20	剥	片	安山岩	22.1×32.3×7.5	4.6	13	H 1			安山岩 14
11		21	剥	片	安山岩	49.6×50.0×7.9	20.0	19	C	N		安山岩 13
12		22	石	核	安山岩	49.6×61.0×11.5	36.4	4b				花崗岩 2
13		24	剥	片	安山岩	20.0×36.0×6.1	4.9	9	H 1	N	I, N	安山岩 16
14		25	剥	片	安山岩	19.3×26.3×5.9	2.4	22d	H 1		I	安山岩 12
15	26	剥	片	安山岩	37.7×50.4×14.7	23.6	3	N		I, II, III	安山岩 16	
16	28	剥	片	安山岩	15.5×8.5×2.4	0.4		N		I	安山岩 12	
17	29	剥	片	安山岩	24.5×19.5×8.3	3.4	29f				安山岩 12	
18	32	剥	片	安山岩	20.9×33.6×7.4	4.9	11	P 1			安山岩 14	
19	33	剥	片	安山岩	16.0×12.0×6.0	1.2		H 1		I, III	安山岩 17	
20	35	剥	片	安山岩	10.2×7.6×5.7	0.9		C		I, N	安山岩 18	
21	14C-19-	1	剥	片	珪質頁岩	41.8×29.3×6.5	8.8	6	H 1		I, IV	珪質頁岩 12
22		2	石	核	安山岩	40.5×67.5×19.0	46.1	22a				安山岩 12
23		3	石	核	花崗岩	44.5×21.0×12.0	11.6	4a	C	N	I	花崗岩 2
24		6	龍	石	安山岩	62.4×51.8×12.6	60.4	5				安山岩 15
25		7	剥	片	安山岩	16.4×32.0×5.2	2.0	10	H 1	N	I	安山岩 13
26		8	剥	片	安山岩	24.2×31.4×4.6	4.2	22e	H 1		L	安山岩 12
27		9	剥	片	安山岩	15.1×30.8×8.5	3.9	15	H 1	N	I	安山岩 19
28		11	剥	片	安山岩	12.9×33.7×5.0	1.7	12	C		I	安山岩 17
29		12	剥	片	安山岩	35.4×22.8×9.8	5.8	18	H 1	N	I, II	安山岩 14
30		20	2	剥	片	花崗岩	29.1×32.0×9.5	10.7	21c	H 1	N	I
31	14D-00-	3	剥	片	黒曜石	19.1×17.3×6.3	1.4					黒曜石 3
32		4	石	核	珪質頁岩	27.8×48.9×28.4	16.0	23				珪質頁岩 15
33		14	ナイフ形石核	珪質頁岩	29.2×14.0×4.0	1.3	1	C				珪質頁岩 11
34		17	剥	片	安山岩	19.1×19.8×3.6	1.4			N		安山岩 18
35	14D-10-	2	剥	片	黒曜石	33.5×47.3×18.3	28.3	2	N		I	黒曜石 9
36		3	剥	片	珪質頁岩	28.6×40.2×19.2	7.2	7	N		I, II, III	珪質頁岩 13
37		4	剥	片	安山岩	36.9×22.4×13.2	8.0	20b	H 1	N	II, N	安山岩 13

分を欠損しているが、剥取の衝撃による可能性が強い。上部の一連の剥片剥離の後、下部を自然面から逆時計回りに剥離を行い、比較的大形の剥片を剥離している。さらに裏面に打面転移して自然面側を剥離する。まず22c・22dの横長剥片を剥離して、時計回りに裏面右側面、下端の剥離が看取され、22bを剥離している。側面と下端の剥離は切断に近い剥片剥離を行っている。残核(22a)の剥離構成を見ると22dの剥片剥離により形成された凹面を打面とした剥離が認められるので、裏面上部からの剥離あるいは側面・下部の剥離の後に、さらに自然面側に打面転移をしていることが理解される。これらの剥片剥離工程から、接合資料は盤状剥片を石核素材とし、表面・腹面に打面転移して周縁から求心状に素材を剥片剥離する剥離技術に概括される。素材は横長剥片を目的としていると考えられる。23は珪質頁岩を石材とした石核である。剥離面を打面として正面を広く剥片剥離している。さらに正面で周縁からの小さな剥離と裏面を作業面として上下からの剥片剥離が看取される。残核は多面体を呈する。

特徴 石材は安山岩が主体を占める。それに花崗岩、珪質頁岩、黒曜石が少量加わる。これは安山岩による集中的な剥片剥離作業によるものである。この剥片剥離作業は素材作出作業の

みを行っており、ナイフ形石器、削器等の利器に連続した素材の調整加工は看取されない。剥片剥離技術は、安山岩を素材にするもので、1. 打面と作業面を交互に転移して剥片剥離作業するもの、2. 盤状剥片を石核素材として求心的に剥片剥離するものがある。花崗岩を素材とするもので、3. 打面を90度を基調として転移し剥片剥離するものがある。1、2の剥片剥離作業で生産された剥片は概して横長剥片が多く、自然面打面・広い複剥離面打面を持ち、背面に自然面を持つなどの特徴を有している。これらの素材剥片からどのような器種を製作したかは調整加工段階の資料が欠落して不明である。器種構成については素材生産中心のブロックであることを反映して石核が6点と多い。他にブランディングの貧弱なナイフ形石器、厚手の素材の削器が組成する。

第9表 第2文化層器種組成表

	ナイフ形石器	台形石器	角錐状石器	尖頭器	鎌器	削器	横形石器	削器	盤石	R F	U F	剥片	砕片	石核	合計
2ブロック	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	2	0	0	6
3ブロック	1	0	0	0	0	1	0	0	1	2	4	7	3	1	20
4ブロック	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	3	0	9
5ブロック	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	4
6ブロック	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	0	5
7ブロック	2	2	0	0	0	0	1	0	0	2	2	17	5	2	33
8ブロック	1	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	27	0	6	37
合計	5	5	0	0	0	6	1	0	3	4	9	60	12	9	114

第10表 第2文化層石材組成表

	黒曜石	安山岩	珪質頁岩	凝灰岩	頁岩	チャート	砂岩	メノウ	流紋岩	閃緑岩	花崗岩	合計
2ブロック	2	1	0	0	0	2	0	0	0	1	0	6
3ブロック	8	2	3	5	0	1	0	1	0	0	0	20
4ブロック	1	3	5	0	0	0	0	0	0	0	0	9
5ブロック	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	4
6ブロック	1	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	5
7ブロック	19	7	5	1	1	0	0	0	0	0	0	33
8ブロック	2	25	5	0	0	0	0	0	1	0	4	37
合計	33	39	21	7	3	3	0	1	2	1	4	114

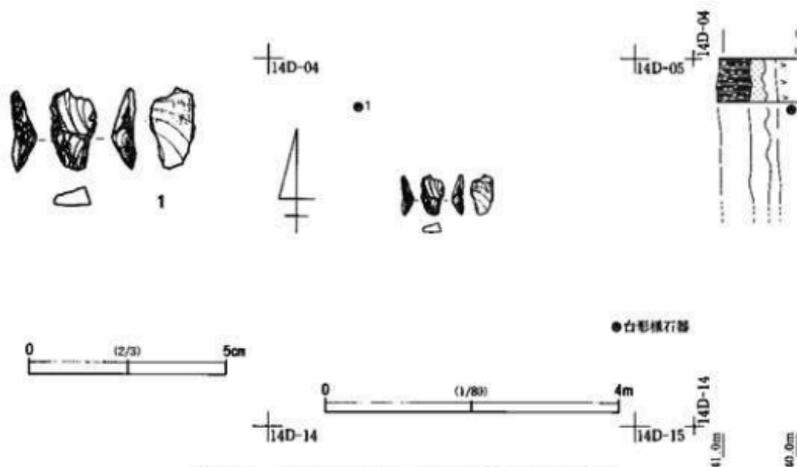
b. 単独出土石器・表面採集石器

単独出土石器(第33図、第11表、図版12)

14D-04区で台形様石器が単独で出土している(1)。出土層準はVI層で、明らかに2～8ブロックの文化層とは異なる。透明度の強い質の良い黒曜石を石材としており、素材を斜めに用いて逆三角形状になるように2側縁を調整加工している。刃部はやや斜刃となる。

表面採集石器(第34図、第12表、図版12)

整理の過程で表面採集、あるいは縄文時代以降の層序から一括して検出された石器から旧石



第33図 単独出土石器実測図・器種別遺物分布図

第11表 単独石器属性表

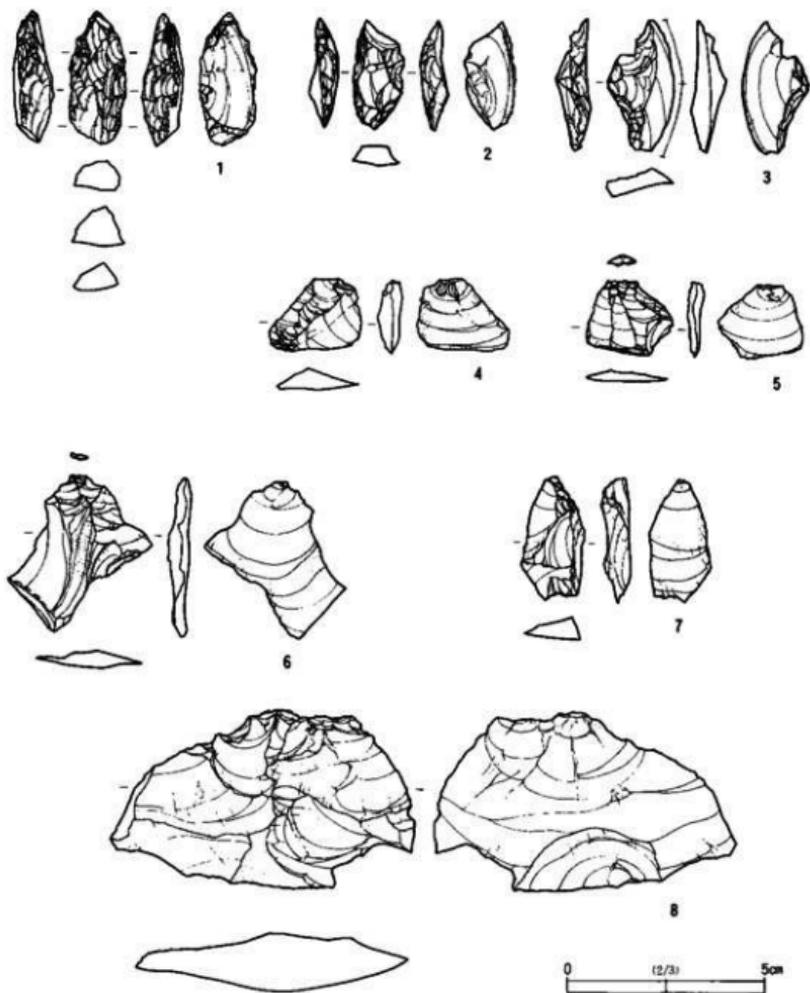
No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	押印 番号	打面 形状	打面 調整	背面構成	折面	母岩別資料
1	14D-04-	1	白形横石器	黒曜石	20.5×11.0×4.7	0.8	1				

第12表 表採石器属性表

No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	押印 番号	打面 形状	打面 調整	背面構成	折面	母岩別資料
1	8C-94-	1	ナイフ形石器	珪質頁岩	27.9×12.9×6.3	2.0	2				
2	11E-58-	1	剃片	珪質頁岩	75.6×45.2×20.1	44.3	8		N	I, II	
3	12C-98-	1	角錐状石器	黒曜石	33.8×14.1×10.1	4.6	1				
4	13C-47-	1	剃片	珪質頁岩	30.1×14.3×6.4	3.0	7	H 1		I, II, III	
5	13C-71-	1	剃片	珪質頁岩	18.6×21.3×3.3	1.1	5	H 2		I, II	
6	13C-96-	1	剃片	珪質頁岩	40.3×35.5×3.9	3.2	6	H 1		I, II, III, IV	
7	13D-77-	1	剃片 U	黒曜石	18.3×22.0×5.4	1.7	4	H 1		I	
8	14D-00-	1	ナイフ形石器	珪質頁岩	33.4×16.8×9.5	2.4	3				

器時代の所産と思われる遺物を抽出したものをここで報告する。

1は角錐状石器である。厚い横長剃片を素材として調整加工が顕著である。黒曜石製。12C-98区出土。2はナイフ形石器である。横長剃片を素材として左側縁にブランディングが顕著で、右側縁は平坦な調整加工が認められる。8C-94区出土。3・4は使用痕を有する剃片である。3は打面を山形に作出しており翼状剃片に類似する。打面側にも細かな調整が見られ頭部調整と把握したが、あるいはナイフ形石器としてもよい資料かもしれない。珪質頁岩製。14D-00区出土。4は右側縁から末端にかけて微細な使用痕が認められる。黒曜石製。13C-77



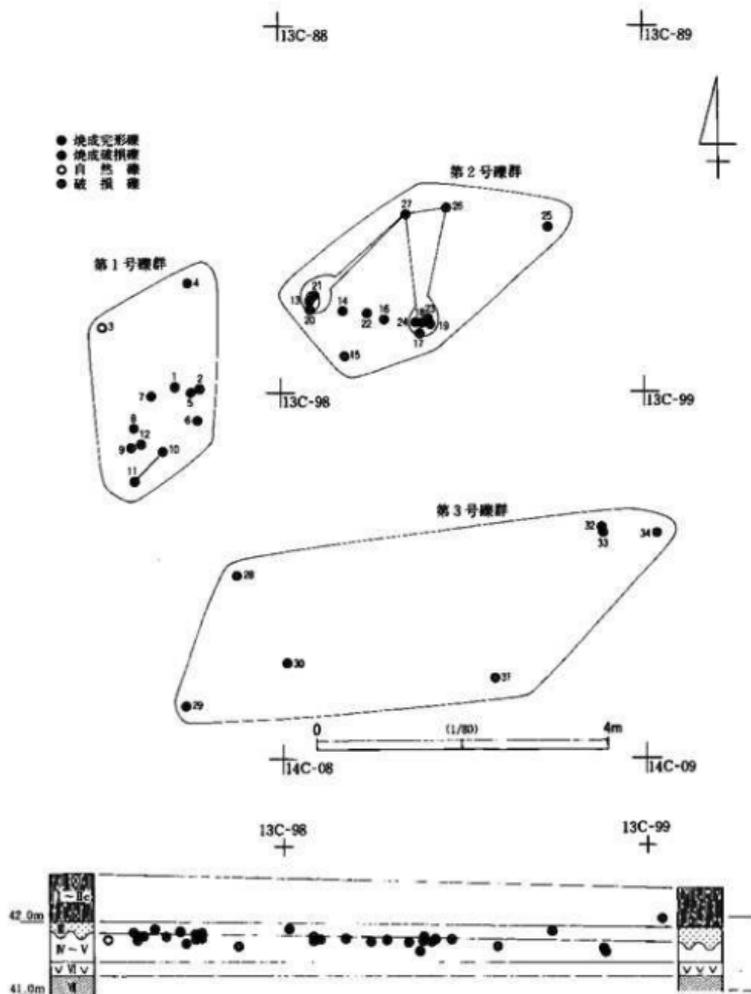
第34図 表採資料石器実測図

区出土。5～8は剥片である。すべて珪質頁岩製。5は背面に主要剥離面と同一方向の連続した剥離面が看取されるものである。13C-77区出土。6・7は打面更新の剥片と思われ、6は頭部調整が顕著である。13C-98区出土。7は背面に右方向からの先行する剥離面が看取され打面転移を伺わせる資料である。13C-47区出土。8は大形の剥片で腹面の剥離痕を剥片剥離作業と見れば石核としての機能も兼ね備えるものである。11E-58区出土。

c. 礫群

第1号礫群(第35・39図、第11表)

調査区西端の13C-87・97区に位置する。東側に2号礫群、南側に3号礫群が近接し、第3ブロックと平面分布で重複する。東西1.4m、南北2.8mの範囲に分布する。南に密集部があり、北に2点が離れる状況である。出土層位はⅣ・Ⅴ層上面に垂直分布のピークを持つ。密集部



第35図 第1～3号礫群、礫群内接合分布図

第13表 第1号群群礁属性表

No	遺物番号	石 材	器種	長 mm	短 mm	厚 mm	重量 g	遺存	赤化	付着	個体番号	備 合	
1	13C-87-	2	花崗岩	B	41.6	32.6	30.1	33.1	d	2	—	花崗岩 1	2, 12, 19
2		4	花崗岩	B	60.8	31.6	34.8	87.7	d	2	—	花崗岩 1	1, 5, 24
3		5	メノウ	C	55.4	47.5	20.8	89.8	a	—	—	メノウ 1	
4		6	閃緑岩	B	28.3	29.3	5.8	7.6	b	①	—	閃緑岩 1	
5	13C-97-	9	花崗岩	B	44.9	23.7	28.9	33.0	d	②	—	花崗岩 1	2, 19, 24
6		2	安山岩	B	59.0	28.0	45.3	4.1	d	②	—	安山岩 1	
7		5	花崗岩	B	32.7	20.5	12.1	6.1	d	②	—	花崗岩 2	9, 114
8		8	花崗岩	B	16.5	20.4	8.0	2.8	d	①	—	花崗岩 1	12, 24
9		9	花崗岩	B	30.8	38.7	14.3	19.4	d	①	—	花崗岩 2	7, 114
10		10	安山岩	B	75.6	62.8	33.0	235.9	c	1	ア	安山岩 2	11
11		13	安山岩	B	40.8	24.7	33.4	41.1	d	1	ア	安山岩 2	10
12		19	花崗岩	B	28.0	16.2	29.2	15.1	d	①	—	花崗岩 1	1, 8, 16

<凡例> 礁属性表の見方

1. No 管理段階に設定したすべての礁の通し番号である。2. 遺物番号 調査時の取り上げ番号である。3. 器種 礁の状態により分類し、焼成完形礁(A)・焼成破損礁(B)・未焼成完形礁(C)・未焼成破損礁(D)と記号で示した。4. 長・短・厚 礁の最大の距離(長)を設定し軸として、それに目次的に直交する最大の距離を短とする。そして、長と短の形成する平面に目次的に直交する最大の距離を厚とした。5. 遺存 a. 完形(遺存率100%)のもの。b. 遺存率100%>破損率(x)>80%のもの。c. 80%>x>50%のもの。d. 50%>xのものに分類した。6. 赤化 赤化度合いの状態により3分類した。1は薄く赤化しているもの。2は1と3の中間の赤化。3は全く赤化しているものである。また割れ面赤化のものは○数字で示した。非赤化は—で示した。7. 付着 ア. スス状付着物。イ. タール状付着物が観察されるものとした。8. 個体番号 すべての破損礁の同一個体ごとの通し番号である。9. 接合 同一個体礁の接合はNoの数字で示した。接合が多いものについては、枠の大きさの制限上その礁に直接接合しているものに止めた。

第14表 第2号群群礁属性表

No	遺物番号	石 材	器種	長 mm	短 mm	厚 mm	重量 g	遺存	赤化	付着	個体番号	備 合	
13	13C-88-	1	閃緑岩	B	62.5	18.9	28.9	40.3	d	2	—	閃緑岩 2	21, 27
14		3	花崗岩	B	72.0	33.3	23.9	50.8	d	①	—	花崗岩 3	
15		5	泥 岩	D	21.7	7.3	8.8	1.8	d	—	—	泥 岩 1	
16		7	花崗岩	B	60.3	29.1	33.4	64.2	d	②	—	花崗岩 1	12, 18, 24
17		10	閃緑岩	B	34.8	16.5	5.6	3.8	d	2	—	閃緑岩 2	26, 27
18		11	花崗岩	B	47.1	34.0	33.8	73.4	d	②	—	花崗岩 1	16
19		12	花崗岩	B	42.0	33.1	24.3	39.4	d	③	—	花崗岩 1	1, 5
20		13	閃緑岩	B	37.3	27.0	28.2	29.4	d	1	—	閃緑岩 2	27
21		14	閃緑岩	B	70.5	18.9	23.9	57.8	d	2	—	閃緑岩 2	13, 20
22		15	花崗岩	B	27.2	19.4	22.1	19.3	d	③	—	花崗岩 2	118
23		16	花崗岩	B	47.3	37.1	39.3	94.9	d	②	ア	花崗岩 4	29
24		17	花崗岩	B	18.5	11.2	8.2	1.7	d	③	—	花崗岩 1	2, 5, 8, 16
25		18	凝灰岩	B	50.1	42.2	22.2	48.5	c	1	—	凝灰岩 1	
26		19	閃緑岩	B	28.1	7.4	19.8	4.5	d	1	—	閃緑岩 2	17, 27
27		20	閃緑岩	B	102.4	42.1	38.7	171.6	d	2	ア	閃緑岩 2	13, 17, 20, 25

第15表 第3号群群礁属性表

No	遺物番号	石 材	器種	長 mm	短 mm	厚 mm	重量 g	遺存	赤化	付着	個体番号	備 合	
28	13C-97-	16	玄武岩	D	26.6	19.8	11.0	7.7	c	—	—	玄武岩 1	
29		17	花崗岩	B	54.7	39.5	48.0	98.9	d	3	ア	花崗岩 4	23
30	13C-98-	1	チャート	B	44.5	45.0	24.2	32.7	d	②	—	チャート 1	
31		5	花崗岩	D	23.2	22.2	14.5	7.5	d	—	—	花崗岩 5	
32		7	砂 岩	B	36.4	26.1	25.1	35.1	d	②	ア	砂 岩 1	33, 81
33		8	砂 岩	B	19.1	15.1	20.6	4.5	d	②	—	砂 岩 1	32
34	13C-99-	1	花崗岩	D	28.5	16.4	16.8	10.0	d	—	—	花崗岩 6	

に4、5cm大の破損礁が多い。構成礁数は12点(6個体)である。総重量は575.7g、平均重量は48.0gを量る。遺存は9点が完形礁の50%以下の状態である。11点が赤化しており、内2点到スス状付着物が認められた。接合状態は接合が礁群内で収まるものが1例2点あり、礁群外

の接合は2号礫群内の礫と接合する個体が1例5点で本礫群構成礫の主体を占め、2号・8号礫群と接合する個体が1例2点ある。礫群内接合の例は割れ面非赤化の接合であるが、礫群外接合の例は割れ面赤化の接合であり、赤化の度合いも差異が認められる。

第2号礫群(第35・39図、第12表)

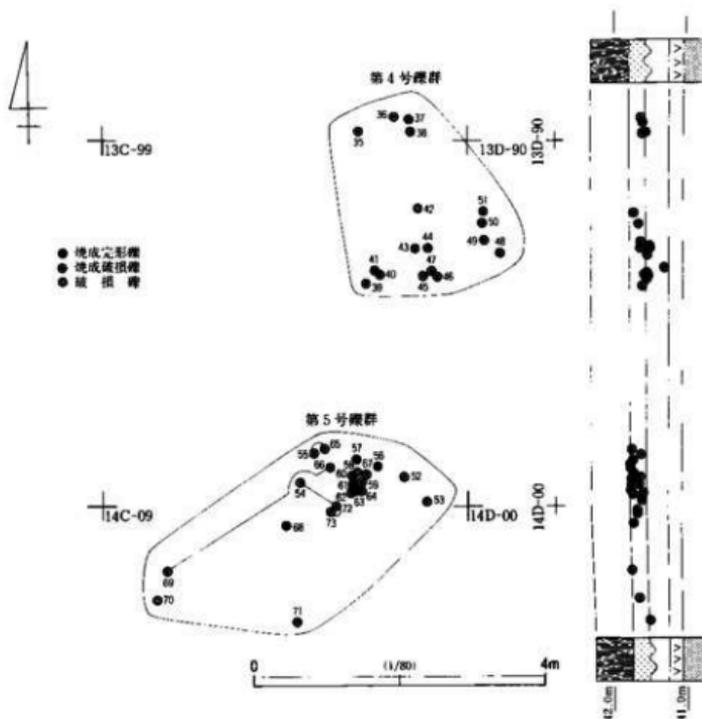
調査区南端の13C-88区に位置する。西側に2号礫群、南側に3号礫群が近接し、第3ブロックと平面分布で一部東側が重複する。東西3.4m、南北2.0mの範囲に分布する。南側に一列に並ぶように密集部があり、北側に数点散在する状況である。出土層位はⅣ・Ⅴ層上面に垂直分布のピークを持つ。構成礫数は15点(7個体)である。総重量は701.4g、平均重量は46.8gを量る。1点を除いて焼成破損礫で、遺存は14点が完形礫の50%以下の破損状態である。14点が赤化しており、内2点にスス状付着物が認められる。接合状態は接合が礫群内で収まる個体が1例6点あり、礫群外の接合は1号礫群内の礫と接合する個体が1例4点、3号礫群内の礫と接合する例が1例1点、1号・8号礫群と接合する個体が1例1点ある。礫群内接合の例は割れ面非赤化の接合であるが、礫群外接合の例は、3号礫群内との接合例は割れ面非赤化の接合であり、他の接合例は1号礫群と個体を共有するので割れ面赤化である。

第3号礫群(第35・39図、第13表)

調査区西側の13C-97・98・99区に位置する。北側に1号・2号礫群が近接し、3号ブロックと平面分布で一部西側が重複する。東西6.4m、南北2.6mの範囲に分布する。東西に離れて数点ずつ散在する状況である。出土層位はばらつきがあるがⅣ・Ⅴ層上面に垂直分布を持つものが多い。構成礫数は7点(6個体)である。総重量は196.4g、平均重量は28.1gを量り、総量、平均重量共に全ての礫群で最も貧弱である。遺存は6点が完形礫の50%以下の破損状態である。4点が赤化しており、内2点にスス状付着物が認められる。接合状態は2号礫群と接合する個体が1例1点あり、割れ面非赤化の接合である。他の礫群と比較して、各礫が小さいこと、赤化率が低いこと、礫群内での集中的な接合がみられないこと等から、1つの礫群として機能するのではなく他の礫群からの散礫集合の可能性が高い。

第4号礫群(第36・40・41図、第14表)

調査区中央部北側の13C-89・99、13D-90区に位置する。南東側に6号礫群が接し、南側に5号礫群が約2.0m離れて存在する。第4ブロックと平面分布で重複する。東西2.0m、南北2.4mの比較的狭い範囲に分布する。南側に密集部があり北側に4点まとまって分布する状況である。出土層位はⅢ層下部に垂直分布するものが多い。構成礫数は17点(6個体)である。総重量は515.9g、平均重量は30.3gを量る。1点を除いてすべて焼成破損礫であり、遺存は17点全部が完形礫の50%以下の破損状態である。16点が赤化しており、内3点にスス状付着物が認められる。接合状態は接合が礫群内で収まる個体が1例2点(接合では礫群内で収束するが、同個体のものが6号礫群内の礫と接合している)あり、礫群外の接合は6号礫群の礫と接合す



第36図 第4・5号群、群内接合分布図

る個体が2例6点、5号・7号群の碟と接合する例が1例1点ある。これは平面分布を見るとこの個体を中心に放射状に接合する状況がみられる。群内外共に接合の例は全て割れ面赤化の接合であるが、個体番号チャート2は4号群内の接合では各碟が一様に濃く赤化しており、6号群内で接合するものは薄く赤化してその差異は明瞭である。

第5号群(第36・40・41図、第15表)

調査区中央部の13C-99、14C-09区に位置する。周囲に3号・4号・6号・8号群が約1、2m離れて取り囲むように存在する。第6ブロックと平面分布で西側が一部重複する。東西3.8m、南北2.4mの範囲に分布する。北側に密集部があり南側に数点散在する状況である。出土層位はⅢ層中位に垂直分布するものが多く、焼成完形碟が垂直分布の上位に位置する傾向が看取される。構成碟数は22点(11個体)である。総重量は1427.8g、平均重量は64.9gを量る。16点が焼成破損碟であり焼成完形碟が4点検出されており特徴的である。遺存は14点が完形碟の50%以下の破損状態であり、他の群に比較してその遺存度は高い。20点が赤化しており、

第16表 第4号礫群隸属性表

No	遺物番号	石材	器種	長 mm	短 mm	厚 mm	重量 g	遺存	弁化	付着	個体番号	集 合	
35	13C-99-	2	安山岩	B	37.5	22.2	13.6	12.4	d	②	—	安山岩 3	91
36		5	安山岩	B	40.7	19.2	18.5	11.2	d	②	—	安山岩 3	37
37		6	安山岩	B	44.6	22.9	23.8	42.0	d	②	—	安山岩 3	36
38	13C-99-	7	安山岩	B	58.1	47.0	50.0	129.2	d	②	—	安山岩 4	
39		2	砂岩	B	17.7	16.2	28.9	11.8	d	①	—	砂岩 1	43, 45, 81
40		3	チャート	B	51.6	43.5	20.3	46.8	d	③	—	チャート 2	41, 48, 74, 85
41		4	チャート	B	28.2	29.3	45.9	46.3	d	③	—	チャート 2	40, 77,
42		8	安山岩	D	54.2	29.2	31.2	60.5	d	—	—	安山岩 5	
43		9b	砂岩	B	18.1	14.1	14.1	4.0	d	①	—	砂岩 1	39, 45, 83
44			10	チャート	B	17.0	15.9	13.4	6.4	d	③	—	チャート 2
45		12	砂岩	B	23.2	15.3	27.4	15.6	d	①	7	砂岩 1	39, 43, 46, 83
46		13	砂岩	B	31.0	22.8	28.6	19.6	d	①	7	砂岩 1	45
47		21	砂岩	B	20.2	20.1	22.5	10.4	d	①	7	砂岩 1	83
48	13D-90-	6	チャート	B	25.3	24.3	22.5	11.5	d	③	—	チャート 2	40, 43, 75
49		7	チャート	B	34.5	28.6	16.0	16.3	d	③	—	チャート 2	74, 89
50		8	砂岩	B	59.4	43.3	29.7	69.6	d	②	—	砂岩 2	53, 71, 97, 101
51		9	チャート	B	20.8	12.4	16.3	2.3	d	1	—	チャート 2	

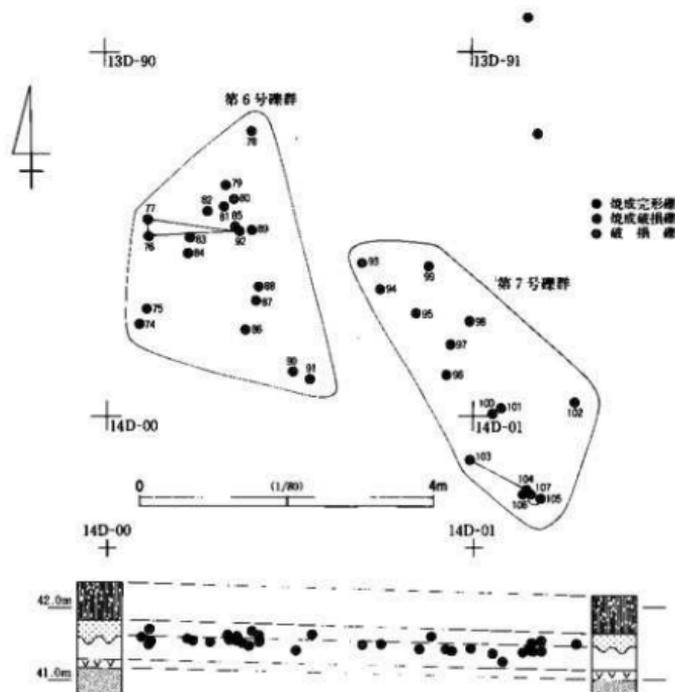
第17表 第5号礫群隸属性表

No	遺物番号	石材	器種	長 mm	短 mm	厚 mm	重量 g	遺存	弁化	付着	個体番号	集 合		
52	13C-99-	17	安山岩	B	34.6	18.2	5.1	2.9	d	①	—	安山岩 6	64, 67	
53		18	砂岩	B	28.8	19.9	19.4	9.3	d	2	—	砂岩 2	50, 71	
54		19	砂岩	B	40.2	28.5	18.1	21.4	d	①	—	砂岩 3	72, 73	
55		20	凝灰岩	B	45.2	44.2	17.2	29.4	d	1	—	凝灰岩 2	65	
56		22	砂岩	A	98.3	73.6	27.1	241.7	a	1	—	砂岩 3		
57		23	花崗岩	A	79.5	57.9	18.6	130.7	a	3	7	花崗岩 7		
58		24	安山岩	D	78.5	49.2	20.2	108.7	c	—	—	安山岩 7		
59		25	花崗岩	B	57.6	23.4	12.5	18.9	d	①	—	花崗岩 8	26	
60		26	花崗岩	B	75.3	55.1	29.7	156.8	c	1	—	花崗岩 8	25	
61		27	安山岩	A	82.1	53.0	30.1	174.0	c	1	—	安山岩 8		
62		28	花崗岩	B	62.2	33.3	22.1	72.9	d	②	7	花崗岩 9		
63		29	花崗岩	B	89.4	27.5	23.4	152.6	b	②	—	花崗岩 10		
64		30	安山岩	B	50.6	51.0	18.0	55.1	c	①	7	安山岩 6	52, 87	
65		31	凝灰岩	B	42.1	15.4	17.2	13.2	d	①	7	凝灰岩 2	55	
66		32	安山岩	B	42.9	26.8	14.6	22.0	d	①	—	安山岩 7	69	
67		33	安山岩	B	43.3	36.4	10.1	21.6	d	①	7	安山岩 6	52, 64	
68		14C-09-	2	凝灰岩	A	39.4	34.6	15.0	25.5	a	1	—	凝灰岩 3	
69			3	安山岩	B	38.1	22.6	14.4	18.2	d	①	—	安山岩 7	66
70			4	安山岩	D	45.9	36.1	16.5	20.7	d	—	—	安山岩 8	
71			9	砂岩	B	60.7	26.4	26.2	33.8	d	②	—	砂岩 2	50, 53, 87
72			36	砂岩	B	57.8	44.6	21.0	53.9	d	①	7	砂岩 3	54, 73
73			37	砂岩	B	81.2	29.5	17.0	42.5	d	①	—	砂岩 3	54, 72

内6点にスス状付着物が認められる。接合状態は接合が礫群内で収まる個体が5例12点と多い。礫群外の接合は4号・7号礫群の礫と接合する個体が1例2点あるだけである。礫群外の1例は割れ面赤化の接合である。礫群内のは3例が割れ面赤化の接合で、2例が割れ面非赤化の接合である。

第6号礫群(第37・40・41図、第16表)

調査区中央部やや東側の13D-90区に位置する。周囲に4号・5号・7号礫群が取り囲むように存在する。第7ブロックと平面分布で東側が一部重複する。東西2.4m、南北3.5mの範囲に分布する。北側が密に分布し南側に向かって散漫に分布する状況である。出土層位はIV・V層上面に垂直分布するものが多い。構成礫数は19点(7個体)である。総重量は761.4g、平



第37図 第6・7号礫群、礫群内接合分布図

均重量は40.1gを量る。1点を除いてすべて焼成破損礫である。遺存は19点全部が完形礫の50%未満の破損状態である。18点が赤化しており、内2点にスス状附着物が認められる。接合状態は接合が礫群内で収まる個体はなく、すべてが礫群外の接合である。4号礫群の礫と接合する個体が2例10点と構成礫数の過半数を占め、4号礫群との結び付きが強いことが理解される。他に7号礫群の礫と接合する個体が2例2点ある。礫群外の例はすべて割れ面赤化の接合である。

第7号礫群(第37・40・41図、第17表)

調査区東端の13D-90・91、14D-00・01区に位置する。西側で6号礫群が近接する。第7ブロックと平面分布で重複する。東西2.9m、南北3.2mの範囲に分布する。北西と南東を長軸として細長い範囲に散在するような状況である。出土層位はばらつきが見られるがⅣ・Ⅴ層上面に垂直分布するものが多い。構成礫数は16点(8個体)である。総重量は1026.5g、平均重量は68.4gを量る。15点が焼成破損礫であり焼成完形礫は1点検出されている。遺存は15点が完形礫の50%以下の破損状態である。16点すべてが赤化しており、内1点にスス状附着物が

第18表 第6号礫群確属性表

No	遺物番号	石 材	器種	長 mm	短 mm	厚 mm	重量 g	遺存	赤化	付着	個体番号	接 合	
74	13D-90-	2	チャート	B	32.7	19.9	26.2	11.1	d	1	—	チャート 2	40, 44, 49
75		3	チャート	B	38.2	15.9	25.2	14.4	d	1	—	チャート 2	48, 78, 85
76		4	チャート	B	40.0	29.9	26.2	21.2	d	①	—	チャート 2	77, 92
77		5	チャート	B	31.4	30.1	21.7	22.2	d	①	—	チャート 2	76, 92
78		11	チャート	B	36.9	20.2	25.0	21.9	d	①	—	チャート 2	79
79		12	チャート	B	32.0	13.8	21.2	10.3	d	①	—	チャート 2	78
80		13	玄武岩	D	13.4	12.0	15.5	1.2	d	—	—	玄武岩 2	
81		14	砂 岩	B	34.9	33.6	25.3	39.9	d	①	7	砂 岩 1	32, 39, 83
82		16	花崗岩	B	73.3	34.8	32.9	110.2	d	①	7	花崗岩 11	93, 94
83		17	砂 岩	B	96.0	30.8	24.9	97.1	d	①	—	砂 岩 1	39, 43, 45, 47, 81
84	18	砂 岩	B	88.0	23.6	22.5	64.7	d	①	—	砂 岩 1	83	
85	19	チャート	B	79.3	60.0	47.0	175.5	d	1	—	チャート 2	40, 41, 75, 77, 92	
86	21	花崗岩	B	25.0	19.2	3.6	1.8	d	①	—	花崗岩 12		
87	22	安山岩	B	56.2	42.2	20.4	41.0	d	②	—	安山岩 3		
88	25	砂 岩	B	31.4	9.9	8.6	6.7	d	①	—	砂 岩 2	96	
89	28	チャート	B	32.7	21.0	17.3	12.3	d	①	—	チャート 2	41, 49	
90	29	安山岩	B	55.1	32.5	32.7	49.6	d	②	—	安山岩 3		
91	30	安山岩	B	46.9	31.2	25.0	27.8	d	②	—	安山岩 3	35	
92	46	チャート	B	52.6	32.0	31.0	32.5	d	②	—	チャート 2	76, 77, 85	

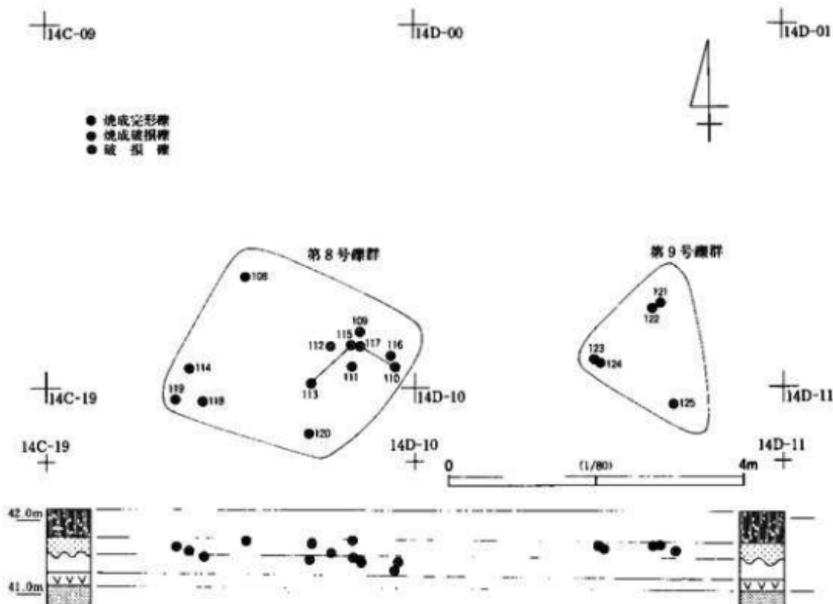
第19表 第7号礫群確属性表

No	遺物番号	石 材	器種	長 mm	短 mm	厚 mm	重量 g	遺存	赤化	付着	個体番号	接 合		
93	13D-90-	32	花崗岩	D	38.6	25.8	11.6	10.5	d	①	—	花崗岩 11	82, 94	
94		33	花崗岩	B	42.0	28.4	32.9	14.7	d	①	—	花崗岩 11	82, 93	
95		34	砂 岩	B	10.5	8.2	5.4	0.5	d	②	—	砂 岩 2		
96		37	砂 岩	B	41.7	27.3	21.5	17.4	d	1	—	砂 岩 2	88	
97		39	砂 岩	B	53.7	34.1	28.4	50.6	d	2	—	砂 岩 2	50, 71	
98		41	砂 岩	B	40.2	33.5	25.2	33.6	d	2	—	砂 岩 2		
99		43	花崗岩	B	6.6	6.4	3.2	0.2	d	①	—	花崗岩 12		
100		13D-91-	1	花崗岩	B	16.6	12.3	12.4	3.3	d	②	—	花崗岩 13	
101			3	砂 岩	B	21.1	18.0	4.9	2.2	d	②	—	砂 岩 2	50, 102
102		7	砂 岩	B	35.3	21.2	16.8	11.4	d	②	7	砂 岩 2	50, 101	
103	14D-00-	12	安山岩	B	22.0	18.8	13.0	6.7	d	②	—	安山岩 9	104	
104a		4a	安山岩	B	55.8	47.7	38.1	74.5	c	②	—	安山岩 10		
104b	4b	安山岩	B	66.4	56.3	69.3	369.1	d	②	—	安山岩 9	103		
105	5	安山岩	B	30.3	16.8	37.4	17.4	d	②	—	安山岩 11	107		
106	7	安山岩	A	94.3	63.4	48.4	346.5	a	1	—	安山岩 12			
107	8	安山岩	B	66.5	55.7	42.9	171.4	d	②	—	安山岩 11	105		

認められる。接合状態は接合が礫群内で収まる個体が2例4点ある。礫群外の接合は4号・7号礫群の礫と接合する個体が1例3点あり、6号礫群と接合する個体が2例3点ある。礫群内外共にすべての例が割れ面赤化の接合である。

第8号礫群(第38・40図、第18表)

調査区南端の14C-09・19区に位置する。北側に5号礫群が近接する。第8ブロックと平面分布で重複する。東西3.2m、南北2.2mの範囲に分布する。東側に密集部があり西側に散在するような状況である。出土層位はばらつきが見られるがIV・V層上面に垂直分布するものが多い。構成礫数は13点(6個体)である。総重量は593.9g、平均重量は45.7gを量る。1点を除いて焼成破損礫である。遺存は12点が完形礫の50%以下の破損状態である。12点が赤化しており、4点にスス状付着物が認められ、さらにその内の2点にはタール状の付着物が認められた。接合状態は接合が礫群内で収まる個体が2例4点ある。礫群外の接合は1号・2号礫群



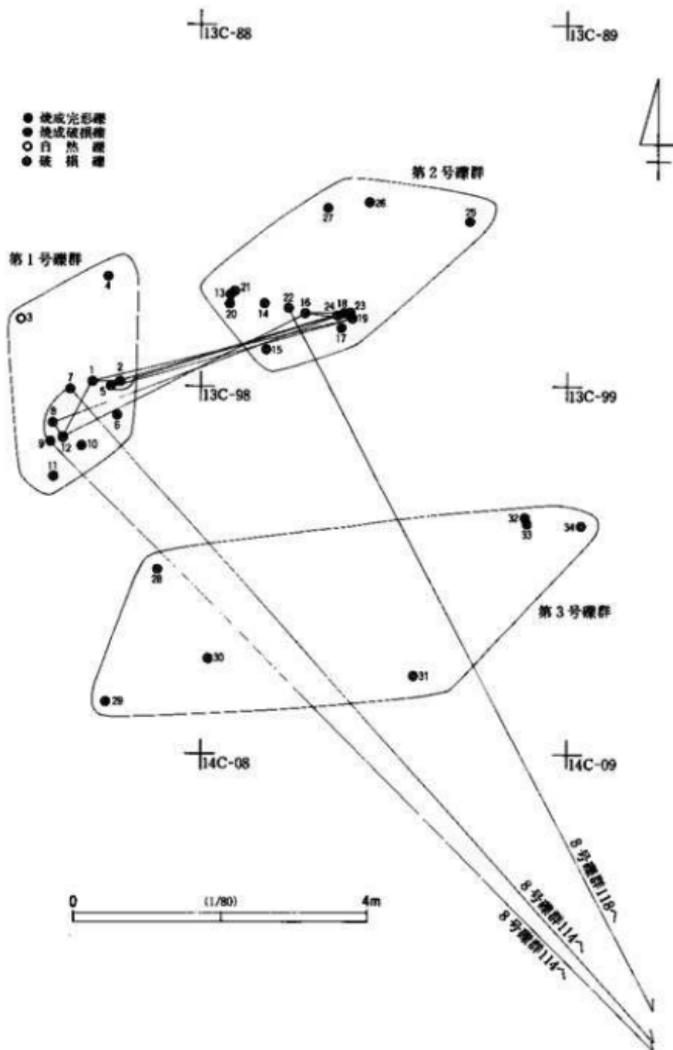
第38图 第8・9号群、群内接合分布图

第20表 第8号群群属性质表

No	遺物番号	石 材	器種	長 mm	短 mm	厚 mm	重量 g	遺存	劣化	付着	關係番号	備 考
106	14C-09- 8	花崗岩	B	66.1	63.5	21.4	129.8	a	1	—	花崗岩 14	
109	13	砂岩	B	28.1	13.7	5.3	2.4	d	①	—	砂岩 4	
110	15	安山岩	B	34.4	12.1	12.2	5.1	d	①	7, 1	安山岩 13	117
111	17	砂岩	B	26.9	22.9	11.8	8.0	d	①	—	砂岩 4	
112	19	花崗岩	D	36.6	23.5	9.5	8.6	d	①	—	花崗岩 15	
113	23	砂岩	B	44.3	14.9	21.1	15.3	d	—	7	安山岩 14	115
114	27	花崗岩	B	56.9	44.2	49.0	118.0	d	②	—	安山岩 2	7, 9, 22, 118
115	30	砂岩	B	37.1	20.7	48.3	d	d	①	7	安山岩 14	113
116	31	安山岩	B	60.6	43.9	15.0	34.7	d	②	7, 1	砂岩 4	
117	34	安山岩	B	59.4	45.1	15.3	37.0	d	①	—	安山岩 13	110
118	4	花崗岩	B	39.4	23.5	11.5	49.3	d	①	—	花崗岩 2	7, 9, 22, 114
119	5	砂岩	B	19.1	15.2	5.3	2.0	d	①	—	砂岩 4	
120	10	安山岩	B	37.0	16.7	7.8	3.2	d	①	—	安山岩 14	

第21表 第9号群群属性质表

No	遺物番号	石 材	器種	長 mm	短 mm	厚 mm	重量 g	遺存	劣化	付着	關係番号	備 考
121	14D-00- 15	チャート	A	71.1	51.5	26.3	141.5	a	①	—	チャート 3	
122	16	チャート	A	68.8	46.1	30.0	144.3	a	①	—	チャート 4	
123	18	砂岩	B	64.3	69.8	24.0	144.3	c	1	7	砂岩 5	
124	19	花崗岩	A	82.1	55.0	21.1	132.4	a	②	7	花崗岩 16	
125	14D-10- 1	閃綠岩	B	70.2	38.5	28.2	117.1	d	②	—	閃綠岩 3	

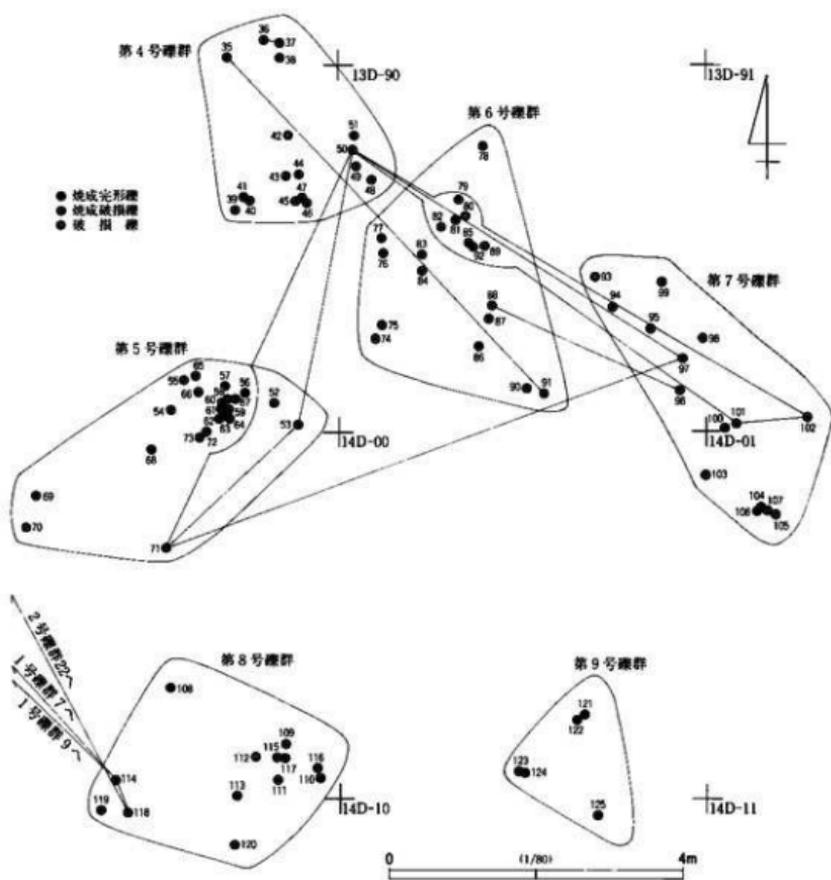


第39図 第1～3号礁群、礁群外接合分布図

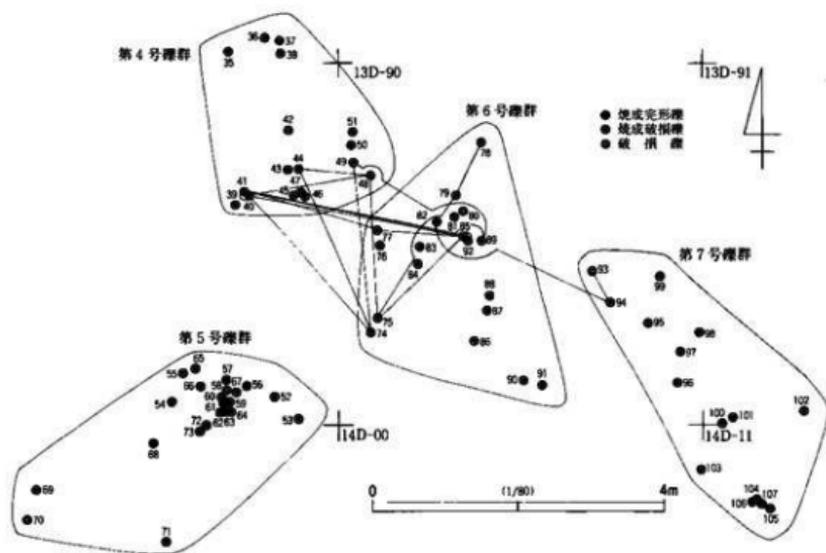
の礁と接合する個体が1例2点ある。これは近接した礁群間の接合ではなく3号礁群を飛び越えて約13m離れて接合している。礁群内は全て割れ面非赤化の接合であり、礁群外の接合は割れ面赤化の接合である。

第9号礫群(第38・40図、第19表)

調査区南東端の14D-00・10区に位置する。西側に約2.7m離れて8号礫群が存在するが、他の礫群とは1つだけ離れて分布するような状況である。第8ブロックと平面分布で西側で近接する。東西1.2m、南北1.4mの狭い範囲に分布する。三角形の各頂点に1、2点が散在するような状況である。出土層位はⅢ層上部に垂直分布が並ぶ。構成礫数は5点(5個体)で、規模及び構成礫数で各礫群中最も小さいものである。総重量は679.7g、平均重量は135.9gを量る。3点が焼成完形礫で他の2点が焼成破損礫である。遺存は1点のみが完形礫の50%以下の破損状態であり、遺存度が高いことが特徴的で、それは他の礫群の平均重量に比較して2～3倍以



第40図 第4～9号礫群、礫群外接合分布図



第41図 第4～7号礫群、礫群外接合分布図

上の平均重量であることに現れている。すべて赤化しており、2点にスス状付着物が認められた。接合状態は接合が礫群内共になく各個体も単独の個体である。このことも他の礫群の様相とは異なる状況を呈している。

第2節 縄文時代

1. 遺構

Y字状に広がる台地上23,500㎡を確認調査した結果、縄文時代の遺構は陥穴が2基検出されただけである。ともに北東に伸びる尾根中央に位置している(第42図)。

001(第43図・図版13)

11E-03区に位置し、南北1.4m、東西1.6mの楕円形を呈し、深さ2.5mを測る。底面も楕円形の形状を示し、平坦につくられている。直立する壁面は底面から約60cmのところまで20cmほど外方に抉られ、開口部では若干外傾しながら開いている。底面、壁面等にピットなどは認められず、遺物も検出しなかった。

陥穴と考えられる。

002(第43図・図版13)

11E-42区に位置し、主軸方向は尾根とほぼ同方向をとっている。開口部の長軸は2.1m、短軸は1.4mの隅丸長方形を呈し、深さ2.1mを測る。底面は長軸1.8m、短軸0.8mでコーナーがほぼ直角につくられた長方形を示し、中央が多少窪んでいる。壁面は底面から中央付近まで外方に大きく抉られ、最も広い部分で長軸2.5m、短軸1.4mを測る。開口部は壁面が崩れ外方に開いている。覆土は最下層に踏み固められ堅く締まった黒褐色土が50cmほど堆積し、その上部に薄い暗黒褐色土が認められる。踏み固められた部分はオーバーハングし始めるところと対応している。その上位の土層はロームブロックを多量に含んでいる。遺物は検出しなかった。

陥穴と考えられる。

包含層(第44～46図・図版2)

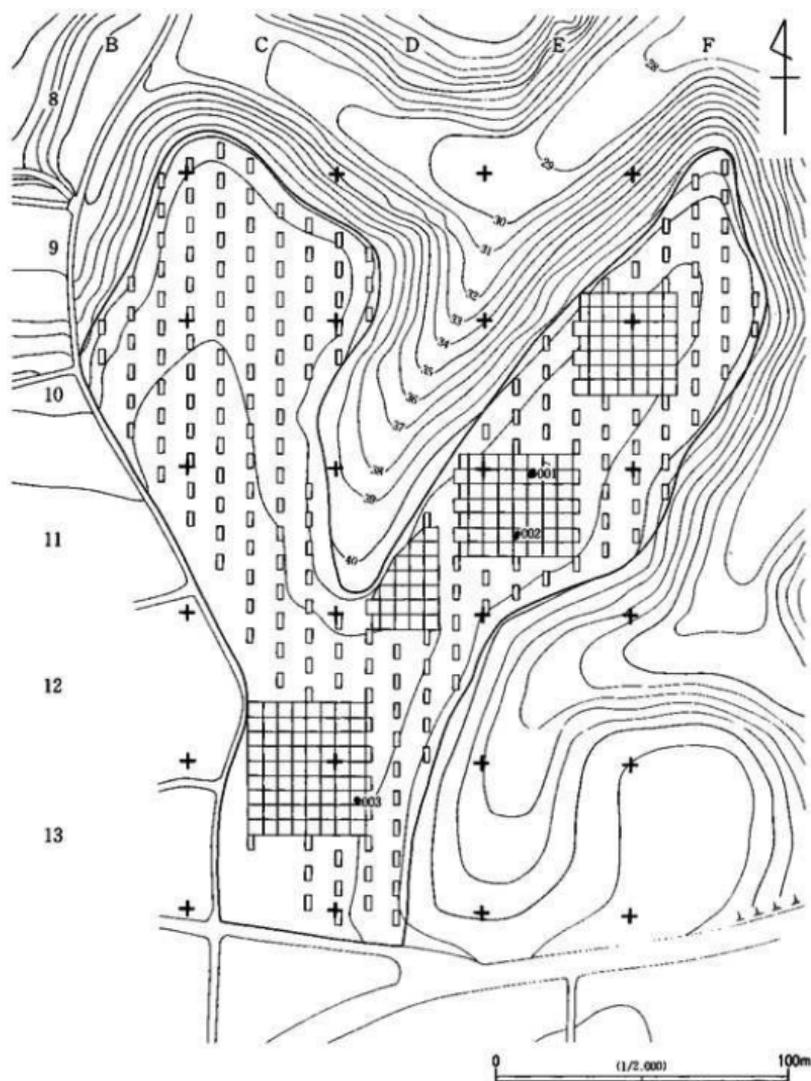
調査区内に10%のグリッドを設定し、確認調査を実施した結果、包含層の広がりが尾根状の台地から南に分布していることが判明し、西側の台地上にはグリッド内から数点程度しか出土せず、包含層の所在は確認できるもの集中して出土する地域は予測できなかった。この結果をふまえて、集中して土器が出土した4地点について本調査範囲を設定し、縄文後期から晩期の包含層を調査した。

拡張した本調査範囲は4地点あるが、5×5mのグリッド内で最多破片数が11E-03の252片で、他のグリッドで100片を越えるものはない。ほとんどが平均して10片前後で、接合資料の出土するグリッドだけが数量的に突出している。完形に近い状態で復元できる土器を出土するグリッドからの遺構の検出はなく、いわゆる包含層として認識できるものであった。出土層位は表土層下のテフラ層及び下部の暗褐色土であり、暗褐色土でも上位から多くの土器片を検出している。

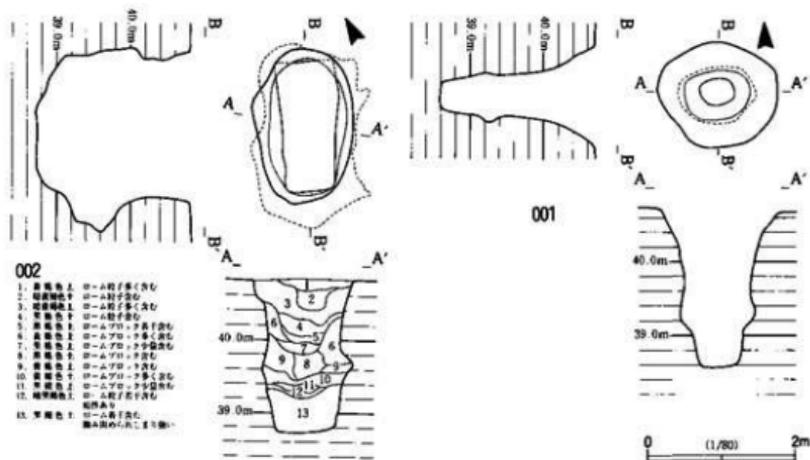
遺物の出土傾向としては、北側の方が古く南に行くに従って新しい時期の遺物が増加するこ

とが窺える。ほぼ完形の遺物を見ても10E区付近には後期後半の土器が、12~13C区にかけては晩期の土器が目立っている。

拡張した本調査範囲の4地点を北側から1区、2区、3区、4区として以下説明する。



第42図 上仁羅台遺跡遺構配置図



第43図 001・002陥穴

1区

Y字状に張り出す台地の先端部付近の9 E-86区から10 F-42区にかけて約1,100㎡の範囲である。遺物分布は全体にまばらで、北東寄りの9 F-91区を中心に後期後半の土器片が比較的多く出土している。また、10 E-38区でも出土数の頻度が高くなるが、時期的に特別まとまったものはない。

2区

1区よりやや南下した10 D-98区から11 E-55区にかけて、約1,300㎡の範囲である。全体にまばらな分布であるが、11 E-03区に安行Ⅰ式が、隣接した11 E-02区からは加曾利B式が多量に出土した。また、11 E-22区を中心に前浦式が比較的多く出土している。

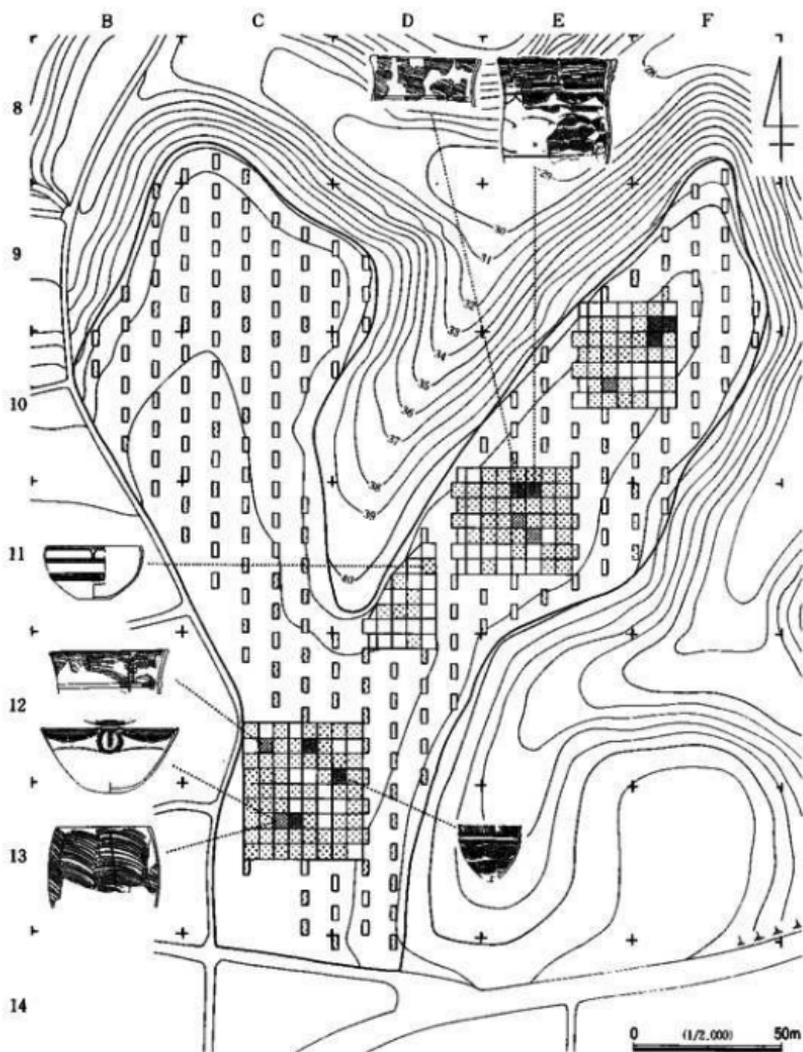
3区

Y字状に張り出す台地の付け根部分の11 D-84区を中心とした約400㎡の範囲である。まとまった出土はなく、図上復元できた安行Ⅰ式の鉢形土器が11 D-56区から出土したのが目につく程度である。

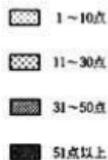
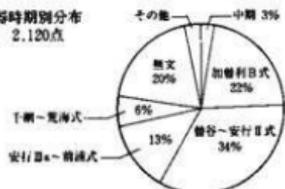
4区

12 C-56区から13 D-41区にかけて、約1,800㎡の範囲である。遺物の分布は比較的広範囲に認められ、時期的にも後期中葉から晩期中葉にかけて継続する。13 C-26・27区には純山式から千瀬・荒海式が集中している。調査区の北側には後期中葉から後半の土器が多い。

これらの出土状況から、当台地は居住地としての利用は考えにくくむしろ狩猟等の移動拠点(キャンプ地)などに利用されていたものと考えられる。遺物集中地点はその反映かもしれない。

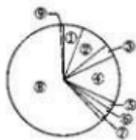


出土土器時期別分布
総数 2,120点



第44図 グリッド別出土土器分布図1(全体図)

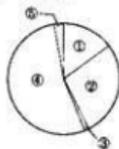
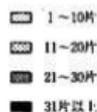
加曾利B式土器片分布
総数 463片



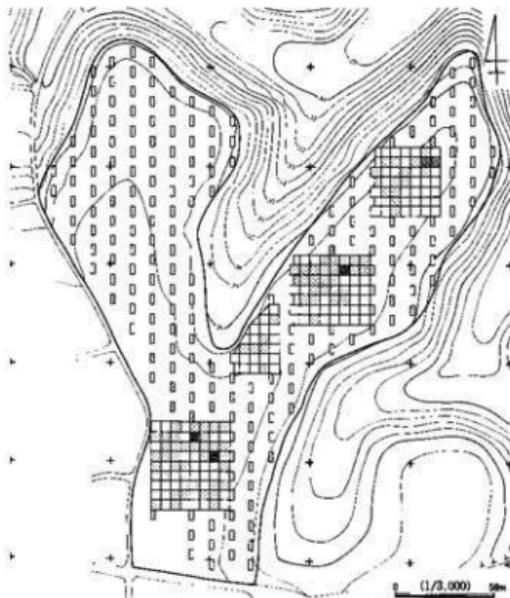
- ① 加曾利B 1式
- ② 加曾利B 2式 区画沈線
- ③ 加曾利B 2式 粗製沈線
- ④ 加曾利B 3式 区画沈線
- ⑤ 浅鉢 無文
- ⑥ 浅鉢 横文
- ⑦ ソロバン状
- ⑧ 粗製 深鉢
- ⑨ その他



曾谷-安行Ⅱ式土器片分布
総数 719片

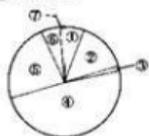
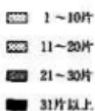


- ① 曾谷式
- ② 安行Ⅰ式
- ③ 安行Ⅱ式
- ④ 粗製深鉢
- ⑤ その他



第45図 グリッド別土器出土分布図2(後期)

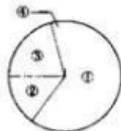
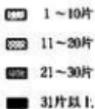
安行Ⅱa～前浦式土器片分布
総数 281片



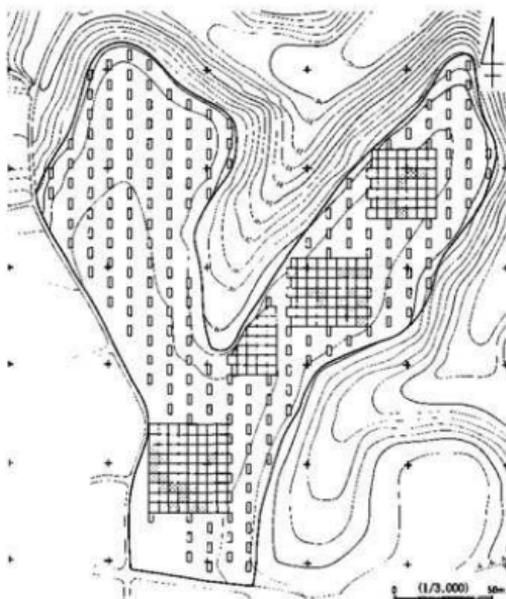
- ① 安行Ⅱa式
 ② 姥山Ⅱ式
 ③ 姥山Ⅲ式
 ④ 姥山式横線深鉢
 ⑤ 前浦式
 ⑥ 大洲系
 ⑦ その他



千網～荒海式土器片分布
総数 125片



- ① 千網式
 ② 荒海式
 ③ 荒海式(象嵌文)
 ④ 無文



第46図 グリッド別土器出土分布図3(晩期)

2. 遺物

a. 包含層出土土器

本遺跡で出土した土器は遺構に伴うものはほとんどなく、すべて包含層からの出土としてとらえることができる。

そこで、遺物の説明をするにあたり、上仁羅台遺跡と西長山野遺跡の土器を関連づけて行なうこととし、基本的に下記のように分類している。

- 1 群土器 早期後葉の沈線文・条痕文土器を一括した。
- 2 群土器 前期中葉の黒浜式を一括した。
- 3 群土器 中期の土器を一括した。
- 4 群土器 後期前葉の堀之内式を一括した。
- 5 群土器 後期中葉の加曾利B式を一括した。
- 6 群土器 後期後葉の曾谷式から安行Ⅱ式を一括した。
- 7 群土器 晩期前半の安行Ⅲa式から前浦式を一括した。
- 8 群土器 大洞系を一括した。
- 9 群土器 晩期後半の千網式を一括した。
- 10 群土器 晩期終末の荒海式を一括した。

なお、2 遺跡を総合して分類しているため、1 遺跡で群や細分する類などが抜けている場合があることを明記しておきたい。

2 群土器(第47図1、図版15)

胎土に繊維を含む焼成のしっかりとした黒浜式土器である。口縁部が大きく開き、頸部の屈曲が強い形態を示す深鉢で、頸部に半截竹管による連続爪形文を施文し、口縁部には縦方向の羽状縄文を施した後、節の方向と平行に縄文を磨り消し、半截竹管による連続爪形文を施文している。

3 群土器(第47図2～11、図版15)

1 類(2～4)

2・3はやや斜めに連続爪形文を施した隆帯を垂下させ、その両側に竹管状工具を用いて平行沈線文を施している。隆帯の断面形は三角形である。4は縄文を地文に平行沈線文と垂下文を組み合わせところどころに三角形刻目文を配している。

五領ヶ台式土器と考えられる。

2 類b種(5・6)

磨消縄文の手法をとる深鉢で、沈線による区画をもつもの(5)ともたないもの(6)とがある。加曾利EⅡないしEⅢ式に該当しよう。

2 類c種(7～11)

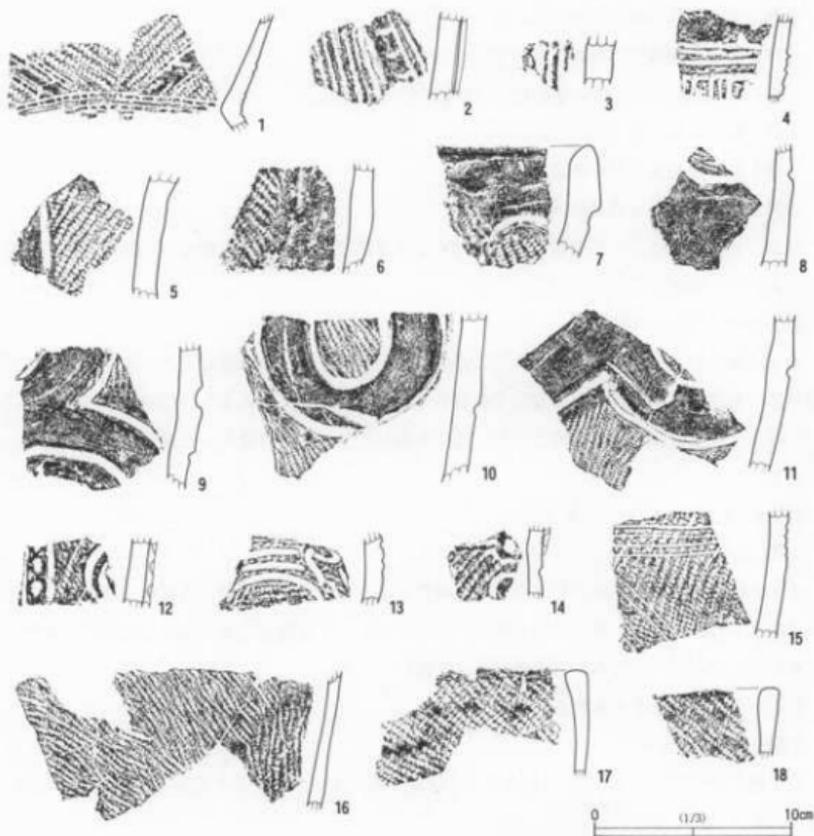
磨消縄文の手法をとる深鉢であるが、無文部は隆帯気味に若干盛り上がる。無文部と縄文部を区画する沈線は深く刻まれている。7は内弯する口縁部の破片で、やや肥厚した無文部の円形の沈線区画内に縄文を施している。無文部の磨り消しが若干甘く、縄文が一部残っている。8～11は胴部破片で、円形のモチーフを組合せている。無文部の磨きは丁寧で光沢をもつ。

無文部が若干肥厚し、沈線の刻みが強い手法、円形のモチーフを描いていることなどから、大木式の影響をつよく受けていることを感じさせる。加曾利E式の末に比定できよう。

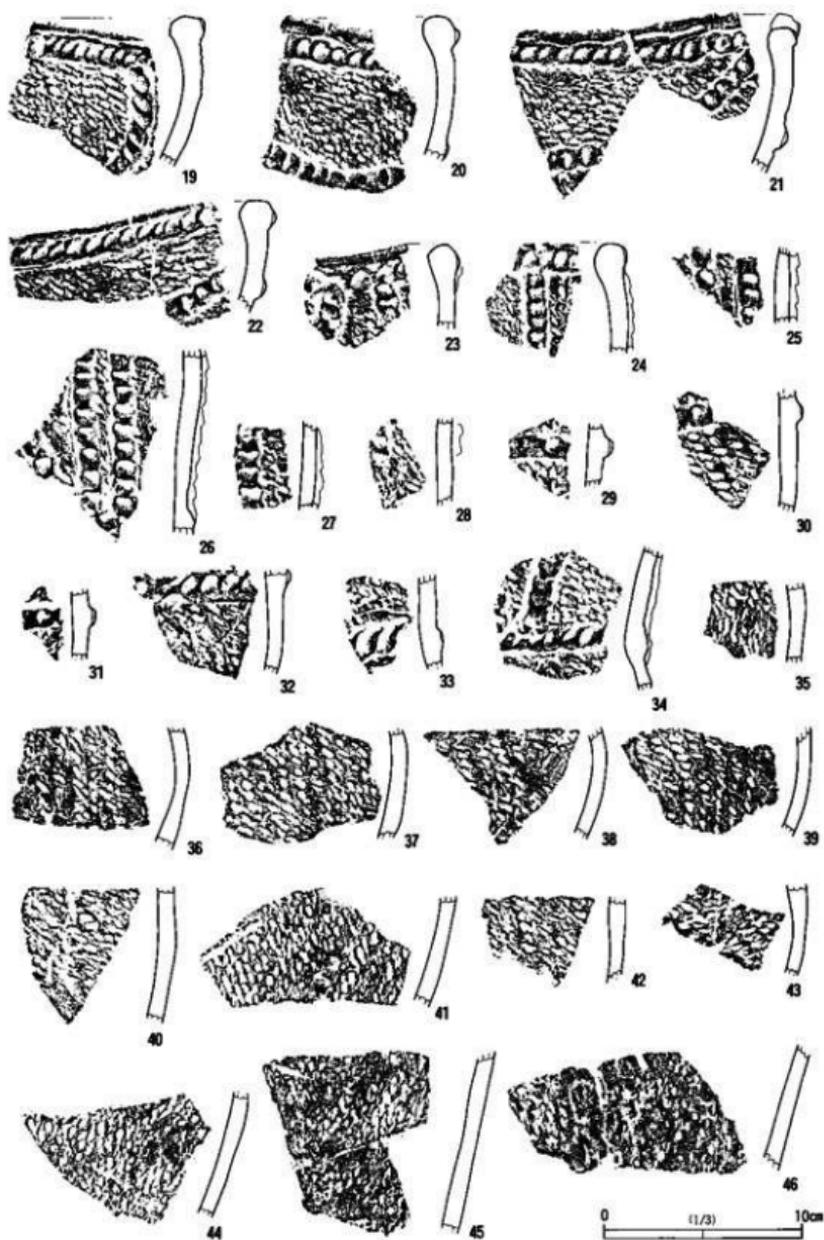
4 群土器(第47図12～18、図版15)

1 類 a 種(12～14)

縄文を地文に円形、波状の沈線を描くものである。12は隆帯の垂下文があり、隆帯上には連



第47図 縄文土器拓影図(1)



第48図 縄文土器拓影図(2)

統刺突が施されている。13は波状沈線と重円弧文が施される。14は中央に刺突をもつ円形貼付文から平行沈線を施し、貼付文の下部には円弧文を描いている。堀之内式である。

1類b種(15)

縄文を地文に半截竹管による平行沈線と斜行沈線を施している。沈線の刻みは浅い。

1類c種(16~18)

縄文を施した深鉢である。口縁端部は若干肥厚し17は内弯し、18は直立している。堀之内式の深鉢と考えて良いであろう。

5群土器(第48~51図、図版14~18)

1類a種(47~58)

第48図にのせた土器は同一個体で、頸部が若干しまり口縁部が内弯しながら開く。胴部は上位で脹らみをもち底部に移行している。口縁部は波状を呈すようである。地文に目が粗く太いLRを口縁部から底部まで縦方向に充填し、頸部以上に紐線による文様帯をもつ。19~34は口縁部文様帯で、口縁直下と頸部に紐線を施し、その内部に2条一對の縦方向の紐線を垂下して文様単位を区画している。区画内には上下に対面する弧状の紐線を施している。紐線は連続した指頭圧痕を左から右、上から下の方向で押捺している。なお、紐線は縄文を施した後に貼付している。

47~58も同一個体を集めたものである。器形は頸部が若干しまり口縁部が内弯気味に立ち上がっている。口縁部は波状を呈すと思われるが、破片数が少ないため不確実である。場合によっては東京都平尾遺跡出土のG8型の中に見られるような瓢状になるのかもしれない。器面には目の粗く太いRLを施し、頸部以上に紐線による文様帯をもつ。口縁部と頸部に紐線を施して、その内部に紐線でたすき掛けした菱形のモチーフをつくっている。菱形の頂部には48・49・52のようにボタン状の貼付文が見られる。47は貼付文がとれている。また、ボタン状貼付文の両側には、47~49・51のように焼成前の穿孔が認められる。紐線文の施文は縄文施文後に行なわれている。

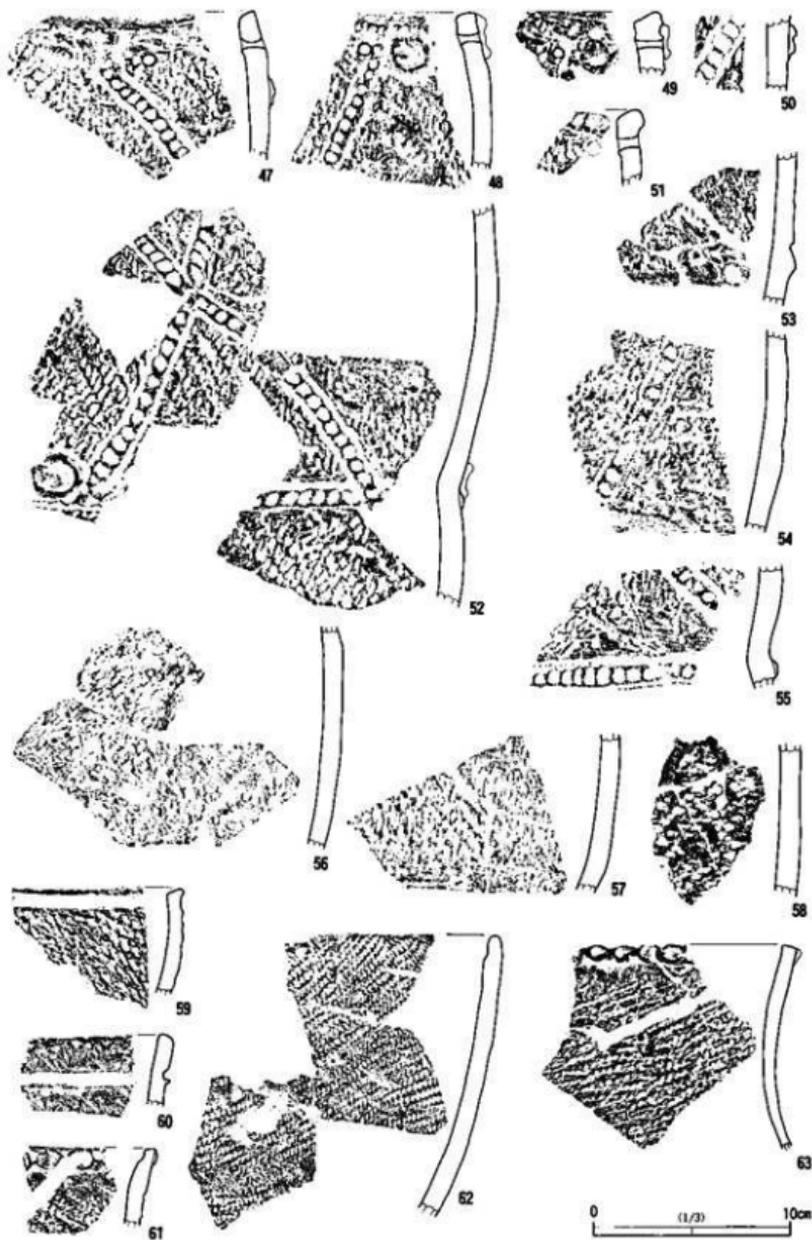
これらの資料は類例に乏しいが、前者は口縁部の外反する深鉢にはまれに見られる文様モチーフである。縄文を地文にし、紐線文のみの文様であることから加曾利B1式と考えて良いであろう。

1類b種(59・60)

縄文を地文に口縁直下に沈線を施すものである。59は内弯する口縁部で、口唇部直下に沈線を施している。口唇部は平坦で内傾している。60は口唇部から若干下方に深く深い平行沈線文を施している。

1類c種(61・63)

口縁部が外反し、口縁端部にのみ紐線文をもつもので、以下は縄文を施している。61はRL



第49图 繩文土器拓影图(3)

で63はLRである。

1類d種(62)

内弯気味に立ち上がる深鉢口縁で、口縁部内面に浅い沈線をもつ。器面にはLRを全面に施している。

2類a種(64~66)

つよく外反する口縁部をもち、斜沈線を施す深鉢である。64は波状口縁を呈し、口唇直下に刻み目をもつ。口縁部上半には沈線区画内に斜沈線を施している。口唇部は内側に若干肥厚している。65は頸部に横走沈線をめぐっている。66は沈線区画内に縄文と斜沈線を施している。斜沈線はかなり粗雑な施文である。ともに加曾利B2式の範疇に入るものであろう。

2類b種(99・102~105)

99は頸部のしまりが弱く、口縁部が若干内弯気味に開く深鉢である。口縁部は比較的短く胴部上半に脹らみをもつ。頸部には平行沈線文を施し無文帯とし、他の器面は斜沈線で飾られる。施文順位は斜沈線→横走沈線→磨きである。102は外反する口縁部に格子状の沈線を施している。104も格子状の沈線を施すものである。103・105は斜沈線を施している。

2類c種(100・101)

斜沈線を施す深鉢であるが、弱くしまる頸部の斜沈線を磨り消しているものを本種とした。101は縦方向に細沈線が垂下している。モチーフは99と同じであろう。ただ、かなり簡略化しているようにも窺える点では後出的な要素かもしれない。

3類a種(67~77)

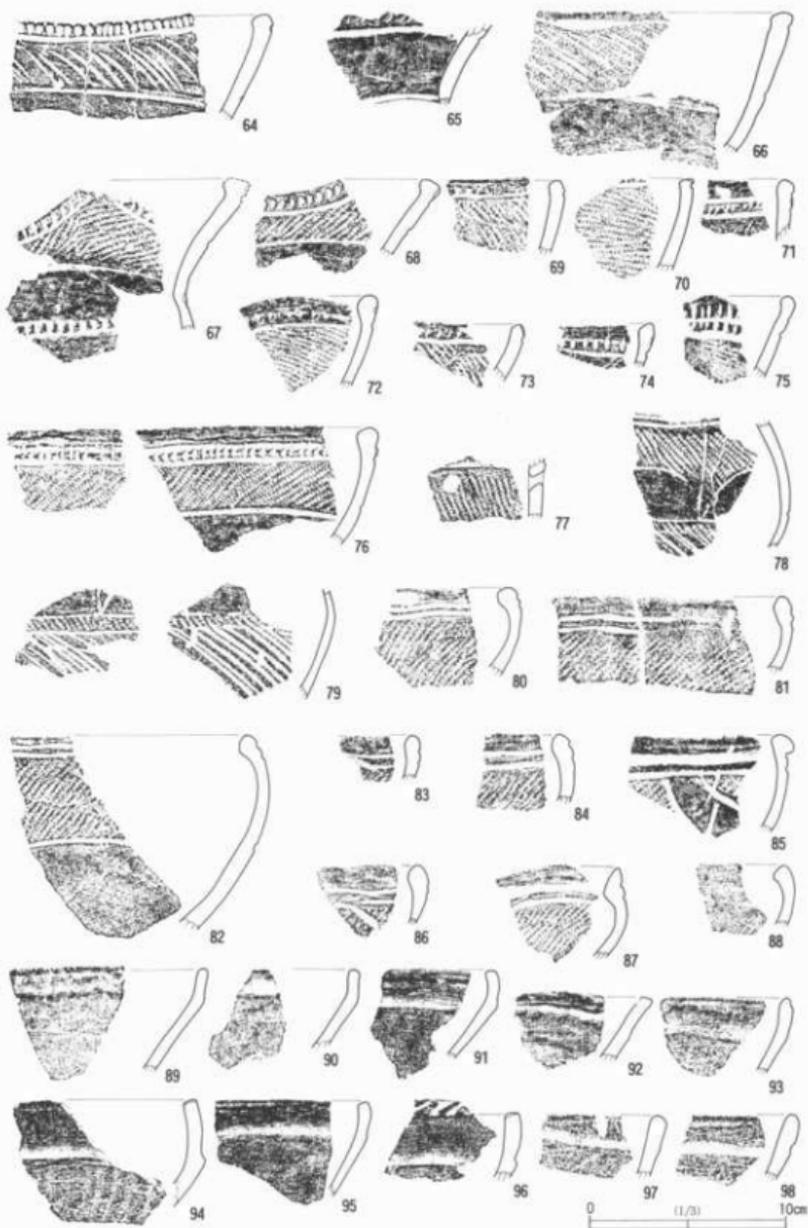
強く外反する口縁部が頸部で強く屈曲し、胴部の上位で脹らみをもつ深鉢である。口縁部は平行沈線で区画される縄文帯と無文帯とに分かれ、胴部には弧状入組の磨消縄文が施されている。口唇部直下に刻み目を施しているが、刻み目の下部に沈線を施すもの(67~70・72・73)、平行沈線間に刻み目を施すもの(71・74~76)とがある。75は2段にわたって刻み目を施している点で、後続する土器群に入れたほうが良いかもしれない。77は焼成後の補修孔が穿たれている。なお、口縁部には波状をなすものと平縁のものがある。

3類b種(80~88)

磨消縄文を施し、口縁部が強く内弯する椀状の浅鉢である。口縁部に1ないし2条の横走沈線をめぐらし、以下縄文を施している。85は口唇部が外方に肥厚し、磨消縄文は弧状の沈線で区画されている。88は無文である。

3類c種(89~98)

口縁部が短く屈折し、直線的に底部に収束する無文浅鉢である。口縁部が若干内弯するもの(91・93~96)と外反もしくは直立するもの(89・90・92・97・98)とがある。96の口唇部には刻み目が施されている。



第50図 縄文土器拓影図(4)

3類d種(78・79)

胴部の断面形状が「く」の字状で、算盤玉状の鉢である。口縁部は短く外反する。頸部には2条の横走沈線をめぐらし、以下、胴部の屈曲部までが磨消縄文帯となり、縄文を充填した幅の狭い2条の横走沈線を経て、胴下半部には斜行沈線文を施している。磨消縄文帯は連続する弧状沈線で区画された上部に縄文を残している。弧状沈線の連結部には縦方向の沈線を垂下し文様の接続部には円形刺突文が見られる。

4類a種(106~110)

粗製深鉢の胴部破片で、粗い縄文に粗雑な斜沈線を施している。斜沈線の間隔は比較的広めで、106・107・109には沈線が認められない。

4類b種(111~116・118)

紐線文を有する粗製深鉢で、縄文を地文に弧状の斜沈線を施している。118は口径24.2cmを測る粗製深鉢で、縄文を地文に斜沈線を施した後に口縁部と頸部に紐線文を貼付している。紐線文間には縦方向になで状の細沈線が垂下し、さらに下方に伸びているようである。

4類c種(117)

口縁部には刻目文、頸部に紐線文を有する粗製深鉢である。口縁部は外反するが、端部で若干内傾している。口唇部直下に沈線を施している。縄文を地文に斜沈線を施している。口径23cmを測る。

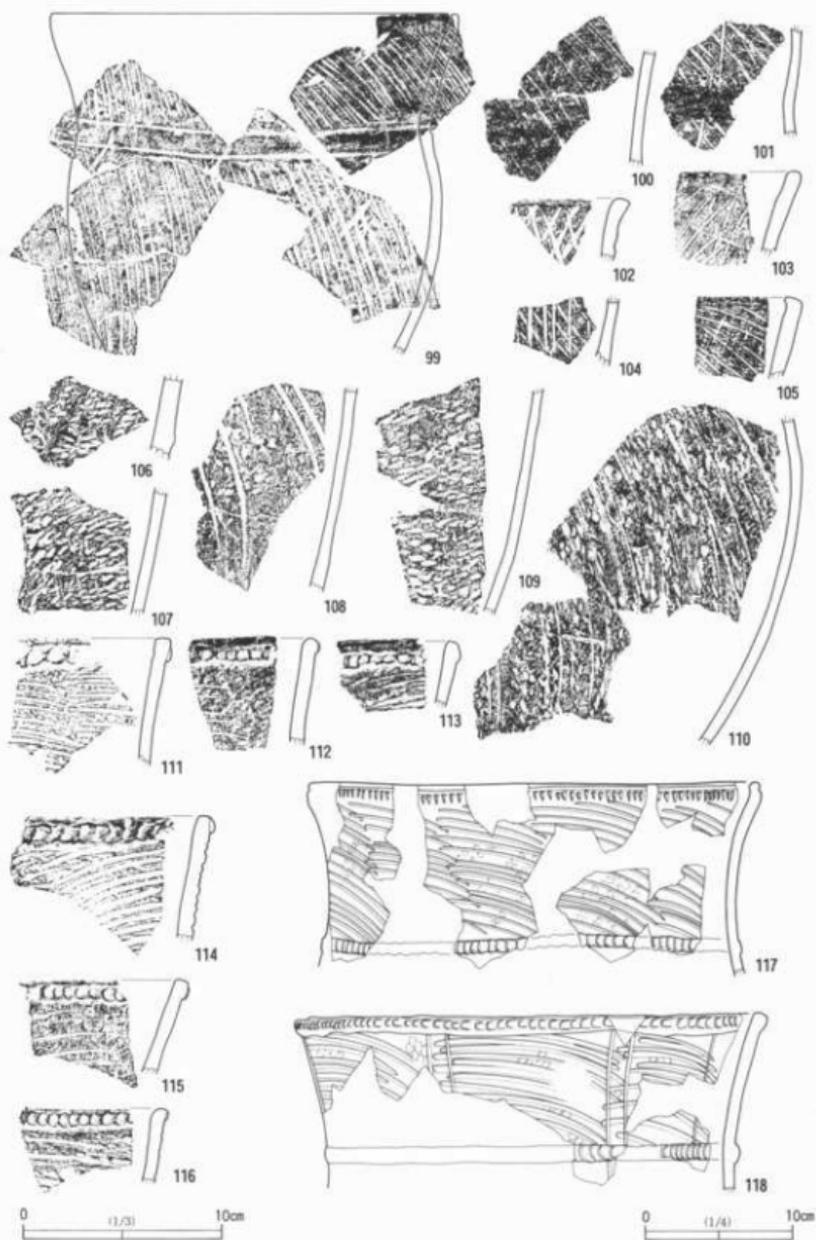
第6群土器(第52~56図、図版14・19~23)

1類a種(119~134)

口縁部が若干内湾気味に開き、頸部がしまって、張りのある胴部をもつ深鉢である。口縁部直下には帯縄文が数条めぐり、連弧文内を縄文で充填する連弧状充填縄文を施している。頸部には三角形の連続刻目文をめぐらし、胴部には対連弧状充填縄文を施すものが多い。119は口縁部に縦長の貼付文を付し、2条の帯縄文の直下に連弧状充填縄文を施し、頸部には幅の狭い平行沈線間に三角形刻目文、胴部には大きい対連弧状充填縄文が施されている。無文部はよく磨かれ光沢をもつ。120もほとんど同じモチーフを描いているが、帯縄文と連弧状充填縄文の間に無文部をもっている。また、三角形刻目文の下部にのみ沈線文を施している。121の頸部は沈線が2条施されるだけである。127は比較的小形品である。131・134は対連弧状充填縄文の下位に縄文帯が認められる。132は鎖状に入り組み、133は「S」字状に入り組む胴部文様である。全体に焼成は良好で、器面調整も丁寧である。首谷式土器と考えられる。

1類b種(135・136)

口縁部が若干内傾し、縦長の貼付文が付す。135の口唇部は面取りされて平坦となり内傾している。外面には3条の平行沈線が横走し、縄文を施している。136は短く内傾する口縁部形態を示し、口唇直下と屈曲部に沈線と刻目目を配している。屈曲部以下には縄文が施されてい



第51図 縄文土器拓影・実測図(5)

る。a種に近い器形を示すようである。

1類c種(137)

台付鉢の脚台部である。丸みの強い形態を示している。連弧状充填縄文と帯縄文を施し、裾部付近の帯縄文はやや盛り上がっている。

2類a種(138~147・183)

帯縄文を施す深鉢で、口縁部は大きな波状となり、口縁部文様帯には縦長貼付文を付している。138・140は波状口縁の波頂部が方形の把手状を示し、焼成前に大きな円孔を穿っている。138の貼付文の内斜め方向の帯縄文交点に施されているものは縦長で、胴部との境目にあたる屈曲部に施された横方向の帯縄文部分のものは豆粒状の小さな貼付文である。斜め方向の帯縄文間は沈線区画による無文部をつくっているが、三角形に区画される部分では沈線区画内に斜沈線を充填し、さらに三角形頂部から2条の沈線を垂下している。183は口縁部上部を欠く小形の深鉢である。口縁部から屈曲部にかけての文様は138と同様である。胴部文様は帯縄文とは2条の三角形刻目文を隔て、連弧状充填縄文を上部に、下部には横走沈線以下に縄文を施し底部にいたっている。頸部の屈曲は弱い。口縁端部はほとんどが内面に面取りがあり、内面が肥厚している。三角形の区画内には斜沈線を施す他に綾杉状の沈線を施すもの(146)もある。

2類b種(148~169・184)

帯縄文を施す深鉢で平縁を呈し、口縁部文様帯に縦長貼付文を付している。帯縄文は平行に施され、沈線で区画されて無文帯をつくる。184は大形の深鉢の胴上半部で、口径32.5cm、残存高29cmを測る。頸部のしまりが弱く、かなり寸胴なプロポーションを呈す。6単位の縦長貼付文が口縁部に配され、口縁部は貼付文の付される部分が若干低く、貼付文間がやや高くなっている。帯縄文は口縁部上半に3帯施され、下半には連弧状充填縄文を1帯めぐらしている。帯縄文間に施される沈線は縄文帯を画する他にも数条認められる。口縁部文様と胴部文様は2条の三角形刻目文で区画されている。胴部文様は対連弧状充填縄文を施している。縦長貼付文は3山で帯縄文の中程までで止っている。

2類c種(170・171)

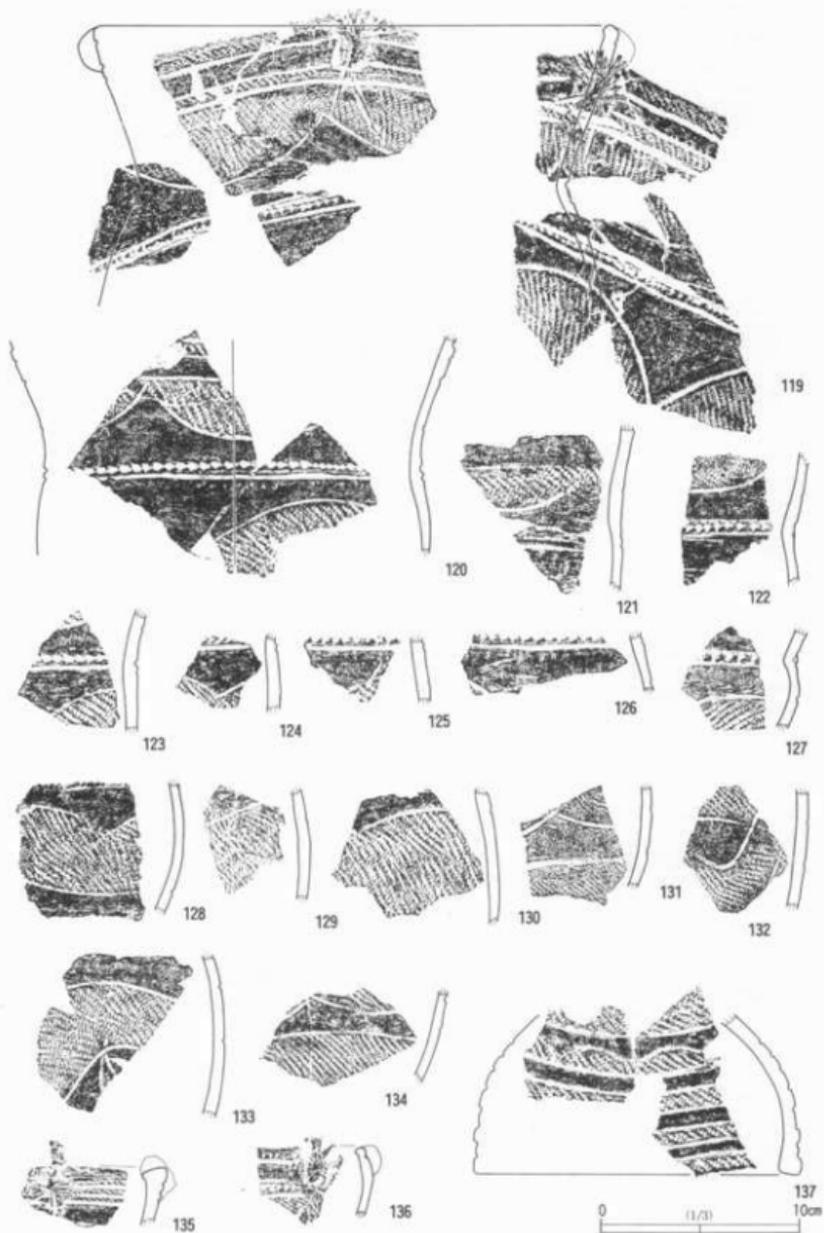
帯縄文を施す深鉢の胴部破片である。170は連弧状充填縄文を施し、171はなで状の斜沈線を施している。

2類d種(172~176)

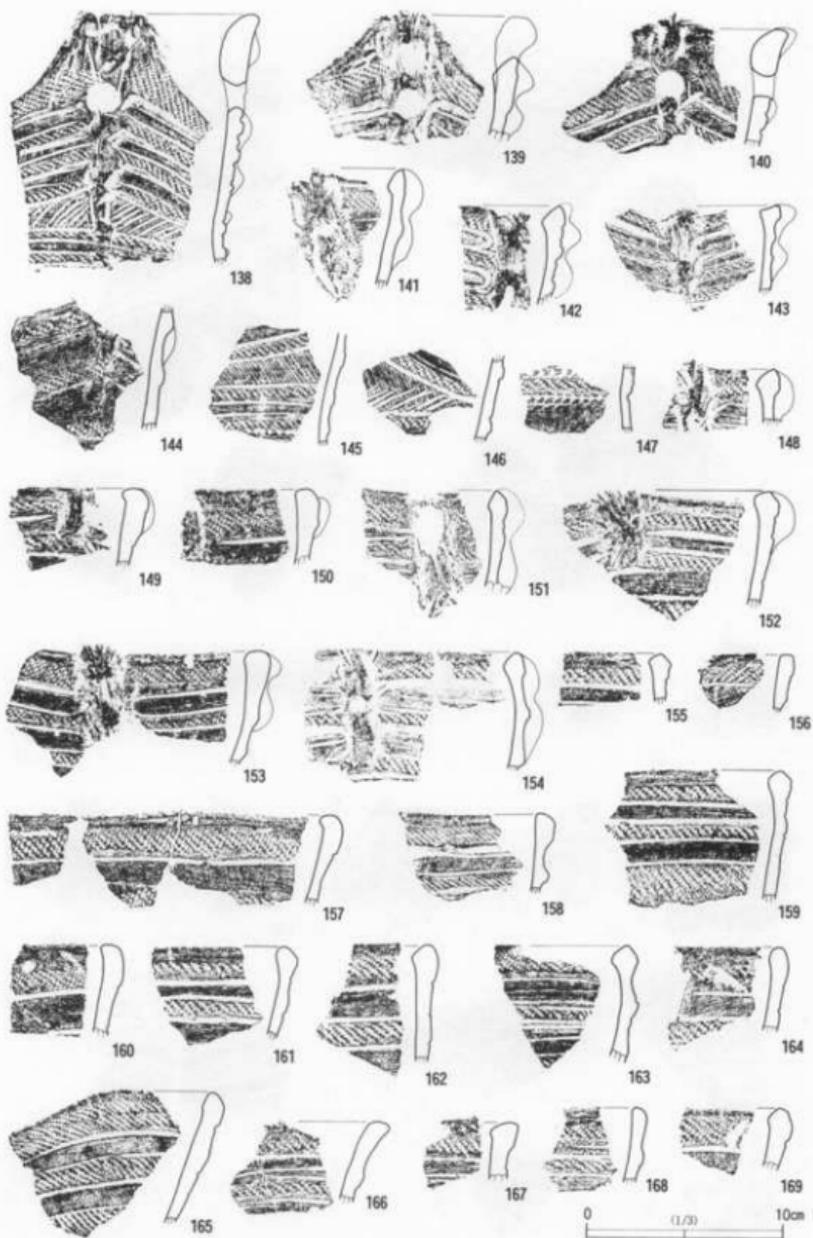
瓢状の深鉢である。帯縄文はかなり肥厚し、下端に三角形刻目文を施している。帯縄文の上端は沈線で無文部を画している。172は口縁下半に鎖状の磨消縄文がみられる。175も同様の文様か連弧状充填縄文が施されるようである。

2類e種(182)

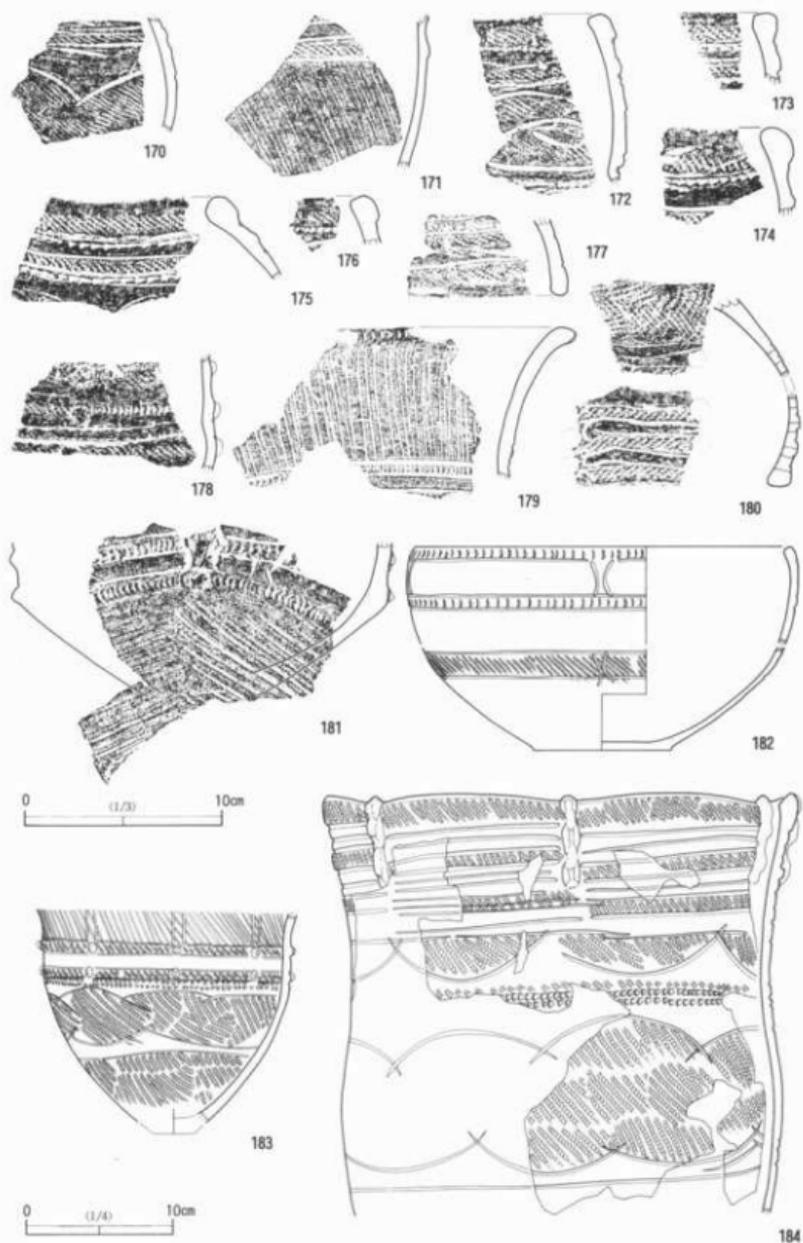
大形の浅鉢で、横走沈線内に半月形の刻目文と縄文が認められる。口径は25.5cm、推定高14



第52图 绳文土器拓影图(6)



第53图 縄文土器拓影图(7)



第54图 縄文土器拓影・実測図(8)

cmで体部は丸味が強い。口縁部に2条の沈線区画の刻み目を施し、上下を2条の沈線で結び無文部に方形の区画をつくっている。胴下半には沈線区画内に縄文を充填し、2条の沈線を垂下している。

2類f種(137・177・180)

台付鉢の脚部である。137は半円形のカーブを描き、帯縄文に連弧状充填縄文を組み込んでいる。180も同様の器形を示し、帯縄文に円孔が多く穿たれている。177は脚の立ち上がりが比較的直線的である。

3類a種(178)

波状口縁を呈す深鉢の胴部破片である。細隆帯上には連続した刻み目を施している部分と縄文を施している部分がある。無文部には竹管工具による変形爪形文風の押し引きが見られる。隆帯上には貼付文が認められる。

3類c種(179・181)

台付鉢である。口縁部が外反して長く伸び、体部下半で屈折して脚台部に移行する。179は口縁部破片で、口唇部に刻目文を施し、縦方向の沈線を垂下している。体部には横走沈線をめぐらし、無文部と刻み目を施した部分とが交互に認められる。内面はきわめて丁寧に磨かれ光沢がある。181は体部下半部で、屈折部上部は竹管状工具による刻目文を施しているが、各段で工具の向きを変え、竹管文に変化をつけている。竹管文の上下には沈線が施される。数単位の貼付文が施される。体部下半は斜沈線を充填している。

本類は安行Ⅱ式と考えられる。

4類a種(185～207)

口縁部と頸部に紐縄文を施す粗製の深鉢である。地に縄文はもたず、弧状の斜沈線を充填している。203から207は紐縄文の刻離した口縁である。

4類b種(208・209・211)

外反する口縁端部に刻み目を施す粗製深鉢である。口縁部には斜沈線を施している。

4類c種(210・212～215)

口縁部が直立気味に内弯し、口縁端部に刻み目と沈線を施している粗製深鉢である。斜沈線を施した後に口縁部に1条の沈線をめぐらし、左から右方向に刻み目を施している。刻み目はやや引きずるように施文するため、半月形になるもの(213)もみられる。口縁部はやや肥厚している。

4類d種(216・219)

口縁部が内弯しながら開き、端部で内側に肥厚する粗製深鉢である。口縁部には無文部を沈線で画して2条の隆帯をつくり、その上部に刻み目を施している。頸部には段を設け、上部に刻み目と沈線を施している。体部には縦方向に近い浅い斜沈線を施している。219は頸部に平行



第55圖 縄文土器拓影圖(9)

する横走沈線をめぐらし、その中に2条の刻目文を施している。斜沈線は細く浅い。

4類 e種(217・218・220・221)

口縁部が直立気味に内弯し、口縁部と頸部に紐線文を施す粗製深鉢である。217は密集した縦方向の沈線を施し、218は間隔を保った斜方向の沈線を施している。220・221は217の頸部破片で、頸部以下の沈線はやや斜方向となる。紐線は沈線を施した後に貼付している。

4類 f種(222～226)

内弯する口縁部に紐線文を施し、紐線間に沈線を施す粗製深鉢である。226は紐線間に弧状沈線を施している。224は直線的である。225は肥厚する口縁部下端に押し引き状の刻みを施したものである。

7群土器(第57～60図、図版14・21・24～26)

1類 a種(227・229)

頸部に屈折し、磨消縄文を施す深鉢である。227は口縁端部には内側に沈線を施した山形突起を付し、口縁部文様は弧状沈線内に縄文を残す磨消縄文で、胴部文様は連弧状充填縄文のようである。口縁内面には深いなで痕が残る。229も弧状沈線内に縄文を施す口縁部破片であるが、対面する弧状沈線の間には横走する沈線を施している。

1類 b種(233・234)

帯縄文をもつ深鉢で、胴部に張りをもたせる形態である。口縁部に幅広い帯縄文を、その下部には横走する細い縄文帯を横位・弧状に施し、その交点には沈線を施した貼付文を付している。縄文帯と無文部は沈線で画している。

1類 c種(228)

三叉文を施すもので、磨消縄文を施している。

1類 d種(230)

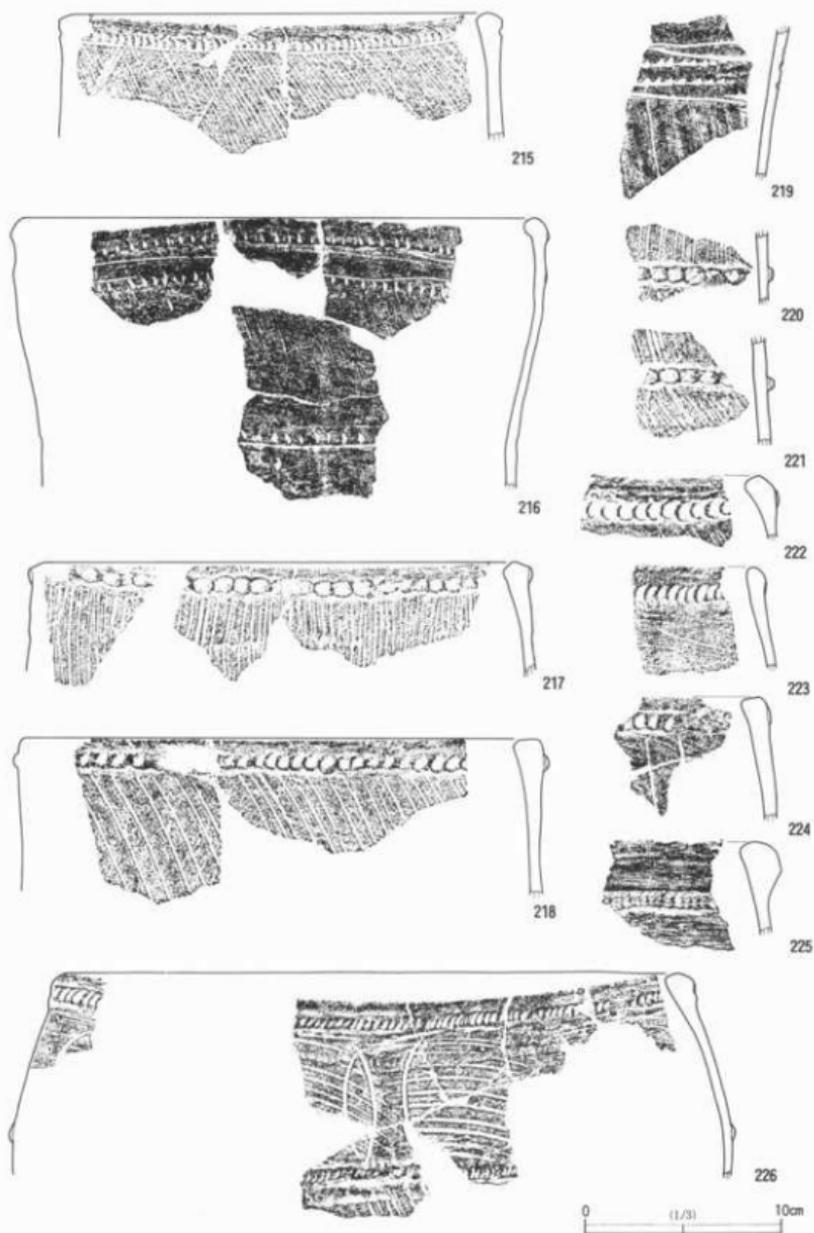
連続刻目を施した隆線を施した深鉢で、群馬県千網谷戸遺跡に類例がある。器面はなでによる無文で、4単位の把手状の突起が口縁部に付す。口縁部と頸部に連続刻目を施した隆線を施し、その間に三角形に同様の隆線を配している。三角形のモチーフの交点には貼付文を配している。230は三角形のモチーフの交点に貼付文はないが、三角形のモチーフと隆線の形状が同じことから本類に含めて良いものと判断した。安行Ⅲa式に比定できると思われる。

1類 e種(231・232)

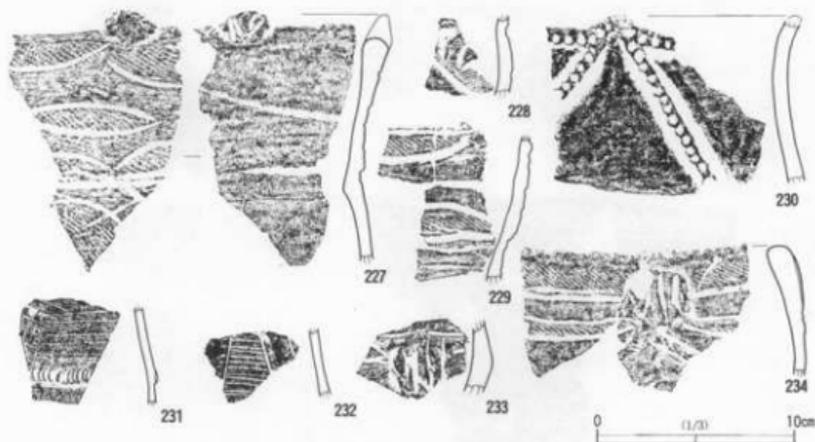
紐線文を施す粗製深鉢である。口縁部文様に直線的な沈線を施している。232は沈線間を丁寧に磨り消している。斜沈線はほぼ横方向である。

2類 a種(235～237・239～242)

磨消縄文を施す大形な浅鉢である。口縁部は波状口縁を呈すもの(235・236)と平縁のもの(237・241)とがある。235は大きな波状口縁の頂部に突起を付し、波頂部を連結する三日月状



第56图 縄文土器拓影图(10)



第57図 縄文土器拓影図(11)

の太沈線による磨消縄文を施している。体部中位には平行沈線を施し、磨消縄文帯としている。237は平縁であるが、前者と同様のモチーフを描いており、三日月状の沈線連結部の口唇に2瘤の突起を付している。口縁部は若干肥厚している。241は平縁の大形鉢で、口唇部四方に刻みを施した1対の突起を付し、その内側の口唇中央に沈線を刻んでいる。口縁内面には1対の突起間を結ぶ小隆帯を弧状に貼付し刺突を施している。外面の文様は、突起が貼付される四方に沈線による馬蹄形の文様を描き、その中央に縦方向の沈線区画を垂れ下げている。沈線区画内には縄文が残り連続刺突が施される。四方の突起間は沈線と弧線により連結し、その間の縄文は残される。体部中位には口縁部の弧線文と対応する弧線が施されている。口縁部直下には刺突文がめぐる。

2類b種(243)

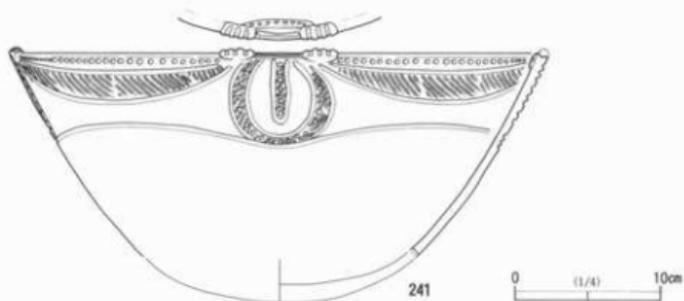
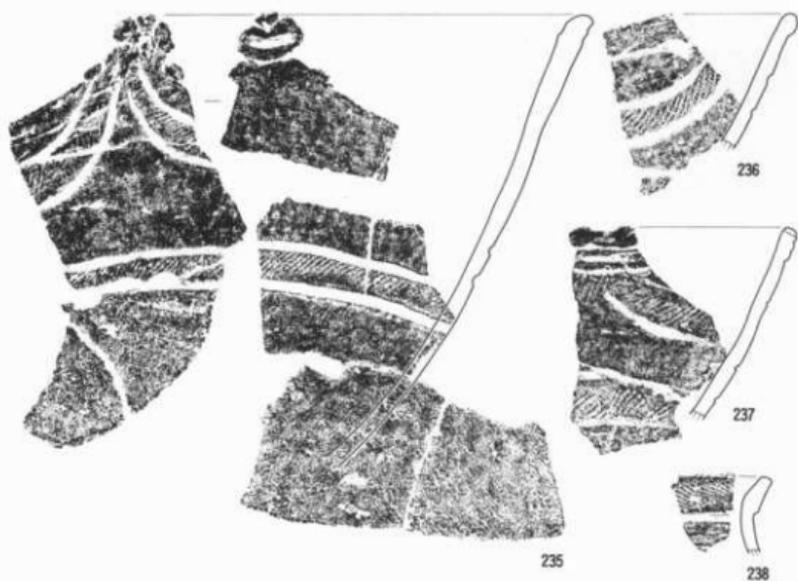
内弯する深鉢で、無文地に口縁部に沈線の長四角文を施している。口唇部直下には連続刺突文がめぐる。

2類c種(244・245)

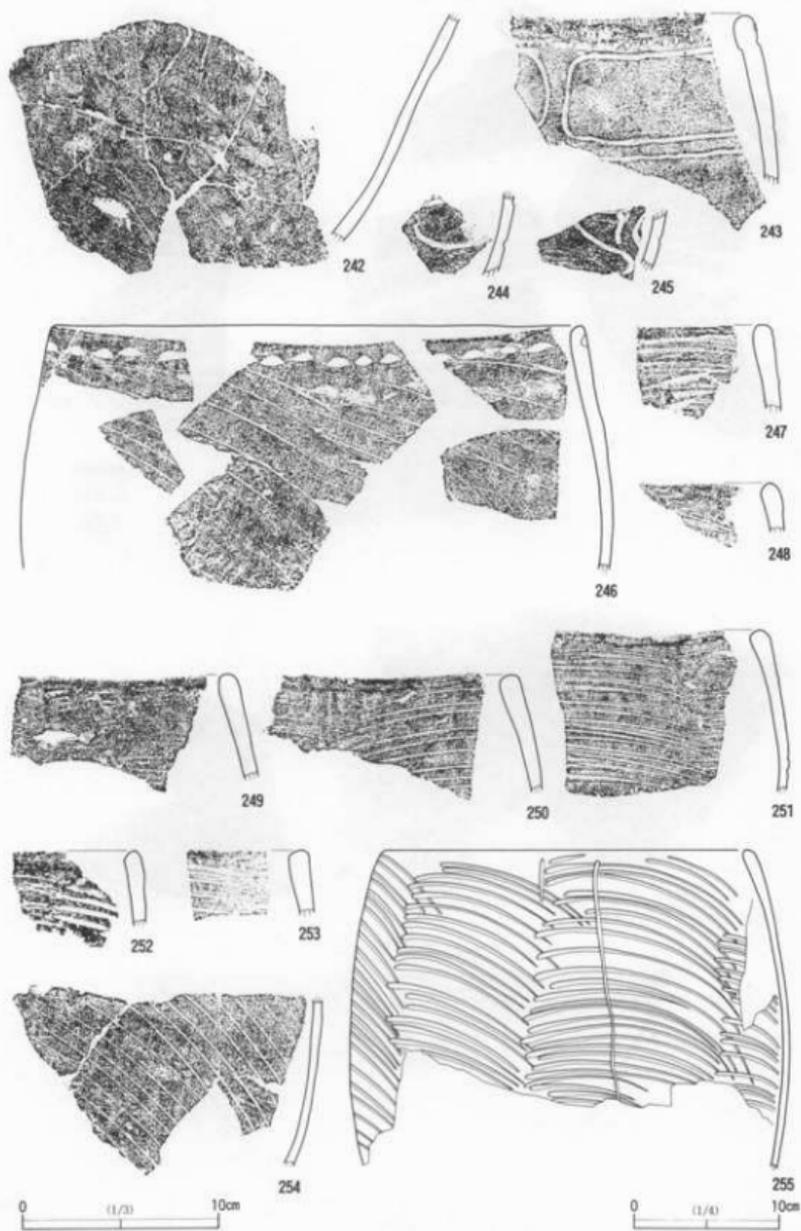
棒状工具による曲線文を施すものである。器壁は薄く、器内外面とも丁寧に磨かれている。浅鉢の可能性もある。

2類d種(246-255)

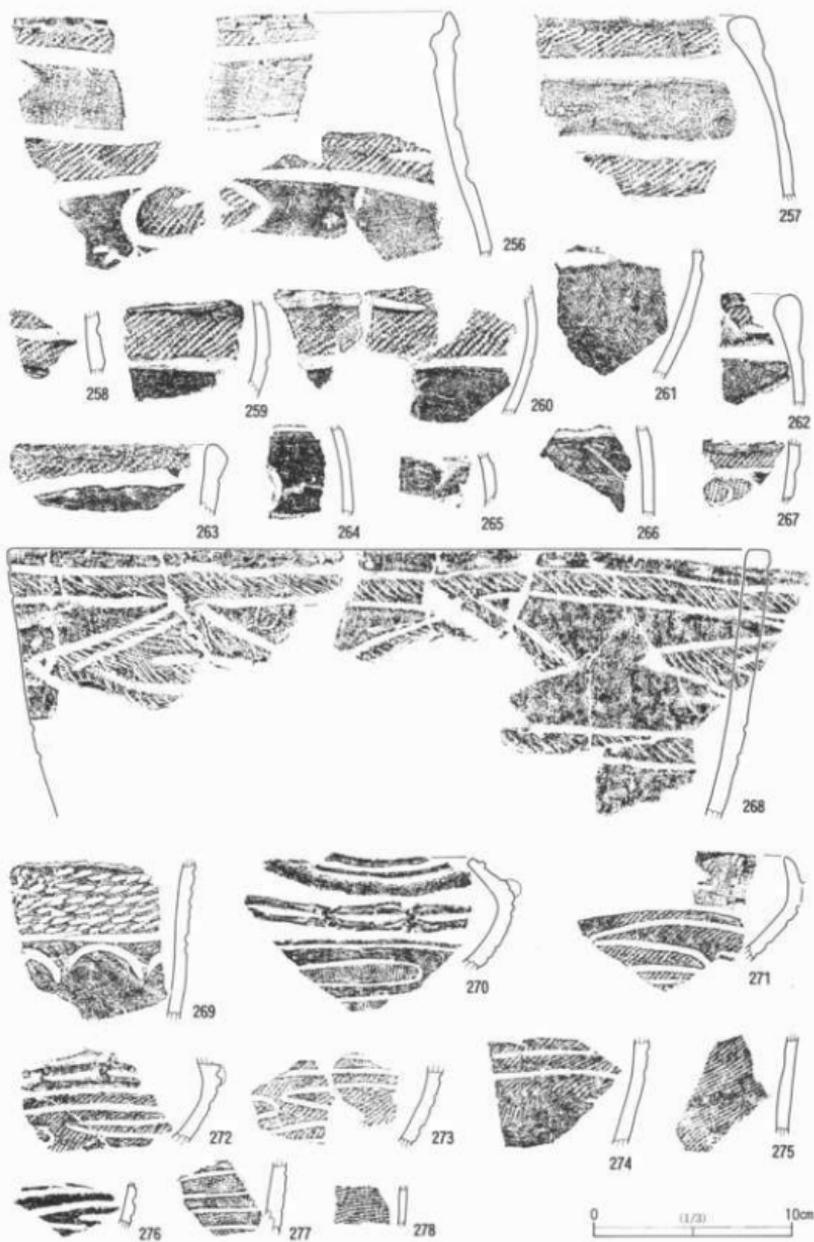
粗製深鉢で、比較的間隔をおいた斜沈線を充填するものと、間隔のつまった斜沈線を施すものがある。246は口縁部直下に粒の大きい連続横走刺突文を施している。255は斜沈線を施したうえに縦方向に浅い沈線を垂下している。



第58図 縄文土器拓影・実測図(12)



第59図 縄文土器拓影・実測図(13)



第60圖 縄文土器拓影図(14)

2類 e種(238)

口縁部が若干外反する小形の壺で、口縁部は肥厚させ縄文を施している。

本類は姥山式である。

3類 a種(256~263)

太沈線と磨消縄文を施した深鉢を一括した。口縁部は257・262・263のように肥厚させ縄文帯とし、太沈線で無文部と区画している。256のように口縁内面に太沈線をめぐらしたのものもある。無文部分には「の」の字文の描かれるものが認められる。

3類 b種(264~267)

施文モチーフはa種と同じであるが施文具が細く、全体に薄手な土器である。

3類 c種(268)

雷文を施す浅鉢である。上下2帯の沈線区画の縄文帯の内部に4単位の雷文を施し、内部は縄文を充填している。比較的大形な浅鉢である。

a~c種は前浦式に比定されよう。

3類 d種(269)

沈線区画内を列点文で充填する文様帯下部に弧状沈線を施す深鉢で、安行Ⅲc式に比定できる。

8群土器(第60図、図版26)

大洞系の土器を一括した。270~273・276は浅鉢で体部下半には磨消縄文による雲形文を施している。縄文原体は細くしっかりとした撚りで、緻密な縄文となっている。体部最大径の屈曲部には連続刺突を施した隆帯がめぐる。274・275・277・278はやはり緻密な縄文を施した土器で本群と考えた。

9群土器(第61図、図版27)

1類(279~292)

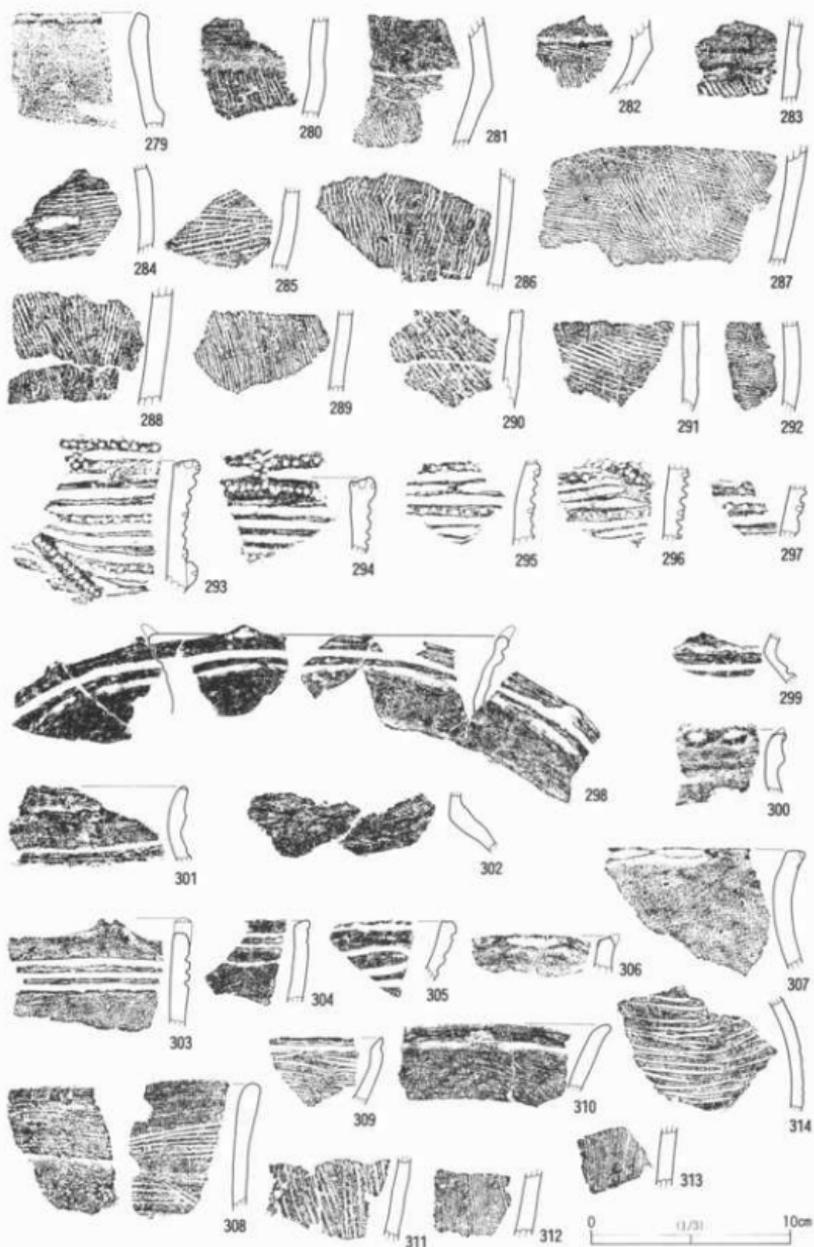
口縁に無文部をもち、胴部に燃糸文を施す深鉢である。

口縁部はやや内傾し、燃糸文を施す胴部へは鈍い稜線をもって屈折する。口唇部は面取りされている(279)。281・282・284のように文様部上端の燃糸文は横あるいは斜めに施されているものと、280・283のように縦方向に施すものがある。胴部の燃糸も方向は定まっていなが、基本的には縦方向であろう。

2類(293~297)

太沈線と隆線を組合せた文様を施す深鉢である。

293・294は口唇部をやや外方に肥厚させ、短沈線を少し間隔を開けながら押し引きし、隆起した部分に細かい刺突文を連続して施している。293や296では斜方向に隆線を貼付し刺突文を施している。器面には太沈線が施されているが、3条おきに隆起した部分に連続刺突文を施し、



第611圖 繩文土器拓影圖(15)

3条のうち中央の沈線はところどころ途切れているようで、295のように隆起した部分で工字文風の文様効果を上げている。

1類は千網式、2類は類例が乏しく不明な点が多いが同時期と考えて良いであろうか。

10群土器(第61図、図版27)

1類 a種(298・299・302)

口縁部に沈線を施す壺である。298は数単位の小突起のつく口縁部形態で、2条の沈線がめぐる。口縁は長く外傾し、やや肩の張る器形をとるものと思われる。299は肩の部分に沈線が1条めぐっている。302は肩の張りも大きい。

1類 b種(300・301)

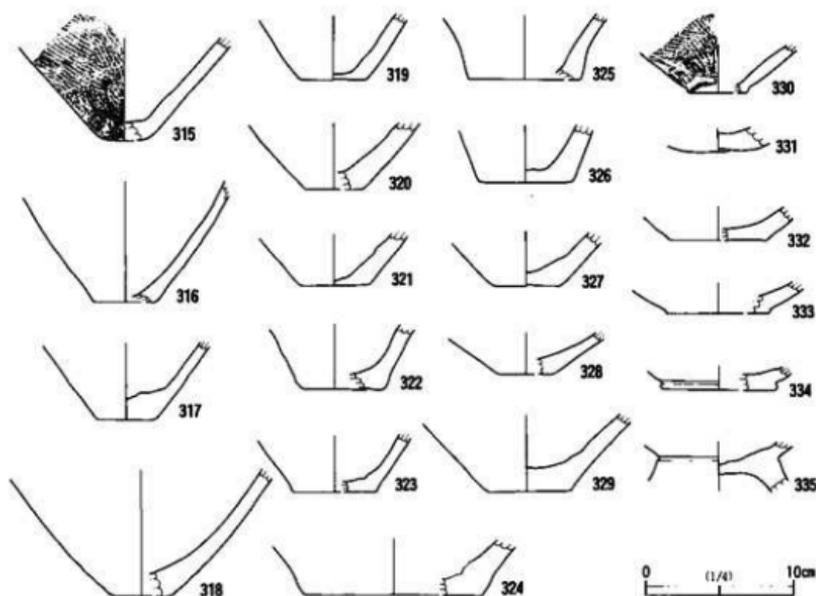
短く外反する口縁部が肥厚したものである。300の口唇部には連続した圧痕が施される。301も同様な圧痕が施されるようである。

2類(303~305)

口縁直下に沈線を施す深鉢で、303は口縁部に小突起をもつ。305は曲線的な沈線である。

3類(306・307)

口縁部に連続した横長の指頭圧痕を施す深鉢で、器面は無文である。



第62図 縄文土器実測図(16)

4類(308~313)

条痕を施すもので、308は深鉢、303は浅鉢状である。310は無文。311から313は縦方向の条痕を施している。

これらは荒海式に相当しよう。

底部(第62図)

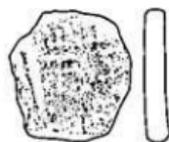
縄文土器の底部を一括した。胴下半部が無文になるものが多く、縦方向の磨きが目立っている。315は胴下半部が縄文で飾られ、小さい底部が付くことから安行系の精製深鉢と考えられる。

330は曾谷式の浅鉢か。

土製品(第63図)

土器片を利用した土製円盤が1点出土している。

縄文を地文に沈線区画の磨消縄文を施す加曾利E式の土器片で、縁辺部を粗く削り落とし楕円形に成形している。4.4×4.0cmの大きさである。



第63図 土器片実測図

b. 出土石器(第64・65図、第22表、図版28)

遺跡から出土した石器は総点数53点を数える。遺構出土の石器はなくすべて包含層出土の石器である。器種組成は、石鏃3点、ピエス・エスキューユ1点、磨製石斧1点、削器1点、磨石5点、軽石1点、砥石2点、使用痕を有する剥片1点、石核1点、剥片10点、礫27点である。主要な利器の出土も少なく、各器種ともごく少量ずつの出土であり、特徴的な器種組成の傾向を把握するには至らない。分布状況を見ると、12C-84区で石核と剥片が検出されその周辺に石器・礫がややまとまって出土して何らかの生産活動が推測されるが、遺構などは検出されなくその性格は不明である。他は包含層の各区を中心に数点ずつ散在する状況を呈しており、特定器種の集中は看取されなかった。これらの石器の帰属時期は、近世以降の所産と考えられる砥石を除いて、本遺跡の出土土器の時期に伴う蓋然性が高い。土器の時期は縄文時代後期後半(土器型式では加曾利B2式~安行II式)が主体で晩期末まで継続するので、石器も当該期の所産と考えられる。次に主要な器種について説明を加えていく。

石鏃(1~3)

1・2は浅く基部が抉れる形態で、2点とも形状は二等辺三角形を基調とし、側縁が直線的となる。1は主要剥離面が残置し縦長剥片を素材としている。2は片脚が尖るように調整が施される。3は下半部を欠損するが、かなり長身になると思われる。調整は精緻である。

ピエス・エスキューユ(4)

小楕円礫の両端に微細な階段状剥離と潰れが顕著である。両極技法によるものであろう。

使用痕を有する剥片(5)

小楕円礫の横長剥片を素材として、鋭利な縁辺が刃こぼれ状になる。

磨製石斧(6)

刃部に最大幅を持ち基部が尖る厚味のあるものである。風化が著しいが形状は流美である。

削器(7)

縦長剥片を素材として、腹面からの調整が右側縁に連続して認められる。

軽石(8)

多孔質軽石である。形状は不定形で調整は認められない。浮子などの用途が想定される。

石核(9)

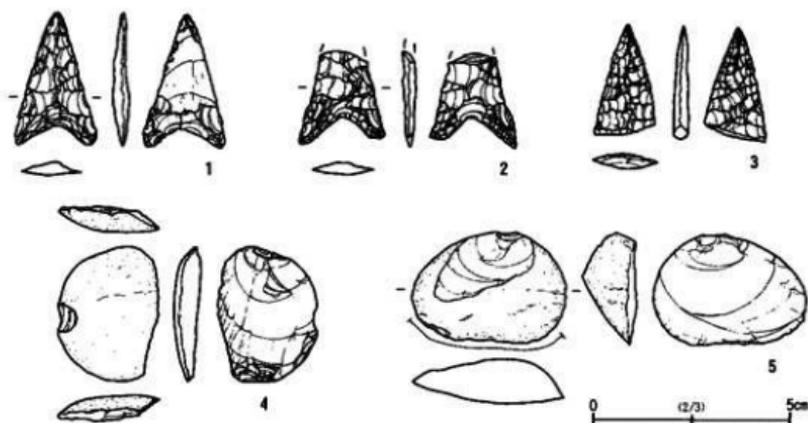
9 a-bは石核(9 a)と剥片(9 b)の接合である。剥片剥離技術は打面と剥離面を交互に入れ変えて剥離が進行している。作出剥片は自然面を持つ剥片である。

磨石(10~14)

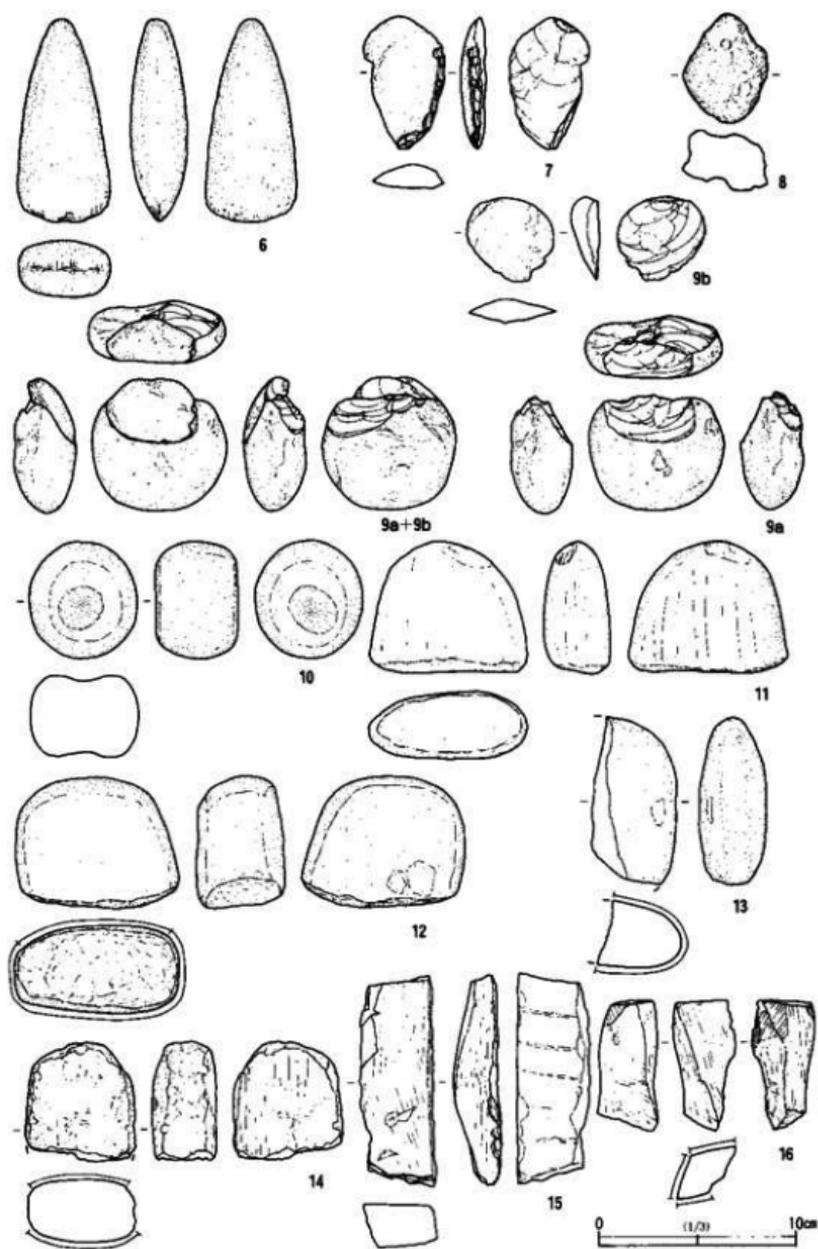
10は丁寧に面取りされた精巧な作りで、表裏に光沢を帯びた広い窪みを有している。11・12は片面が割れたような形態をしてしているもので、この面は自然面で磨痕が認められる。13は欠損するが磨痕が全面に及ぶものであろう。14は磨痕が表裏面に顕著で石鱗型を呈する。

砥石(15・16)

近世以降の所産と思われるもので、15は表面の両端の使用が著しくその部分が細くなっている。16は各面が機能面となり、中央の使用が顕著でその部分が細くなる。



第64図 縄文時代以降石器実測図(1)



第65図 縄文時代以降石器実測図(2)

第22表 上仁羅台遺跡石器属性表

押出	部	種	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	石 材	遺物番号	押出	部	種	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	石 材	遺物番号
1	石	鏃	31.6×20.8×4.2	1.6	宝山岩	13C-36-1	9/8	割	片	43.5×44.2×14.4	21.5	凝灰岩	12C-94-1
2	石	鏃	24.4×21.7×4.1	1.2	チャート	9F-91-1	10	割	石	59.1×54.2×41.0	295.0	砂岩	9C-70-1
3	石	鏃	29.0×15.9×4.1	1.2	桂貫頁岩	10E-79-1	11	割	石	47.1×79.8×24.1	275.4	石英質岩	13C-39-1
4	ビスス・スキヤース		34.0×25.3×7.2	4.9	チャート	13C-16-1	12	割	石	66.6×62.7×43.8	379.7	石英質岩	10F-11-1
5	使用痕を有する割片		28.7×38.8×12.9	35.8	チャート	12C-94-1	13	割	石	84.7×42.4×23.5	159.0	砂岩	12C-94-1
6	磨製石斧		105.1×51.0×28.6	207.7	宝山岩	13C-16-1	14	割	石	80.5×55.1×27.3	179.5	宝山岩	12C-94-1
7	磨製石		47.4×45.1×12.7	38.0	宝山岩	10E-49-1	15	割	石	106.8×37.0×23.0	122.0	凝灰岩	11D-36-1
8	磨製石		36.4×42.4×21.4	33.7	凝灰岩	11E-40-1	16	割	石	66.3×30.9×23.0	48.8	凝灰岩	11C-18-1
9a	石	杖	47.4×47.7×21.0	155.6	凝灰岩	12C-94-1							

第3節 その他の遺構と遺物

旧石器時代・縄文時代以外ではきわめて少量の遺構と遺物を検出したにとどまる。

弥生時代

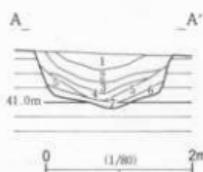
第61図314の土器を1点出土した。条痕を施した壺で、胴上部の肩に近い部分と考えられる。初期の弥生土器と考えてよいであろう。

近・現代

炭窯1基(第66図、図版13)と古銭(第67図)が出土した。

炭窯は1.9m×1.8m、深さ0.8mの隅丸方形で、中央部がやや窪む。最下層には炭化物が主体をなす層が薄く堆積し、焼土粒子や炭化物粒子を含む層が何層も堆積している。壁面は被熱でやや赤化している。

古銭は寛永通寶で、2枚出土している。それぞれ種類が異なり、元禄丁字屋銭、元禄京経目銭である。



003

1. 炭 灰 土 コーア粒子、炭化物粒子含有
2. 炭灰土 炭化物粒子、焼土粒子含有
3. 炭灰土 炭化物粒子含有
4. 炭灰土 焼土粒子、炭化物粒子含有
5. 炭 灰 土 コーア粒子、炭化物粒子含有
6. 炭 灰 土 炭化物粒子、焼土粒子多量含有
7. 炭 灰 土 炭化物主体

第66図 003炭窯



第67図 出土銭貨

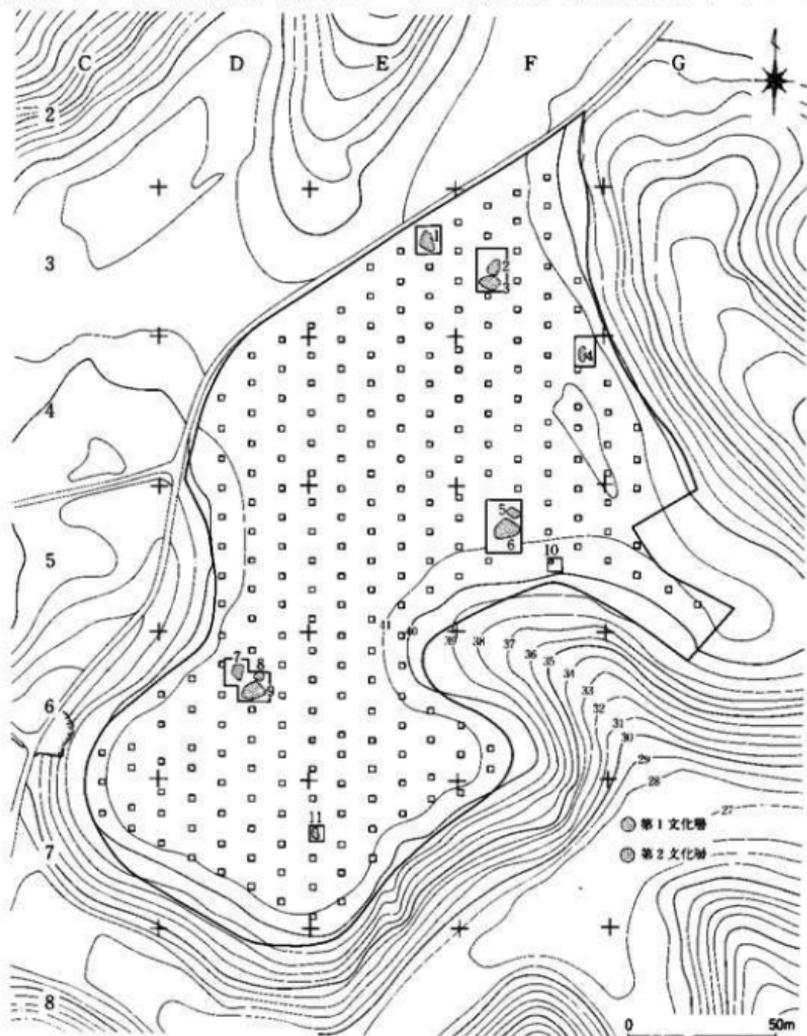
第 2 章

にしながやまの
西長山野遺跡
遺跡コード 408-007

第1節 旧石器時代

1. 概要

台地の縁辺を中心に遺跡全面にわたって石器集中地点が検出された。調査時には8ブロックと把握されていたが、整理作業の過程で11ブロックに再構成された。産出層準からこれらのブ



第68図 西山長野遺跡ブロック配置図 (1/2,000)

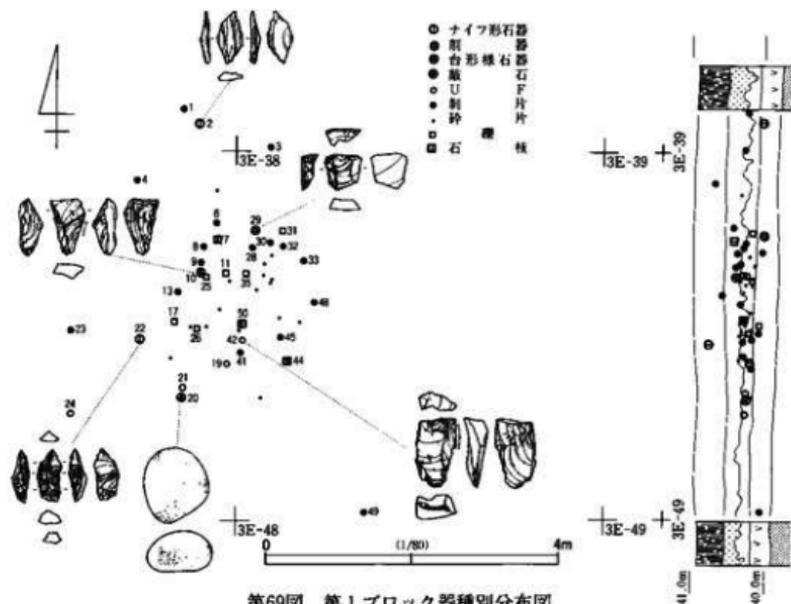
ロックは、Ⅲ層下部～Ⅳ・Ⅴ層上部に産出層準をもつ一群とAT層下位に産出層準をもつ一群に峻別される。上位のものを第1文化層(第1～9ブロック)、下位を第2文化層(第10・11ブロック)として2文化層を設定した。各ブロックの遺跡における位置関係を第68図に示した。

2. 第1文化層

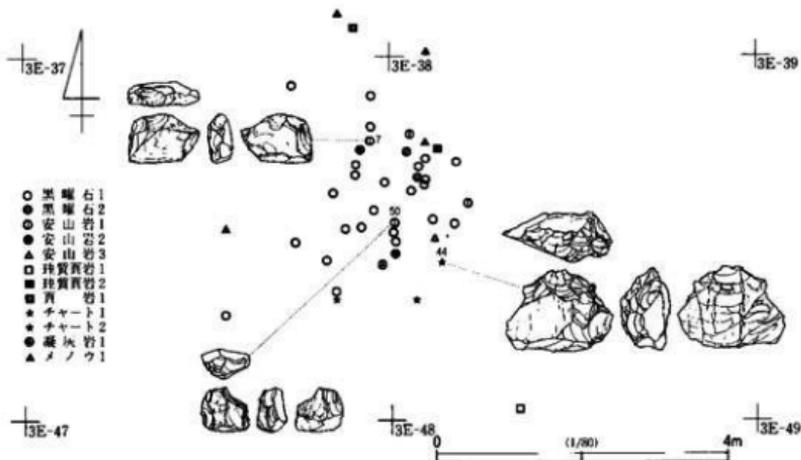
遺跡の主体を占める文化層である。産出層準はⅢ層下部～Ⅵ層上部に及んでいる。垂直分布のピークは微視的には上下するがほぼⅣ・Ⅴ層上面に中心をなすものが多く、同一文化層として把握される。5箇所の拡張区に9ブロックを設定した。各拡張区は約10m～約60m離れて台地縁辺に散在しており、個々の拡張区内では1～3ブロックでブロック群を構成している。

第1ブロック(第69～72図、第21表、図版29・32)

状況 遺跡最北端から検出された。3E-27・28・37・38区にまたがる南北5.8m、東西4.0mの範囲に50点の遺物で構成される。3E-37・38区の境界に石器の集中部分があり、この周囲に疎らに遺物が散在する状況が窺える。微地形は遺跡北側の小支谷の肩部に位置し、層位は北東方向に傾斜する。出土層準はⅡ層～Ⅵ層に及びⅣ・Ⅴ層上面に集中がみられる。器種構成はナイフ形石器2点、台形様石器1点、削器1点、敲石1点、使用痕を有する剥片4点、剥片16点、碎片16点、石核3点、礫6点である。



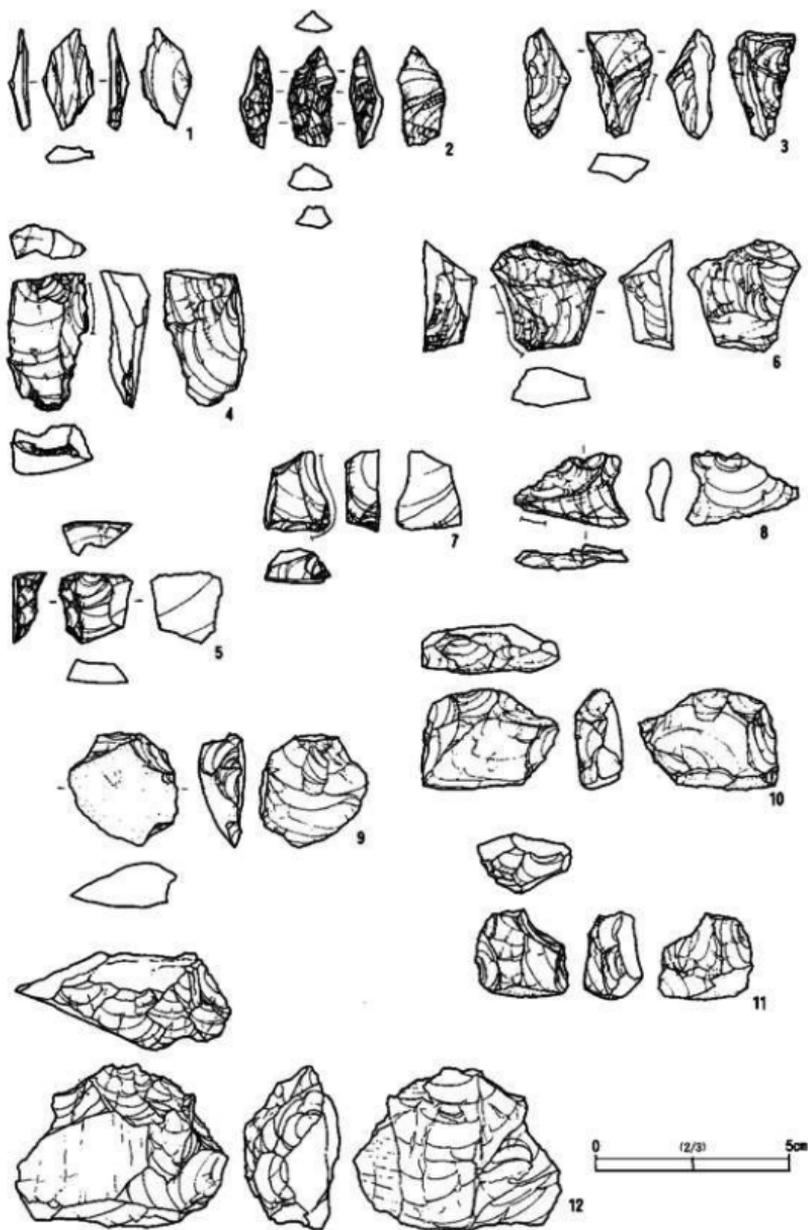
第69図 第1ブロック器種別分布図



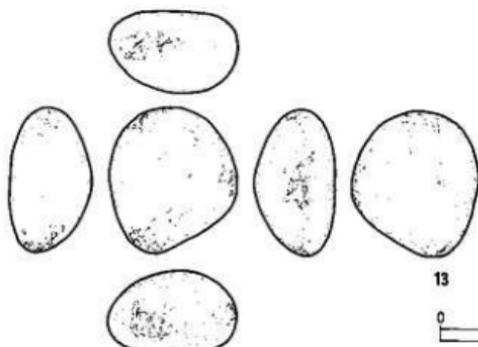
第70図 第1ブロック母岩別分布図

遺物 1、2はナイフ形石器である。1は横長剥片の端部を切断するように荒い調整を加える。石材は頁岩の単独母岩である。2は素材の横長剥片をやや斜位に用いて、打面部と端部を切り取るように平坦調整と急斜角な調整を施し、先端に一次剝離面を残置する。先端部は尖る。3は台形様石器とした。素材の打面部を平坦調整で除去し、器体を逆三角形状に仕上げる。5は削器である。厚味のある剥片の右側縁に急斜角加工と微細調整が看取される。4・6～8は使用痕を有する剥片である。4は下端部に連続した微細剝離が見られる。4・6・8は石材が黒曜石1とした同一母岩である。9はメノウ石材の剥片である。10～12は石核で、10・11が安山岩、12がチャートである。それぞれ厚い剥片素材の石核で、打点を左右に移動して横長剥片を生産していることが剝離面から理解されるが、本ブロックには生産された剥片は僅少である。13は蔽石である。石材はチャートで上下端及び右側縁に蔽打痕が顕著である。

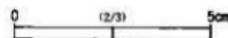
特徴 石材は同一母岩の黒曜石1としたものが24点とまとまり本ブロックの過半数を占める。この母岩からナイフ形石器、台形様石器、使用痕を有する石器などの器種が製作されているが、この母岩は碎片、剥片を主体としており素材から製品の調整加工過程に偏重した母岩消費を示す。一方、安山岩、チャート石材の石核がほとんど素材を生産せずに組成していることは、母岩消費サイクルの面から対称的である。他に僅かずつ珪質頁岩、メノウ、凝灰岩、頁岩などが組成し石材の多様性が読み取れるが、黒曜石が量的に主体を占めることは動かない。器種組成はナイフ形石器、台形様石器、削器など各器種が存在する。剥片剝離技術は黒曜石1の母岩から多様な素材を生産する打面転移の煩雑な剥片剝離が想定されるが資料的に明瞭ではない。他の石材からは盤状系の横長剥片石核が目目される。



第71図 第1ブロック石器実測図(1)



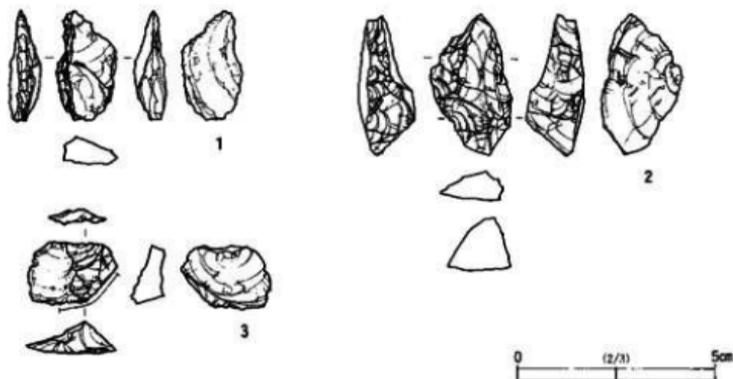
13



第72図 第1ブロック石器実測図(2)

第23表 第1号ブロック石器属性表

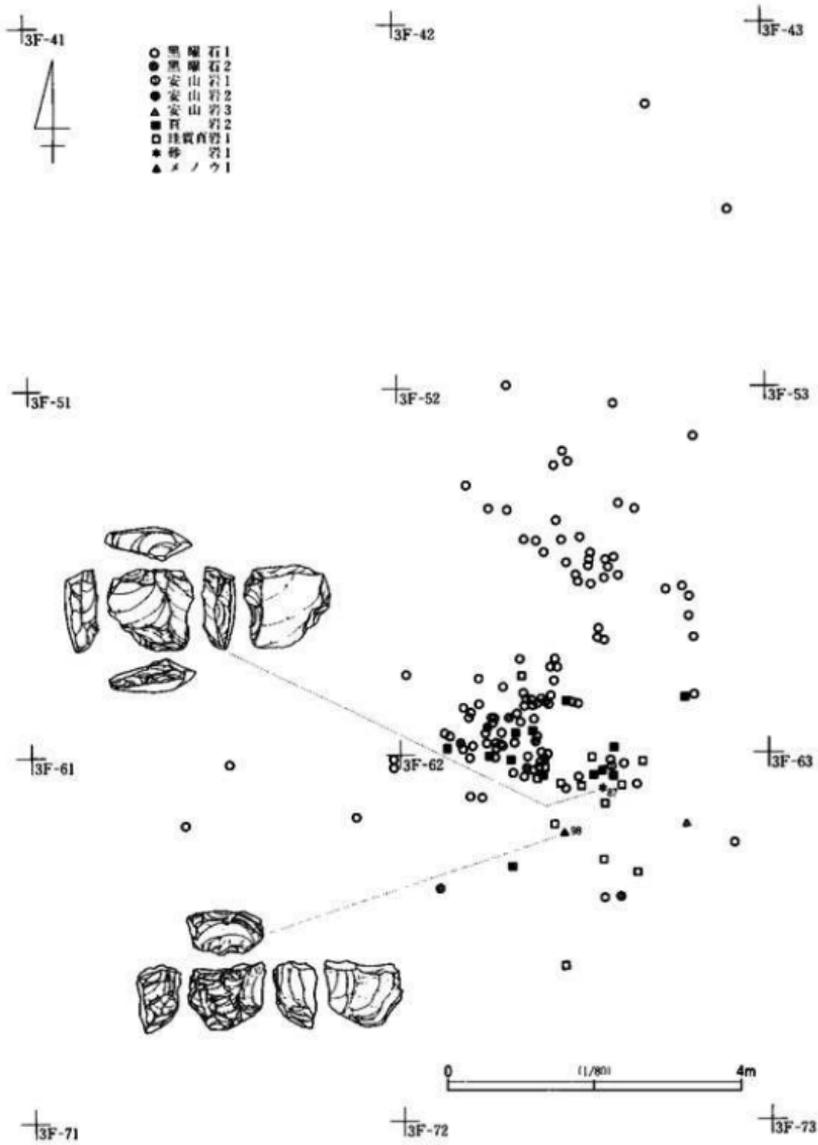
No	遺物番号	器種	石種	材	長×幅×厚 mm	重量 g	標記 番号	打製 状況	行割 調整	背面構成	断面	母岩質資料
1	3E-27-	1	割	片	メノウ	9.5×23.4×6.0	0.9		P			メノウ1
2		2	ナイフ形石器	片	メノウ	12.7×24.7×4.1	1.0	1	H1			頁岩1
3	3E-28-	1	割	片	メノウ	18.8×14.1×6.6	1.0		K		H	メノウ1
4	3E-37-	1	割	片	黒曜石	13.5×19.3×5.2	1.2		H2			黒曜石1
5		2	砕	片	黒曜石	10.4×12.1×5.1	0.4		H1			黒曜石1
6		3	割	片	黒曜石	15.3×10.6×4.0	0.5		H			黒曜石1
7		4	石	塊	安山岩	25.4×36.0×12.8	12.7	10				安山岩1
8		5	割	片	安山岩	29.9×33.1×8.8	7.3		N			安山岩1
9		6	割	片	黒曜石	14.2×10.6×3.6	0.3		H			黒曜石1
10		7	台形石器	片	黒曜石	15.7×28.3×10.8	3.1	3	H1			黒曜石1
11		8	磨	片	安山岩	35.7×18.2×10.1	7.2					安山岩1
12		9	砕	片	黒曜石	10.0×10.2×1.6	0.1		H1			黒曜石1
13		10	割	片	黒曜石	12.1×20.3×7.3	1.4		H1			黒曜石1
14		11	砕	片	黒曜石	11.2×8.6×3.0	0.3		N			黒曜石1
15		12	砕	片	黒曜石	9.6×14.8×2.6	0.3		N			黒曜石1
16		13	砕	片	黒曜石	10.4×12.7×4.8	0.3		H1			黒曜石1
17		14	磨	片	安山岩	22.4×21.9×15.3	7.4					安山岩1
18		16	砕	片	黒曜石	10.4×7.3×2.0	0.1		L			黒曜石1
19		17	割	片	海灰岩	20.3×17.0×7.9	2.6	7	N			海灰岩1
20		18a	磨	片	チャート	37.9×33.0×21.5	36.5	13	L		D	チャート1
21		18b	割	片	黒曜石	27.4×27.6×13.0	8.3	6				黒曜石1
22		19	ナイフ形石器	片	メノウ	25.2×11.6×7.3	1.8	2	N			黒曜石1
23		20	割	片	メノウ	22.3×25.0×10.0	2.1		L			メノウ1
24		21	割	片	メノウ	18.7×27.8×5.5	2.1	8	H1			黒曜石1
25		22	磨	片	安山岩	33.3×19.5×9.0	6.0					安山岩1
26		23	磨	片	花崗岩	31.5×24.0×28.4	12.5					花崗岩1
27	3E-38-	1	砕	片	黒曜石	9.4×12.0×2.1	0.2		H1			黒曜石1
28		2	割	片	黒曜石	7.8×12.7×4.8	0.6		N			黒曜石1
29		3	割	片	珪質頁岩	17.5×17.6×8.5	2.4	5	N		H	珪質頁岩2
30		4	割	片	メノウ	26.3×27.0×10.5	8.4	9	H1		D	メノウ1
31		5	磨	片	安山岩	36.5×21.7×32.9	33.5					安山岩1
32		6	割	片	柱状頁岩	11.8×19.4×3.2	0.8		N			柱状頁岩2
33		7	割	片	黒曜石	15.5×18.5×5.3	0.8		H1		H	黒曜石1
34		8	砕	片	黒曜石	13.7×12.3×4.5	0.7		H1			黒曜石1
35		9	磨	片	安山岩	26.3×20.0×12.2	6.3					安山岩1
36		10	砕	片	黒曜石	11.9×13.9×3.6	0.5		F			黒曜石1
37		11	砕	片	黒曜石	8.2×7.7×3.3	0.1		H1			黒曜石1
38		12	砕	片	黒曜石	10.1×8.8×3.7	0.3		H1			黒曜石1
39		13	砕	片	黒曜石	11.7×13.6×2.5	0.2		H1			黒曜石1
40		15	砕	片	チャート	10.0×20.5×3.4	0.5					チャート2
41		16	割	片	安山岩	28.8×14.4×17.0	2.8		H1			安山岩2
42		17	割	片	黒曜石	33.0×19.9×10.8	5.5	4	H1			黒曜石1
43		18	砕	片	黒曜石	10.8×5.6×1.7	0.1					黒曜石1
44		19	石	塊	チャート	41.5×54.7×24.0	47.8	12			H	チャート2
45		20	割	片	安山岩	13.0×18.7×4.0	0.8		F			安山岩3



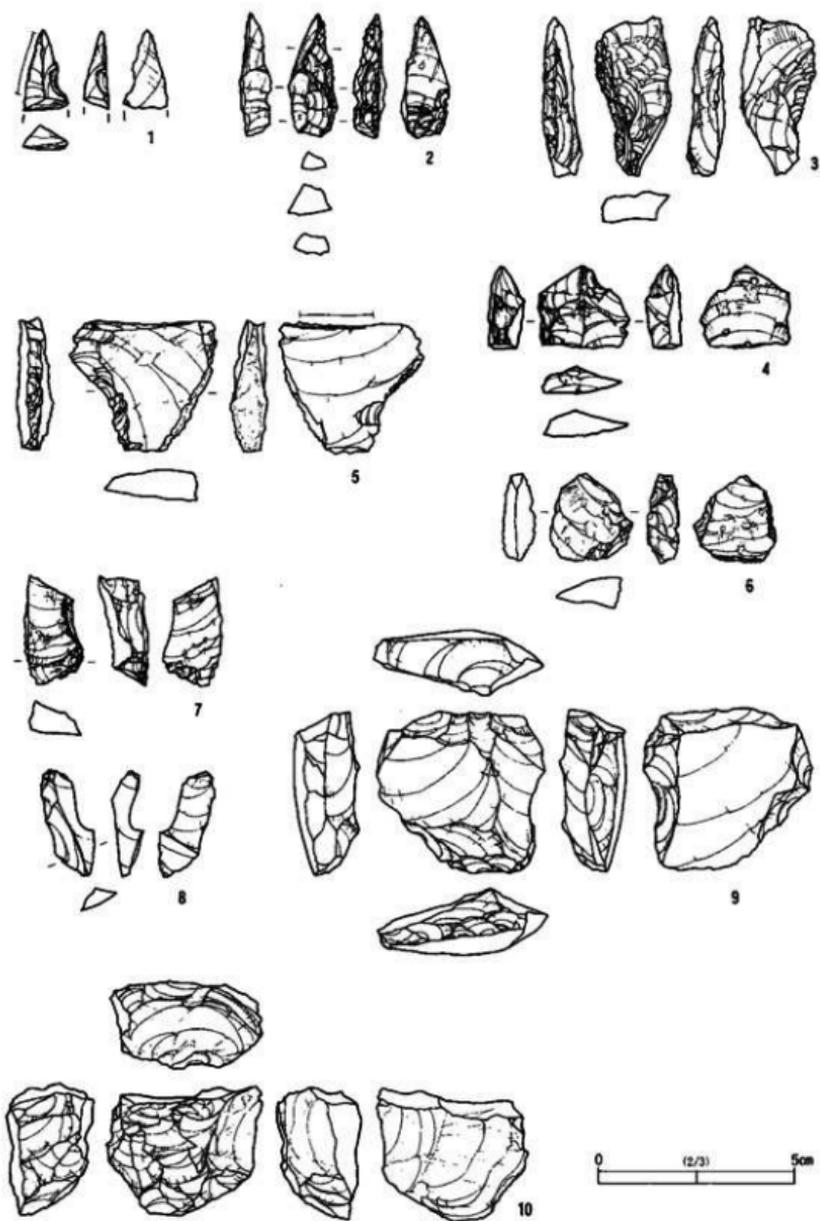
第74図 第2ブロック石器実測図

第24表 第2号ブロック石器属性表

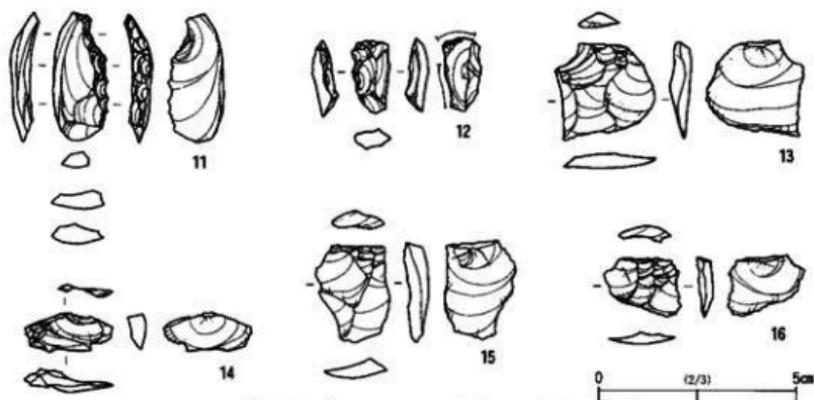
No	遺物番号	器種	石	材	長×幅×厚 mm	重量 g	検出 番号	打製 形状	打製 回数	背面構成	折痕	付随資料	
1	3F-42-	1	砕	片	黒曜石	8.2×16.3×2.4	0.3		H1		I		黒曜石1
2		2	削	片	黒曜石	19.7×31.0×8.3	3.9		N				黒曜石1
3		3	砕	片	黒曜石	10.1×5.0×2.7	0.1		P		I, II		黒曜石1
4	3F-52-	1	削	片	黒曜石	11.7×21.2×4.4	1.2		H1		I, II, III		黒曜石1
5		2	片	U	黒曜石	15.4×22.8×6.0	1.7	3	H1				黒曜石1
6		3	削	片	黒曜石	9.5×12.0×5.5	0.5		N		I, III		黒曜石1
7		4	削	片	黒曜石	20.3×18.0×5.0	1.5		N		I, II		黒曜石1
8		5	砕	片	黒曜石	9.8×13.4×3.3	0.3		H1		I		黒曜石1
9		6	砕	片	黒曜石	× × ×	0.1		H1		I, IV		黒曜石1
10		7	ナイフ形	石	黒曜石	27.0×15.3×7.7	2.6		H1		I		黒曜石1
11		8	削	片	黒曜石	14.5×6.0×3.1	0.1		N		I, II	H	黒曜石1
12	9a	削	片	黒曜石	8.9×19.2×8.4	1.5		N		I			黒曜石1
13	9b	砕	片	黒曜石	× × ×	0.1		L		I			黒曜石1
14	11	削	片	黒曜石	24.8×16.0×5.2	2.0		H1		I, III			黒曜石1
15	13	砕	片	黒曜石	× × ×	0.1		H1		I, IV			黒曜石1
16	14	砕	片	黒曜石	7.6×9.3×4.5	0.3		N		I	H		黒曜石1
17	15	砕	片	黒曜石	× × ×	<0.1							黒曜石1
18	16	砕	片	黒曜石	6.1×5.0×1.1	<0.1		N		I	H		黒曜石1
19	17	砕	片	黒曜石	16.6×7.8×3.4	0.2		N		I	H		黒曜石1
20	18	削	片	黒曜石	21.1×19.2×5.0	1.8		N		I, III			黒曜石1
21	19	削	片	黒曜石	7.3×18.8×3.7	0.4		N		I	H		黒曜石1
22	20	砕	片	黒曜石	6.7×10.0×5.1	0.3		P		I			黒曜石1
23	21	砕	片	黒曜石	5.7×6.1×1.6	0.1		N		I	H		黒曜石1
24	22	削	片	黒曜石	15.4×23.9×8.3	2.2		N		I, II	H		黒曜石1
25	23	砕	片	黒曜石	8.0×9.2×1.8	0.1		P		I			黒曜石1
26	24	削	片	黒曜石	10.0×15.6×5.0	0.6		N		I, III	H		黒曜石1
27	25	削	片	黒曜石	17.6×11.3×6.0	0.7		N		III	H		黒曜石1
28	26	削	片	黒曜石	16.6×7.8×3.4	0.2		H1		I, IV			黒曜石1
29	27	砕	片	黒曜石	7.0×5.0×1.2	0.1		N		I	H		黒曜石1
30	28	砕	片	黒曜石	10.0×5.8×2.8	0.1		P		I			黒曜石1
31	29	砕	片	黒曜石	11.9×8.9×2.1	0.1		N		I	H		黒曜石1
32	30	角	片	黒曜石	19.8×7.3×4.2	0.4		N		I, II, III			黒曜石1
33	31	角	片	黒曜石	35.7×18.7×13.2	7.0							黒曜石1
34	32	削	片	黒曜石	13.9×15.0×4.0	0.8		N		I	H		黒曜石1
35	33	削	片	黒曜石	10.6×30.2×5.8	1.4		H1		I			黒曜石1
36	45	砕	片	黒曜石	× × ×	<0.1							黒曜石1
37	46	砕	片	黒曜石	5.1×9.1×3.0	0.1		H1		I			黒曜石1
38	95	削	片	U	黒曜石	22.6×14.0×7.7	1.7		N		I, IV	H	黒曜石1
39	96	砕	片	黒曜石	× × ×	<0.1							黒曜石1
40	97	磨	山	安山岩	42.4×34.9×35.9	52.5							安山岩1
41	98	砕	片	黒曜石	× × ×	<0.1							黒曜石1
42	99	砕	片	黒曜石	× × ×	<0.1							黒曜石1
43	100	削	片	黒曜石	12.0×15.7×5.3	0.8		N		I	H		黒曜石1



第76図 第2・3ブロック母岩別遺物分布図



第77図 第3ブロック石器実測図(1)



第78図 第3ブロック石器実測図(2)

西6.0mの範囲に分布する。東側にやや遺物の密集した部分があり、母岩資料の珪質頁岩1が集中する。出土層率はⅢ層下部～Ⅳ・Ⅴ層上部に遺物の集中が認められる。器種構成はナイフ形石器5点、台形楯石器1点、削器1点、二次加工を有する石器2点、使用痕を有する石器3点、剥片24点、碎片76点、石核2点である。

遺物 1は先端部しか残置しないため、形状が明確ではないがナイフ形石器とした。右側縁に調整が認められる。2もナイフ形石器である。右側縁部の調整加工は主要剥離面からの調整後、稜上から右側縁に向かって調整が施される。また、左側面下部から基部にかけて裏面調整が看取される。先端角が鋭利でいわゆる刺突タイプのナイフ形石器である。3は台形楯石器である。素材の打面部・末端部を切断して打面側に連続したブランディングを行っている。そのため形状は逆三角形を呈することになる。4はナイフ形石器とした。基部を欠損するが切出形状になると思われる。5は削器。左側縁部に加工が施され挟入した刃部をもつ。6・7は二次加工を有する剥片である。6は主要剥離面右側縁に微細加工が看取される。7は末端部に細部加工が認められる。8は剥片である。9・10は石核を示した。9は砂岩石材の盤状剥片素材石核で腹面を切り取るように剥片剥離作業が行われている。単一の母岩であり次に述べる珪質頁岩1の母岩との技術的共通性に着目して置く。10は部厚い剥片を石核素材として正面で連続する剥片剥離が進行する。11～16は珪質頁岩1とした同一母岩資料を図示した。11・12はナイフ形石器である。11は底面を有する横長剥片を素材としたナイフ形石器で、形態的にはいわゆる「国府型ナイフ形石器」と呼ばれるものに類似する。素材剥片は石核の底面を保持する横長剥片で、背面構成は打面と同方向からの先行する剥離面が看取され、打面を横方向に移動しながら剥片剥離作業が進行すると考えられる。打点方向は器体上部に寄る。この打面部を除去するように調整は右側縁に連続する。刃角は55度である。12も底面をもつ横長剥片を素材とするもの

で、調整加工と打点部の切り合いが判然としないが一応のナイフ形石器と把握しておく。13-16は同一母岩の剥片である。この母岩は乳黄白の色調で茶褐色斑点が入る珪質頁岩である。剥片の特徴は長い平坦打面と打面調整が顕著である。形状は横長剥片が多いが15のように縦長剥片も存在する。背面構成は、打面と同方向の剥離で構成される。これらの剥片は11のナイフ形石器の調整剥片と考えられる。

特徴 石材は黒曜石が多数を占め、それに珪質頁岩、頁岩が少数加わる。母岩は第2ブロックの黒曜石1が本ブロックと共有され、この母岩を中心にナイフ形石器、台形様石器が製作されている。さらに注目されるのは、これに珪質頁岩1の母岩が共存して「国府型ナイフ形石器」が製作されている点である。剥片剥離技術は黒曜石の母岩では素材調整に偏った状況を示している。生産された製品を見ると、角錐状石器の調整加工に類似するナイフ形石器や、台形様石器などに素材形状により作り分けが認められ、剥片剥離技術が素材の選択の利用に重点があることが考えられる。国府型ナイフ形石器の剥片剥離技術を見てみると、石核が存在しないのでその過程は明瞭ではないが、盤状剥片素材の石核の腹面を切り取る様に素材作出されたと同

第25表 第3号ブロック石器属性表

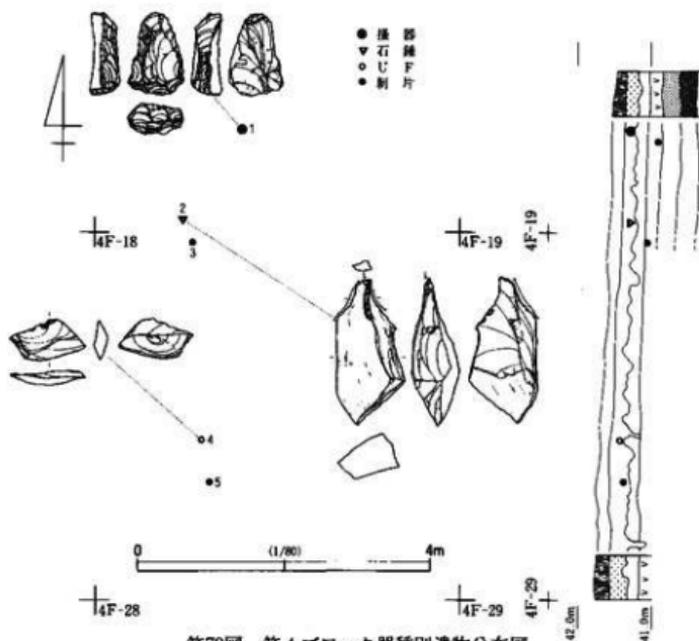
No	遺物番号	器	種	石	材	長×幅×厚 mm	重量 g	採掘 番号	打面 形状	打面 調整	背面構成	断面	母岩別資料
1	3F-52-	10	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1						黒曜石 1
2		34	砕	片	頁岩	6.2×6.5×1.3	0.1		P		I	R	頁岩 1
3		35	砕	片	黒曜石	19.4×23.4×11.4	2.7		P		I		黒曜石 1
4		36	砕	片	黒曜石	10.8×10.0×2.3	0.1		P		I		黒曜石 1
5		37	砕	片	黒曜石	7.2×10.5×2.0	0.2		N		I, II, III	黒曜石 1	
6		38	砕	片	頁岩	9.9×11.6×1.6	0.2		L		I	頁岩 1	
7		39	砕	片	黒曜石	9.7×8.1×4.7	0.2		N1		I	黒曜石 1	
8		40	砕	片	黒曜石	10.9×13.2×7.2	0.7		N		I, II, III	黒曜石 1	
9		41	砕	片	黒曜石	8.4×9.3×1.2	0.1		P		I	黒曜石 1	
10		42	砕	片	黒曜石	3.4×7.1×2.7	<0.1		P		I, IV	黒曜石 1	
11		43	砕	片	黒曜石	4.5×7.7×0.9	<0.1		N		I, IV	黒曜石 1	
12		44	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1		N1		I	黒曜石 1	
13		47	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1		P		I	黒曜石 1	
14		48	砕	片	珪質頁岩	× ×	<0.1		N1		I	珪質頁岩 1	
15		49	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1		L		I	黒曜石 1	
16		50	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1		L		I	黒曜石 1	
17		51	ナイフ形石器	部	黒曜石	31.3×10.6×6.4	2.3	2					黒曜石 1
18		52	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1						黒曜石 1
19		53	砕	片	黒曜石	× ×	0.1		N1		I	黒曜石 1	
20		54	砕	片	黒曜石	7.3×12.2×4.4	0.2		N1		I	黒曜石 1	
21		55	砕	片	黒曜石	8.9×11.6×4.2	0.3		L		I	黒曜石 1	
22		56	ナイフ形石器	部	頁岩	30.3×11.0×6.2	0.8	1					M-H 頁岩 1
23		57	部	部	黒曜石	32.6×16.1×7.7	9.8	5					黒曜石 2
24		58	砕	片	黒曜石	8.0×10.7×1.8	0.2					I	黒曜石 1
25		59	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1						黒曜石 1
26		60	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1						黒曜石 1
27		61	砕	片	黒曜石	29.0×14.2×9.7	3.9	7	N		I, II		黒曜石 1
28		62	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1		N1		I		黒曜石 1
29		63	台形様石器	部	黒曜石	31.3×19.0×8.2	5.7	3					黒曜石 1
30		64	砕	片	黒曜石	7.9×6.2×2.0	0.1		N		I		黒曜石 1
31		65	砕	片	黒曜石	6.8×10.1×4.0	0.2		N1		I		黒曜石 2
32		66	砕	片	頁岩	13.5×8.9×2.9	0.3		N		I		M-B 頁岩 1
33		67	砕	片	頁岩	9.2×13.9×2.5	0.2		P		I, II, III		頁岩 1
34		68	砕	片	黒曜石	× ×	0.1		P				黒曜石 1
35		69	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1						黒曜石 1
36		70	砕	片	黒曜石	7.7×11.6×2.8	0.2		N1		I		黒曜石 2
37		71	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1						黒曜石 1
38		72	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1						黒曜石 1
39		73	砕	片	黒曜石	× ×	<0.1						黒曜石 1

推される。この過程で打面の山形調整は看取されないでこの素材はいわゆる翼状剥片の形状と異なったものとなるが、横長剥片の形状は石核底面を保持することとなる。素材の背面構成から打点が横に移動していることが注目される。調整加工は打面部を除去するように1側縁にわたっている。瀬戸内技法に拠らないで国府型ナイフ形石器が製作される例は殿山技法に詳しい。本ブロックの剥片剥離技術による国府型ナイフ形石器の製作もこうした技術基盤の範疇に含んで考える必要がある。

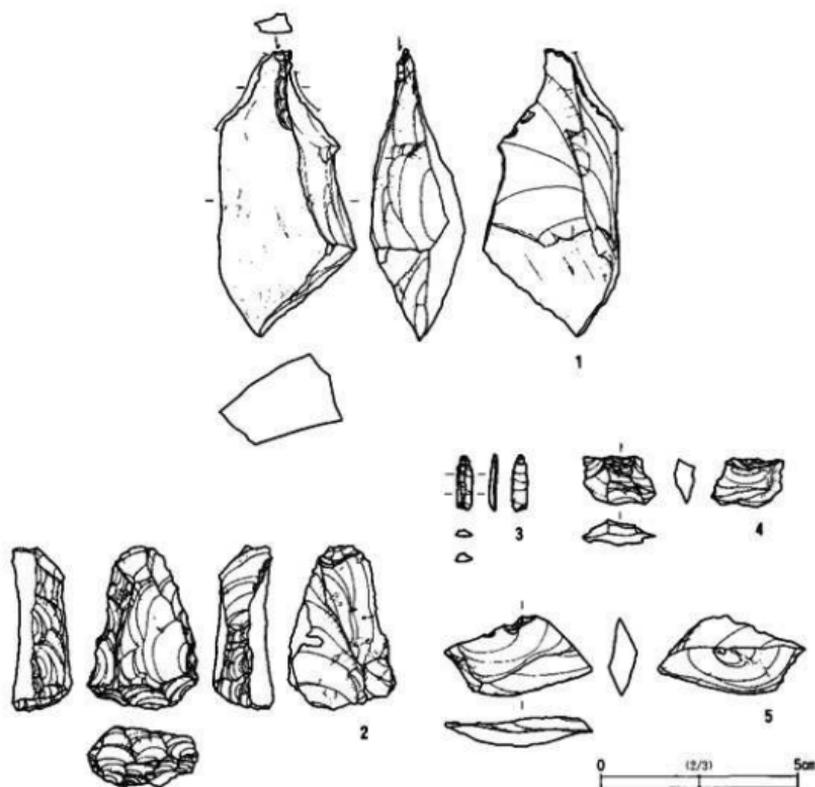
第4ブロック(第79・80図、第24表、図版30・34)

状況 遺跡北東の台地縁部に位置する。4F-08・18区を中心に6点で構成される小規模なブロックである。南北4.0m、東西0.5mの範囲に南北を軸として1列に並んで散在する。出土層準はⅢ層下部に遺物の集積が認められる。器種構成は掻器1点、彫器1点、使用痕を有する剥片1点、剥片2点、碎片1点である。

遺物 1は彫器とした。自然面を広く残した厚い剥片を素材として、先端部に垂直な楕状剥離が施される。その両側辺は小調整と、刃こぼれ状の使用痕が看取される。この母岩は5の母岩と同一母岩であり、また第3ブロックにおける国府系石器群の石材とも類似している。素材の剥離面構成をみると、或いは石核素材としての機能も併せ持つ可能性がある。2は掻器であ



第79図 第4ブロック器種別遺物分布図



第80図 第4ブロック石器実測図

る。分厚い横長剥片を素材として下端部から両側縁にかけて急斜角な調整が入念に施される。下端部が広くなる形状を呈する。3・4は剥片である。3は形態的には細石刃としてもよいものであるが、あるいはピエス・エスキューから剥がされた剥片とも考えられる。5は使用痕を有する剥片で、末端が刃こぼれ状になる。底面を持つ横長剥片を素材としており、背面構成から打点を移動させて盤状剥片石核から横長剥片を剥離する剥離技術が想定される。

特徴 石器製作のみられない小規模なブロックである。石材は珪質頁岩・黒曜石で占められ、この珪質頁岩は第3ブロックの国府系石器群と同一石材であり、さらに石器製作上も共通する技術が想定された。この剥片剥離技術は、盤状剥片素材石核から、底面をもつ横長剥片を剥離する技術である。また搔器と彫器が器種組成することもその機能面を考えると注目される状況を呈する。

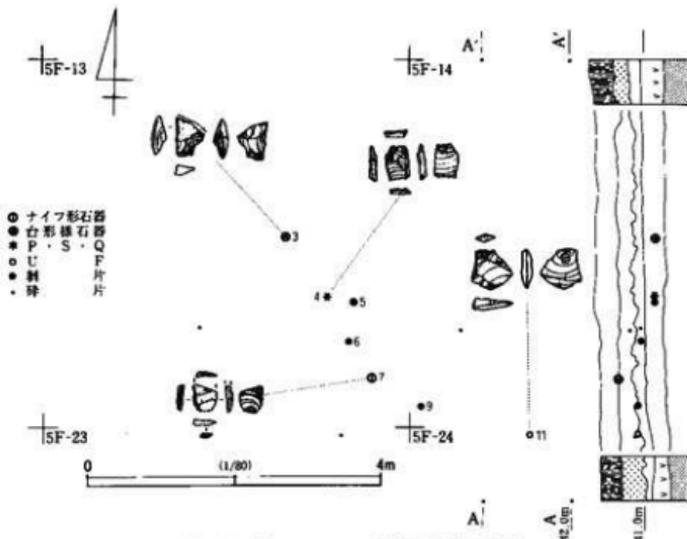
第26表 第4号ブロック石器属性表

No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	打痕 番号	打痕 形状	打痕 位置	背面構成	断面	母岩別資料
1	4F-08-	1 透	黒曜石	41.5×27.7×15.0	14.7	2					黒曜石 1
2		2 削	珪質頁岩	28.2×3.5×2.4	38.5	1					珪質頁岩 1
3	4F-18-	1 削	黒曜石	11.7×16.7×4.5	0.9	4	H 1	D	I, II		黒曜石 2
4		2 削	珪質頁岩	20.5×27.4×6.5	3.3	5	H 1		I, II		珪質頁岩 1
5		3 削	黒曜石	13.4×3.9×1.7	0.1	3	P		I		黒曜石 3

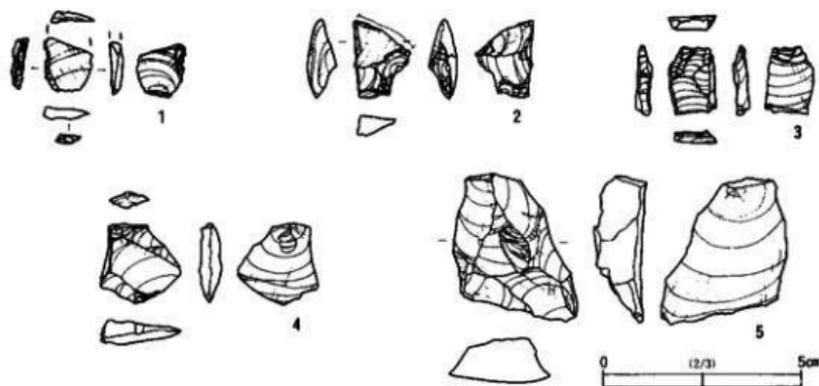
第5ブロック(第81・82図、第25表、図版35)

状況 遺跡の中央部東側の南東方向より入る小支谷の縁辺に位置する。5 F-13・14区に11点で構成される小規模なブロックである。南北2.8m、東西4.6mを測る楕円形の範囲に散在する。南側で第6ブロックと近接する。出土層準はⅢ層～Ⅵ層上部に及ぶが、Ⅳ・Ⅴ層上部に遺物の垂直分布が集中する。器種構成はナイフ形石器1点、台形様石器1点、ピエス・エスキュー1点、使用痕を有する剥片1点、剥片4点、砕片3点である。

遺物 1はナイフ形石器。背面から腹面に小調整加工がある。先端を欠損して形態が窺い知れないが一応ナイフ形石器に含めておく。2は台形様石器である。主要剥離面の打点部を切断して、末端部を扶るように調整して切出状に器体を仕上げる。さらに腹面の基部にも調整が認められる。3はピエス・エスキューである。下端部を欠損するが細長い器体を抜けるような剥離と上面の潰れが看取され上面は線状となる。1～3は良質の黒曜石の同一母岩で製作され



第81図 第5ブロック器種別遺物分布図



第82図 第5ブロック石器実測図

第27表 第5号ブロック石器属性表

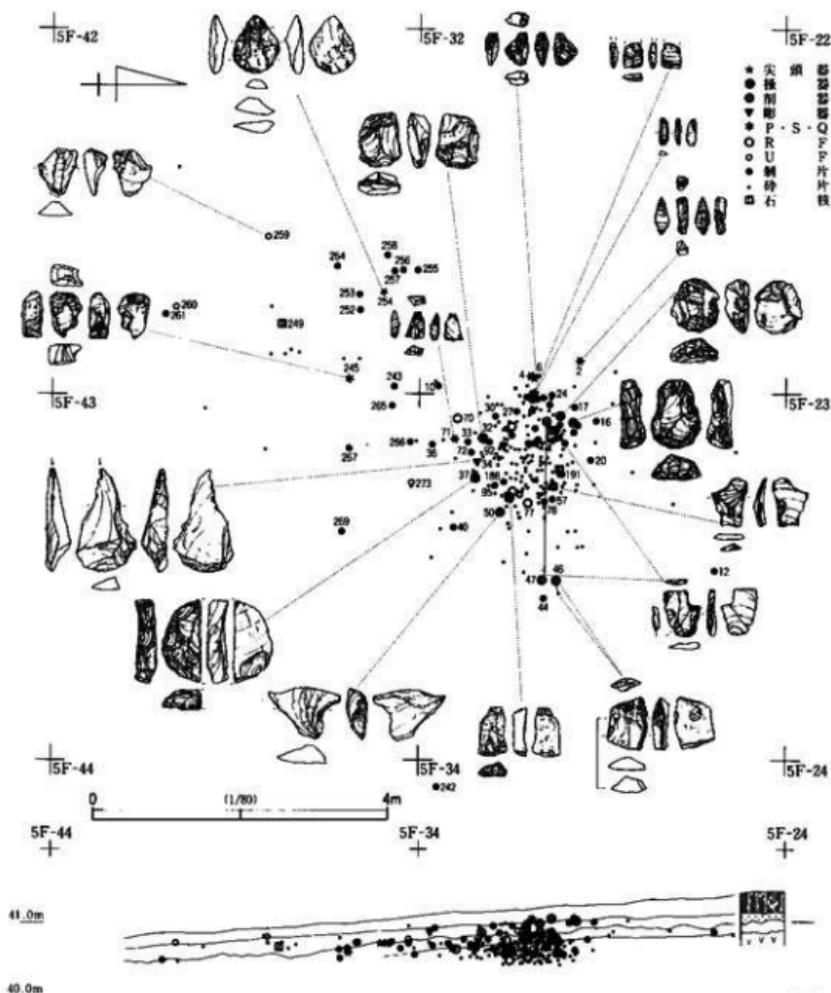
No	遺物番号	器種	石	材	長×幅×厚 mm	重量 g	検出 番号	打製 形状	打製 調整	背面構成	断面	母岩別資料
1	SF-12-	1	剥片	A	34.0×32.5×12.5	11.1	5	H I		I, II		A ノウ 1
2	SF-13-	1	剥片	頁岩	9.1×3.7×2.4	0.3		H I		I		頁岩 1
3		2	台形椽石器	燧石	13.4×20.1×7.0	1.5	2	N		I		黒燧石 1
4		3	楔形石器	燧石	17.0×11.4×3.0	0.9	3	N		I		黒燧石 1
5		4	剥片	燧石	13.3×10.0×6.4	0.4		N		I		黒燧石 1
6		5	剥片	頁岩	8.1×16.0×5.0	0.6				I, IV		頁岩 1
7		6	ナイフ形石器	燧石	17.7×11.2×3.0	0.6	1	N		I		黒燧石 1
8	SF-14-	1	剥片	頁岩	11.0×11.6×2.0	0.2		P		I		頁岩 1
9		2	剥片	燧石	13.2×8.8×1.9	0.2		N		I		黒燧石 1
10	SF-23-	1	剥片	燧石	9.5×6.4×1.1	0.1		N		I		黒燧石 1
11	SF-24-	1	剥片	頁岩	2.0×2.0×0.6	1.9	4					頁岩 1

ている。4は使用痕を有する剥片である。末端部に微細な使用痕がみられる。5はメノウ製の剥片である。

特徴 11点の石器で構成される小規模なものであり、石器製作の痕跡が認められないブロックである。同一母岩の良質な黒燧石を素材としてナイフ形石器、台形椽石器、ピエス・エスキューユの3器種がそれぞれ製品で組成する点が注目される。

第6ブロック(第83~89図、第26表、図版30・35~37)

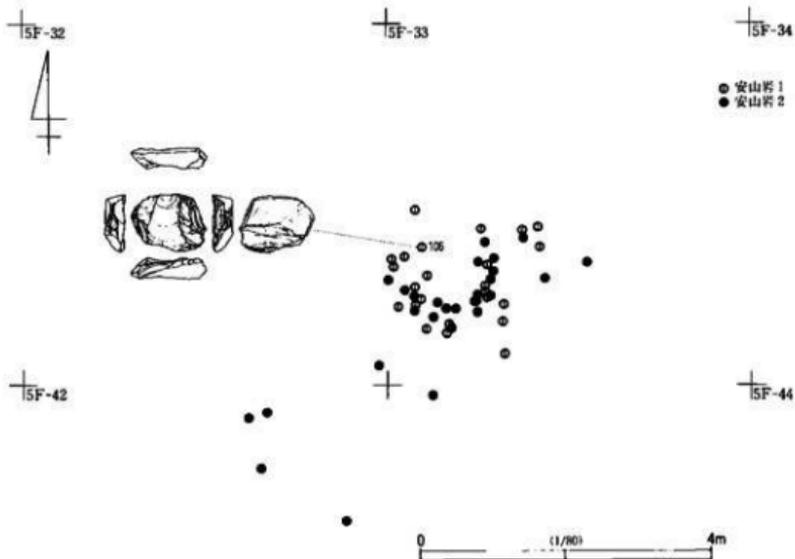
分布 遺跡の中央部東側に位置し、北側で第5ブロックと近接する。台地縁辺に立地し微地形は小支谷に向かって南側に傾斜する。5 F-32・33・42・43区に273点で構成される。南北7.8m、東西6.0mの範囲に分布する。5 F-33区に直径約2m程に遺物の密集部があり、その周囲及び南東側に散漫に分布する状況が窺える。出土層準はⅡ層下部~Ⅵ層に及ぶ。垂直分布の中心はⅣ・Ⅴ層下部~Ⅵ層上部にみられるが、先記したように地形が南側にかなり傾斜し土層投影が本来の出土層を反映していない可能性がある。碎片などの微細遺物がより下層で検出されている点もブロック形成における遺物移動の問題が喚起される。器種構成は尖頭器1点、



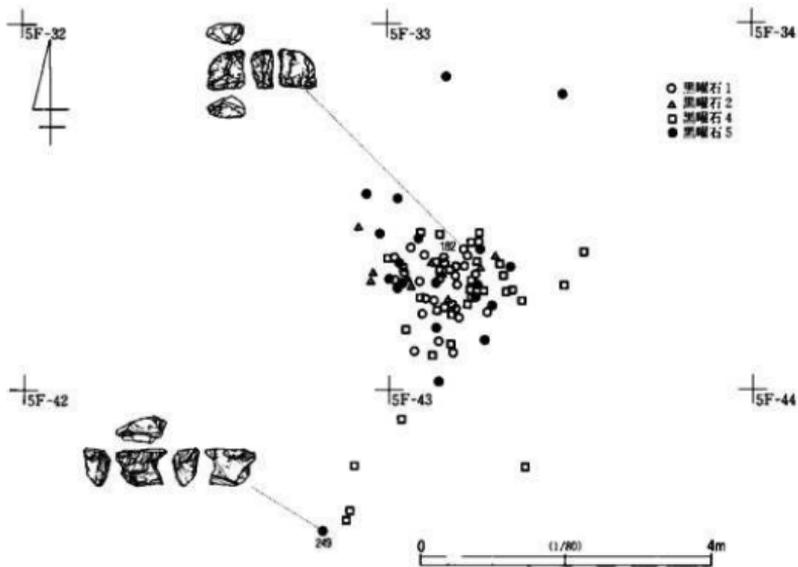
第83図 第6ブロック器種別遺物分布図

掻器 5点、ピエス・エスキュー 6点、彫器 1点、細部加工を有する剥片 3点、使用痕を有する石器 5点、剥片 51点、碎片 191点、石核 3点である。

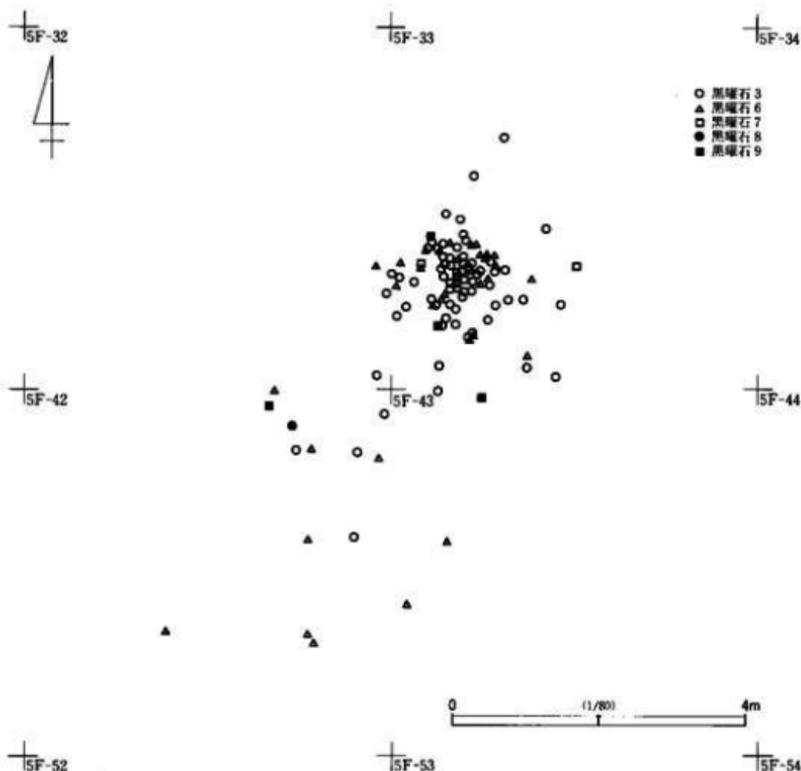
遺物 1は尖頭器とした。横長剥片素材の背面を平坦剝離により調整が施され、下半部に最大幅をもつ形状に仕上げられる。両側縁を対称にし先端部を鋭利にするような調整企画が看取されるため尖頭器とした。本ブロックでの利器の組成が掻器・削器に限定されることを考える



第84図 第6ブロック母岩別遺物分布図(1)

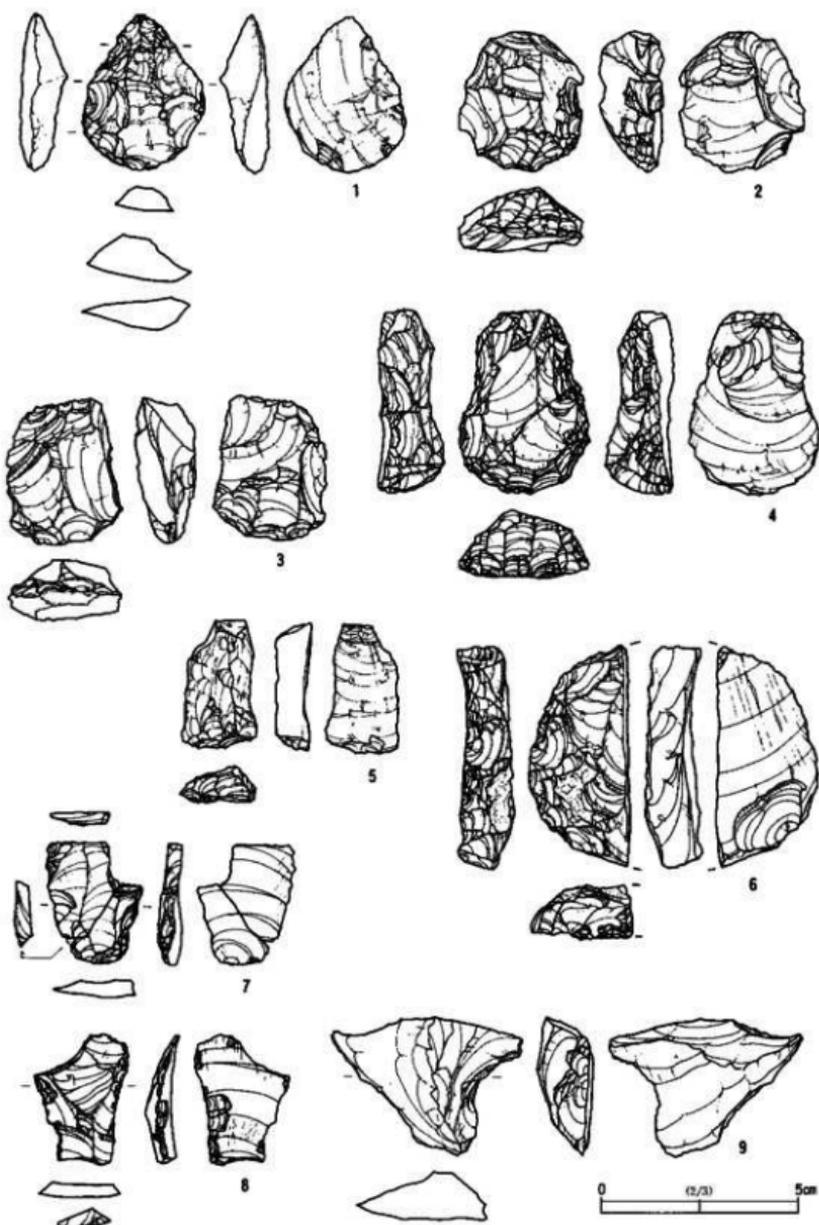


第85図 第6ブロック母岩別遺物分布図(2)

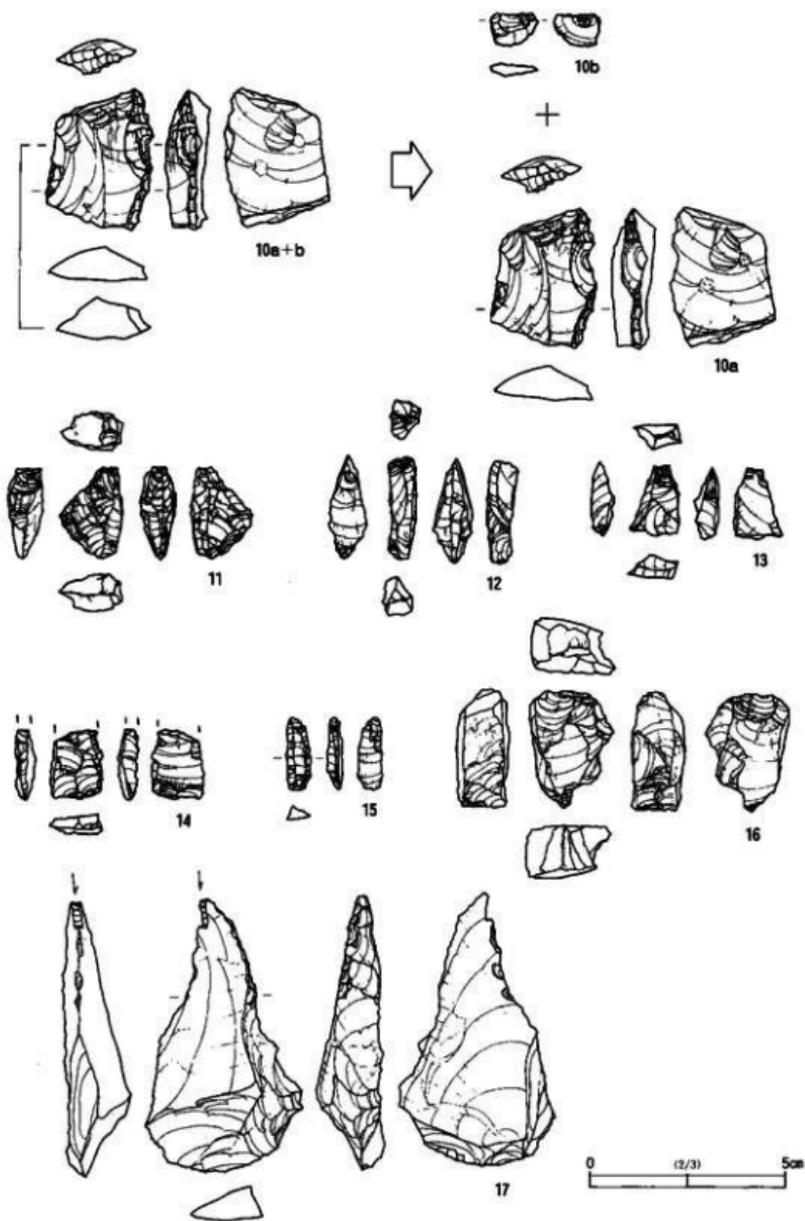


第86図 第6ブロック母岩別遺物分布図(3)

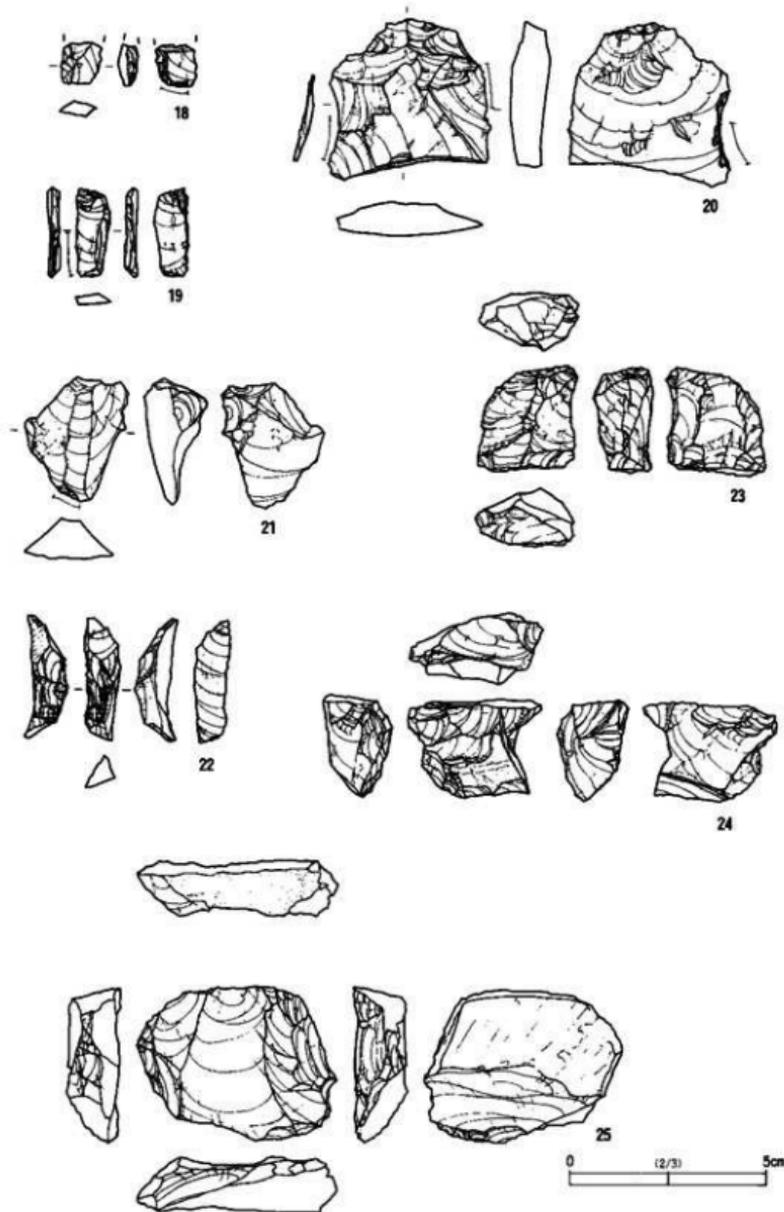
と、槍先に装備されるものというよりは機能的には尖頭状の削器を想定する方が蓋然性が高い。2-6は搔器である。3・5が安山岩製で、他は黒曜石である。2は分厚い縦長剥片の周囲が荒く調整され下端部の急斜角剝離が丁寧である。3は上下端の調整が顕著である。あるいは両極技法によるものかも知れない。4は急斜角調整が下端部から両側縁に巡り、下端部は縞状に調整が施され、下部が円みを帯びるように形状を仕上げた流美なものである。5は縦長剥片の末端部を切断するように加工される。6は右半分を欠損し形態は明確ではないが、全周に精緻な急斜角加工が施されていたと思われ、円盤状搔器が想定される。7a・b-10a・bは削器である。7a・bは茶色がかった良質の黒曜石石材の両側縁に調整が施される。7aは切断後の調整が看取される。8も両側縁に調整加工が認められるが調整は疎らである。9は安山岩製のもので抉入するような加工が1側縁に限定して看取される。10a・bは削器に調整剥片が接合したものであ



第87図 第6ブロック石器実測図(1)



第88図 第6ブロック石器実測図(2)



第89回 第6ブロック石器実測図(3)

第28表 第6号ブロック石器属性表

No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	採掘 番号	打 形 状	打 削 調整	背面構成	折面	参考資料
1	SF-32-	3	砕片	燧石	7.4×8.0×1.5	0.1	L		I		黒曜石 5
2		4	彫形石	燧石	25.9×6.9×7.7	1.5	12	L			黒曜石 2
3		5	砕片	燧石	8.0×12.0×2.2	0.2		N	I	H	黒曜石 5
4		6	彫形石	燧石	12.0×3.7×4.0	0.2		L	I, II	B	黒曜石 2
5		7	砕片	燧石	8.6×7.7×2.2	0.1		L	I		黒曜石 3
6		8	彫形石	燧石	22.4×15.0×7.7	2.4	11				黒曜石 2
7		9	砕片	燧石	× × ×	<0.1					
8		10	砕片	燧石	18.6×9.8×2.1	<0.1					黒曜石 6
9		11	砕片	燧石	8.0×5.2×1.7	0.1		L	I		黒曜石 3
10		12	砕片	安山岩	36.7×25.6×5.1	6.4		L	I		安山岩 2
11	SF-33-	1	砕片	燧石	× × ×	<0.1					黒曜石 5
12		2	砕片	燧石	36.3×28.1×6.7	6.4	H1		I, IV		黒曜石 5
13		3	砕片	燧石	14.2×9.2×2.5	0.2	N		I		黒曜石 3
14		4	砕片	燧石	11.7×10.4×2.1	0.2	H1		I, II		黒曜石 3
15		5	砕片	燧石	14.0×9.0×4.2	0.3	N		I	H-R	黒曜石 5
16		6	砕片	安山岩	15.8×8.1×2.3	0.3	N			H-B	安山岩 1
17		7	砕片	安山岩	19.3×12.7×5.1	1.3	H1				安山岩 2
18		8	砕片	燧石	46.9×31.7×16.2	23.6	4				黒曜石 5
19		9	砕片	燧石	11.1×15.8×2.9	0.5	H1		I, II, IV		黒曜石 9
20		10	砕片	燧石	42.8×37.5×11.0	0.2	H1		I	D	黒曜石 3
21		11	砕片	燧石	× × ×	<0.1					黒曜石 3
22		12	砕片	燧石	18.0×9.6×8.4	2.3	H1		I, II		黒曜石 5
23		13	砕片	燧石	5.9×7.2×1.9	0.1	H1		I		黒曜石 1
24		14	砕片	燧石	13.8×4.9×2.1	0.1	P		I		黒曜石 4
25		15	彫形石	燧石	17.8×15.2×4.3	1.1	14				黒曜石 3
26		16	砕片	燧石	16.5×13.1×4.5	0.6	P		I, II		黒曜石 2
27		17	砕片	安山岩	26.0×16.4×5.9	2.3	N		I	H	安山岩 2
28		18	砕片	燧石	21.5×10.2×7.7	1.3	N		I		黒曜石 5
29		19	砕片	安山岩	11.1×19.2×4.0	0.6	H1				安山岩 2
30		20	砕片	燧石	15.9×11.8×3.1	0.3	N		I, II	H	黒曜石 3
31		21	砕片	燧石	5.3×7.6×1.6	0.1	P				黒曜石 4
32		22	彫形石	安山岩	35.2×27.8×13.9	16.6	3				安山岩 1
33		23	砕片	燧石	15.2×11.2×4.1	0.6	P		I, II		黒曜石 1
34		24	彫形石	安山岩	66.6×36.2×75.0	36.2	17	H1			安山岩 1
35		25	砕片	燧石	× × ×	<0.1					黒曜石 3
36		26	砕片	燧石	19.1×12.2×2.7	0.6	P		I		黒曜石 5
37		27	彫形石	燧石	55.7×25.9×12.3	20.2	6				黒曜石 6
38		28	砕片	燧石	10.0×8.2×3.3	0.3	L		I		黒曜石 5
39		29	砕片	安山岩	6.7×6.0×1.0	0.4	N		I	H	安山岩 1
40		30	砕片	燧石	16.2×11.7×1.8	0.2	N			H	黒曜石 6
41		31	砕片	安山岩	10.0×6.2×1.2	0.1	N		I	H	安山岩 1
42		32	砕片	燧石	9.5×6.7×0.7	0.1	L		I		黒曜石 3
43	33	砕片	燧石	10.7×8.6×1.8	0.1	L		I		黒曜石 3	
44	34	砕片	安山岩	22.1×20.0×4.0	1.3	L		I		安山岩 2	
45	35	砕片	燧石	8.0×11.7×2.2	0.2	10b	H1			黒曜石 4	
46	36	彫形石	燧石	35.3×25.0×9.2	8.9	10a	H3		B	黒曜石 4	
47	37	彫形石	燧石	24.3×17.3×4.0	1.7	7b				黒曜石 7	
48	38	砕片	燧石	9.3×7.4×3.5	0.2	L		I, II		黒曜石 6	
49	39	砕片	燧石	× × ×	<0.1					黒曜石 4	
50	40	彫形石	安山岩	35.4×47.9×12.9	15.1	9				安山岩 1	
51	41	砕片	燧石	11.0×10.0×1.3	0.1	N		I	H	黒曜石 4	
52	42	砕片	燧石	× × ×	<0.1					黒曜石 5	
53	43	彫形石	安山岩	16.6×23.8×5.3	2.1	H1		I, II		安山岩 2	
54	44	砕片	燧石	5.9×8.5×2.0	0.1	P		I	S	黒曜石 3	
55	45	砕片	燧石	9.0×9.1×0.4	<0.1			I		黒曜石 3	
56	46	彫形石	燧石	33.3×22.7×6.8	3.3	8	N		I, II, III	黒曜石 6	
57	47	彫形石	燧石	11.3×4.0×3.0	0.1	P		I		黒曜石 2	
58	48	砕片	燧石	7.8×6.5×2.0	0.1	L		I		黒曜石 5	
59	50	砕片	燧石	7.9×6.7×1.7	0.1	P		I		黒曜石 3	
60	51	砕片	燧石	× × ×	<0.1					黒曜石 3	
61	52	砕片	燧石	20.8×8.5×2.6	0.5	N		I	H-R	黒曜石 6	
62	53	彫形石	燧石	21.0×13.2×4.7	1.4	7a	H		B-R	黒曜石 7	
63	54	彫形石	燧石	31.0×8.0×5.2	1.5			I	S	黒曜石 3	
64	55	砕片	燧石	11.0×11.7×4.2	0.3	22	L		I, II, III, IV	黒曜石 3	
65	56	砕片	安山岩	× × ×	<0.1					安山岩 1	
66	57	砕片	燧石	× × ×	<0.1					黒曜石 3	
67	58	砕片	燧石	× × ×	<0.1					黒曜石 1	
68	59	砕片	燧石	8.6×7.3×2.4	0.1	P		I, II		黒曜石 4	
69	60	砕片	燧石	9.2×4.2×4.9	0.1	P		I, II		黒曜石 5	
70	61	砕片	燧石	14.1×16.2×3.6	0.9	N		I	B	黒曜石 1	

71	5F-32-	62	塊	石	安	山	石	18.1X11.5X 5.5	1.1	13	L	I, II, III	M-B	黑	石	4
72		63	制	形	片	安	山	24.5X23.8X 5.1	2.4		N	I, II, III		山	山	1
73		64	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		黑	石	3
74		65	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		黑	石	4
75		66	種	片	黑	黑	石	5.3X 9.6X 1.3	0.1		N	I	H-M	黑	石	3
76		67	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		黑	石	4
77		68	制	片	黑	山	石	10.1X 9.6X 4.1	0.4	18	L	I, II, III	H-M	黑	山	5
78		69	種	片	黑	山	石	9.9X 9.8X 2.0	0.2		N	I		山	山	2
79		70	種	片	黑	黑	石	X X	0.1		N	I		黑	石	4
80		71	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		黑	石	3
81		72	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		黑	石	4
82		73	種	片	黑	黑	石	8.8X 5.9X 1.6	0.1		P	I		黑	石	3
83		74	制	片	黑	黑	石	11.0X 8.9X 2.0	0.3		K	I	H-M	黑	石	6
84		75	制	片	黑	黑	石	X X	0.1		N	I		黑	石	6
85		76	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		黑	石	6
86		77	制	片	黑	黑	石	19.6X 8.7X 3.4	0.3	15	P	I, II		黑	石	5
87		78	塊	形	片	黑	石	18.4X 6.0X 3.6	0.4		P	I, II		黑	石	5
88		79	種	片	黑	黑	石	8.7X 10.1X 2.6	0.2		L	I, II, III		黑	石	5
89		80	制	片	黑	山	石	15.2X 8.7X 6.2	0.5		N	I	H	黑	山	4
90		81	種	片	黑	山	石	X X	0.1		N	I		山	山	1
91		82	種	片	黑	山	石	12.5X 7.4X 1.3	0.1		P	I		山	山	3
92		83	制	片	黑	山	石	17.7X 11.7X 2.6	0.6		N	I	H	山	山	2
93		84	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	3
94		85	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	3
95		86	制	片	黑	山	石	16.4X 22.2X 4.6	1.2		N	I		山	山	2
96		87	種	片	黑	黑	石	12.1X 10.8X 1.9	0.2		L	I		山	山	3
97		88	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	6
98		89	種	片	黑	黑	石	7.5X 10.7X 1.2	0.1		N	I, II		山	山	3
99		90	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	4
100		91	種	片	黑	黑	石	6.7X 6.9X 3.3	0.1		H I	I		山	山	1
101		92	制	片	黑	山	石	46.6X 37.5X 8.9	14.4		H I	I, II		山	山	1
102		93	種	片	黑	山	石	6.1X 12.1X 1.7	0.1		L	I		山	山	1
103		94	種	片	黑	黑	石	X X	0.1		N	I		山	山	1
104		95	種	片	黑	山	石	X X	<0.1		N	I		山	山	1
105		96	種	片	黑	黑	石	35.2X 30.0X 15.2	16.6	2	N	I	H	山	山	1
106		97	石	塊	黑	山	石	38.5X 49.9X 11.3	31.0	25	P	I		山	山	1
107		98	制	片	黑	山	石	9.3X 17.5X 4.0	0.6		L	I		山	山	1
108		99	制	片	黑	黑	石	18.9X 10.7X 2.2	0.3		L	I		山	山	3
109		100	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	6
110		101	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	6
111		102	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	3
112		103	種	片	黑	山	石	10.1X 4.0X 3.8	0.1		N	I		山	山	1
113		104	種	片	黑	山	石	X X	<0.1		N	I		山	山	1
114		105	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	3
115		106	種	片	黑	黑	石	X X	0.1		N	I		山	山	6
116		107	種	片	黑	黑	石	12.2X 6.6X 1.5	0.1		N	I		山	山	6
117		108	種	片	黑	黑	石	13.8X 7.4X 1.5	0.1		N	I, II	H	山	山	4
118		109	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I	H	山	山	1
119		110	種	片	黑	黑	石	X X	0.1		N	I		山	山	1
120		111	種	片	黑	黑	石	8.3X 6.4X 2.0	0.1		H	I		山	山	3
121		112	制	片	黑	山	石	41.5X 35.1X 9.6	9.8		H	I, II	H-B	山	山	1
122		113	制	片	黑	山	石	28.7X 52.7X 6.6	10.8		P	I, III		山	山	1
123		114	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	1
124		115	種	片	黑	黑	石	8.3X 6.6X 1.1	<0.1		N	I	H	山	山	3
125		116	種	片	黑	黑	石	9.4X 4.5X 1.0	<0.1		P	I		山	山	3
126		117	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	2
127		118	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	3
128		119	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	3
129		120	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	3
130		121	種	片	黑	黑	石	X X	0.1		N	I		山	山	3
131		122	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	3
132		123	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	1
133		124	制	片	黑	山	石	13.2X 9.8X 2.4	0.2		P	I	H-R	山	山	2
134		125	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	2
135		127	種	片	黑	黑	石	X X	0.1		N	I		山	山	3
136		128	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	1
137		129	種	片	黑	黑	石	10.2X 13.2X 4.8	0.4		N	I, II, III	H-M	山	山	6
138		130	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	5
139		131	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	1
140		132	種	片	黑	黑	石	13.2X 5.0X 2.4	0.1		P	I	M-B	山	山	4
141		133	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	5
142		134	種	片	黑	黑	石	X X	0.1		N	I		山	山	6
143		135	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	6
144		136	種	片	黑	黑	石	X X	0.1		N	I		山	山	4
145		137	種	片	黑	黑	石	X X	<0.1		N	I		山	山	3

剥離が施される。18は細部加工を有する剥片である。左腹面に小剥離が認められる。19-21は使用痕を有する剥片である。22は稜上調整の顕著な剥片である。23-25は石核である。石材は23・24が黒曜石で25が安山岩である。23は両設打面から縦長剥片を剥離している。24は上面・左側面から剥片剥離が進行する。25は盤状素材石核の周囲から剥離されるものである。

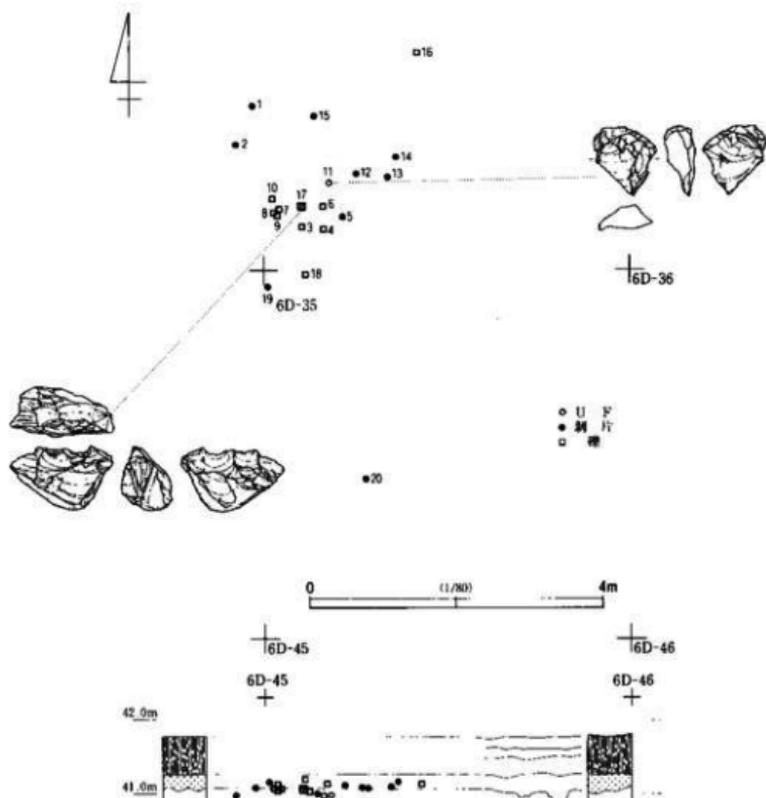
特徴 多量の遺物が検出されたブロックである。石材は黒曜石を主体として安山岩が加わる。黒曜石の母岩は10母岩、安山岩の母岩は2母岩に還元された。1母岩が10点以上のは碎片が多数を占め、安山岩2の母岩以外はそれぞれに搔器、削器、ピエス・エスキューユの製品を含んでいる。こうしたあり方から個々の母岩消費は搔器、削器、ピエス・エスキューユという特定器種を集中的に製作していたものと推定される。剥片剥離技術は母岩状況から素材から製品の過程にいたる2次加工段階に遍在し、しかも碎片が殆どを占めることを考えると、搔器、削器の刃部調整の仕上げ段階を示すものと評価できる。搔器、削器と同一母岩の石核も存在するが、その石核から看取される剥片剥離の技術相は搔器の素材作出のそれと隔絶している。このことは搔器、削器が素材段階で搬入されたことを示唆している。器種組成は既に述べてきたように搔器、削器、ピエス・エスキューユが安定して存在している。また第4ブロックと同様に彫器がこれらの器種に組成することも注目される。このように本ブロックは搔器、削器等のいわゆる2次生産用具を集中的に生産していた場として評価される。

第7ブロック(第90・91図、第27表、図版31・37)

状況 遺跡の南西部に位置する。6D-24・25・35区を中心に20点で構成される。南方向から切れ込む支谷と西側で面する。第8・9ブロックが南東側に近接し、3ブロックが同一拡張区で展開する。南北6.0m、東西2.6mの広い範囲に分布するが、1点剥片が南側に離れて検出されているため、遺物の集中する部分は直径3.0mの範囲にまとまる。出土層準はⅢ層～Ⅵ・

第29表 第7号ブロック石器属性表

No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	押切 番号	打削 形状	打削 調整	背面構成	所産	母岩別資料
1	6D-24-1	剥片	瑠璃岩灰岩	37.9×29.8×13.0	16.3				N I	N	瑠璃岩灰岩1
2	6D-24-2	剥片	安山岩	39.0×37.5×21.3	34.2		N		N Ⅱ	N-M	安山岩1
3	6D-25-1	磨片	安山岩	35.1×30.8×34.3	37.2						
4	6D-25-2	磨片	安山岩	43.0×31.8×25.3	27.1						
5	6D-25-3	剥片	瑠璃岩	32.6×33.6×4.6	4.5		N 1		I, IV		瑠璃岩1
6	6D-25-4	磨片	安山岩	44.5×15.0×27.8	18.2						
7	6D-25-5	磨片	安山岩	26.1×14.1×21.9	7.3						
8	6D-25-6a	磨片	安山岩	70.5×36.5×50.2	125.6						
9	6D-25-6b	磨片	安山岩	82.7×55.8×33.7	167.3						
10	6D-25-7	磨片	安山岩	50.9×32.5×25.5	22.2						
11	6D-25-8	剥片	瑠璃岩灰岩	26.6×32.9×13.9	11.2	1	N 1		I, Ⅱ, Ⅲ		瑠璃岩灰岩1 安山岩1
12	6D-25-9	剥片	安山岩	31.1×26.0×6.6	5.1						
13	6D-25-10	剥片	瑠璃岩	28.1×23.8×4.0	2.6				I		瑠璃岩2
14	6D-25-11	剥片	瑠璃岩	16.6×14.6×8.3	2.0		N 2		I, IV		瑠璃岩1
15	6D-25-12	剥片	瑠璃岩	22.8×20.8×4.5	1.4		N 1		I		瑠璃岩1
16	6D-25-13	磨片	安山岩	49.5×17.3×47.7	39.5						
17	6D-25-14	石核	瑠璃岩	32.4×52.1×25.2	32.8	2					瑠璃岩1
18	6D-35-3	磨片	花崗岩	22.0×16.9×24.9	8.2						
19	6D-35-4	剥片	安山岩	25.0×32.2×14.0	4.2		N		I	N	安山岩2
20	6D-35-5	剥片	安山岩	48.5×28.3×17.4	18.1		N		N I, Ⅱ		安山岩1

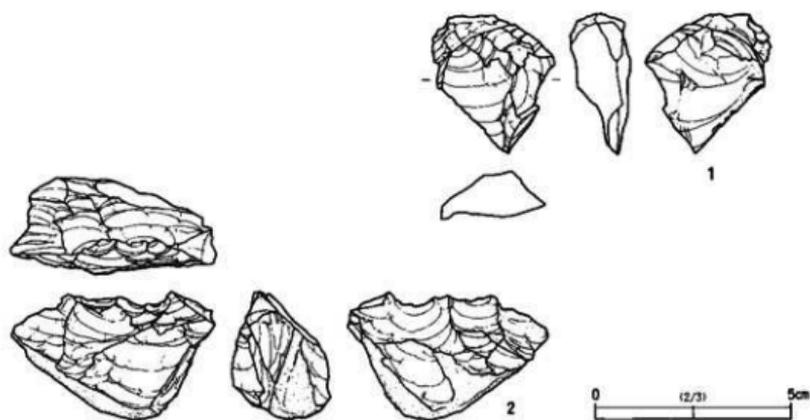


第90図 第7ブロック器種別遺物分布図

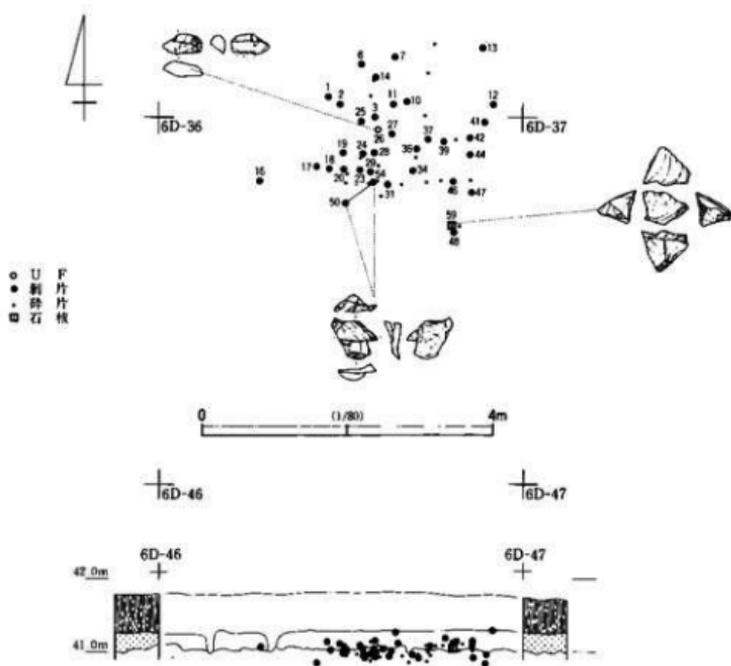
V層に及びⅢ層下部に集中が見られる。器種構成は使用痕を有する刮片1点、刮片9点、石核1点、碟9点である。碟はすべて焼成破損碟で3個体に還元された。碟群として評価されるが小規模なため1項目は設けずここでの説明に止める。

遺物 1は使用痕を有する刮片である。先端左側縁に刃こぼれが認められる。2は石核である。楕円碟素材の石核で打面と作業面を入れ換えながら刮片剥離が進行し、残核は両刃碟器状になる。やや縦長の刮片を剥離している。

特徴 碟を除くと11点と小数で構成されるブロックである。石材も同一母岩の珪質頁岩、安山岩、珪質凝灰岩が数点ずつある状況である。刮片剥離技術は打面と作業面を交互に転移する刮片剥離技術により縦長刮片を生産しているが、製品との関係は不明である。器種組成も使用痕を有する刮片があるのみで、刮片が主体であり特徴的な様相は看取されなかった。



第91図 第7ブロック石器実測図

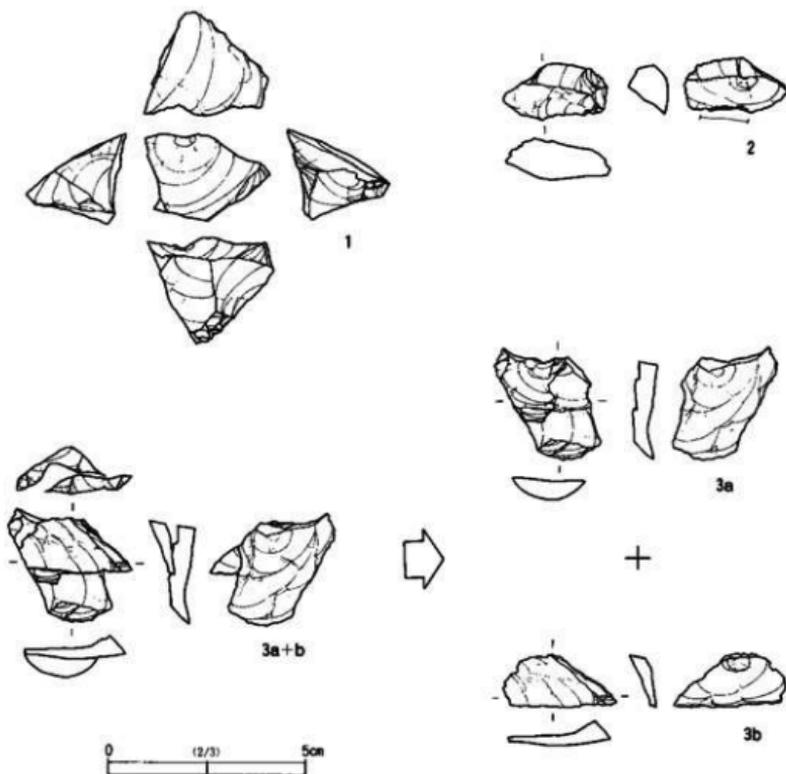


第92図 第8ブロック器種別遺物分布図

第8ブロック(第92・93・95図、第28表、図版31・38)

状況 遺跡南西部に位置する。6 D-26・36区を中心に55点で構成される。南北2.6m、東西3.3mの円形状に密集して分布する。出土層準はⅢ層～Ⅳ・Ⅴ層に及びⅣ層上部に集中が見られる。第7ブロックと北西側、第9ブロックと南側で近接する位置関係にある。器種構成は使用痕を有する剥片1点、剥片34点、碎片19点、石核1点である。

遺物 1は石核で石材は凝灰岩である。正面に作業面が大きく残りこの面が最終作業面となる。剥片剥離作業の進行は剥離面を作業面としてランダムに打面を転移するもので、残核は多面体を呈している。2は使用痕を有する剥片である。横長剥片の端部に微細な剥離痕が認められる。背面構成を見ると右方向からの剥離面が2面あり、90度の打面転移が看取される。3 a・bは剥片と剥片の接合資料である。剥片剥離に着目すると、剥離面打面からまず3bの横長



第93図 第8ブロック石器実測図

第30表 第8号ブロック石器属性表

No	遺物番号	部	種	石	材	長×幅×厚 mm	重量 g	押切 番号	打製 状況	打削 調整	背面構成	折面	母岩別対称	
1	6D-26-	1	削	片	珧質頁岩	20.6×30.9×5.8	2.9		H1		I		珧質頁岩 1	
2		2	削	片	凝灰岩	23.7×27.8×4.9	3.2		H1		I, II		凝灰岩 1	
3		3	削	片	凝灰岩	26.2×31.2×10.2	10.5		N		I, IV		凝灰岩 1	
4		4	削	片	凝灰岩	11.1×14.1×2.7	0.4		P		I		凝灰岩 2	
5		5	削	片	珧質頁岩	× ×	<0.1							珧質頁岩 1
6		6	削	片	凝灰岩	18.7×11.1×4.0	0.8		P		I, II		凝灰岩 1	
7		7	削	片	凝灰岩	20.0×20.3×6.0	1.3		P		I, II		凝灰岩 1	
8		8	削	片	凝灰岩	10.6×15.3×2.1	0.4		L		I		凝灰岩 2	
9		9	削	片	凝灰岩	11.4×10.7×4.0	0.3		H1		I		凝灰岩 1	
10		10	削	片	凝灰岩	22.0×25.6×8.6	4.7		H1		I, IV		凝灰岩 1	
11		11	削	片	凝灰岩	13.4×23.5×8.7	2.1		N		I, II, III		凝灰岩 1	
12		12	削	片	凝灰岩	19.7×12.1×5.0	1.2		H1		I, IV		凝灰岩 1	
13		13	削	片	凝灰岩	14.7×18.8×3.4	0.8		H1		I		凝灰岩 1	
14		14	削	片	凝灰岩	18.5×25.2×6.0	2.5		P		I, II		凝灰岩 1	
15		15	削	片	凝灰岩	5.0×11.6×3.8	0.1		N		I, II		凝灰岩 1	
16	6D-36-	16	削	片	凝灰岩	10.3×19.8×2.8	0.6		N		I		凝灰岩 1	
17		11	削	片	珧質頁岩	14.1×7.8×3.5	0.3		N		II, III, IV		珧質頁岩 1	
18		12	削	片	珧質頁岩	14.5×8.8×2.0	0.3		P		I		珧質頁岩 1	
19		13	削	片	珧質頁岩	24.9×13.4×5.6	1.1		N		I, II		珧質頁岩 1	
20		14	削	片	珧質頁岩	33.4×13.8×10.2	4.1		H1		I		珧質頁岩 1	
21		15	削	片	珧質頁岩	× ×	<0.1		H1					珧質頁岩 1
22		16	削	片	珧質頁岩	15.3×10.2×3.8	0.5		N		I, II		珧質頁岩 1	
23		17	削	片	凝灰岩	19.0×28.5×6.0	2.8		N		I, II		凝灰岩 1	
24		18	削	片	珧質頁岩	12.3×10.0×2.5	0.4		N		I		珧質頁岩 2	
25		19	削	片	珧質頁岩	23.4×11.8×4.3	1.0		P		I		珧質頁岩 2	
26		20	削	片	凝灰岩	26.0×15.2×7.1	2.6	2	H1		I		珧質頁岩 1	
27		21	削	片	凝灰岩	11.5×29.4×7.6	2.6		H1		III		凝灰岩 2	
28		22	削	片	珧質頁岩	15.7×15.3×14.9	0.4		H1		I, II, III		珧質頁岩 1	
29		23	削	片	珧質頁岩	15.7×11.7×7.8	0.9		P		I		珧質頁岩 2	
30		24	削	片	珧質頁岩	× ×	<0.1							珧質頁岩 1
31		25	削	片	珧質頁岩	19.8×19.1×6.0	1.9		H1		I, IV		珧質頁岩 2	
32		26	削	片	凝灰岩	7.7×17.2×2.7	0.3		N					凝灰岩 1
33		28	削	片	凝灰岩	× ×	0.1		H1		I			凝灰岩 1
34		29	削	片	凝灰岩	18.1×12.5×4.0	1.0		H1		I			凝灰岩 1
35		30	削	片	凝灰岩	× ×	0.1		H1		I			凝灰岩 1
36	31	削	片	凝灰岩	13.3×13.1×2.5	0.3		H1		I			凝灰岩 1	
37	32	削	片	珧質頁岩	10.4×18.4×4.6	0.7		H1		I			珧質頁岩 1	
38	34	削	片	凝灰岩	18.2×24.7×9.4	3.3		H1		III			凝灰岩 1	
39	35	削	片	凝灰岩	8.8×8.5×1.7	0.1		L		I, II			凝灰岩 1	
40	36	削	片	凝灰岩	17.4×15.3×11.8	1.1		N		I, II			凝灰岩 1	
41	37	削	片	凝灰岩	20.4×9.8×10.8	2.1		H1		I, II			凝灰岩 1	
42	39	削	片	凝灰岩	19.7×24.2×12.6	5.4		H1		I, IV			凝灰岩 1	
43	40	削	片	凝灰岩	× ×	0.1		P		I			凝灰岩 1	
44	41	削	片	珧質頁岩	17.2×13.0×5.3	1.5		H1		I, IV			珧質頁岩 1	
45	42	削	片	凝灰岩	19.2×12.8×10.4	1.5		H1		I, IV			凝灰岩 2	
46	43	削	片	チャート	19.4×20.2×9.0	3.8		N		I			チャート 2	
47	44	削	片	珧質頁岩	7.6×11.3×4.9	0.2							珧質頁岩 1	
48	45	削	片	珧質頁岩	33.4×20.0×5.4	3.6	3a	H1		I, II, III			珧質頁岩 1	
49	67	削	片	珧質頁岩	12.8×14.5×4.6	0.7		H1		III, IV			珧質頁岩 1	
50	68	削	片	珧質頁岩	12.2×9.4×9.9	0.1		P		I			珧質頁岩 1	
51	69	削	片	珧質頁岩	11.6×8.4×5.7	0.4		H1		I			珧質頁岩 1	
52	70	削	片	珧質頁岩	17.3×25.7×4.3	1.3	3b	H2		I			珧質頁岩 1	
53	71	削	片	珧質頁岩	× ×	<0.1							珧質頁岩 1	
54	73	削	片	珧質頁岩	11.5×9.6×0.7	0.2							珧質頁岩 2	
55	75	石	核	凝灰岩	23.1×31.9×26.0	10.3	1						凝灰岩 1	

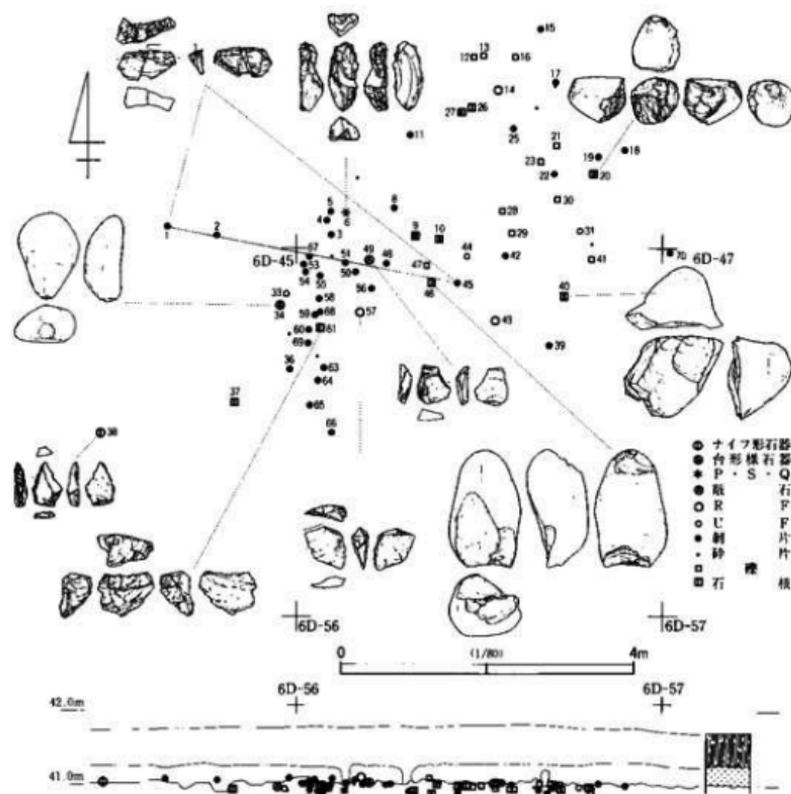
剥片が剥取され、その後小剥離を介在させて同一打面より3aの縦長剥片を剥離している。3 a・bの背面構成を観察すると左方向から広い剥離痕が看取され、3a・bの剥離作業に先行して剥離がなされており90度の打面転移が推定される。

特徴 石材は凝灰岩、珧質頁岩が主体を占める。これは珧質頁岩1、凝灰岩1の母岩により集中的な剥片剥離作業が行われているためである。この剥片剥離作業は素材作出作業に偏重しており、素材の調整加工は看取されない。剥片剥離技術は、母岩の珧質頁岩1では打面を90度

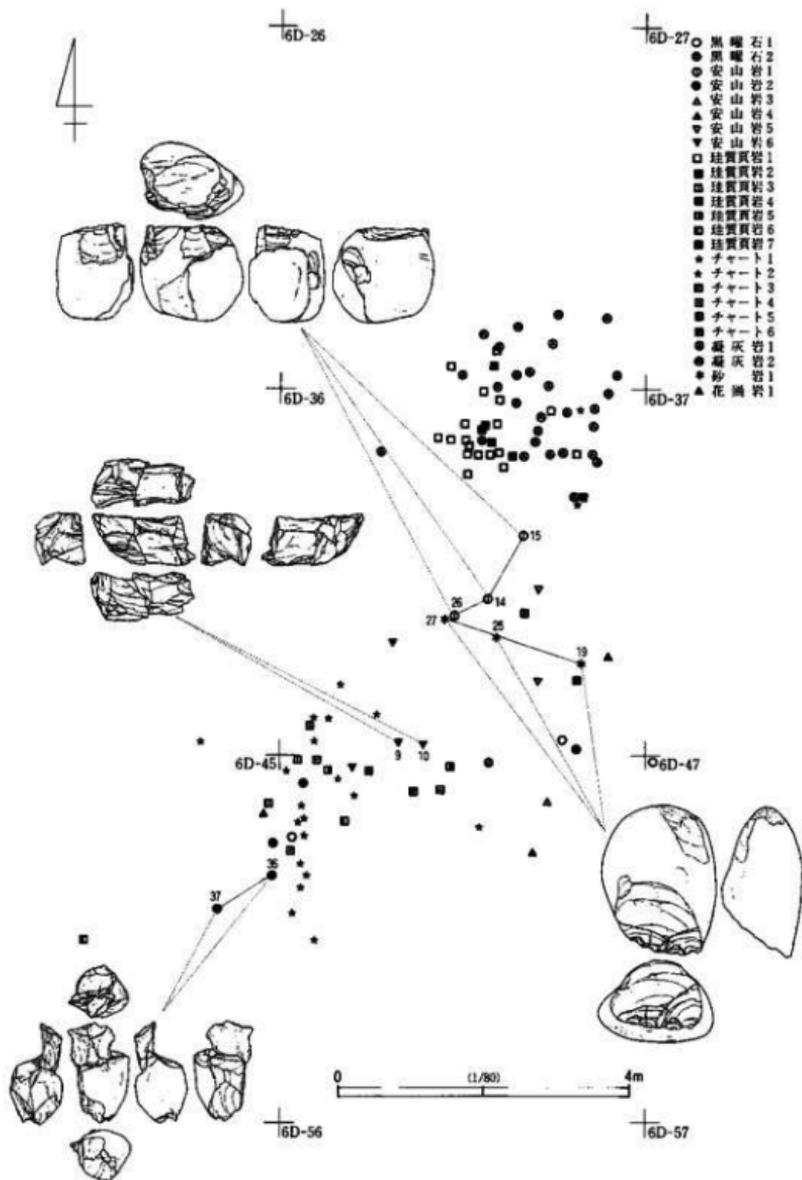
を基調として転移して剥片剥離するものが、凝灰岩1では剥離面を打面としてランダムに転移する剥片剥離が推定された。それぞれの剥片剥離技術で生産された剥片は縦長・横長剥片の企画性に薄く多様な形状をしている。これらの素材剥片からどのような器種を製作したかは調整加工段階の資料が欠落して不明である。器種構成は素材剥片作出の痕跡を示すことを反映して剥片が主体となっている。

第9ブロック(第94~102図、第29表、図版31・38~43)

状況 遺跡の南西部に位置する。6D-35・36・45・46区を中心に74点で構成される。南北5.5m、東西7.8mの不整形形状の範囲に散在している。第7・8ブロックと北側で近接しており、ブロック群を形成している。出土層位はⅢ層下部~Ⅳ・Ⅴ層で比較的遺物の垂直移動は少なくⅣ・Ⅴ層上部に集中する。器種組成はナイフ形石器1点、台形様石器1点、敲石1点、ピエス・



第94図 第9ブロック器種別遺物分布図

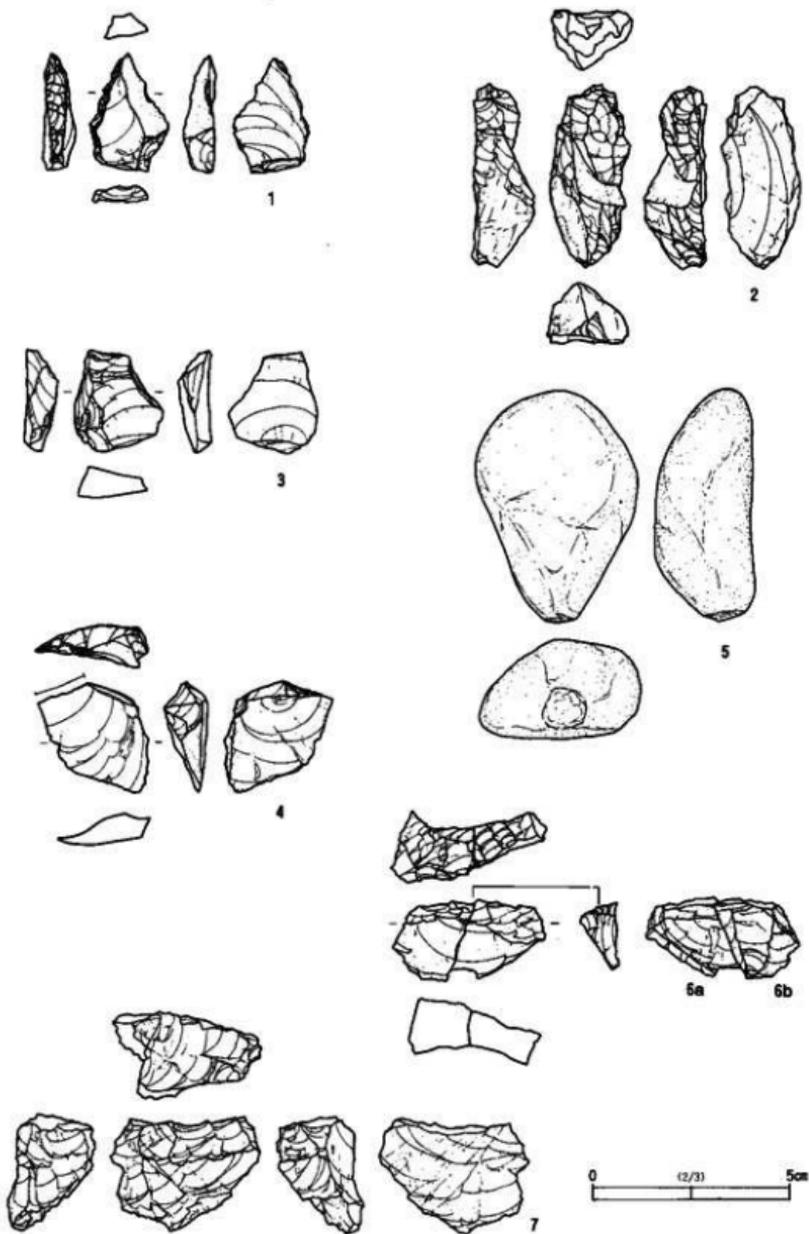


第95図 第8・9ブロック母岩別遺物分布図

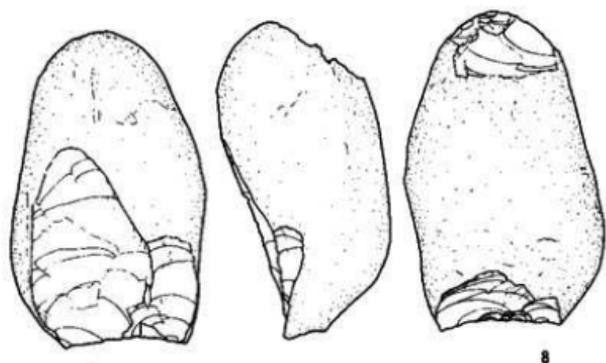
エスキュー1点、細部加工を有する剥片3点、使用痕を有する剥片3点、剥片35点、碎片10点、石核9点、礫10点である。

遺物 1はナイフ形石器である。左側縁と右側縁基部にブランディングを施し、自然面を刃部としている。2はピエス・エスキューで階段状剥離が顕著で、上下両端は点状に近くなる。3は台形礫石器とした。素材の打面を基部側に設定して左側面に細部調整が認められる。4は二次加工を有する剥片。5は敲石である。先細りした器体端部に敲打痕が顕著である。6a・bは剥片の接合資料である。剥離の衝撃で分割したものであろう。打面更新の剥片と思われる。7～10は石核である。7は厚い剥片を石核素材として、分割面から正面・側面に剥離が行われる。8は楕円礫の一端に打面を設定して縦長剥片を剥離している。9は角礫素材のもので自然面打面から打点を横に移動させて剥片剥離が進行している。10も同様に自然面に打点を設定するが作業面を回転するように剥離が進行する。また表面には敲打痕が看取され敲石の機能も兼ね備えるものである。11～14は接合資料を示した。11a・bは石核と石核とが接合している例である。石材は安山岩である。打面転移が頻繁に行われており転移は90度を基調としている。剥片剥離作業の初期段階では、2つの石核は共通する剥離面が存在するので1つの石核として機能していたが、途中で中絶するように分割されたものであろう。その工程は煩雑な打面転移のため判然としないが、11aは分割後も剥片剥離作業が進行する。3の台形礫石器と同一母岩である。12a・bは石核と剥片の接合である。製作工程的に観察すると、12bの剥離以前に12bの上面・左右側面方向からの剥離が行われ、その後12bが剥離される。さらに12aの上面の剥離が進行している。12a裏面、下面の剥離と上面の剥離の前後関係は判然としないが、上面の剥離の進行の過程に裏面下面に打面を転移させていると考えられる。剥片剥離工程の連続性の保証が得られないので明確ではないが、この資料も90度の打面転移を基調にして剥片剥離が進行するものと把握される。13a・b・cの接合例も同様に剥片剥離工程的に観察すると角のある楕円礫素材の一端を平坦剥離する。この面を打面としておそらく13bの背面に見られる剥離から剥離が進行し、続いて13bが剥離される。一連の同一打面を半周ほど巡るように剥離作業が行われる。その後右側面からの大きな剥離により13cが剥離されている。これは単一打面から打面を巡るように打点を移動させて剥片剥離が進行するものと把握される。14a・b・cの接合資料は大形の楕円礫を石核素材として長軸方向に広い平坦剥離が施され、その面を作業面とするように自然面を打面として剥片剥離が行われる。まず14b・cの背面の小剥離が行われ、そして正面右側の剥片が剥取され続いて14b・cが剥離されている。いわゆるチョッパー状に残核形状になるものである。10と同様に作業面と対向する端部に敲打痕が認められる。

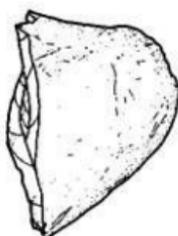
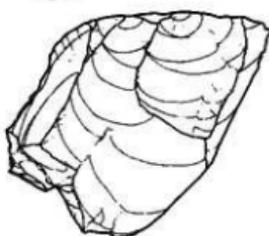
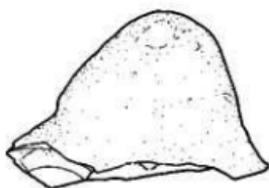
特徴 石材は安山岩が主体を占め、それにチャート、珪質頁岩が小数加わる。これは多数の安山岩母岩を中心に剥片剥離作業が行われているためである。石器製作工程は素材作出段階に比重が置かれている。安山岩6によって台形礫石器が製作されている以外は、製品まで連続し



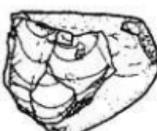
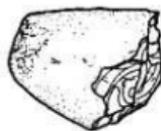
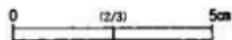
第96図 第9ブロック石器実測図(1)



8

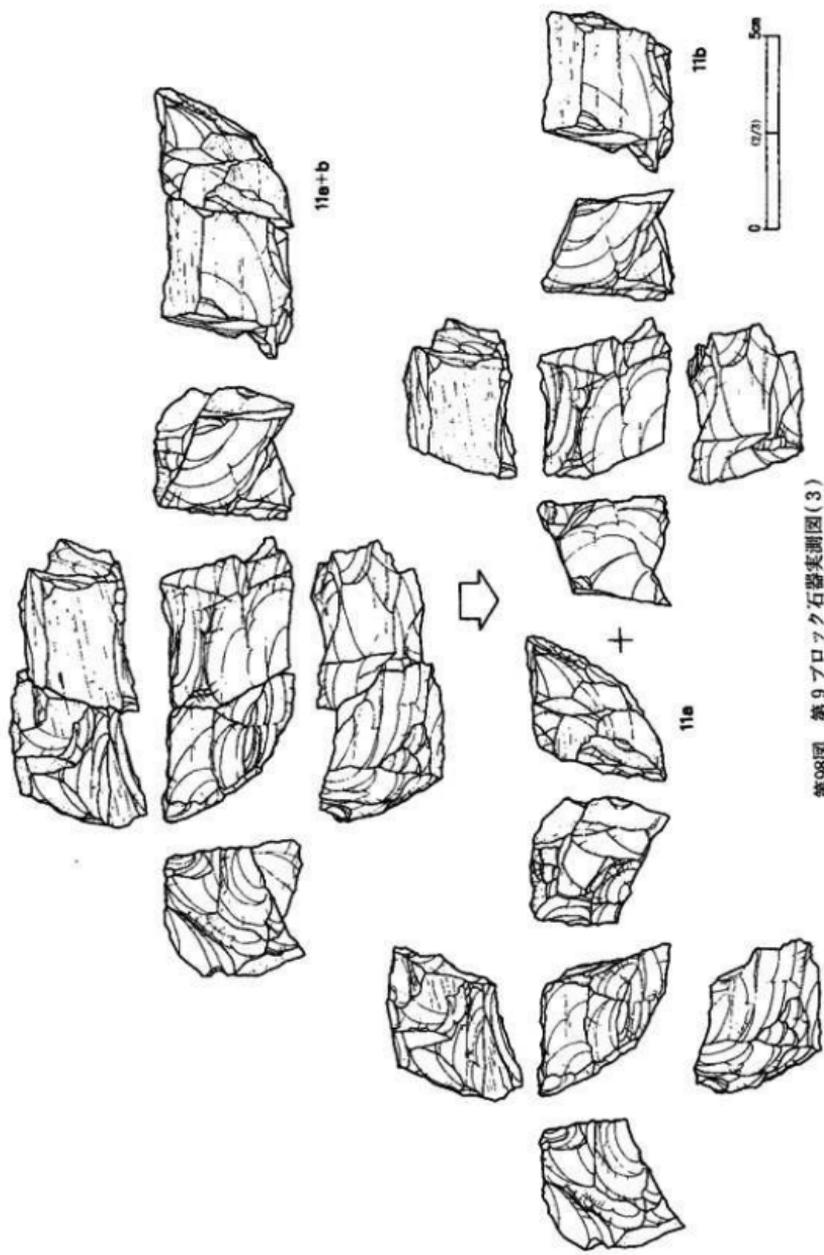


9

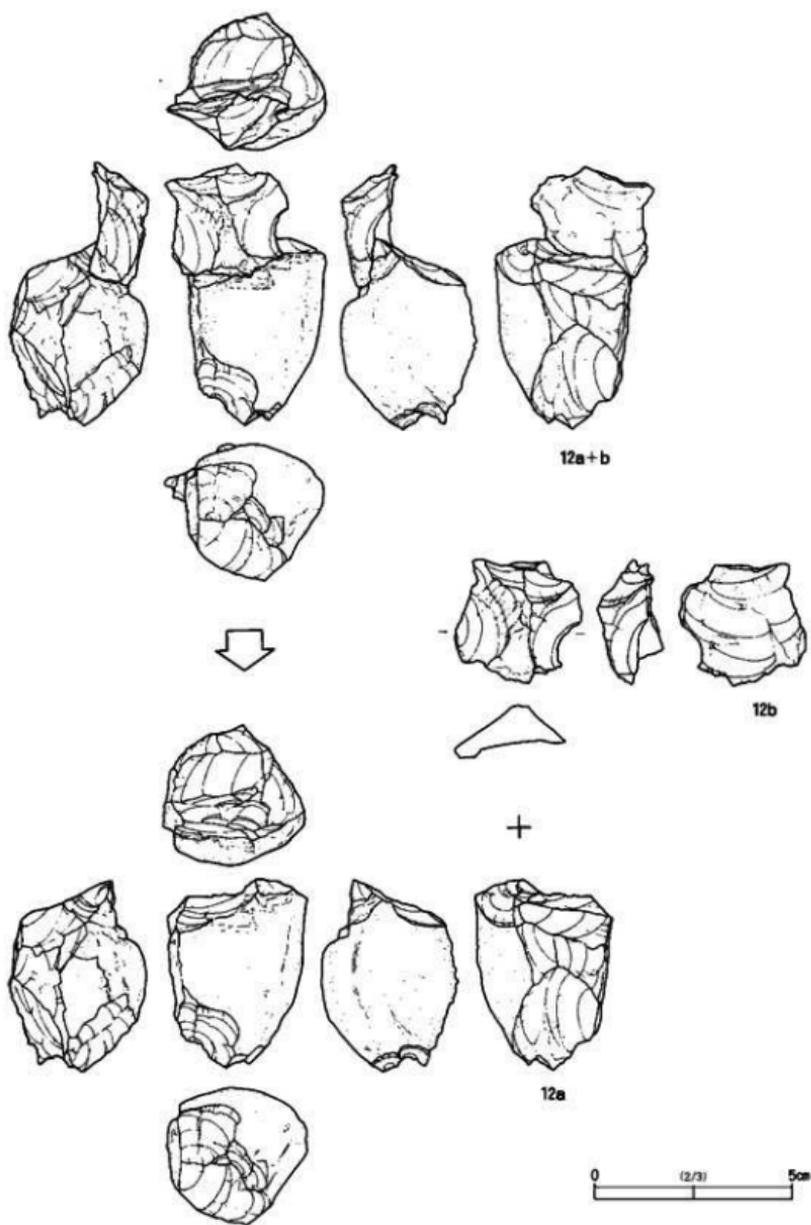


10

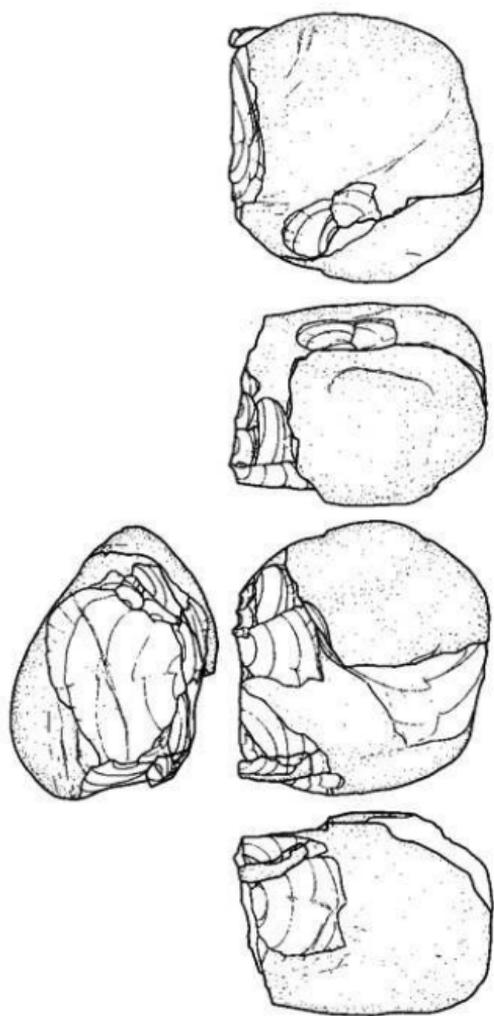
第97図 第9ブロック石器実測図(2)



第98図 第9ブロック石器実測図(3)



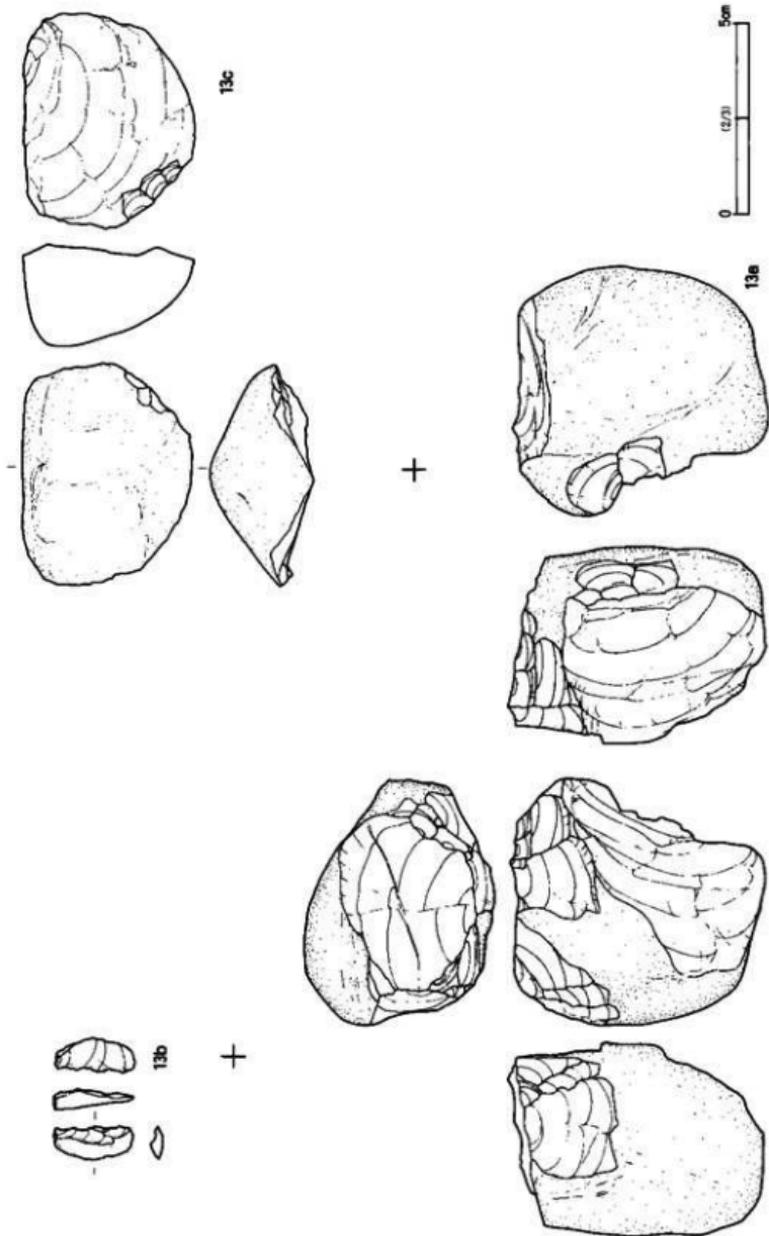
第99図 第9ブロック石器実測図(4)



13a+b+c



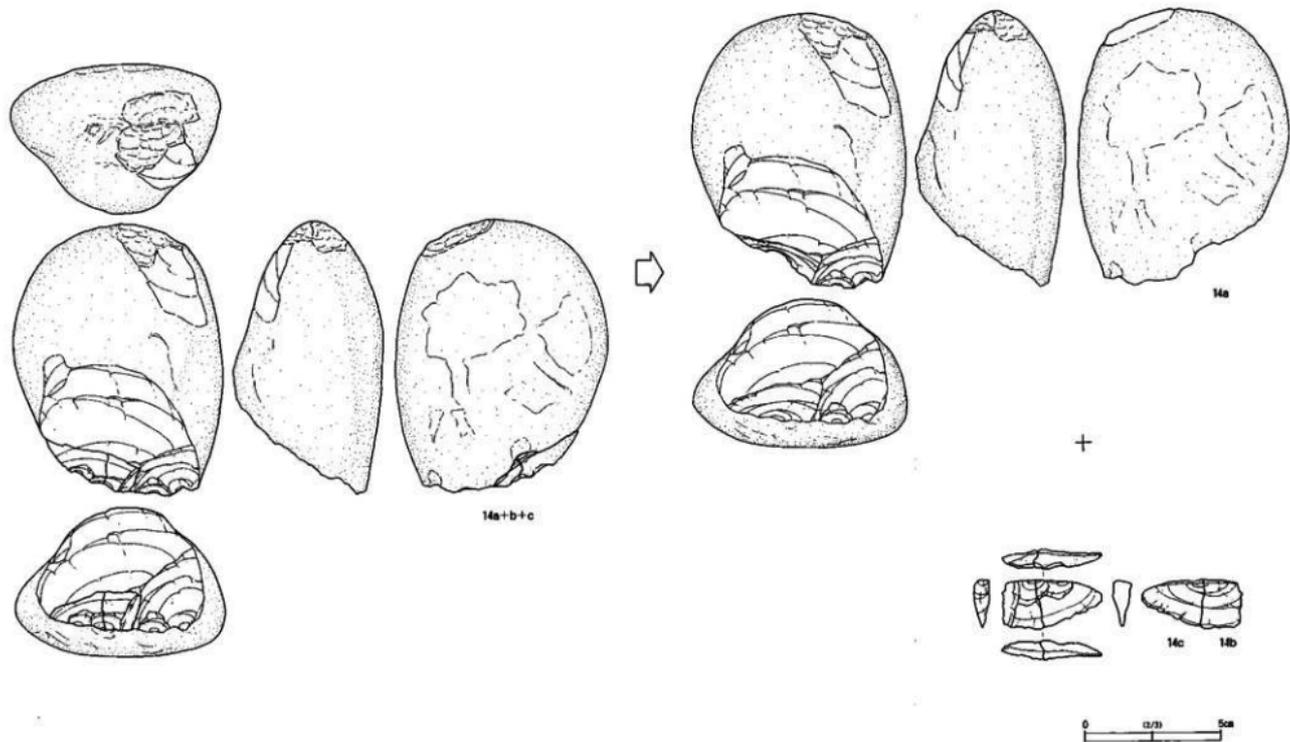
第100図 第9ブロック石器実測図(5)



第101図 第9プロック石器実測図(6)

第31表 第9号ブロック石器属性表

No	産物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	検出 番号	打製 状況	打製 調整	背面構成	折痕	母岩別資料
1	6D-35-	1	銅片	チャート	25.8×17.5× 7.7	3.3	6a	N	I		チャート4
2		2	銅片	チャート	25.0×20.2×13.8	6.9		N	I		チャート1
3	6D-36-	1	銅片	チャート	21.1×19.2× 5.5	1.0	H1		S		チャート1
4		2	銅片	チャート	29.4×21.0×12.8	7.0		N	S	I, II	チャート3
5		3	銅片	チャート	27.8×20.0×10.8	4.2		N	I, II		チャート1
6		4	銅片	チャート	47.2×18.8×14.8	12.1	2				チャート1
7		5	銅片	チャート	4.8×16.2× 2.4	0.1		H1	I		チャート1
8		6	銅片	チャート	30.4×10.7× 4.5	1.2		N	I		チャート1
9		7	銅片	安山岩	33.7×40.5×27.5	35.4	11b				安山岩6
10		8	銅片	安山岩	35.1×37.8×31.4	32.7	11a				安山岩6
11		9	銅片	安山岩	17.2×12.7× 6.8	1.1			I, II		安山岩6
12		33	銅片	凝灰岩	8.6×18.7× 4.8	0.5		H1	I		凝灰岩2
13		38	銅片	チャート	6.2×13.0× 1.6	0.1		H1	I		チャート1
14		46	銅片	安山岩	64.3×56.8×32.4	162.3					
15		47	銅片	安山岩	52.4×36.4×36.9	63.9					
16		48	銅片	安山岩	42.8×55.8×24.8	62.3	13c	C	N		安山岩1
17		49	銅片	安山岩	19.7× 8.3× 3.8	0.6	13b	H1	N	I	安山岩1
18		50	銅片	砂岩	43.7×40.4×28.2	35.7					
19		51	銅片	安山岩	38.0×21.7× 9.3	6.1		H1	N	II, IV	安山岩5
20		52	銅片	安山岩	24.0×43.3× 6.2	6.3		H	N	I	安山岩4
21		53	銅片	砂岩	17.8×14.5× 5.4	1.7	14b	L			砂岩1
22		54	銅片	凝灰岩	38.7×31.2×28.9	43.0	10		I		凝灰岩7
23		55	銅片	安山岩	39.6×38.6×22.7	41.0					
24		56	銅片	安山岩	34.2×28.7× 8.6	9.0		H1	N	II, IV	安山岩5
25		57	銅片	安山岩	41.2×32.9×22.2	27.2					
26		58	銅片	チャート	7.7×10.2× 2.0	0.2		H1	I		チャート5
27		59	銅片	砂岩	24.3×17.0×16.7	2.1	14c	L			砂岩1
28		60	銅片	安山岩	65.0×63.1×50.0	230.7	13a				安山岩1
29		61	銅片	砂岩	100.8×77.9×34.9	490.9	14a				砂岩1
30		62	銅片	砂岩	15.8×14.1×26.0	7.4					
31		63	銅片	砂岩	27.8×14.8×18.0	6.9					
32		64	銅片	砂岩	23.4×21.0×14.9	6.2					
33		65	銅片	黒曜石	13.0×19.8× 3.5	0.8		L	I		黒曜石1
34		66	銅片	安山岩	4.3× 8.4× 1.3	0.1			I		安山岩2
35		72	銅片	凝灰岩	× ×	0.1					凝灰岩1
36		74	銅片	安山岩	× ×	0.1					安山岩1
37	6D-45-	1	銅片	地質頁岩	25.3×18.0× 7.6	2.3		H1	S	I	地質頁岩3
38		2	銅片	花崗岩	58.7×40.5×23.6	69.1	5				花崗岩1
39		3	銅片	安山岩	9.8×12.2× 3.4	0.3		H2			安山岩2
40		4	銅片	安山岩	33.7×33.3×13.3	8.4	12b		N	I, II, III	安山岩2
41		5	石	安山岩	48.9×36.8×34.9	63.4	12a				安山岩2
42		6	ナイフ形石器	地質頁岩	29.4×19.3× 6.2	3.5	1				地質頁岩6
43	6D-46-	1	銅片	安山岩	16.8×39.1× 6.6	4.2		N	N		安山岩4
44		2	石	凝灰岩	55.0×65.1×63.0	122.1	9				安山岩3
45		3	銅片	砂岩	17.0×13.9×11.0	2.7					
46		4	銅片	黒曜石	28.2×19.2× 7.4	4.9		C	I, IV		黒曜石2
47		5	銅片	チャート	9.2× 9.5× 5.0	0.3		P	I, IV		チャート1
48		6	銅片	地質頁岩	21.8× 7.2× 5.6	0.6		N	I, II		地質頁岩5
49		7	銅片	チャート	22.3×19.0×19.0	4.9	6b	N	S		チャート4
50		8	石	チャート	80.0×49.1×41.2	169.8	8				チャート6
51		9	銅片	凝灰岩	33.3×22.4×11.3	7.6					
52		10	銅片	地質頁岩	22.2×32.9× 7.1	3.0		H1	S	I	地質頁岩4
53		11	台形塊石器	安山岩	25.7×20.8× 7.7	4.4	3				安山岩6
54		12	銅片	チャート	19.0× 6.2× 6.7	0.9		N	S	I	チャート1
55		13	銅片	地質頁岩	6.7×24.8× 4.6	0.7		P	I		地質頁岩5
56		14	銅片	チャート	13.5×12.0× 2.5	0.3		H1		I, II, III, IV	チャート1
57		15	銅片	チャート	17.6×18.7× 8.4	2.5		H1	S	I	チャート1
58		16	銅片	地質頁岩	39.7×25.6×16.1	13.3		H1	N	I, III	地質頁岩6
59		17	銅片	安山岩	19.1×24.5×10.4	3.2		C	N	II, III	安山岩2
60		18	銅片	チャート	20.1×32.8×20.4	4.1		P	S	I, III	チャート1
61		19	銅片	地質頁岩	27.4×29.0× 9.6	4.7	4	H1	N		地質頁岩6
62		20	銅片	チャート	8.3×15.4× 2.7	0.4		N	I		チャート1
63		21	銅片	チャート	19.7×12.2× 4.0	1.0		N	I		チャート1
64		22	銅片	黒曜石	21.5×26.7× 5.6	2.4		H1	I, III		黒曜石1
65		23	石	チャート	29.8×37.5×22.1	17.5	7				チャート1
66		24	銅片	チャート	× ×	<0.1					チャート1
67		25	銅片	チャート	20.3×17.6× 7.8	2.0		H1	S		チャート1
68		26	銅片	チャート	28.2×16.0×10.9	4.9		H1	S	I	チャート1
69		27	銅片	チャート	17.2×30.6×10.7	4.1		H1	S	II	チャート1
70		28	銅片	チャート	22.0×15.6×11.1	3.4		N	I, II		チャート1



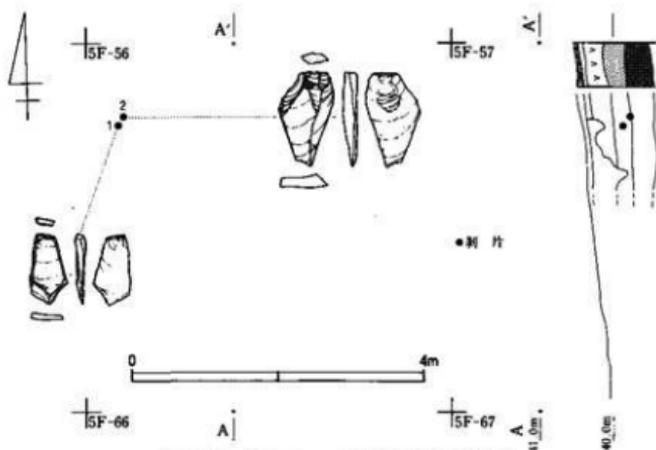
第102図 第9ブロック石器実測図(7)

3. 第2文化層

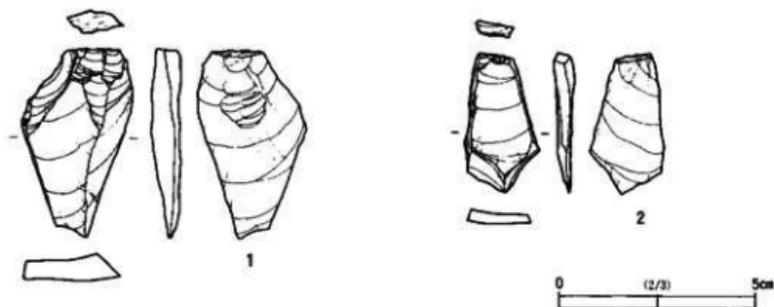
A T層下位に出土層準を持つ文化層である。2ブロックが検出されたがいずれも小規模なブロックであり細別的な時期には異同があろうが、概要は第2黒色帯上部の石器群と考えられる。

第10ブロック(第103・104図、第32表、図版44)

状況 遺跡中央東側に位置する。南から入り込む支谷の台地縁辺に立地している。5 F-56区に2点が近接して検出された。出土層位はⅣ層である。器種組成は剥片2点である。



第103図 第10ブロック器種別遺物分布図



第104図 第10ブロック石器実測図

第34表 第10号ブロック石器属性表

No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	検出 番号	打製 形状	打製 調整	骨髄構成	断面	母岩別資料
1	5F-56-	1	剥片	メノウ	32.9×18.5×3.8	2.7	2	H1		I, II	メノウ 1
2		2	剥片	陸奥頁岩	47.5×28.1×6.5	8.6	1	N		I	陸奥頁岩 1

遺物 1・2は剥片である。2点とも石刃として把握されるもので、打面が平坦な打面であり、頭部調整が行われているという共通した技術的特徴を有している。背面構成は2では打点方向と反対方向からの剥離が見られる。

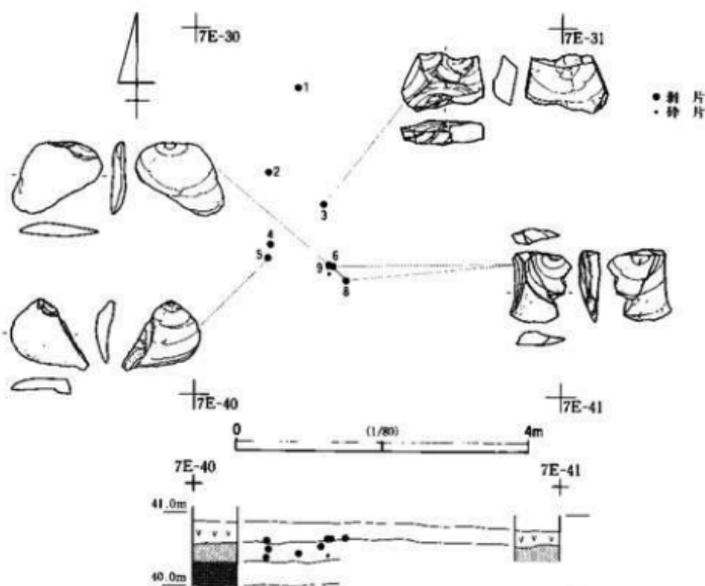
特徴 2点の出土であるのでブロックとしたが多分に単独出土的な様相を呈する。しかしその内容は注目される。同種の技術的特徴を有する石刃が近接して遺存しており、こうした特徴器種の単独的な検出は、ブロック構造の検討とは異なった面からの集団の行動様式の問題を喚起する。

第11ブロック(第105・106図、第33表、図版31・44)

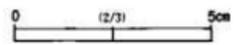
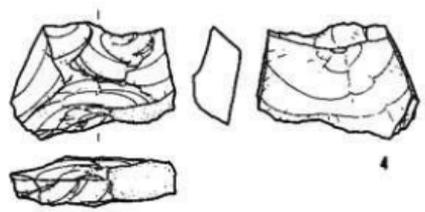
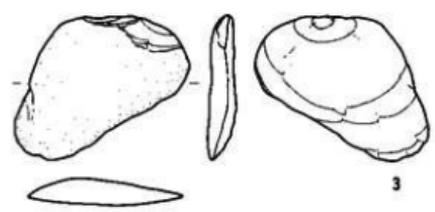
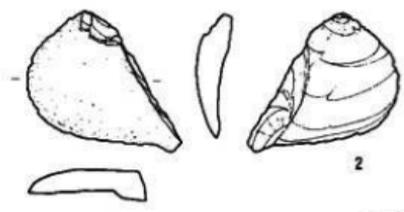
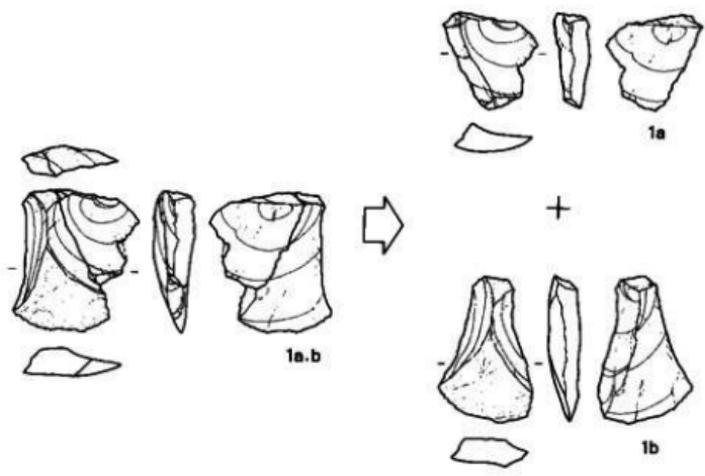
状況 遺跡の最南部に位置する。台地の縁辺よりやや奥まった平坦部に立地する。7E-30区に9点で構成される。出土層位はⅥ層下部～Ⅶ層。器種構成は剥片8点、砕片1点である。

遺物 1a・bは剥片の接合資料である。この剥離順序を観察すると1a・bが作出された後、打面の小口を打点として1bを剥離している。2～4も剥片である。2、3は自然面打面で背面に自然面を広く残置する。4は背面に周縁からの剥離面が看取される。

特徴 石材はすべて安山岩である。打面を転移するような剥片剥離が想定されるが、資料数が乏しく不明瞭である。器種構成は剥片主体であり指標的な利器が欠如するため、明確な時期は認定し得ないが、検出状況のあり方から第2黒色帯上部の石器群と評価しておく。



第105図 第11ブロック器種別遺物分布図



第106図 第11ブロック石器実測図

第35表 第11号ブロック石器属性表

No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	標記 番号	打面 形状	打面 調整	背面構成	折面	母岩別資料
1	7E-30-	1	剥片	安山岩	26.7×31.7×6.9	5.7	L		I		安山岩 1
2		2	剥片	安山岩	20.3×47.4×10.2	10.9	N		I, II		安山岩 2
3		3	剥片	安山岩	29.1×41.2×13.0	14.2	4		I, II		安山岩 2
4		4	剥片	安山岩	22.4×25.0×6.8	4.0	N		I, II		安山岩 2
5		5	剥片	安山岩	36.5×41.7×7.6	8.6	2		N	H-M	安山岩 3
6		6	剥片	安山岩	37.0×23.6×8.6	5.7	1b		N	H-M	安山岩 1
7		7	砕片	安山岩	7.3×6.3×2.4	0.2					安山岩 2
8		8	剥片	安山岩	26.2×23.3×5.5	3.3	1a	H1	I	B	安山岩 1
9		9	剥片	安山岩	36.9×30.3×8.3	10.1	3				安山岩 3

4. 単独石器・表面採集石器

単独出土石器(第107・108図、第36表、図版45)

6 E-70区で石核が出土している。出土層準はⅢ層下部であり、盤状剥片素材から横長剥片を作出している。側面は縦に折断するような剝離面が看取される。石材は安山岩である。

6 E-74区で使用痕を有する剥片が出土している。出土層準はⅣ層下部であり、打面が欠損する剥片の端部に微細な剝離痕が連続する。石材は黒曜石である。

第36表 単独石器属性表

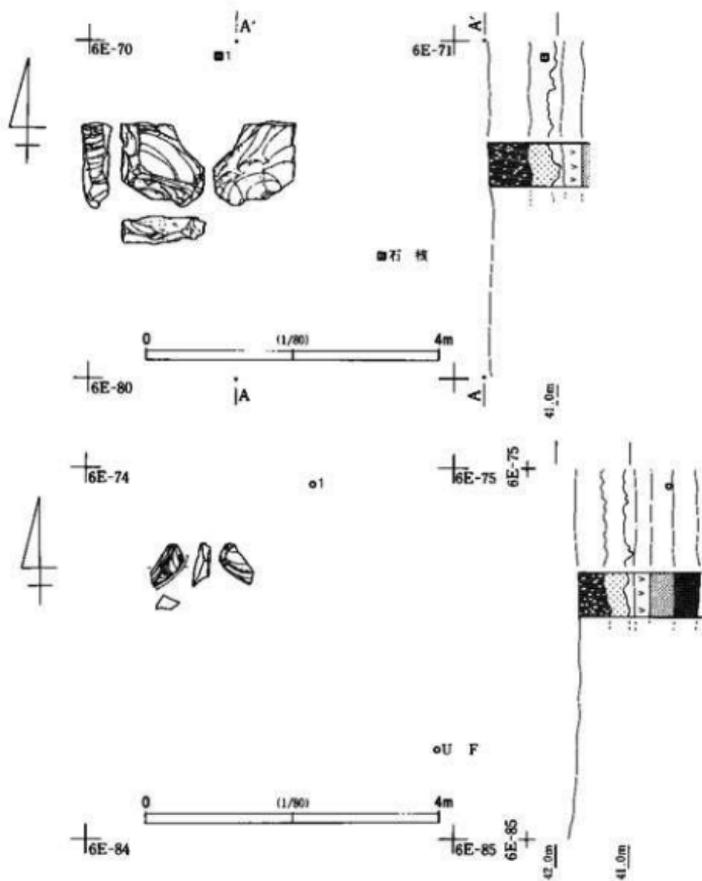
No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	標記 番号	打面 形状	打面 調整	背面構成	折面	母岩別資料
1	6E-70-	1	石核	安山岩	38.8×52.6×12.2	24.8	1	H1	I, II		
2	6E-74-	1	剥片	黒曜石	12.3×23.5×5.7	1.3	1	H1	I, IV	R-II	

表面採集石器(第109図、第37表、図版45)

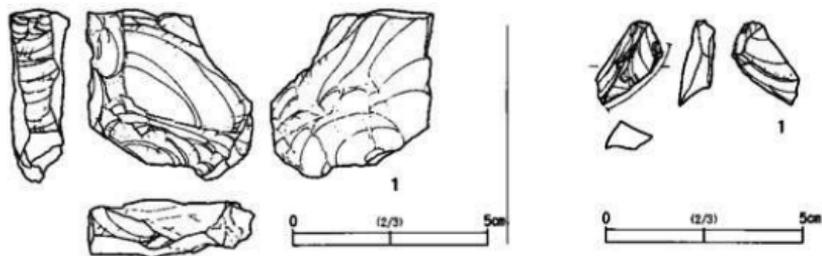
1は尖頭器である。中形の下半部に最大幅を持つ流美なものである。先端と基部を僅かに欠損する。安山岩製。3 E-39区出土。2は剥片である。幅の長い打面を持つ横長剥片である。珪質頁岩製。3 F-62区出土。3は使用痕を有する剥片である。末端部に刃こぼれ状の使用痕が看取される。珪質頁岩製。4 F-88区出土。4 a-bは剥片と剥片の接合例である。角礫素材の石核の平坦打面から打面を巡るように縦長剥片が連続的に剝離されていることが理解される。安山岩製。6 D-34区出土。

第37表 表採石器属性表

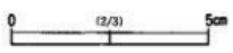
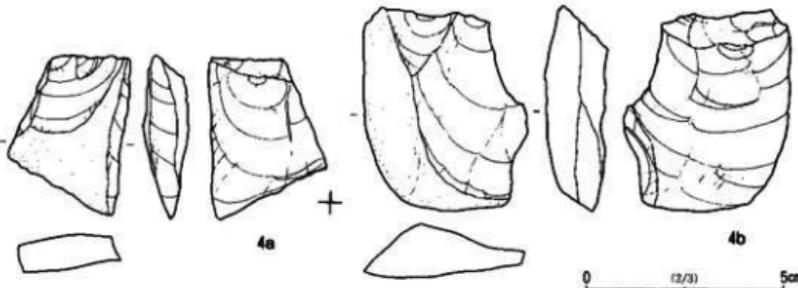
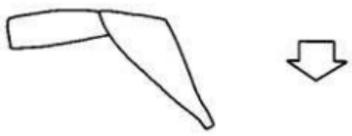
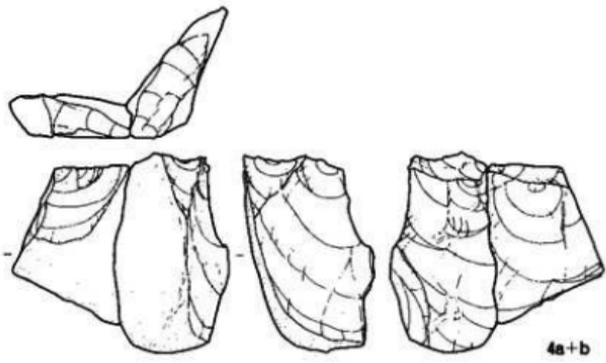
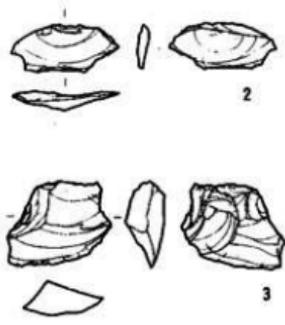
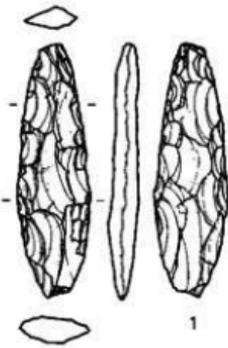
No	遺物番号	器種	石材	長×幅×厚 mm	重量 g	標記 番号	打面 形状	打面 調整	背面構成	折面	母岩別資料
1	3E-39-	尖頭器	安山岩	65.5×18.5×8.0	8.0	1					
2	3F-62-	剥片	珪質頁岩	12.5×27.0×5.0	0.9	2					
3	4F-88-	剥片	珪質頁岩	21.8×26.0×10.0	3.6	3					
4a	6D-34-	1	剥片	安山岩	54.5×41.0×13.9	32.1	4a				
4b		2	剥片	安山岩	29.5×37.5×10.3	13.4	4b				



第107图 6E-70(上)・6E-74(下)单独遗物分布图



第108图 6E-70(左)・6E-74(右)单独遗物石器实测图



第109图 表採遺物石器実測図

第2節 縄文時代

1. 遺構

馬蹄形に広がる台地上26,000㎡を確認調査した結果、8基の陥穴を発見した他は住居等の遺構は所在しなかった。陥穴は谷のかけ上がりや痩せ尾根へ移行する平坦地のやや北西寄りに点在するものが主体で一基だけ台地先端部付近に所在している。拡張部分での検出数も少ないことからかなり散漫な分布であるといえよう(第110図)。

001(第111図・図版46)

4 E-64区に位置し、長軸1.6m、短軸1.4m、深さ1.5mを測り、長軸基底部付近は抉れ中位で脹らむ断面形状を示し、基底部は隅丸長方形を呈している。底面はほぼ平坦で固くしまり、ピット等は確認されなかった。側壁は底面から中位まではほぼ直立するが上部は緩やかに開口している。覆土にはロームブロックを多量に含んでいる。遺物は出土しなかった。

002(第111図・図版46)

4 E-22区に位置し、長軸2.1m、短軸1.1m、深さ1.6mを測り、長軸中位から下位にかけては若干抉れている。基底部は長方形を呈している。底面はほぼ平坦で固くしまる。ピット等は確認されなかった。側壁は中位まではほぼ直線的に立ち上がり、開口部でやや開く。覆土にはロームブロックを多く含む。遺物は出土しなかった。

003(第111図・図版46)

4 D-28区に位置し、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ1.8mを測る楕円形プランを呈し、基底部に向かって緩く収束している。底面は楕円形で中央がやや凹む。覆土はロームブロックを多量に含み、最下層は粘性が強い。遺物は出土しなかった。

004(第111図・図版46)

6 E-83区に位置し、他の遺構からかなり離れた台地南側にある。長軸2.3m、短軸1.8m、深さ2.2mを測る楕円形のプランを呈す。側壁は基底部付近で抉れ外方に脹らみ、オーバーハングしている。底面は平坦で固くしまる。覆土にはロームブロックを多量に含んでいる。遺物は出土しなかった。

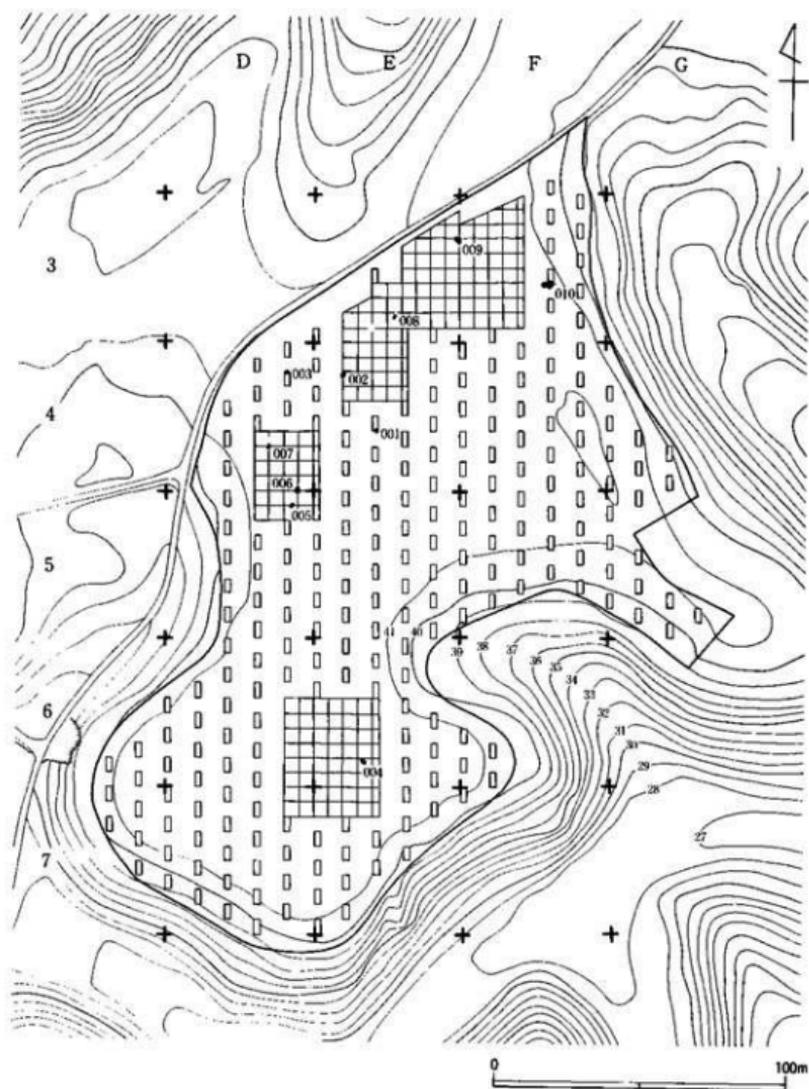
005(第111図・図版46)

5 D-18区に位置し、長軸2.4m、短軸1.4m、深さ2.2mを測る長楕円形プランを呈し、基底部に向かって直線的に掘り込んでいる。底面は若干凹凸がある。覆土にロームブロックの混入が比較的少ない。遺物は出土しなかった。

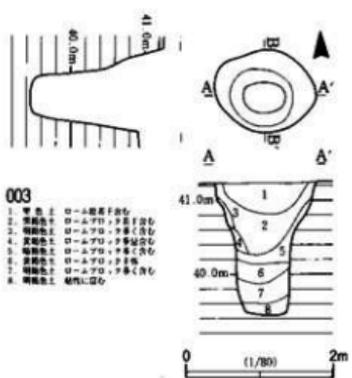
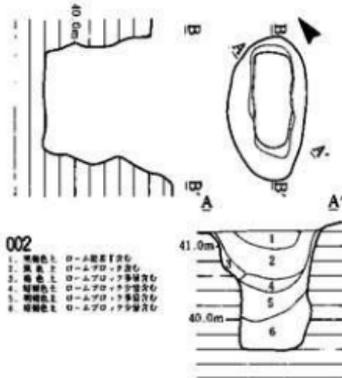
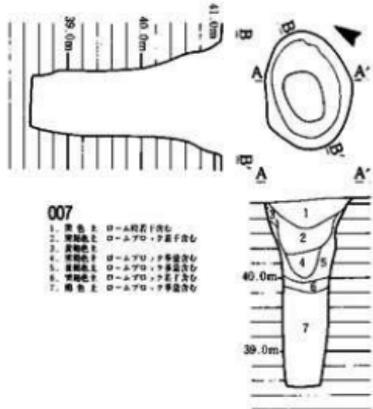
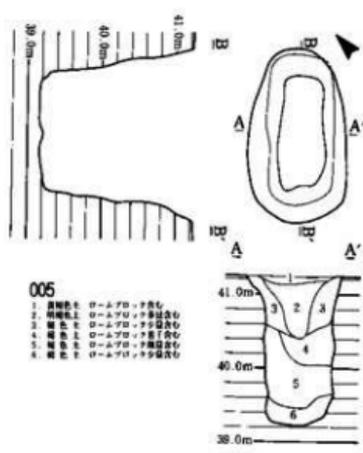
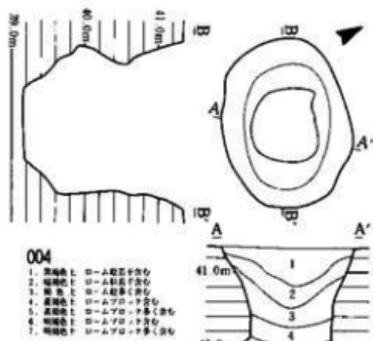
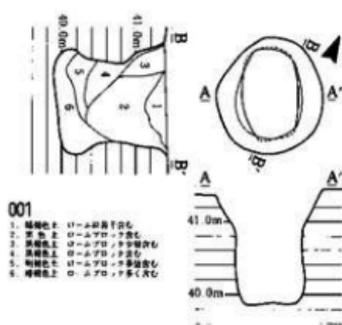
007(第111図・図版46)

4 D-77区に位置し、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ2.5mを測る楕円形プランを呈し、小形な割にはかなりの深さをもつ陥穴である。側壁は直線的でほぼ垂直に掘り込まれている。底面は

平坦に仕上げられ固くしまる。覆土にはロームブロックを多量に含むが、中位には黒褐色土の薄く堆積し、以下はしまりの弱いロームブロック土となる。遺物は出土しなかった。



第110図 西長山野遺跡遺構配置図(1/2,000)



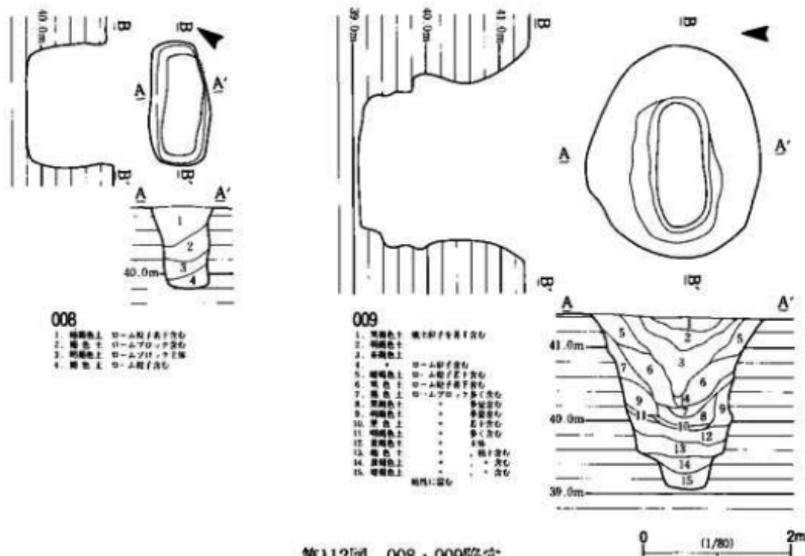
第111図 001~005・007陥穴

008(第112図・図版47)

3 E-85区に位置し、長軸1.7m、短軸0.9m、深さ1.1mを測る長方形プランを呈し、側壁はほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦で固くしまる。遺物は出土していない。

009(第112図・図版47)

3 E-39区に位置し、長軸2.9m、短軸2.4m、深さ2.3mを測る楕円形プランを呈し、側壁は基底部のやや上方で外方に抉れ、一旦平坦面をつくってから長方形の底面にすぼまっていく。覆土中位で薄い黒色土層が堆積し、以下ロームブロック土となる。遺物は出土しなかった。

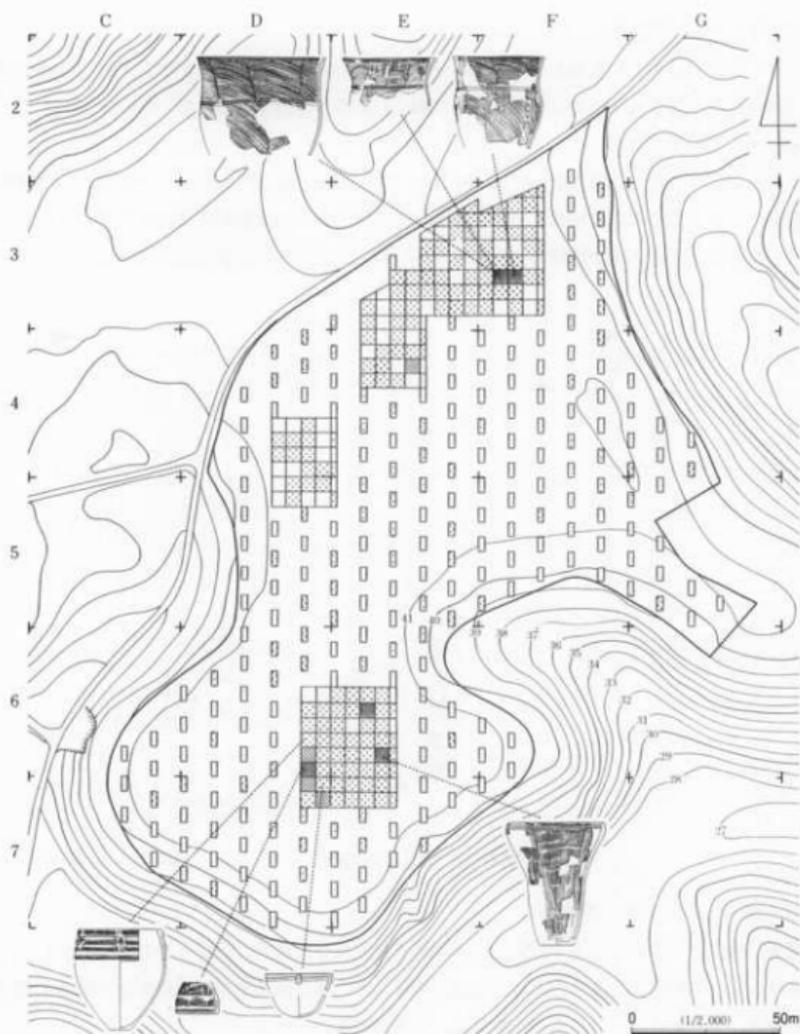


第112図 008・009陥穴

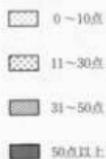
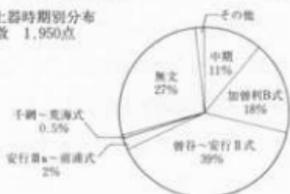
包含層(第113~115図・図版48)

調査区内に10%のグリッドを設定し、確認調査を実施した結果、さほど各グリッドからの出土量はなく、比較的まとまりのあった台地先端付近と、調査区北側の平端部を包含層の主要部分と考え、この地区について本調査を実施、包含層の調査を行なった。

拡張した本調査範囲は3地点あるが、土器片数では後期が半数以上を占めている。比較的多くの遺物を出土したグリッドは3 F-61・62区で、加曾利B式から曾谷式にかけての粗製土器を中心として突出したまとまりがある。また、6 D-98区を中心に安行Ⅱ式がまとまっている。なお、6 E-83区では中期加曾利E式の深鉢が単独出土している。それぞれの出土層位は表土層下のテフラ層及び下部の暗褐色土であり、暗褐色土でも上位に集中している。拡張した本調査範囲の3地点を北側から1区、2区、3区として以下説明していくこととする。

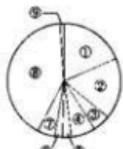


出土土器時期別分布
総数 1,950点

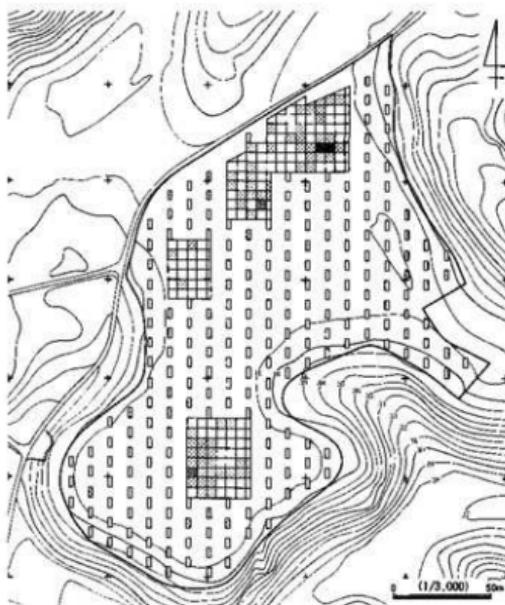


第113図 グリッド別出土土器分布図1 (全体)

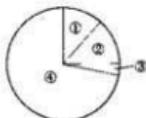
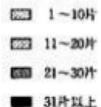
加曾利B式土器片分布
総数 343片



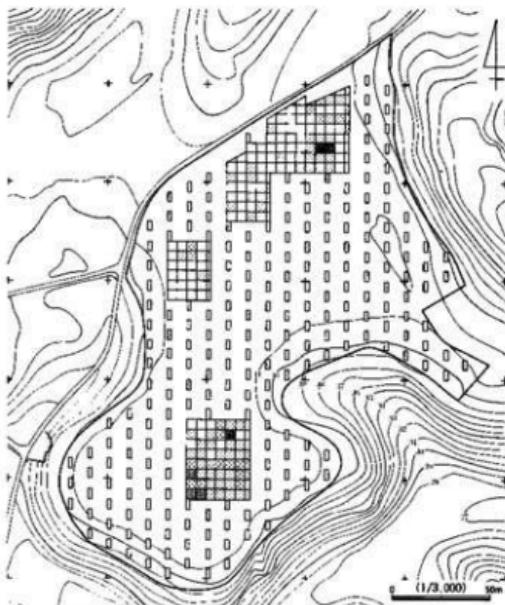
- ① 加曾利B 1式
- ② 加曾利B 2式 区画沈殿
- ③ 加曾利B 2式 区画沈殿
- ④ 加曾利B 3式 区画沈殿
- ⑤ 浅鉢無文
- ⑥ 浅鉢縄文
- ⑦ 白付鉢
- ⑧ 横製深鉢
- ⑨ その他



曾谷-安行Ⅱ式土器片分布
総数 762片



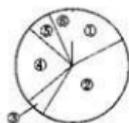
- ① 曾谷式
- ② 安行Ⅰ式
- ③ 安行Ⅱ式
- ④ 横製深鉢



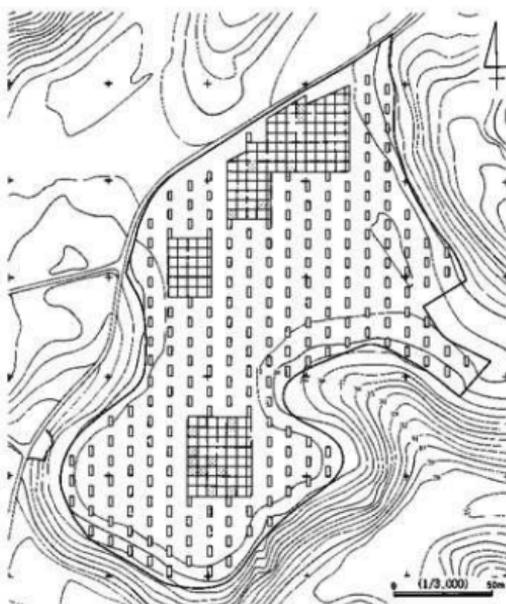
第114図 グリッド別出土土器分布図2(後期)

安行Ⅲa～前浦式土器片分布
総数 41片

- 1～10片
- ▨ 11～20片
- ▩ 21～30片
- 31片以上

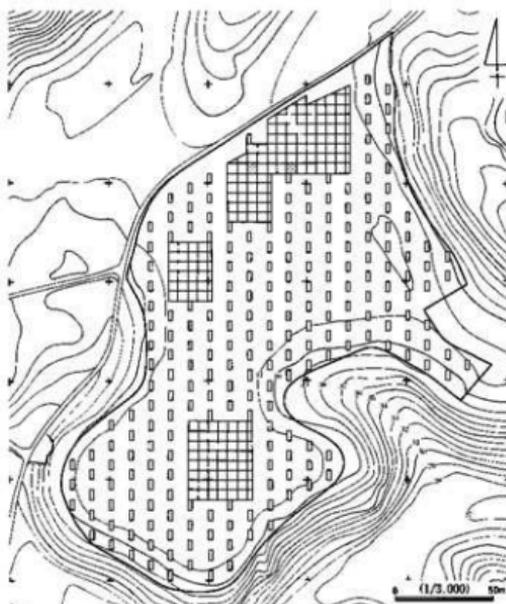


- ① 安行Ⅲa式
- ② 姥山Ⅲ式
- ③ 姥山Ⅲ式
- ④ 姥山式粗製深鉢
- ⑤ 前浦式
- ⑥ 大淵系



千網～荒海式土器片分布

- 1～10片
- ▨ 11～20片
- ▩ 21～30片
- 31片以上



第115図 グリッド別出土土器分布図3(晩期)

1区

台北側部の平端部に鍵の手状に広がる約2,200㎡の範囲である。全体にまばらな分布であるが、3F-61・62区に多量に出土する部分がある。組線文をもつ粗製深鉢が3個体近接している。加曾利B式から曾谷式にかけての遺物出土頻度が高いが、それらに伴う遺構は所在せず、一括廃棄された可能性が強い。晩期段階の遺物はさほど出土しないが、千網式・荒海式についてはこの区域に限定されている。

2区

1区南西側に600㎡ほどの範囲で、全体にまばらな分布を示す。出土遺物の傾向は1区と変わらない。

3区

南側に舌状に突出する平端部中央付近に約2,500㎡の範囲をもつ。曾谷式から安行I式が主体をなし、復元可能な大型破片も目立った。ことに南西部分を中心とする箇所と6E-52区の2箇所に集中している。晩期前半から中ごろにかけての遺物もこの地区に多い。

2. 遺物

a. 包含層出土土器

本遺跡で出土した土器は遺構に伴うものはなく、すべて包含層からの出土である。

遺物は上仁羅台遺跡と同様の分類で行なっている。

1群土器(第116図、図版50)

1類(1・2)

沈線文系の土器である。太沈線と細沈線を組合せたもので、横位の太沈線で文様を区画し、さらに縦位・斜位に太沈線を配し、内部を細沈線で充填している。1の細沈線は縦、2のそれは斜めで格子状をなす。田戸下層式である。

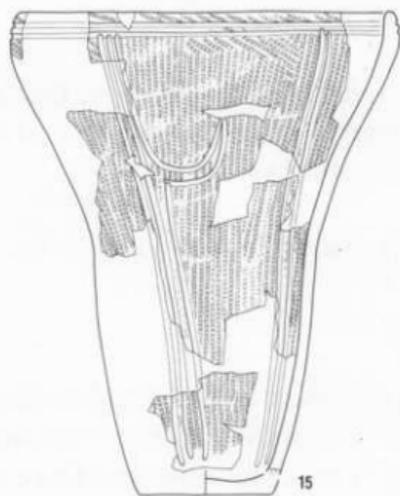
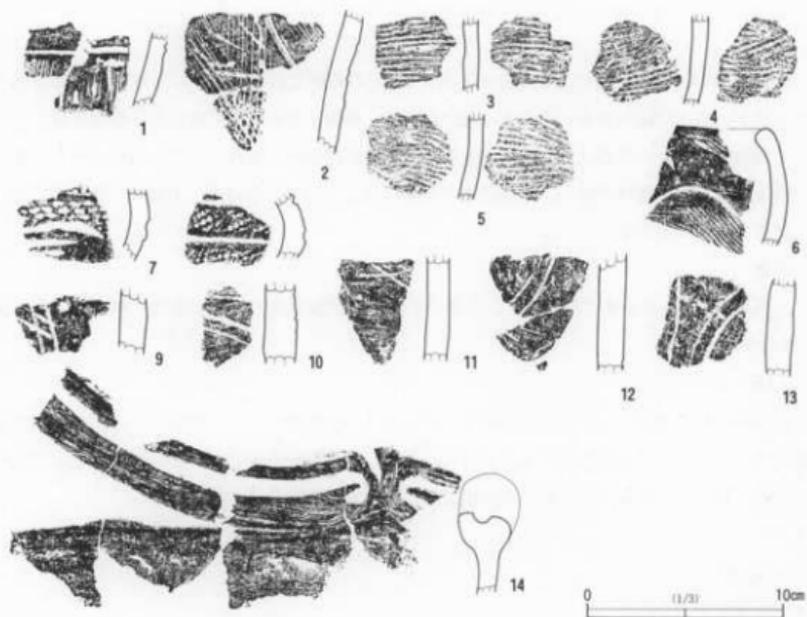
2類(3～5)

条痕文系土器である。内・外面とも横位に条痕を施している。胎土には繊維を多量に含んでいる。

3群土器(第116図、図版49・50)

2類a種(7・8・15)

キャリパー状の深鉢で、縄文や捺糸文を地文に沈線で文様を描くものである。7・8は縄文を地文に横位の沈線を施している。15は復元実測できる半完形で口縁部が内湾気味に開き、胴下半部は円筒状を示す深鉢で、捺糸文を地文に口縁直下に2条の平行沈線を施し、さらに2～3条一組の沈線を垂下している。3条の沈線の右端は途中で逆Jの字状に沈線を弯曲させている。地文の捺糸は口縁部は斜位に、平行沈線以下は縦位に施される。推定高33cmである。



第116図 縄文土器拓影・実測図(1)

2類b種(6)

キャリバー状の深鉢で、沈線区画内に縄文を充填している。縄文施文部は三角形や長球形もしくは短冊形になるものと思われる。

2類d種(9~13)

無文地に半截竹管文を曲線的に施文した深鉢である。比較的厚手の土器である。

2類e種(14)

直立する無文の口縁部で、端部が肥厚し口唇部に沈線を施文している。沈線端部は鍵の手状に短く弯曲する。

4群土器(第117図、図版50)

1類d種(17)

外反する深鉢口縁部でやや波状となる。波頂部内面には円形刺突が2個上下に施され、中央から沈線を両側に引いている。外面には条線文が縦方向に施されている。

5群土器(第117・118図、図版49~51)

1類c種(16)

3単位の波状口縁で外反する口縁端部に紐線文を施している。器面は粗い縄文を施し、口縁内面には1条の沈線をめぐらしている。

2類a種(18~21)

外反する口縁部をもつ深鉢で、沈線区画内に斜沈線を施すものである。波状口縁を示すように、胴部には同様の斜沈線と刺突文を施している。口縁部には細かい刻み目を残している。20のように格子目状のものも認められる。

2類b種(47~52)

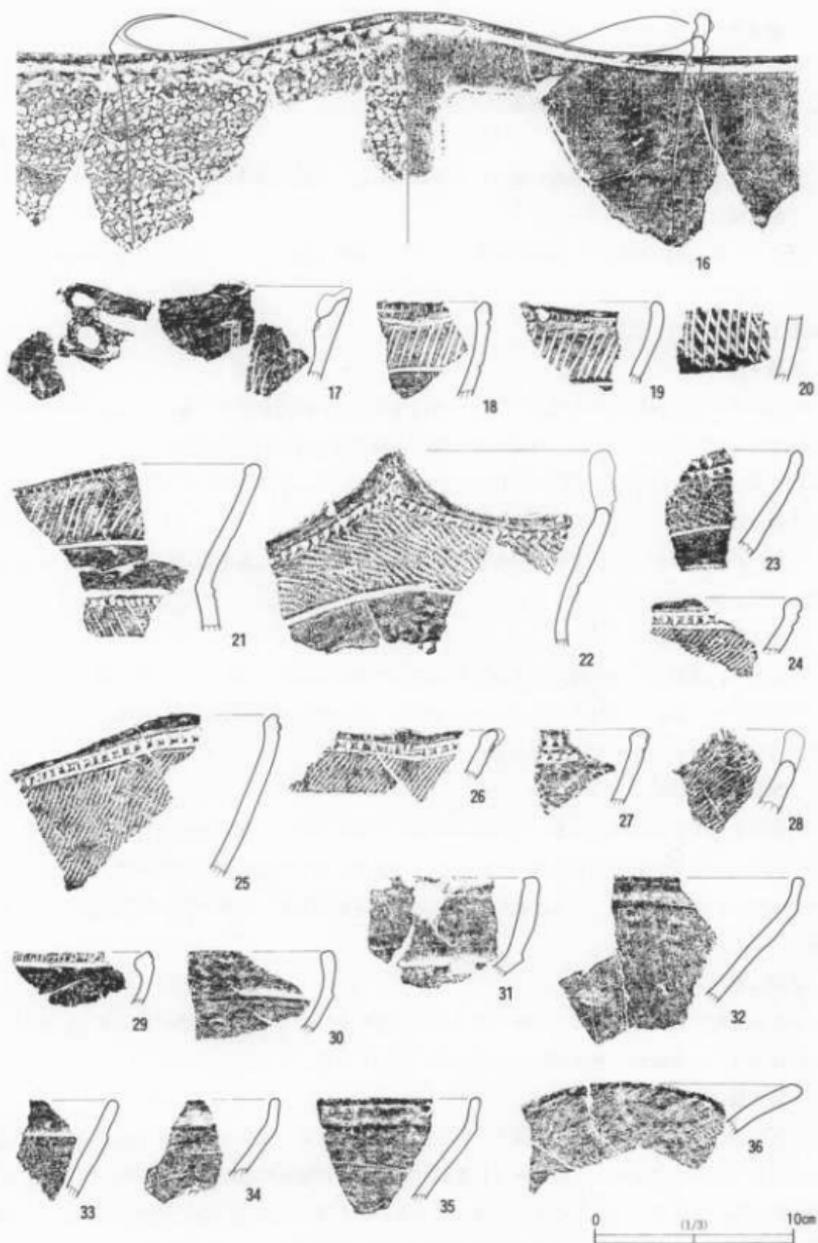
斜沈線を施す粗製深鉢である。48は篋状工具の先端を使用し、粗雑な格子目を描いている。49~52は口縁端部が若干内弯気味に立ち上がり、頸部のわずかにしぼんだ深鉢で、傾斜の強いやや弧状の斜沈線を施し、51では縦位と横位の沈線区画がある。区画内部は斜沈線がそのまま残っている。

2類d種(39~46)

斜沈線を施す台付鉢である。口縁部は外反し、稜線をつかって体部下半に収束する。体部下半には弧状の斜沈線が、屈折部には連続刺突文が施される。

3類a種(22~29)

外反する口縁部が頸部で強く屈曲し、胴上位で脹らみをもつ深鉢である。口縁部は平行沈線で区画され上部に縄文帯、下部に無文帯を設けている。口縁部は波状になるものが主体で、波頂部が三角形の山形を呈すもの(22)と緩やかなカーブを描くもの(25)などが認められる。口縁端部は竹管文の間に刺突文を施したものが縄文区画の上端となる。29は同様の口縁部形態を



第117图 縄文土器拓影图(2)

とっているが縄文帯はなく、口唇部には細かい刻み目が施される。

3類c種(30~36)

口縁部が短く屈折し、直線的に底部に収束する無文浅鉢である。口縁部が内弯気味に立ち上がるもの(30・31)と短く直立もしくは外反するもの(32~35)、大きく外反するもの(36)とがある。

3類c'種(37・38)

口縁部に縄文を施す浅鉢で、37は縄文施文部が短く外反し、下部に弱い稜線をつくっている。底部には直線的に収束している。38は口縁部に沈線区画の縄文帯をめぐらし、底部付近にも縄文を施している。

4類b種(53~57)

紐線文を有する粗製深鉢で、縄文を地文に弧状の斜沈線を施している。57は口径25.5cmを測る粗製深鉢で、縄文を地文に斜沈線を施した後口縁部と頸部に紐線文を施している。紐線文は粘土紐上部に浅い刻みを施したものである。53・55の紐線文は連続した指頭押捺である。

第6群土器(第119~122図、図版49・52~54)

1類a種(58~61)

連弧状充填縄文を施す深鉢で、頸部には三角形の連続刻目文を施している。

1類b種(62・63)

口縁部が若干内弯し、縦長の貼付文が付す。62は無文、63は口縁直下に沈線を施している。

1類c種(65)

台付鉢の脚台部である。沈線区画による連弧状充填縄文と帯縄文を施している。かなり丸みの強い形態である。

1類d種(64・66)

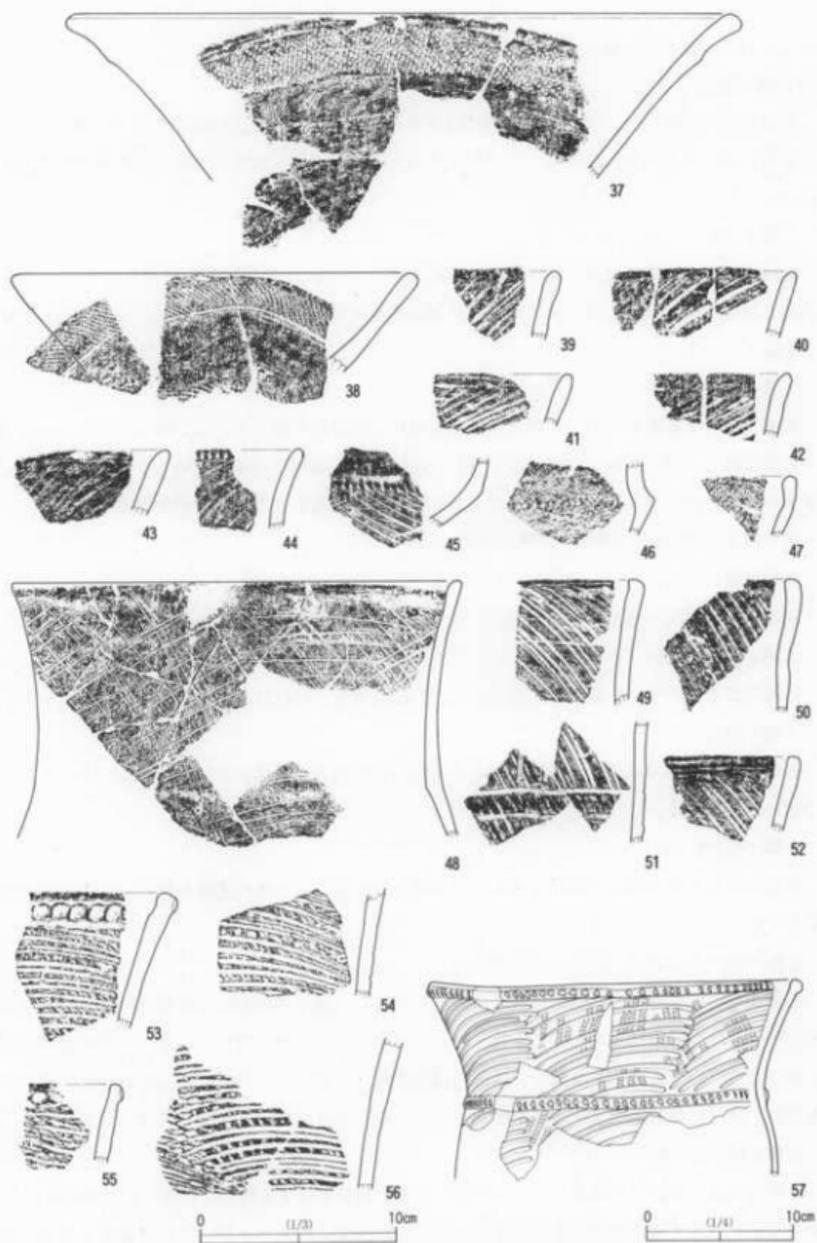
縦長貼付文を付す椀状の浅鉢である。口縁部には1ないし2条の沈線を施し、以下縄文を充填している。

2類a種(70・73)

帯縄文を施す深鉢で、口縁部は大きな波状となり、口縁部文様帯には縦長貼付文を付している。70の波状口縁頂部は方形の把手状となり、直下には円孔が穿たれている。三角形区画内の中央には竹管による垂下文を施し、区画内は斜沈線が充填する。頸部には三角形刻目文が2状めぐり、胴部には対連弧状充填縄文が施されている。73は三角形区画部分の破片である。

2類b種(71・74~77・95)

帯縄文を施す深鉢で平縁を呈し、口縁部文様帯に縦長貼付文を付している。95は内弯する口縁部形態をとる平縁の深鉢で4段の帯縄文をもち貼付文は無文部2段に付し縄文帯3帯をつないでいる。胴下半部は不明である。75の口唇部は内側に肥厚している。



第118图 縄文土器拓影・実測图(3)

2類c種(78・82・83)

帯縄文をもつ深鉢の胴下半部である。帯縄文以下を垂直あるいは斜めに斜沈線を充填している。沈線の密度は比較的高い。

2類d種(67～69・72)

瓢状の深鉢である。帯縄文は肥厚し、下端に三角形の刻目文を施している。

2類e種(97)

口縁部に太い沈線をめぐらし、縦長貼付文を付す浅鉢である。器面はきれいになでられ、焼成は良い。貼付文は比較的大粒である。

2類f種(84・96)

台付鉢の脚台部である。84は薄手で開きが強いが、96は比較丸みの強い形態を示す。帯縄文と連弧状充填縄文を組み合わせ、連弧の交点や縄文部に円孔が多数穿たれている。

3類a種(79～81・86・87・89)

波状口縁を呈す深鉢で、細隆帯上には連続した刻み目を施している。細隆帯は三角形をつくり交点には豚鼻状や刻みのある縦長の貼付文を付している。口縁端部は肥厚した縄文帯がめぐる。81の貼付文は刻みを中央に一箇所施したもので、胴部には連弧状充填縄文が認められる。

3類b種(85)

平縁を呈す深鉢で、細隆帯上には連続した刻み目を施している。貼付文に刻みは入らない。

3類c種(88・90・91)

台付鉢である。口縁部は外反して長く伸び、体部下半で屈折する。平行する細隆帯には刻み目を施し、所々に豚鼻状の貼付文を付す。91では沈線区画の三角形の交点に貼付文があり、区画内に縄文を充填している。体部下半には斜沈線を施している。

3類d種(92)

縄文帯をもつ浅鉢で、口唇部には2個一対の突起をもつ。縄文帯間の無文部には突起部分の下方で逆()状の沈線を施し、下の縄文帯に豚鼻状の貼付文を付している。

4類a種(93・94・98～108)

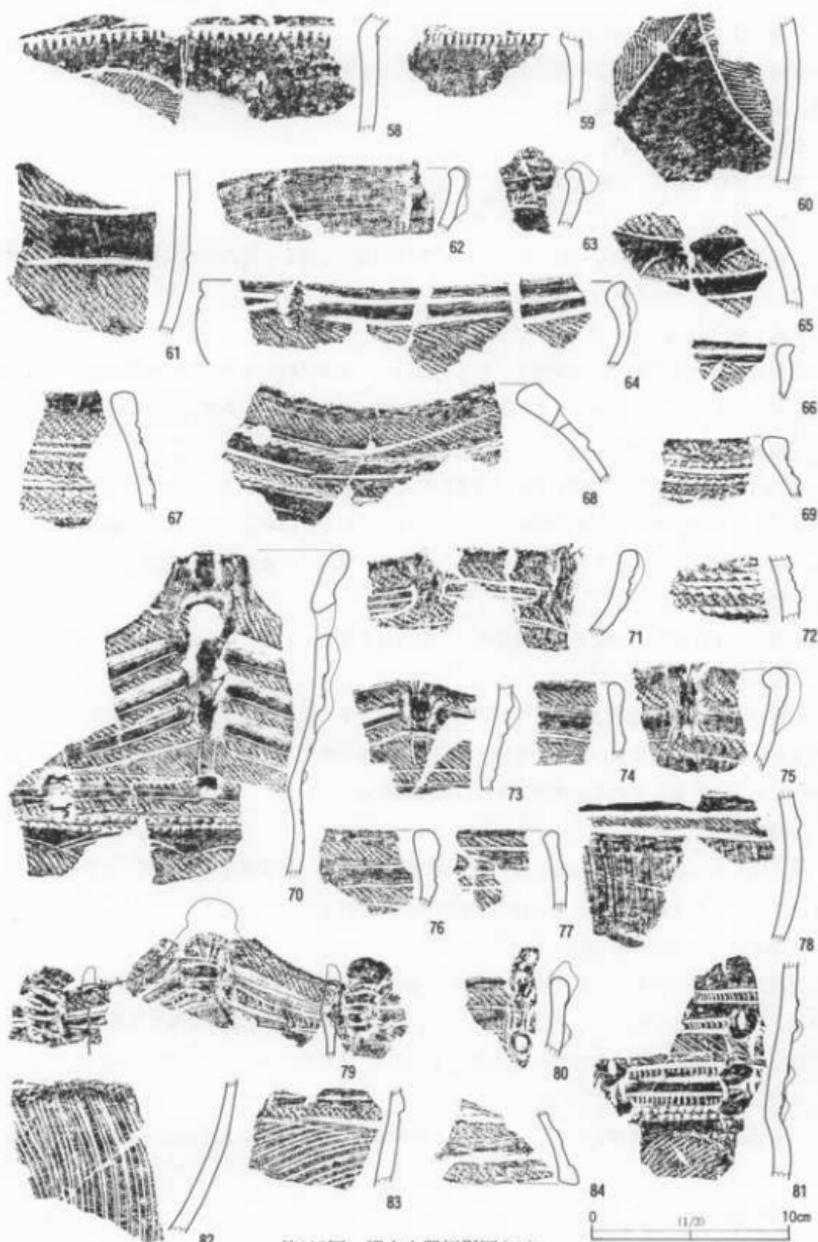
口縁部と頸部に紐線文を施す粗製の深鉢で、地に縄文を施さず弧状の斜沈線を充填している。93は口径25cm、遺存高25.5cmで口縁部は外反し、頸部でややしまって多少張りのある肩をもつ。紐線文は斜沈線施文後に貼付される。94は口径35cm、遺存高28cmでやや大型品である。

4類b種(109～113)

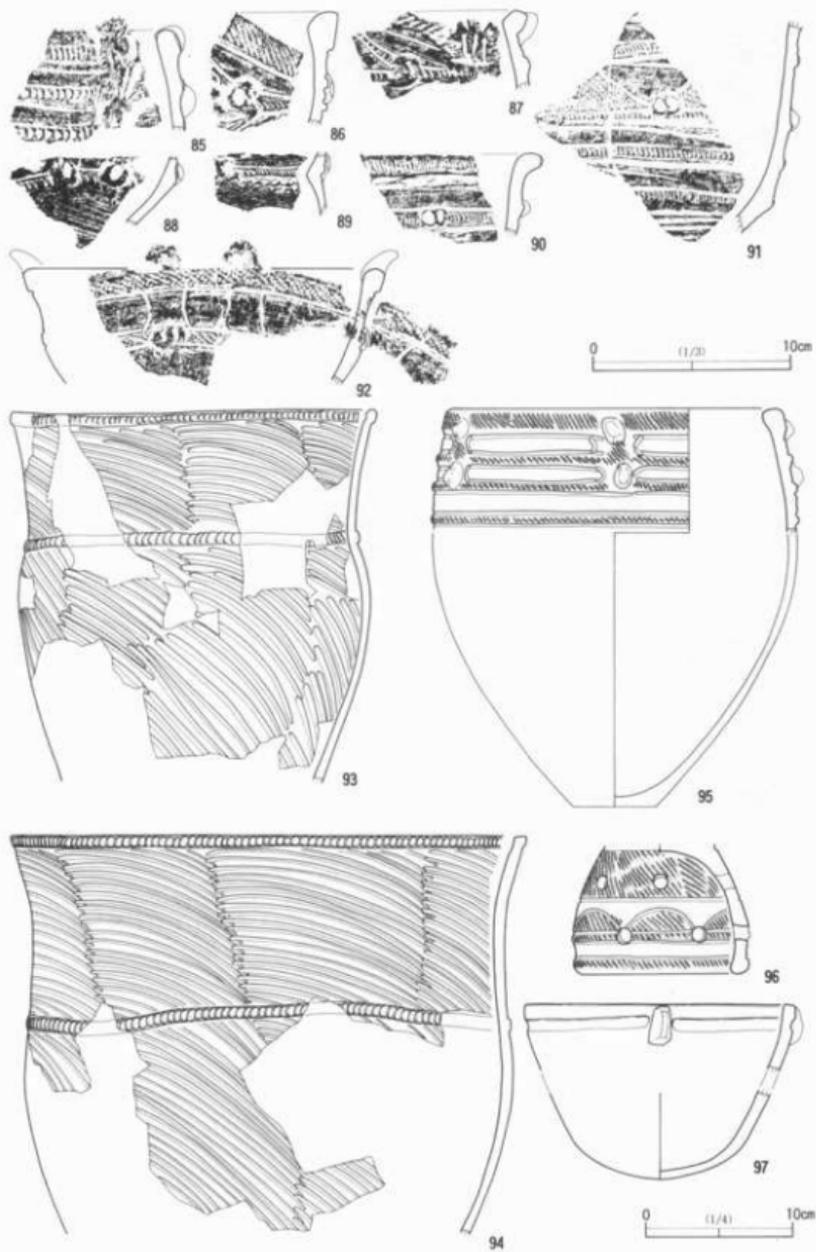
口唇部直下に連続刻目文を施し、口縁部は横方向の沈線を充填する粗製の深鉢で、口縁は直立もしくは若干外反している。

4類c種(119～124)

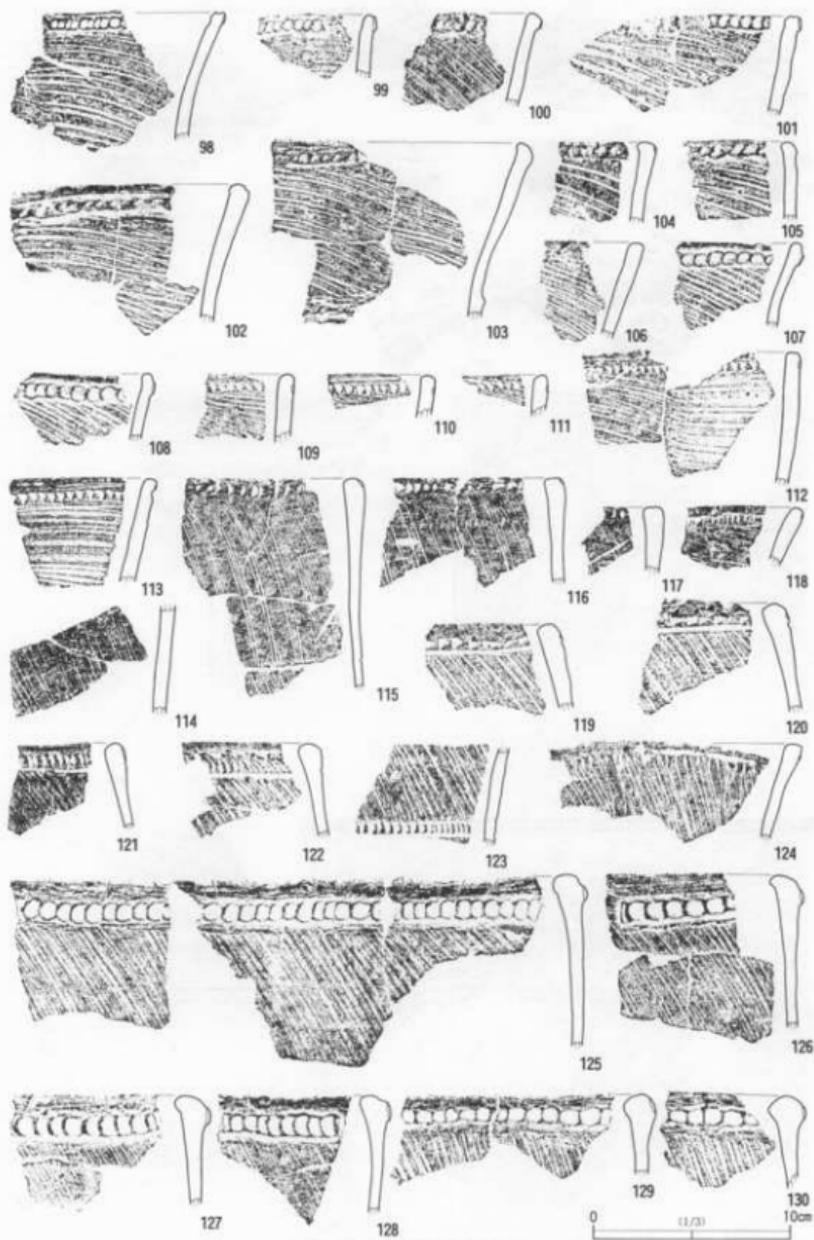
口唇部直下に連続刻目文と沈線文を施し、以下斜方向に沈線を充填する粗製深鉢で頸部には



第119図 縄文土器拓影図(4)



第120図 縄文土器拓影・実測図(5)



第121图 縄文土器拓影图(6)

爪形状の刻みがつく(123)。口縁部の連続刻目文には列点状のもの(119・120)と爪形状のもの(121・122)とがある。口縁部形態は若干内傾するようである。

4類d種(114~118)

口唇部直下に連続刻目文を施し、口縁から胴部にかけては縦方向の細沈線を施している。細沈線は腕先により比較的隙間を開け施文している。115は頸部に横走沈線がめぐっている。口縁部形態は端部で若干肥厚し、やや内傾気味に立ち上がるようである。

4類e種(125~134)

内湾気味に立ち上がる口縁に紐線文を施す粗製深鉢で、口唇部が肥厚している。縦方向に近い斜沈線を密に施すものが多く、133・134のように弧状の斜沈線を施すものもある。

4類f種(132・135・136・138)

内湾する口縁部に紐線文を施し、斜沈線を充填する粗製深鉢である。紐線間には弧状の沈線を施している。口縁端部は外方に肥厚している。

7群土器(第122図、図版54)

1類e種(137・139・140)

紐線文を施す粗製深鉢である。口縁部文様に直線的な沈線を垂下しているが、沈線間の地文斜沈線を磨り消すものはない。

2類a種(142~145)

磨消縄文を施す大形な浅鉢である。口縁は半縁のようで、横位の沈線区画により口縁部に縄文、体部は無文となる。145は沈線を施したもので、口唇部には中央の窪んだ円形貼付文を付している。

2類b種(141)

口縁部が内湾する粗製深鉢で、口縁部に縄文を施している。胴部には縦方向の斜沈線を充填するが比較的浅い施文である。

2類d種(149・150)

内湾する口縁部形態をとり、胴部に斜沈線を充填する粗製深鉢である。

2類f種(146)

縄文を施した小形の浅鉢である。頸部に1条の横走沈線を施している。

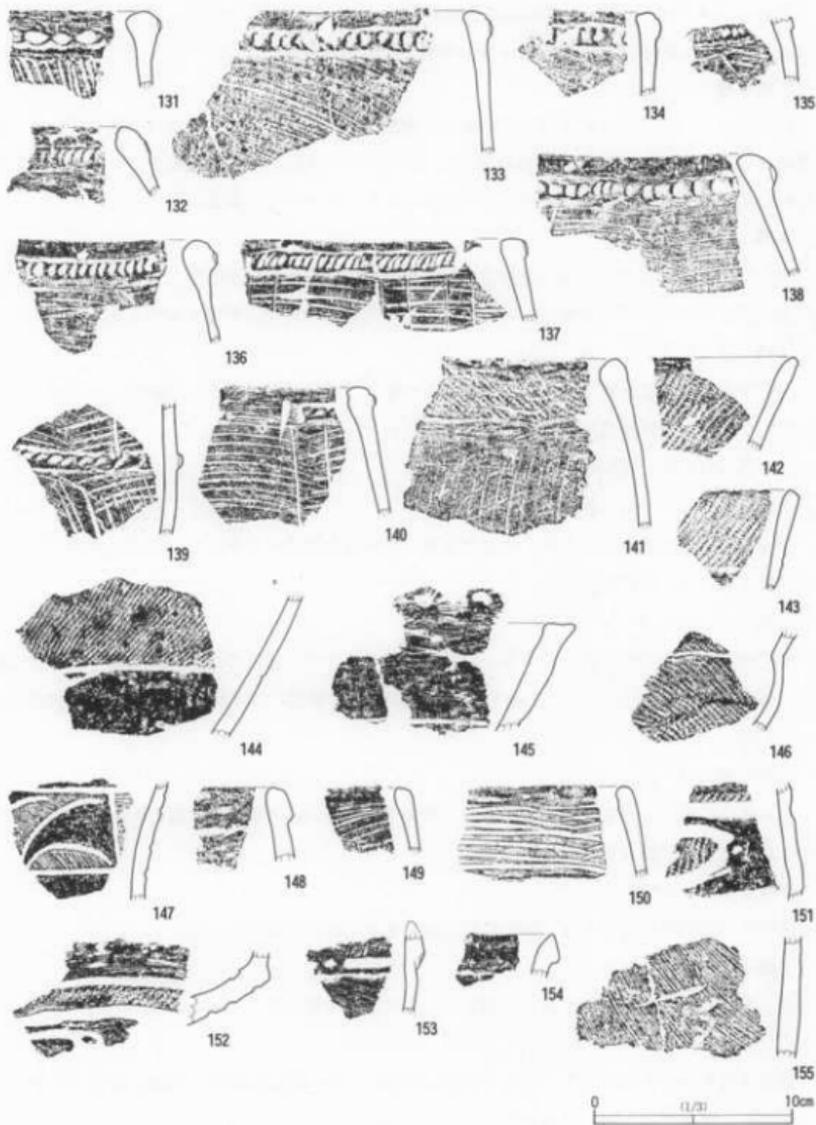
2類g種(147)

細密沈線を施すもの。横走・縦走の沈線区画内に弧状の沈線を施し、内部に細密沈線を充填している。無文部は丁寧に磨かれている。

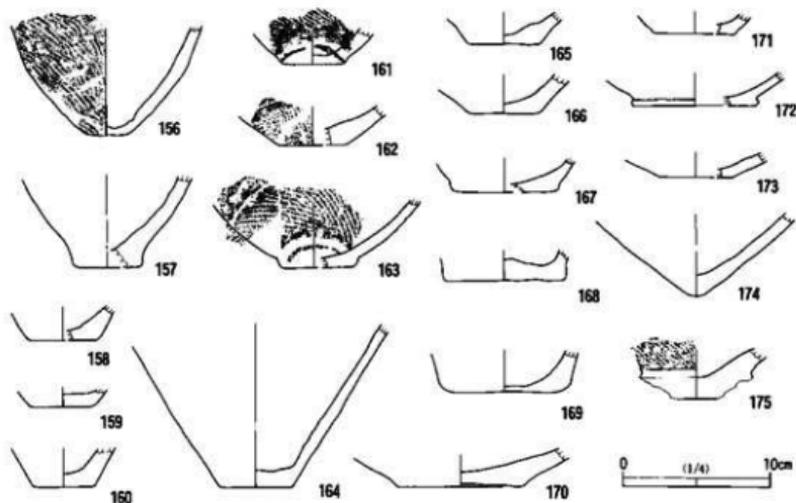
3類a種(151)

太沈線と磨消縄文を施した深鉢である。「の」の字文が無文部に施文されている。

8群土器(第122図152、図版54)



第122図 縄文土器拓影・実測図(7)



第123図 縄文土器実測図(8)

大洞系の浅鉢である。体部下半に雲形状の磨消縄文が施されている。

10群土器(第122図153~155、図版54)

153・154は折り返し状に肥厚した口縁部をもつ深鉢で、155は条痕文を充墳した粗製深鉢である。

底部(第123図)

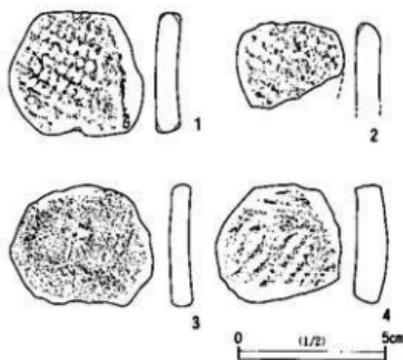
縄文土器の底部を一括した。163は浅鉢、175は台付鉢の体部と脚台部の接合部分である。底部径の比較的小さいものは安行系の深鉢と考えられる。

土製品(第124図)

土器片鎌が4点出土している。

縁辺部を粗く打ち欠き不正円形に仕上げている。

1・2・4は縄文施文部を、3は無文部の利用で、1・2には対をなす刻み目がある。1はともに表裏から斜めの刻みを行ない2は表面側からの刻みである。3・4には刻み目はない。それぞれの大きさは1が4.6×4.2cm、2が3.6×2.8cm、3が5.0×4.0cm、4が4.2×4.0cmである。



第124図 土器片鎌実測図

b. 出土石器(第125図、第38表、図版55)

遺跡から出土した石器は総点数32点を数える。包含層出土の石器がほとんどである。器種組成は、石鏃(未成品)14点、石核1点、磨製石斧2点、磨製石製品1点、剥片11点、礫3点である。主要な利器として石鏃がややまとまって出土した。他の器種の出土はごく少量の出土であり、器種組成において石鏃に偏重して出土しているように見えるが、全体的な遺物量の少なさから見て、その傾向は強調できない。分布状況を見ると、遺跡北側の包含層拡張区(3E、3F区)に石鏃が集中して出土しており、その他の石器もこの地区からの出土が大部分を占める。何らかの生産活動が営まれていたことを伺わせるが伴するような遺構は検出されてなく実態に迫るまでには至らない。これらの石器の帰属時期は、本遺跡の出土石器の時期に伴う蓋然性が高い。土器の帰属時期は上仁羅台遺跡とはほぼ同時期の様相を呈するので、石器もその時期の所産と考えられる。次に主要な器種について説明を加えていく。

石鏃(1~14)

1・2は基部が有茎となるもので、2点とも安山岩製で基部は尖るように突出する。縄文晩期に特徴的に検出されるものである。3~5は基部が平基に近いものである。3は小形で裏面に主要剥離面を残す。4は厚味があるが調整は精緻で均整のとれた縁辺を示す。5は基部の片側がやや膨らむ。6・7は基部が逆V字状に浅く挟れるものである。2点とも小形であり、調整も粗雑である。8~10は基部が深く挟りし明確な脚部が形成されるものである。8は側縁がやや膨らむ。9は両側縁上半部が内弯し先端が尖る。10は片脚を欠損するが挟りは深く脚部が棒状に尖る。11~13は基部を欠損し形状は明確ではないが、それぞれ脚部を有するものであろう。11は側縁が円みをもつ。12は先端が鋭利である。13は黒曜石製で大形のものである。14は未成品である。板状の剥片の周縁を急斜角調整が施されている。石鏃の製作される石材はチャートが6点、安山岩5点、黒曜石3点であり、チャート、安山岩が主体を占め、石材組成上、黒曜石が主要石材とならないことは、当地域の後晩期の石材利用の在り方を示すものとして注目される。

石核(15)

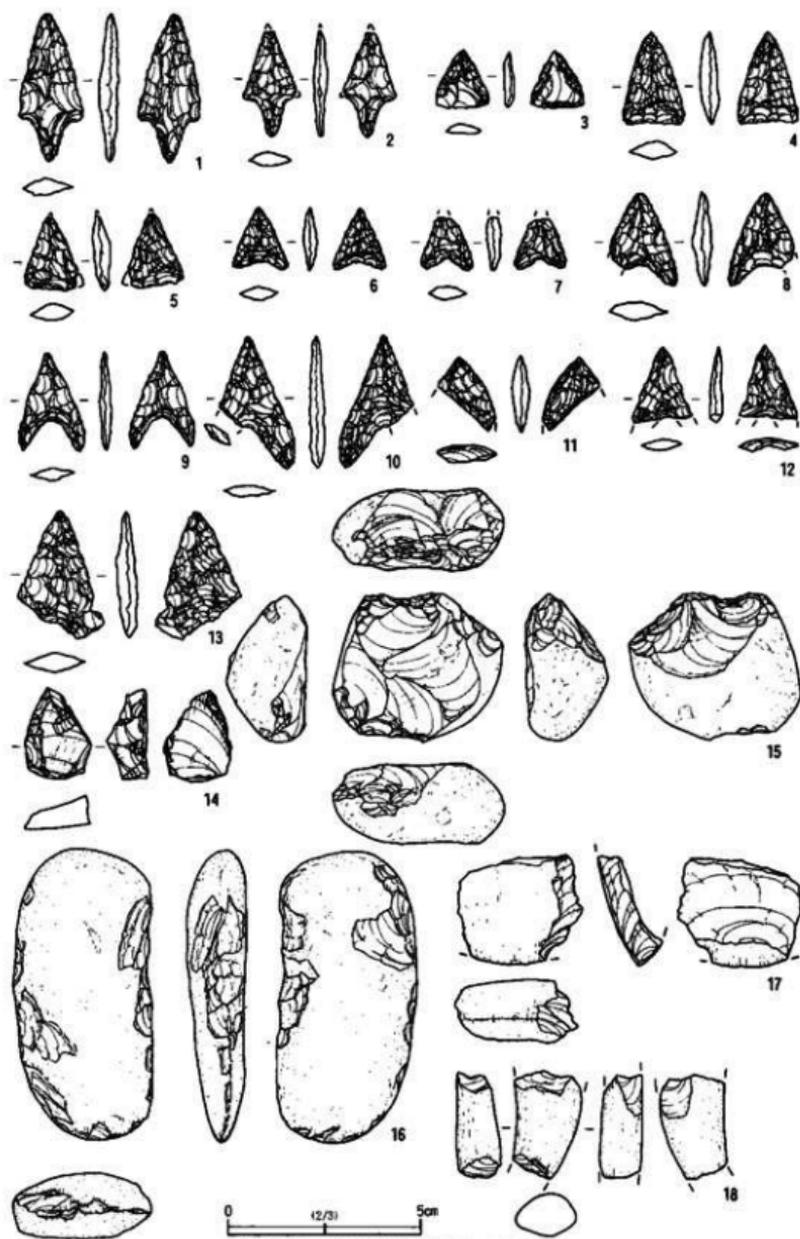
小楕円礫の両端から幅広い剥片を剥離している。1打面で数回の剥片剥離作業を行っている。打点部分は階段状剥離と潰れが顕著である。両極技法によるものであろう。

磨製石斧(16・17)

16は扁平な自然礫を素材とする小形のもので、側縁を調整加工した後に刃部を中心に研磨されている。17は刃部破片である。研磨は丁寧であり光沢を帯びる。

磨製石製品(18)

屈曲する円柱状の礫片に面取りをするような研磨が施されている。研磨は素材の形状を変えるほどには至っていない。両端を欠損し明確な形態は把握できなく、用途は不明である。



第125図 縄文時代以降出土石器実測図

第38表 西長山野遺跡石器属性表

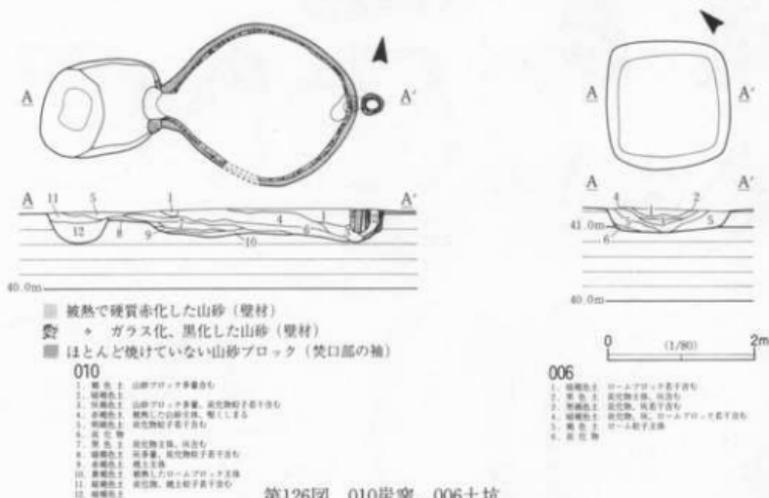
押印	部	種	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	石 材	遺物番号	押印	部	種	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	石 材	遺物番号
1	石	鏃	38.6×15.8×5.4	2.2	安山岩	3F-30-1	10	石	鏃	33.6×18.7×3.8	1.4	チャート	3E-56-1
2	石	鏃	27.7×13.5×4.1	0.8	安山岩	3E-38-1	11	石	鏃	19.0×15.1×4.2	0.5	黒曜石	3F-42-1
3	石	鏃	14.7×13.4×2.8	0.5	チャート	6E-73-1	12	石	鏃	18.3×15.3×3.8	0.7	チャート	3F-81-1
4	石	鏃	23.9×15.5×4.9	1.5	チャート	3F-23-1	13	石	鏃	22.5×22.0×5.2	2.3	黒曜石	3F-71-1
5	石	鏃	18.9×13.2×4.5	0.9	チャート	6E-02-1	14	石	鏃	23.0×17.2×10.3	3.0	黒曜石	3F-43-1
6	石	鏃	16.0×13.8×3.5	0.4	チャート	3E-39-1	15	石	鏃	37.1×43.5×30.8	41.7	珪質頁岩	3F-75-1
7	石	鏃	13.5×13.3×3.2	0.5	安山岩	3F-41-1	16	磨製石器		73.7×35.7×15.7	68.3	緑色凝灰岩	3F-75-1
8	石	鏃	23.6×16.8×4.8	1.2	安山岩	3F-30-1	17	磨製石器		27.4×22.0×16.3	9.3	凝灰岩	2C-94-1
9	石	鏃	25.2×17.1×3.4	0.7	安山岩	005号輪穴	18	磨製石製品		26.6×17.5×10.7	4.7	玄武岩	4E-14-1

第3節 その他の遺構と遺物

近・現代の炭窯(第126図、図版47)と古銭(第127図)を検出している。

炭窯は瓢形と方形のものがある。010は楕円形のかま本体と方形の焚き口が結合し、本体部分の壁は被熱により山砂が赤色硬化している。また黒色にガラス化した部分も認められる。焚き口部の対面には煙道が設けられている。006は方形の形態で、覆土には炭化材を混入する。

古銭は寛永通寶が2枚出土している。明暦2年の称善谷銭、延宝亀戸銭である。



第127図 出土銭貨

第 3 章

ま と め

第1節 旧石器時代

上仁羅台遺跡、西長山野遺跡の旧石器時代について記載してきた。ここでは、両遺跡の各文化層ごとにその特徴をまとめることとする。特に、ブロック、礫群が多数検出された上仁羅台遺跡第2文化層、西長山野遺跡第1文化層の様相を中心にまとめ、その石器群の波及する問題を指摘し、旧石器時代におけるその文化層の位置付け、構造について若干の考察を行ってみたい。

1. 各文化層の様相

上仁羅台遺跡では8箇所のブロックと9箇所の礫群、西長山野遺跡では11箇所のブロックが検出されている。これらは産出層位から大略の段階を設定し文化層を位置づけた。両遺跡の文化層の産出層位、文化層、ブロックの関係は下のように整理される。

	上仁羅台遺跡	西長山野遺跡
Ⅲ層	第1文化層(1ブロック)	
Ⅳ・Ⅴ層	第2文化層(2～8ブロック)	第1文化層(1～9ブロック)
第2黒色帯上部(Ⅵ層)		第2文化層(10・11ブロック)

Ⅳ・Ⅴ層で検出された文化層以外は、小数の資料が1、2箇所のブロックで検出されたに過ぎない。Ⅳ・Ⅴ層の文化層の検討に移る前にこの上仁羅台遺跡第1文化層と西長山野遺跡第2文化層について簡単にまとめておく。

上仁羅台遺跡第1文化層は尖頭器石器群であり、4点の製品のみで構成される小規模なブロックが1箇所検出されている。一般的に尖頭器石器群の石器集中地点の様相については、石器製作が集中的に行われるブロックと、製品が主体となり石器製作が看取されないものが遊離した状態で検出される例が多い。本ブロックは後者の製品だけで構成されるブロックである。尖頭器はすべて器体の一部を欠損しており、尖頭器の利器としての機能面とブロックの形成要因とを連関させて考えると、石器の生産・消費(使用)・廃棄システムとブロック形成における集団の活動プロセスが直接的に表層されているブロックと考えられる。今後、こうしたあり方は注目される必要があろう。尖頭器の形態を見ると、中形から大形の製品ですべて器体の側縁下半部が円味をもち先端部が細くなるという共通した形態を具備している。こうした尖頭器が特徴をなす時期は旧石器時代の終末期から縄文草創期にかけてである。上仁羅台遺跡第1文化層も同時期に比定されよう。

西長山野第2文化層は2箇所の石器集中箇所(10・11ブロック)が検出された。10ブロックで

は石刃2点で構成されており、この石刃は幅広の自然面打面を持ち頭部調整が施され器体端部が鋭角的でないなどの共通する形態的特徴を有する。石刃のこうした諸特徴はⅥ層段階の石刃の特徴を保持している。11ブロックは、安山岩の石材を素材として背面に自然面を残置する幅広な剥片を剥片剥離する製作技術が看取される。こうした剥片剥離技術は第2黒色帯に通時的に存在しており、技術的な側面から時期を限定できないが、産出層準が第2黒色帯上部にまとまるので、概ねⅥ層段階の石器群と捉えておく。2つのブロックの関係については、両ブロックとも小規模で断片的な資料であるので不明と言わざるをえない。西長山野遺跡第2文化層は、両ブロックともⅥ層段階の様相を呈するのでこの時期に比定される蓋然性が高い。

2. 上仁羅台遺跡第2文化層・西長山野第1文化層の石器群の様相

上仁羅台遺跡では8ブロック(総数123点)。礫群9箇所(130点)。西長山野遺跡では9ブロック、総数651点(礫24点)が検出された。産出層準はⅢ層下部～Ⅳ・Ⅴ層でⅣ・Ⅴ層上面に垂直分布が集中する。産出層準からの共通性により同一段階を設定したが、Ⅳ・Ⅴ層は層が薄くⅣ層とⅤ層の識別もできなかった。従って各地点が厳密な意味で連関して共時的に存在していたという保証は得られていないということが考えられる。しかし、各地点における器種組成の等質的な分布状況、石材の同質性、特に黒曜石・珪質頁岩に同一母岩と思われるものが存在するなど、各地点が同一文化層として相互に関係して同時期に存在していた蓋然性は非常に高い。ここではⅣ・Ⅴ層で検出された石器群を同一段階の文化層として把握する視点に立って、石材・器種・石器製作技術の各要素ごとに石器群の構造を見ていくことにする。

(1) 石材

石材は、各ブロックごとにおける器種の生産状況の偏重性による石材の消費の差異がみられるものの、全体的な状況として黒曜石が数量的に主体を占め、黒曜石石材の優位性が挙げられる。個々のブロックで器種までの一連の石器生産が看取されるものについては特にこの傾向が顕著である。上仁羅台遺跡第7号ブロック、西長山野遺跡第6ブロックにおける搔器、削器、ピエス・エスキューの製作が典型例として挙げられる。この傾向とは矛盾するが、母岩の消費が素材作出中心の資料であるものについては、黒曜石以外の安山岩、珪質頁岩、凝灰岩を石材として集中的な剥片剥離を行うブロックが存在する。上仁羅台遺跡第8ブロック、西長山野遺跡第7・8・9ブロックである。

先に黒曜石が数量的に主体であることを指摘した。確かに全体的な石材の量的な側面ではその傾向が強いものの、石材の種類という質的な側面を見ると、石材は豊富な種類を獲得することによって各ブロックが形成されていることが看取される。各地点単位における石材利用をみると、黒曜石を主体として安山岩、珪質頁岩、頁岩、チャート、凝灰岩、瑪瑙、砂岩など多数の石材がみられ、下総台地で利用される全ての石材が出揃っている感がある。さらに、主要な

石材となる黒曜石、安山岩、珪質頁岩、凝灰岩以外は各ブロックでごく小數ずつ存在するような状況が一般的である。

(2) 器種

まず器種組成を見てみると、器種組成は各種の器種が組成している状況を示している。全体的にみるとナイフ形石器、削器、搔器、ピエス・エスキュー、台形椗石器が安定して存在し、さらに敲石、彫器、尖頭器、角錐状石器が小數ずつ存在している。ナイフ形石器は主要な利器として上仁羅台遺跡7点、西長山野遺跡10点と各遺跡の器種の最多数を占める状況である。

石材の様相で指摘したが、器種においても豊富な器種を具備し、器種組成という側面で多様性が看取される。こうした多様性は単に器種単位の相互関係(器種分化が非常に進んだ関係)に留まるものではなく、器種内部の形態分化にも及んでいる状態が見られる。ナイフ形石器の形態について見てみると、形状では先端角が鋭角な刺突形、鈍角で切出形、幾何形等様々であり、調整加工についても微細調整的な加工、ブランディング、角錐状石器の調整加工と類似する鋸歯状面的加工など各種の調整が観察される。加工部位についても2側縁加工、基部加工、1側縁加工部分加工と多様なあり方を示す。このように形状、調整加工、加工部位という個々の要素の多様性は、要素相互の関係で規格化された連結をせず形態のヴァリエーションを表出させている。個々の形態が確立されていない形態分化の多様性と把握することができる。

(3) 石器製作技術

剥片剥離技術についても多様性が指摘される。縦長剥片剥離技術は、より縦長指向的な石刃剥離技術は見られず、幅広で身の厚い縦長剥片を剥離するものが主体である。更に同一打面からの連続的な剥離も見られず多くても数回の剥離に留まる。このため、目的剥片は著しく規格的でなくなっている。ナイフ形石器の素材の中には縦長剥片も存在するが、これらは概して剥片剥離が遺跡内で看取されず、素材として搬入された可能性が高いものが多い。一方、横長剥片剥離技術はブロック内で集中した剥片剥離がみられ、その技術系統も多種のものが存在する。打面と作業面を交互に入れ替えて剥離作業が進行するもの、打面が石核素材の周囲を巡るもの、石核素材に盤状剥片を用い底面を有する横長剥片を作出するもの、打面が先行する剥離面をランダムに移動するものなどがあり多様なあり方を示している。上仁羅台遺跡第8ブロック・西長山野第9ブロックを典型例とする。これらの横長剥片剥離技術から生産される剥片は、盤状剥片素材の剥離技術を除いてその形態の規格性にばらつきがあり、縦長剥片剥離で生産される素材と同様に非画一的である。素材が多様なものとなることは、ナイフ形石器・台形椗石器等の素材利用がより選択的なものとなっていることが想定でき、一連の剥片剥離工程の連関が弱いものであると評価できよう。また、横長剥片剥離技術は黒曜石以外の石材を用いるのが一般的で、特に安山岩を多用していることが認められる。剥片剥離技術を全体的にみれば、横長剥片剥離技術が主体であり、より横長指向に偏向していることが考えられる。

(4) 国府系石器群の共伴について

西長山野遺跡第3ブロックでは国府型ナイフ形石器とそれと同一母岩の剥片、破片が共伴している。石材は珪質頁岩であり接合資料は得られなかったが、剥片・破片類のあり方からみて、この国府型ナイフ形石器は当ブロックで製作されたものと考えられる。同一の母岩から2点のナイフ形石器が製作されているが、1点(第78図12)は底面は保持するものの国府型ナイフ形石器の形態の典型例とは言えず積極的な評価はできないが、もう一点のナイフ形石器(第78図11)については国府型ナイフ形石器の範疇に含めて考える必要がある。

この国府型ナイフ形石器の形態と製作技術について観察すると、以下のように整理される。

1. 盤上剥片素材の石核から剥片剥離されたと想定される。
2. 剥離された目的剥片は、山形の打面調整が施されておらず背面に打面方向と同一方向の剥離面を持ち、打点は素材の中軸からずれ、「翼状剥片」とは異なる底面を有する横長剥片である。
3. 調整加工は打点及び背面の剥離面を切りとるように1側縁に連続して施され、対向する弧を描く底面を刃部としている。

ここで整理された製作技術は石核や接合資料から得られたものでなく、ナイフ形石器、剥片類の諸形態から類推したものであり、やや不確かさはあるが、概ねこうした過程をへて製作されると考えられる。ここで得られた剥片剥離技術は瀬戸内技法とは異なるものであり、打点の移動、目的剥片の形態などは三国技法に類似する。国府型ナイフ形石器は翼状剥片を素材とするという定義に従えば本遺跡の例も国府型ナイフ形石器とは呼べないということになる。この問題については、織笠氏による「殿山技法」を提唱した論文に詳しいもので多くは触れないが、瀬戸内技法によらないで国府型ナイフ形石器が製作されることを明示的に論じている。国府型ナイフ形石器がその中心地域以外で製作されるとき、その在地の剥片剥離技術基盤の構造との関係により国府型ナイフ形石器の製作技術も変容されるという視点で、瀬戸内技法と殿山技法の共通点と相違点を考えていく方向性は重要である。そうした視点に立脚しなければ、国府型ナイフ形石器は—国府型ナイフ形石器と呼ぶ呼ばない、国府型ナイフ形石器であるでない—という研究者間の認識論の差異の問題に陥ってしまう可能性を内在している。この考察であえて「国府型ナイフ形石器」の名称を用いるのもそうした方向性による。本石器群は上記の諸特徴から、殿山技法と同様に瀬戸内技法によらないで国府型ナイフ形石器を製作する石器群の範疇に属すると評価される。

関東地域で国府型ナイフ形石器が検出されている遺跡は神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡、同県橋本遺跡、埼玉県殿山遺跡、同県中砂遺跡などが知られる。また、瀬戸内技法に関連して千葉県彦八山遺跡第4ブロックでは三国技法類似の接合資料が検出されている。本遺跡の資料が製作技法の面で断片的なものであるため、具体的な製作技法技術の比較検討にまで及べないが、こ

ここでは石材の面について見ていくこととする。柏ヶ谷長ヲサ遺跡、橋本遺跡の国府型ナイフ形石器例は凝灰岩、殿山遺跡はチャート、中砂遺跡は粘板岩、彦八山遺跡では国府型ナイフ形石器はないが安山岩を石材としている。また、殿山遺跡では凝灰岩、黒曜石の盤状剥片素材石核についても国府型ナイフ形石器の素材を生産する石核として評価している。西長山野遺跡第3ブロックの国府系石器群は黒色斑点が入る乳黄白色の珪質頁岩である。また同ブロックから検出された砂岩製の盤状剥片素材石核も同種の一群として評価しておきたい。上記の例を見ると織笠氏の指摘するように「南関東における国府型ナイフ形石器はきわめて多様な石材からなっている」ことが再認識される。ここで着目したいのは遺跡における石材利用のあり方である。本遺跡で珪質頁岩は黒曜石、安山岩に次いで多用されている石材であるが、国府型ナイフ形石器の素材となる珪質頁岩と同種のは稀少であり、ブロックでのあり方も異質な存在である。石材の面からみれば本遺跡の国府系石器群は構造外的な存在であると言えることができよう。下総台地における旧石器時代の石材利用を通観するとき、石材利用の量的な面で相模野台地・武蔵野台地・大宮台地と軌を一にするような石材利用の傾向を黒曜石石材などに見ることができる。しかし、特徴的・異質な製作技術、器種においては珪質頁岩を石材利用している例が多い。こうした傾向は、仮説的な表現であるが、下総台地における石材獲得の特殊性の一端が表層化していると考えられるのではないだろうか。

(5) 尖頭器の共伴について

西長山野遺跡第6ブロックで尖頭器(第87図1)が検出されている。黒曜石を石材に、厚みのある横長剥片を素材として片面に面的な調整加工が施される。下半部に最大幅を持ち先端部の側縁が対称となるような細部加工が看取される。筆者は尖頭器の器種認定に際して先端部を意図した面的な調整加工を1つの根拠としており、この石器は尖頭器として器種認定する十分な形態を保持していると考えた。また本文中にも触れたが、この尖頭器が検出された第6ブロックは掻器・削器が多数製作されているブロックであり、素材形態、調整加工の技術的あり方に共通性が看取される。こうした面からこの尖頭器は、槍先に装備され飛び道具としての用途を想定するよりは掻器・削器と同様の機能を想定する方が概然性が高いと考えられる。

尖頭器と認識される石器にはいくつかの機能が想定されると考えられ、この尖頭器もこうした形態の一群の範疇に含まれると考えられる。従って、この尖頭器は飛び道具としての尖頭器の発生問題に直接的に結び付かないと考えている。ただ、ここで注目したい点はV層・IV下層段階の石器群には、その石器技術基盤の中に尖頭器を製作する技術要素をすでに具備している点である。この視点で逆に尖頭器の発生問題を考えると、技術的な共通性だけで尖頭器の発生問題が割り切れないことを示しており、依然として尖頭器の発生問題については多様な視点からのアプローチが必要であると考えられる。

(6) 石器群の編年的位置付け

これまでⅣ・Ⅴ層で検出された上仁羅台遺跡第2文化層、西長山野遺跡第1文化層の石器群について石材・器種・石器製作技術の各要素に検討を加えてきた。さらに、国府型ナイフ形石器の共伴と、尖頭器の共伴について考えその内在する問題を指摘した。ここでは各要素についてまとめながら本文化層の編年の位置付けについて考えていくこととする。石材・器種・石器製作技術のそれぞれの特徴は次のようにまとめられる。

1. 石材は、黒曜石石材が量的に主体を占めながら、質的に多様な石材を獲得している。
2. 器種は、器種組成に多様性が看取される。ナイフ形石器が各器種の中で卓越するものの、削器・搔器などが多数存在し、旧石器時代の器種がすべて出揃った感がある。こうした傾向は器種形態にも及び、個々の形態のヴァリエティーが著しいという現象を表出させている。
3. 剥片剥離技術は、各種の剥片剥離技術がみられ多様なあり方を示すが、横長剥片剥離技術が主体となっている。生産される目的剥片は規格的でなく、器種の素材利用に選択的な利用が想定される。

こうした諸特徴は武蔵野台地のⅤ層・Ⅳ下層段階と共通する様相を示しており、上仁羅台遺跡第2文化層、西長山野第1文化層が当核期に位置付けられることは疑いのないところであろう。近年、Ⅴ層・Ⅳ下層段階の石器群についていくつかの論考が出されている(伊藤 1990a・1990b・1991、服部 1991)。これらは分析方法の差異はあれ、前段階(Ⅵ層段階)からの変化の諸様相を把握し、Ⅴ・Ⅳ下層段階の特徴を推察するという方向性を有している。なかでも伊藤の論考は意欲的で、Ⅴ層とⅣ下層段階を細分する考えを提起している。当石器群の各要素についてⅤ層的な要素とⅣ層下部的な要素を取り上げてみると、Ⅴ層的な要素として国府型ナイフ形石器が共伴すること。搔器・削器の組成に占める割合が高いこと。角錐状石器は1点存在するが、これは未成品的なもので、その技術的萌芽はみられるが、石器群のなかで特徴的なあり方を示していないこと等が挙げられる。Ⅳ下層的な要素として、剥片剥離がより横長指向となること、ナイフ形石器の形態にヴァリエティーが著しいこと。礫群が特徴的に存在すること等が挙げられる。こうした諸特徴を見ると、当石器群は両段階の要素を具備し複雑な状況を呈することが推察される。伊藤も指摘しているとおりⅤ層とⅣ層の変化は漸移的な傾向を示し、明確に峻別することは出来ないものと考えられる。当石器群はⅤ層的な要素が強いもののⅣ下層段階へ変遷していく要素も把握されることから、Ⅴ層の最終段階の編年の位置付けを考えておきたい。

3. 礫群について

上仁羅台遺跡でまとまって礫群が検出された。従来、千葉県下の礫群の報告では礫群自体の検出の少なさ、規模が比較的大きくないこともあってか、やや見過ごされてきた感がある。そ

のため今回の報告では礫群の有する属性を可能な限り明示することにつとめた。この項では上仁羅台遺跡の礫群についてまとめ、各礫群の関係について考えていくこととする。

上仁羅台遺跡では9箇所の礫群を設定した。礫総数は125点、礫個体46個体であった。

(1) 分布

まず分布状況を検討してみる(第7図参照)。すべての礫群は第2文化層のブロックの分布域で検出されている。この9箇所の礫群は南北約15m東西約20mの範囲に各礫群が0.5m～2、3mの間隔をもって散在している。西側に位置する第1～3号礫群と中央から東側に位置する第4～9号礫群とがやや間隔が離れて分布しており、分布的にはそれぞれが1群をなすような状況が看取される。また東側の1群は14D-00区の礫のない空間部の周りをそれぞれの礫群が環状に分布している状況にも視覚的には見える。

(2) 規模・密度

各礫群の平面分布の規模についてA～Cにクラス分けしてみると、

A. 長径3m、短径2m以上の規模の礫群(第2・3・5・6・7・8号礫群)

B. 長径2m、短径1m以上の規模の礫群(第1・4号礫群)

C. 長径、短径共に2m未満の規模の礫群(第9号礫群)

のように分類される。比較的規模の大きな礫群が多いが、さらに平面分布の密度についてa～cに分類してみると、

a. 分布範囲に一樣に高い密度で分布している礫群(該当礫群なし)

b. 分布範囲の中心或いは一方に高い密度で分布し、その周囲或いは他方に散漫に分布する礫群(第1・2・4・5・6・8号礫群)

c. 分布範囲に散漫に分布する礫群(第3・7・9号礫群)

のように分類される。

規模と密度の関係を見てみると、Aa類の礫群は存在せず、Ab類の礫群は第2・5・6・8号礫群、Ac類の礫群は第3・7号礫群、Bb類の礫群は第1・4号礫群、Cc類の礫群は第9号礫群が該当する。この分類結果から、これらの礫群はAb類の礫群が一般的であることが理解できる。さらに各礫群の規模と密度の関係は正の関係とはならず、特殊な様相を呈する第9号礫群を除いて、規模が大きいかほど散漫な分布状況になっていることが看取される。つまり比較的大規模な礫群が主体を占めるが、それはより分布密度が高い部分以外の周囲が散漫になる現象によるものだと考えられる。

(3) 点数・重量

各礫群の構成礫の総点数について検討すると第5号礫群の22点が最も多く、第9号礫群の5点を最少とし、3号礫群の7点以外の礫群はすべて10数点に収まる。数量的なばらつきは少ないが、構成礫数は南関東の他地域の礫群に比較してきわめて少ない。総重量について分けてみ

ると、A. 1000 g を越える礫群(第5・7礫群)、B. 1000 g 以下500 g 以上の礫群(第2・4・6・8・9号礫群)、C. 500 g 以下の礫群(第3号礫群)と分けられる。構成礫数の均等な分布状況からこうした総重量の差異は構成礫の平均重量差に求められると考えられる。そこで平均重量について見てみると、Aの第5・7号礫群は平均重量が60 g 台であり、逆にCの第3号礫群は20 g 台である。Bは第9号礫群以外の礫群は平均重量が30~40 g 台に収まり均等である。構成礫数が最少の第9号礫群は平均重量が135.9 g を量り、各礫群の中で平均重量の値が卓越して高い。

(4) 石材

各礫群の構成礫の石材について観察していく。礫群内で同一個体礫がまとまる状況が一般的であると考えられるので、構成礫数が10数点と少ない場合、各礫群の石材組成は偏する可能性があり、あまり有効な傾向は統計的に把握されないと考えられる。そこで9箇所の礫群全体の石材組成についてのみまとめることとする。使用された石材は花崗岩、安山岩、砂岩、チャート、閃緑岩、凝灰岩、玄武岩、メノウ、泥岩と比較的多種多様の石材を用いている。この内で石材組成に占める比率が高い主要石材は、比率が高い順に花崗岩33点(26.4%)、安山岩30点(24.0%)、砂岩29点(23.2%)、チャート18点(14.4%)である。この4石材で石材総数の9割近くを占める。遺跡の近くに礫群使用に適した石材のない下総台地では、礫群の石材の供給源については十分に説明されてなく不明の点が多い。この面での石材の検討も急務であると考えられる。

(5) 破損・赤化・付着物

次に破損・赤化・付着物について検討していく。破損については遺存状態が完形礫の50%未満の礫(分類のd)が多数を占める。第1・5・9号礫群以外は各礫群ともd類が90%以上を占めている。逆に第9号礫群は完形礫が3点(60.0%)と高い比率を示し、先に述べた平均重量の値の高さの根拠となっている。赤化では第3号礫群以外は各礫群とも90%以上の赤化(焼成礫)比率である。付着物については、そのほとんどがスス状付着物であり、タール状付着物は第8号礫群で2点確認されたのみである。スス状付着物は第5号礫群で6点(27.2%)、第8号礫群で4点(33.3%)、第9号礫群で2点(40.0%)とやや高い比率を示す。しかし他の各礫群では1~3点ずつしか確認されなく、全体の比率でもスス状付着物が確認される礫は20%弱の比率に留まる。

(6) 接合・礫群の関係

ここではこれまで検討してきた各分析結果を踏まえ、さらに礫群の接合状況を読み取り各礫群の属性、礫群相互の関係について解釈を行いまとめる。

まず礫群の構成要素の特徴的な差異から他の礫群とは峻別される礫群として第3号礫群が挙げられる。本文中でも若干触れたが、第3号礫群は規模が大きい割に構成礫数は7点と少なく、総重量、平均重量共に最少である。また非焼成礫も3点(42.8%)と比率が高い。また礫群内で

の接合は近接する1例だけであり、礫群外の接合も隣接する礫群との接合である。こうした状況は第3号礫群として分離した集合が、有為な集合でなく周囲の礫群からの散礫集合である可能性を強くする。つまり、1つの礫群としての機能を果たしていないと考えられる。一方、第3号礫群とは異なる意味で他の礫群と峻別されるものに第9号礫群が挙げられる。第9号礫群は規模が最小であり、構成礫数も5点と最も少ない。しかし、総重量は679.7gを量り他の礫群と遜色ない重量である。先に述べたように完形礫の比率が高いことが特徴的で、そのため平均重量も他の礫群全体の平均重量の3倍近い値を示している。また付着物の比率の高さも際だっている。さらに第9号礫群の構成礫は礫群内で完結する個体礫となっている点も注目される。これらの各要素の差異は、第9号礫群が他の礫群と機能的な面での相違があることを顕在化させている、あるいは第9号礫群と他の礫群との使用(消費)サイクルの面での相違があることを顕在化させているという2側面からの仮説を喚起する。

第3号礫群及び第9号礫群以外の礫群について接合関係を検討していく。まず礫群内の接合の面から見てみると、第5号礫群が5例12点と多くまた完形礫の比率も高い。さらに礫群外とは1個体礫しか個体を共有しないことからやや他の礫群とは差異が感じられる。次に礫群外の接合についてみると第1号礫群と第2号礫群間の接合が顕著であり個体の共有も多い。さらに8号礫群を介在しての接合が存在する。また第4号礫群と第6号礫群の接合も顕著で近接した接合が見られ個体の共有率も高い。第4号礫群と第7号礫群間、第6号礫群と第7号礫群間の接合が見られ、個体の共有も存在する。さらに第4号礫群と第7号礫群の接合の例は第5号礫群を飛び越えて接合し第8号礫群を介在して接合している。これらの諸接合関係をまとめてみると、第1・2・8号礫群の1群(A群とする)と、第4・5・6・7号礫群の1群(B群とする)とに分離できることが明瞭である。このA群とB群は、両群内における各礫群間の関係で等質的なあり方を示す。それは、A群の第1号礫群と第2号礫群の緊密な関係、それに対比されるB群の第4号礫群と第6号礫群と7号礫群の緊密な関係である。また8号礫群は礫群内の接合は少ないものの構成個体は礫群内で完結する比率が高く、同様の要素を持つ礫群として第5号礫群と対比できる。こうした対比を考えるとA群の第8号礫群を介在とした第1号礫群と第2号礫群の関係のあり方と、B群の第5号礫群を介在とした第4号礫群と第7号礫群の関係のあり方についても対比が可能である。A・B両群の各礫群の諸関係のあり方は2つの等質的な構造体として概念化される。

各礫群の属性、各礫群間の接合関係を基に礫群の構造について検討を加えてきた。その結果、9箇所の礫群は、礫群として機能していない第3号礫群、他の礫群との機能面あるいは消費サイクル面での特殊性が看取された第9号礫群、そして、これら以外の各礫群はA群とB群という等質的な要素を持つ2群の構造体として把握された。礫群の個体共有関係の持つ意味、さらに礫群の機能面、他遺跡との礫群の対比等には今回分析が及ばなかった。今後の課題としたい。

第2節 縄文時代

上仁羅台遺跡・西長山野遺跡の縄文土器について

上仁羅台遺跡と西長山野遺跡で検出した縄文時代の遺構は、土坑や陥穴といったものに留まり、両遺跡とも集落を形成するまでには至っていない。全体的な遺物の出土状況は数単位のまとまりはあるもののさほど多くの遺物を包蔵していることはなく、包含層としてはごく散漫な状況を示すものとして捉えることができる。各時期の出土状況においては、中期段階では加曾利E式期の深鉢はほぼ単独の出土と考えてよく完形に近いことから、置き去りにされた可能性が高い。後期加曾利B式段階では両遺跡とも個体数、破片数とも最も多くなり、この時期に両台地が頻繁に利用されていたことがわかる。ただ、ともに集落を営むほどの状態までには行っておらず、キャンプサイトの的な利用に留まっているといえる。これらの状態は安行I式の段階まで続くようで、該期の資料もかなりまとまりがある。これは晩期においても同様で、姥山式・前浦式の段階で比較的まとまった個体数が出土している。したがって、両遺跡ともそれぞれキャンプサイトの的な性格の強い遺跡として捉えることができよう。

ここで、比較的まとまった資料となった後期後半の粗製土器について触れてみたい。加曾利B様式から安行様式にかけては、精製深鉢、粗製深鉢とも大きな変化が窺える。ことに粗製深鉢においては5群・6群土器で良好な資料が出土しているので簡単に触れてみたい。

5群1類：比較的粗い縄文を地文にする粗製深鉢で、施文形態により4つに区分している。aは頸部でしまる形態を示し、瓢状を呈すようにも思える。口縁端部と頸部に紐線による区画をもうけ、その内部に紐線による弧状、樽状のモチーフを描いている。比較的大型品である。bは口縁端部に沈線を施すもの。cは口縁端部にのみ紐線を施し、内面には沈線が1条めぐっている。dは縄文のみのものである。

5群2類：無文地に斜沈線を施したもので、頸部平行沈線区画の無文部をもつものや頸部を磨り消して無文部とするものがある。

5群4類：粗い縄文を地文にし、斜沈線を充填して頸部と口縁端部に紐線文を施したものを本類とした。胴部の斜沈線は間隔が開き地の縄文がはっきりと識別できるものが多いが、口縁部に施される斜沈線は比較的密で地の縄文の識別が困難である。cとしたものは頸部に紐線文を施すが、口縁端部には連続した刻目文を施しており端部には1条の沈線をめぐっている。

以上、5群の土器のうち、1類は加曾利B1式に、2類は加曾利B2式に、4類は加曾利B2から3式に対応するものと思われる。ただ、4類cについては後述する土器の手法の先駆的要素が認められることから下る可能性がある。

6群4類：無文地に斜沈線を施すもので、6つに区分した。

a：無文地になる以外5群4類とほぼ同様の施文を行い、器形上でもほとんど差異はない粗

製深鉢であるが、胴部の斜沈線は比較的密に施文されている。また、紐線文上の押捺も比較的密に施しているものが多い。

b：口縁端部がやや肥厚し内面に張りだすため若干内弯気味になる。また、端部には紐線文に変わり刻目文を施している。

c：口縁端部は肥厚し、より内弯傾向を増す。斜沈線は縦方向に近くなり口縁端部の刻目文の下部に沈線が施されている。また、頸部には爪形状の刻目文を施すものも認められる。

d：口縁端部と頸部に刻目文や沈線文を数条施し、斜沈線は間隔が広く縦方向に近くなる。頸部のくびれが認められ、口縁部は外方に若干開きながら端部で肥厚し内弯している。比較的斜沈線は浅い施文である。

e：口縁部は内弯し、端部にむかって徐々に肥厚していく。頸部はもたず砲弾形の形態をとるものと思われる。口縁端部のやや下方と胴部上位に紐線文を施している。斜沈線は縦方向のものやや斜めのものがある。縦方向のものは胴部ではやや斜めに方向を変えている。

f：砲弾状の器形となり口縁部は強く内弯している。また、口縁端部の肥厚の度合いも強くなる。斜沈線も弧状をなし紐線文間には弧状沈線を施している。

以上、6群4類の土器のうち、aは曾谷式に伴うものと考えられているが、5群4類と地文が異なる以外は器形・文様構成ともそれほどの変化がなく明確に分離できるかどうか検討の余地があるように思える。ことに、5群4類cが加曾利B式段階で多用される縄文を地文にもちながら斜沈線を充填しているものの、口縁部には沈線と刻目文を施すという6群4類b以下の土器の口縁端部の刻目文に通じる要素があることからより慎重にならざるをえないように思える。b・c・d・eは安行Ⅰ式の典型的な粗製土器で、文様にバラエティーがあることが特徴となろう。口縁部形態も内弯肥厚する安行Ⅱ式への過渡的状況をよく示しているといえる。口縁端部や頸部・胴上位にみられる刻目文や紐線文は5群2類c→6群4類dという刻目文の流れと、5群4類a・b(→)6群4類a→eという紐線文の流れを経て、安行Ⅱ式段階の6群4類fへと移行する紐線文の系譜をたどることが可能のように思われる。刻目文の系譜は安行Ⅰ式段階でその姿を消すのに対し、紐線文の系譜はその後晩期安行Ⅲa式まで継続していることは言うまでもなく、上仁羅台遺跡・西長山野遺跡の遺物からもそのことを窺うことができる。

引用・参考文献

- 安孫子昭二 1981 「関東・中部地方」『縄文土器大成3 後期』講談社
- 石橋広克 1991 『鏡子市余山貝塚』(財)千葉県文化財センター
- 伊藤 健 1990a 「2. 時期別の様相—主要遺跡の検討—(6)殿山遺跡V層」『石器文化研究2』石器文化研究会
- 伊藤 健 1990b 「ナイフ形石器文化の画期と変容」『物質文化』54 物質文化研究会
- 伊藤 健 1991 「A T降灰前後の様相—ナイフ形石器文化と広域環境変化」『石器文化研究3』石器文化研究会
- 大場啓雄 1971 「平尾遺跡調査報告I」平尾遺跡調査会
- 織笠 昭 1987a 「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』72-4
- 織笠 昭 1987b 「国府型ナイフ形石器の形態と技術」『古代文化』39-10,12
- 岡崎文喜・新津 健 1978 「八祖遺跡」八祖遺跡調査会
- 小林達雄 1973 「多摩ニュータウンの先住者」『月刊文化財』1月号
- 都 淳一 1989 『横芝町山武純山貝塚確認調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 鈴木公雄 1981 「関東地方」『縄文土器大成4 晩期』講談社
- 田村 隆 1987 「Ⅲ. 出土遺物1. 先土器時代の石器群」『松戸市彦八山遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 辻本崇夫 1987 「礫群の形成過程復元とその意味」『古代文化』39-7
- 服部実喜 1991 「A T降灰前後の様相—第Ⅵ層段階石器群の様相と変遷過程を中心として—」『石器文化研究3』石器文化研究会
- 保坂康夫 1987 「礫群使用の非日常性について」『古代文化』39-7
- 保坂康夫 1989 「礫群とブロックの関わりについて」『山梨考古学論集』Ⅱ
- 堀越正行 1977 「曾谷貝塚D地点」市川市教育委員会

写真図版





第1～8ブロック遺物出土状況



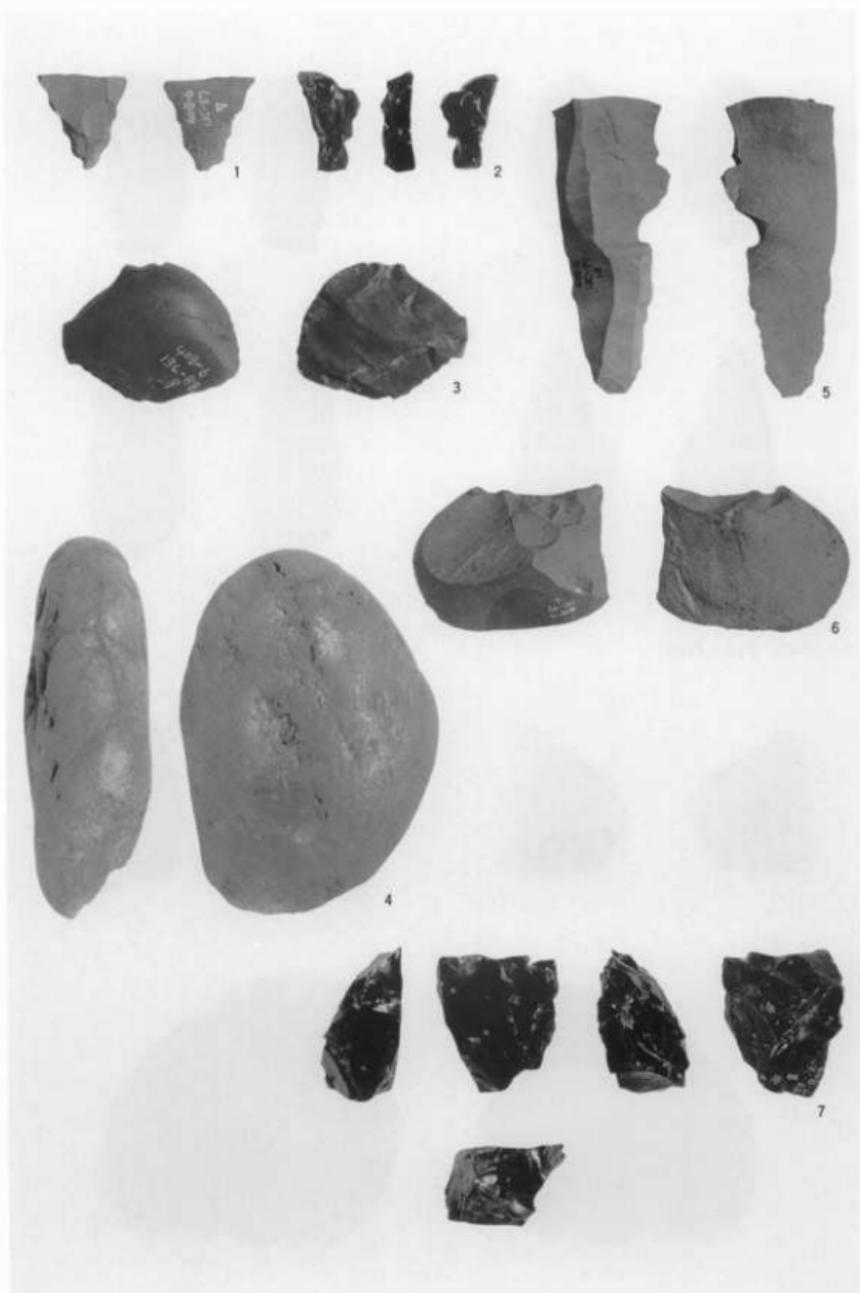
縄文包含層遺物出土状況



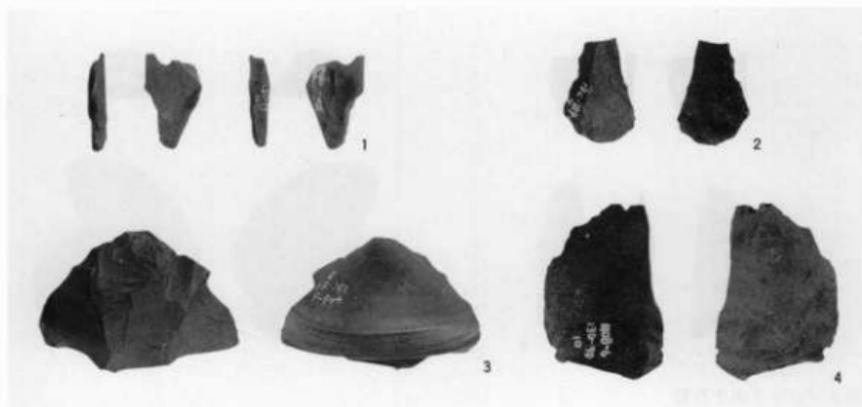
第1ブロック出土石器



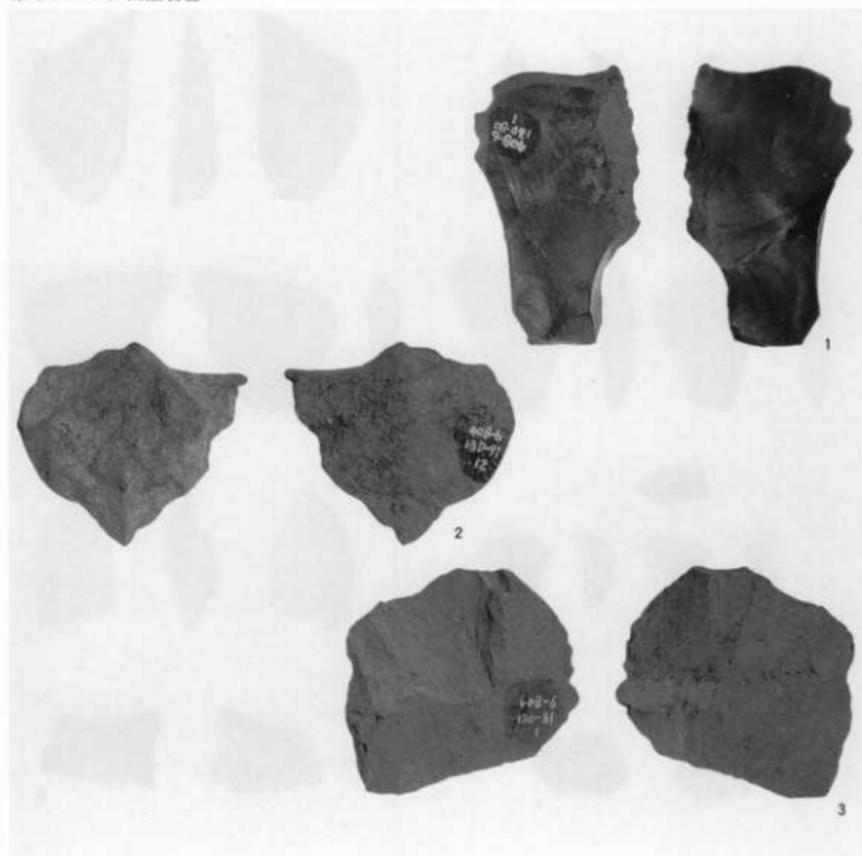
第2ブロック出土石器



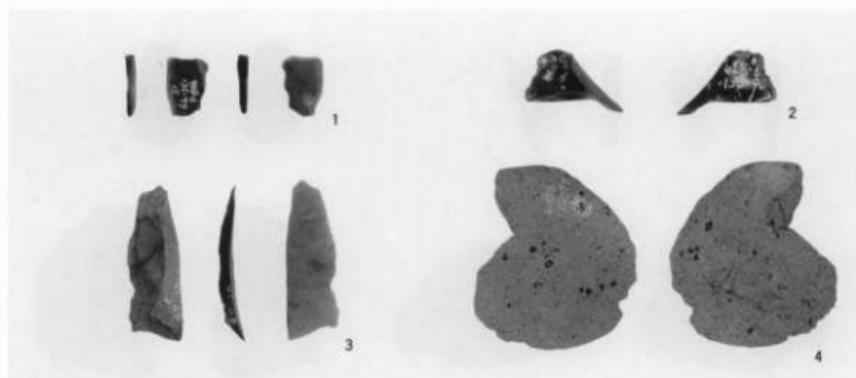
第3ブロック出土石器



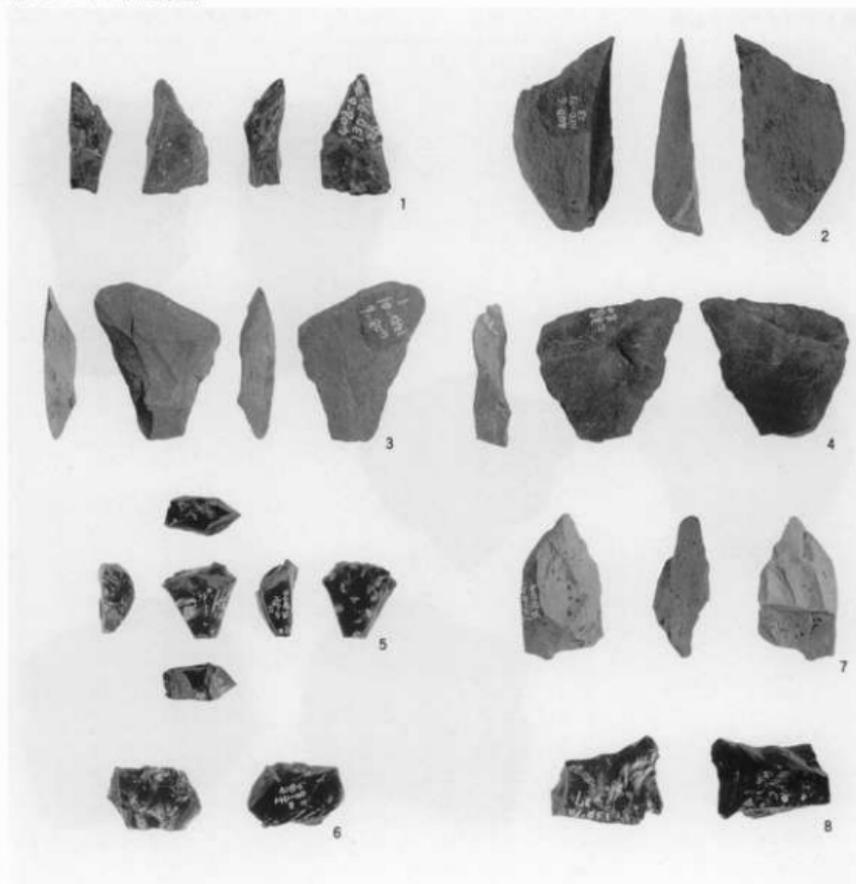
第4ブロック出土石器



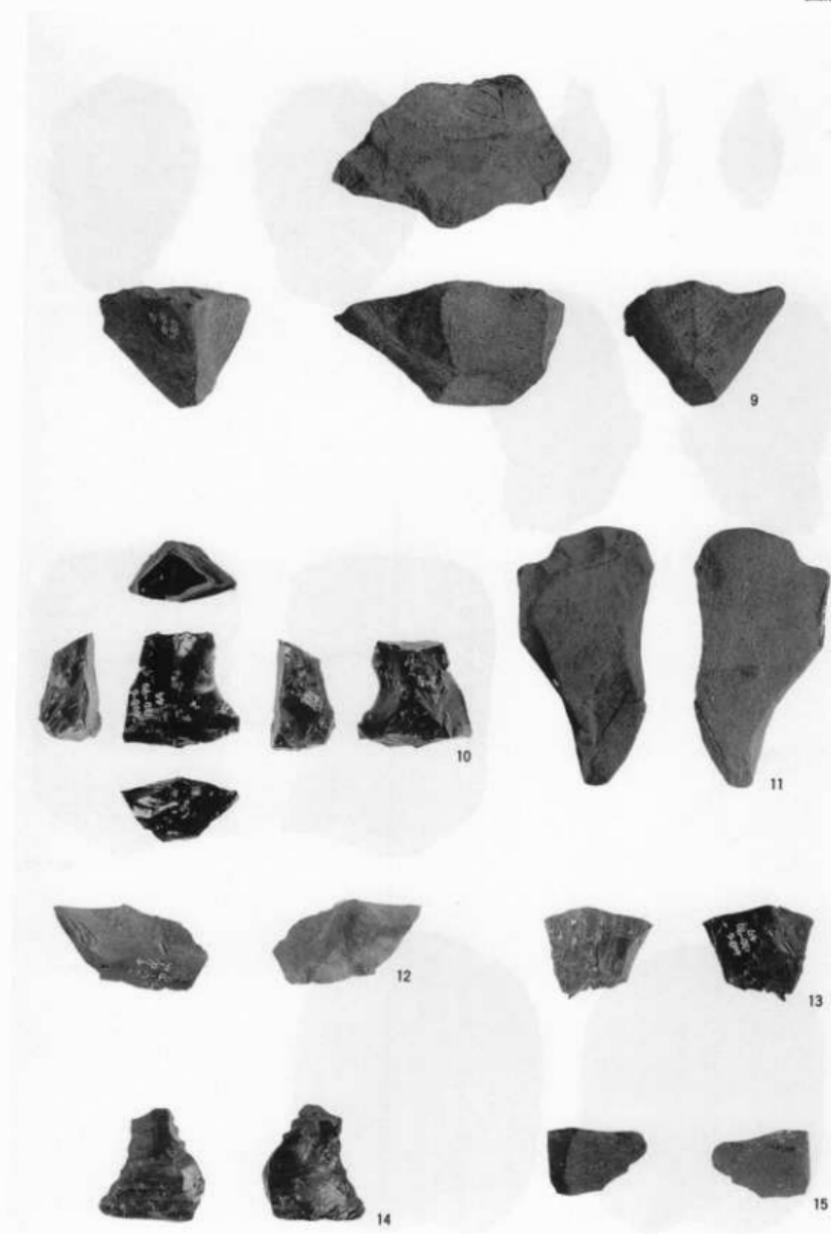
第5ブロック出土石器



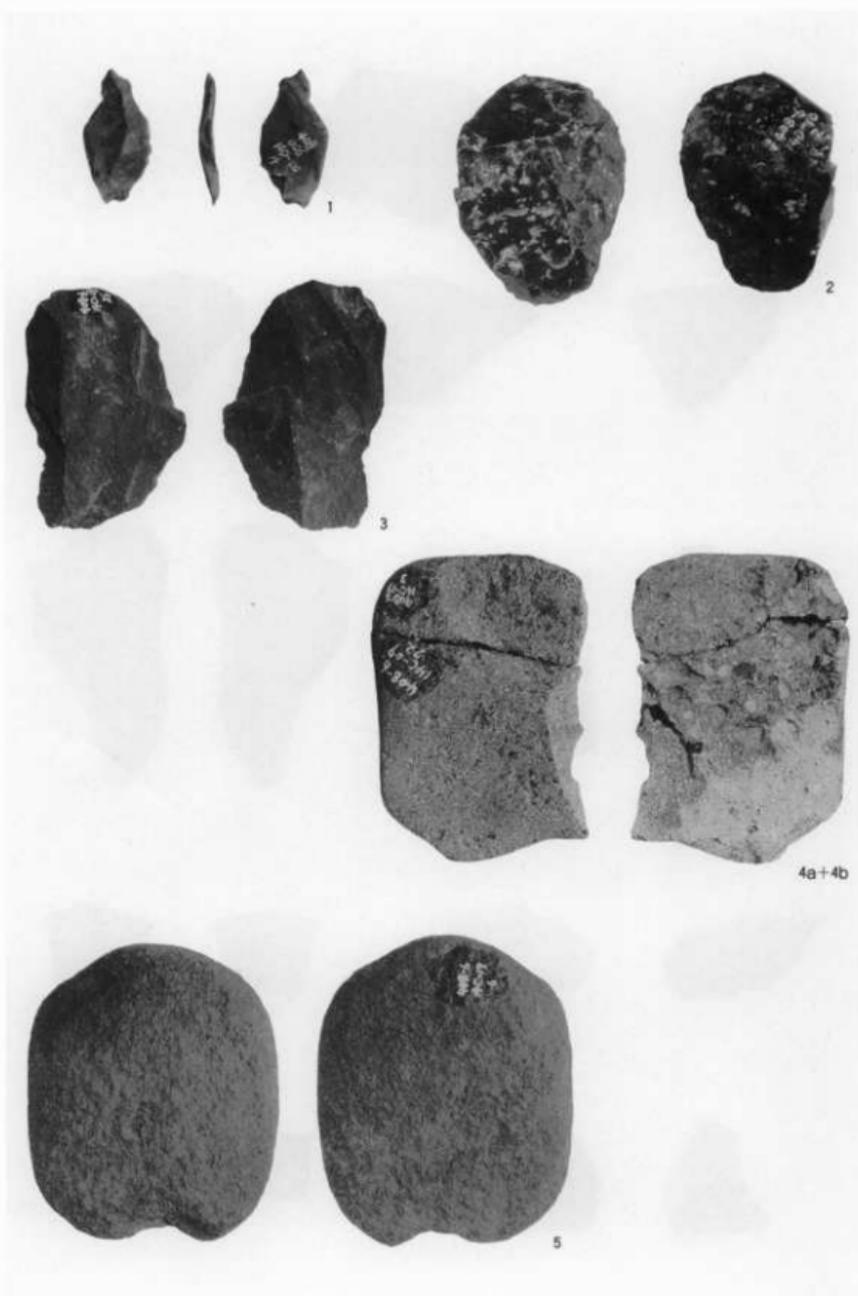
第6ブロック出土石器



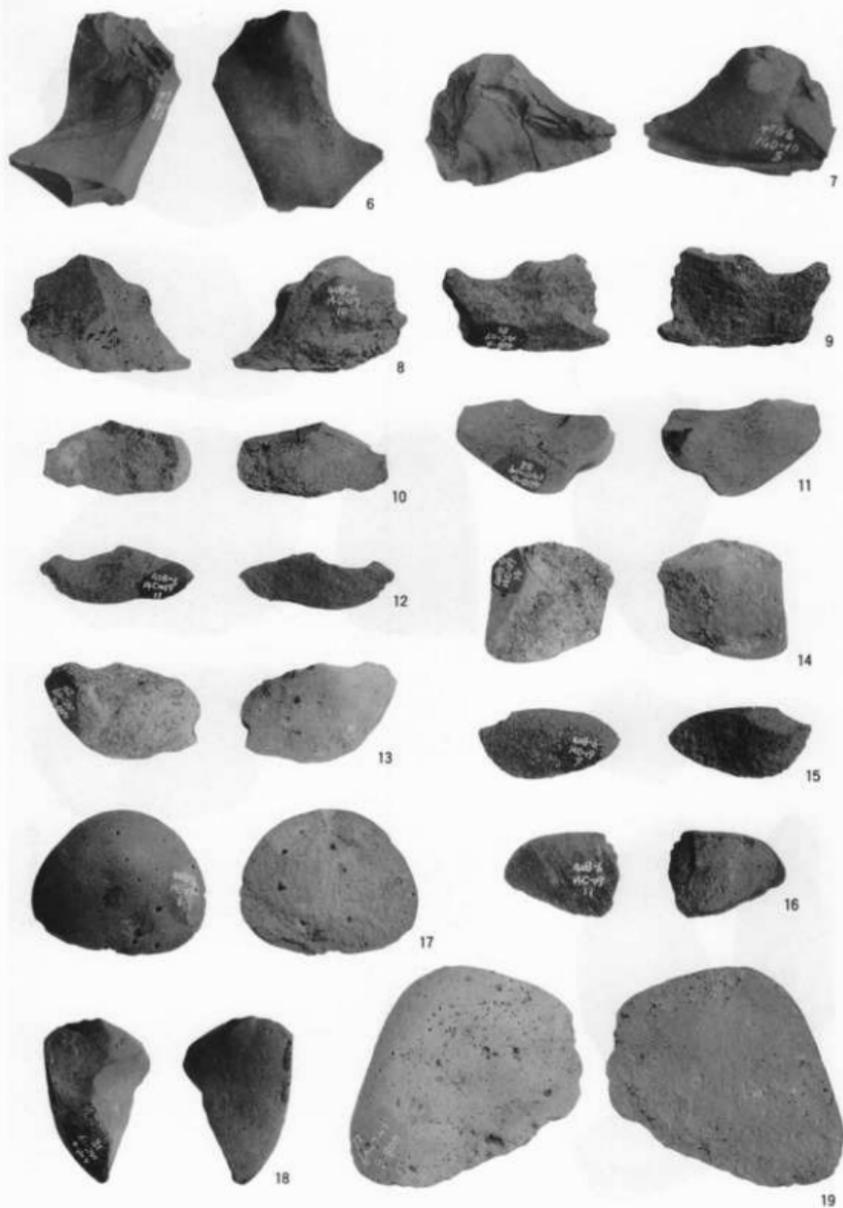
第7ブロック出土石器(1)



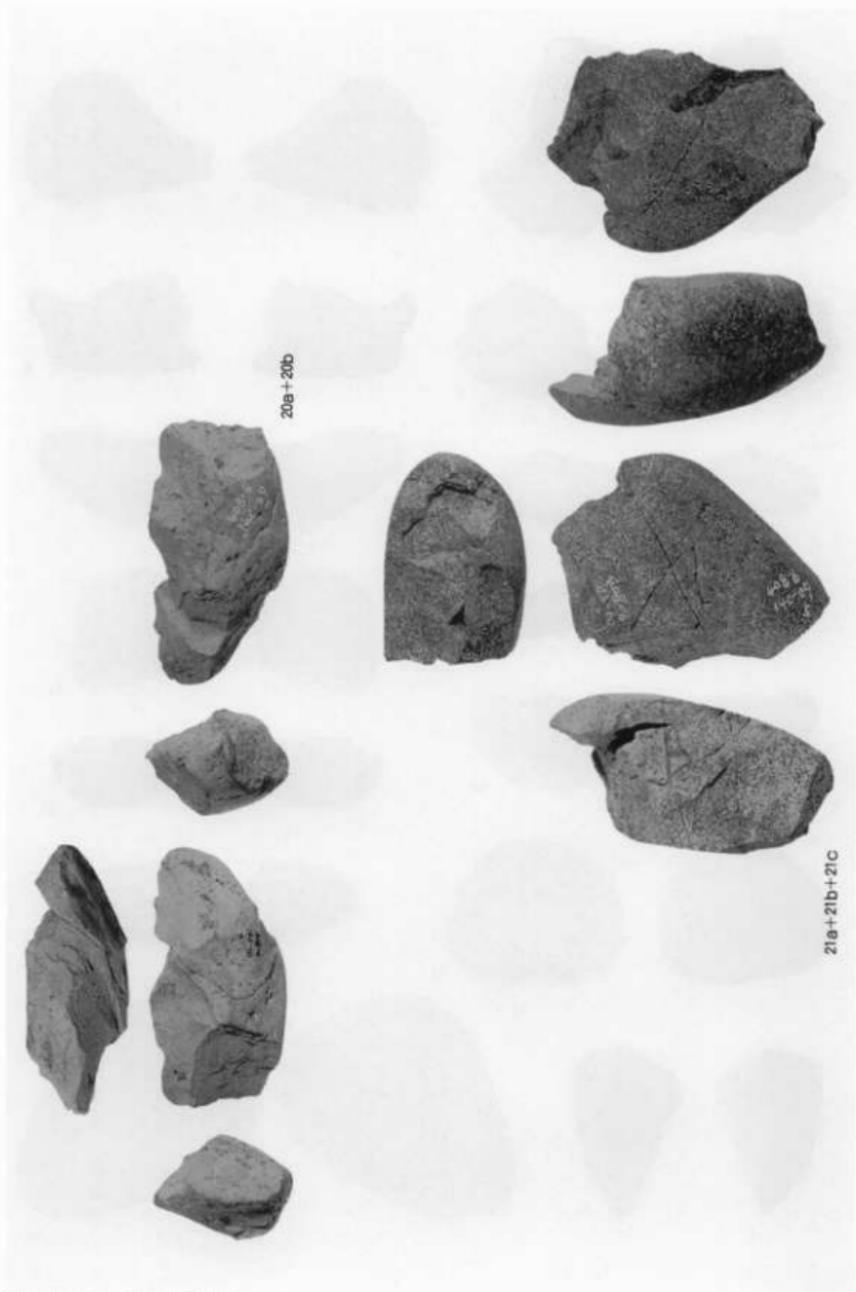
第7ブロック出土石器(2)



第8ブロック出土石器(1)



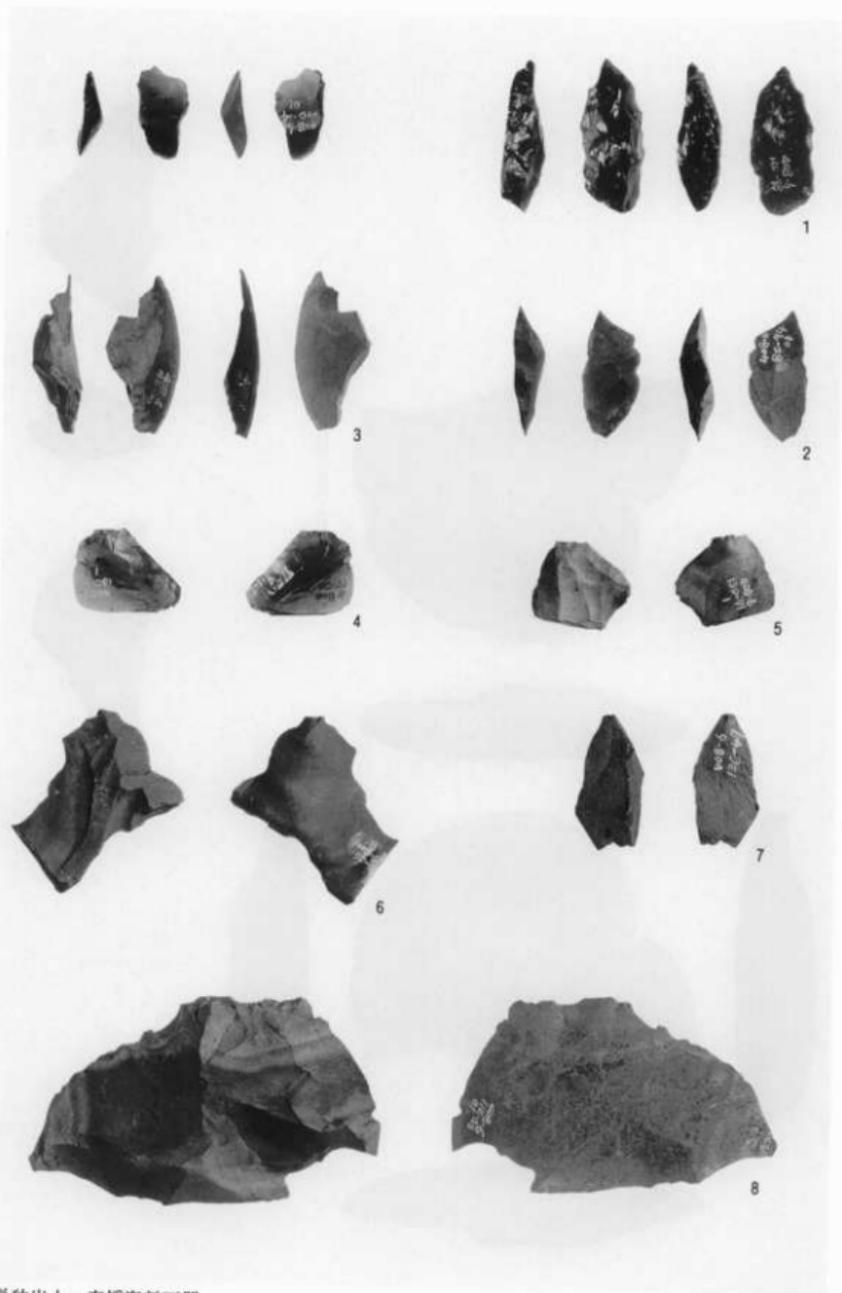
第8ブロック出土石器(2)



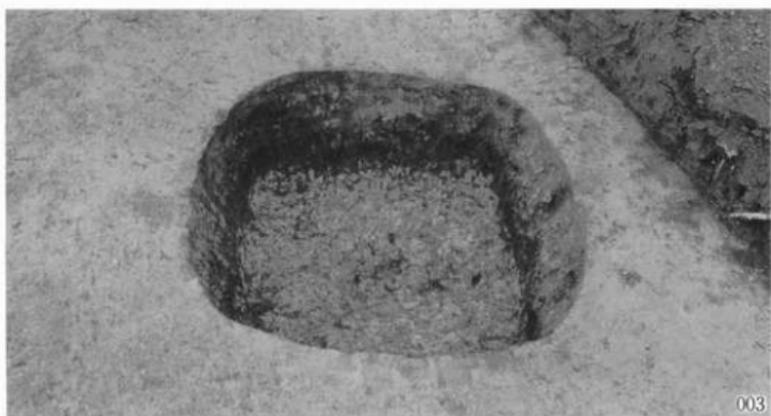
第8ブロック出土石器(3)



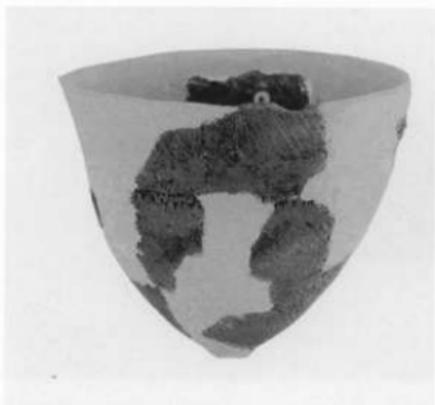
第8ブロック出土石器(4)



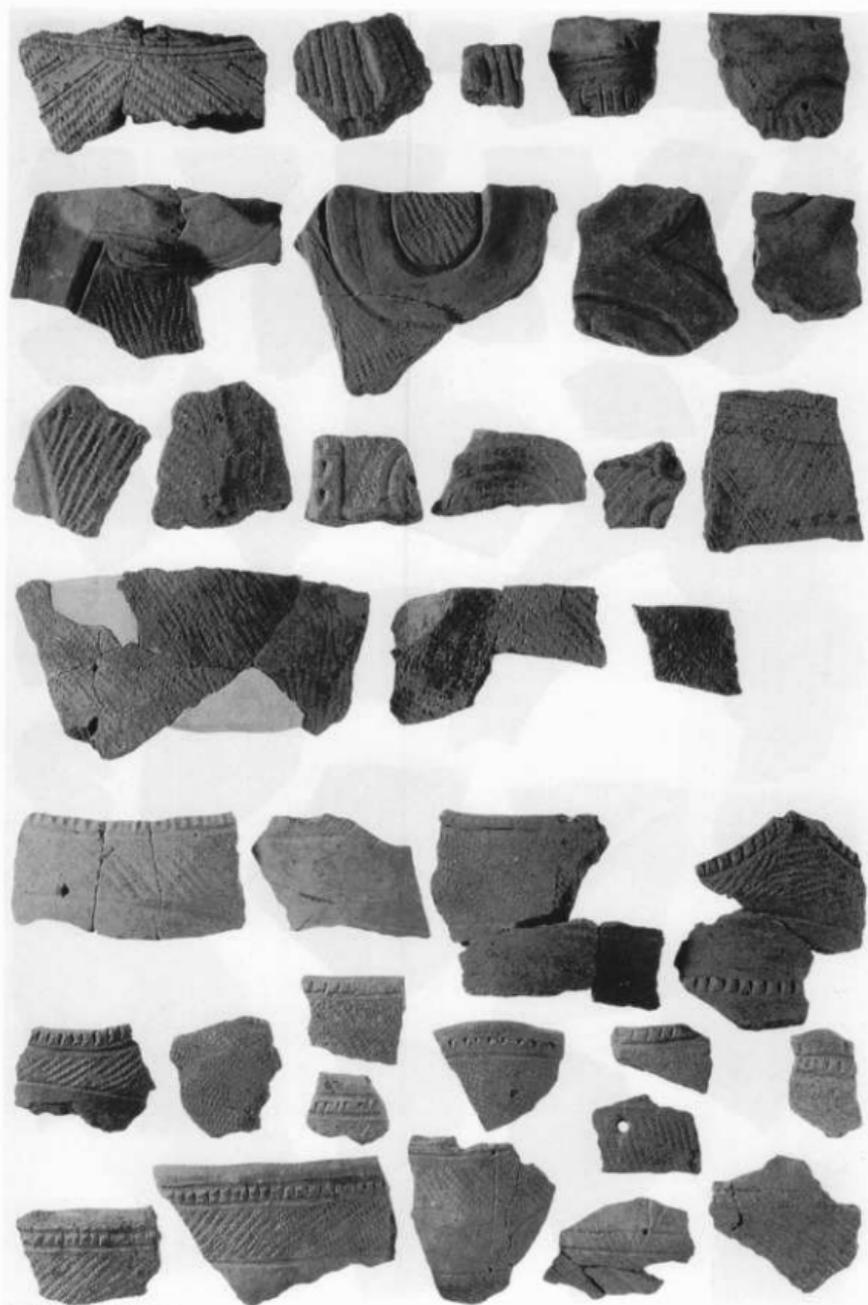
单独出土・表採資料石器



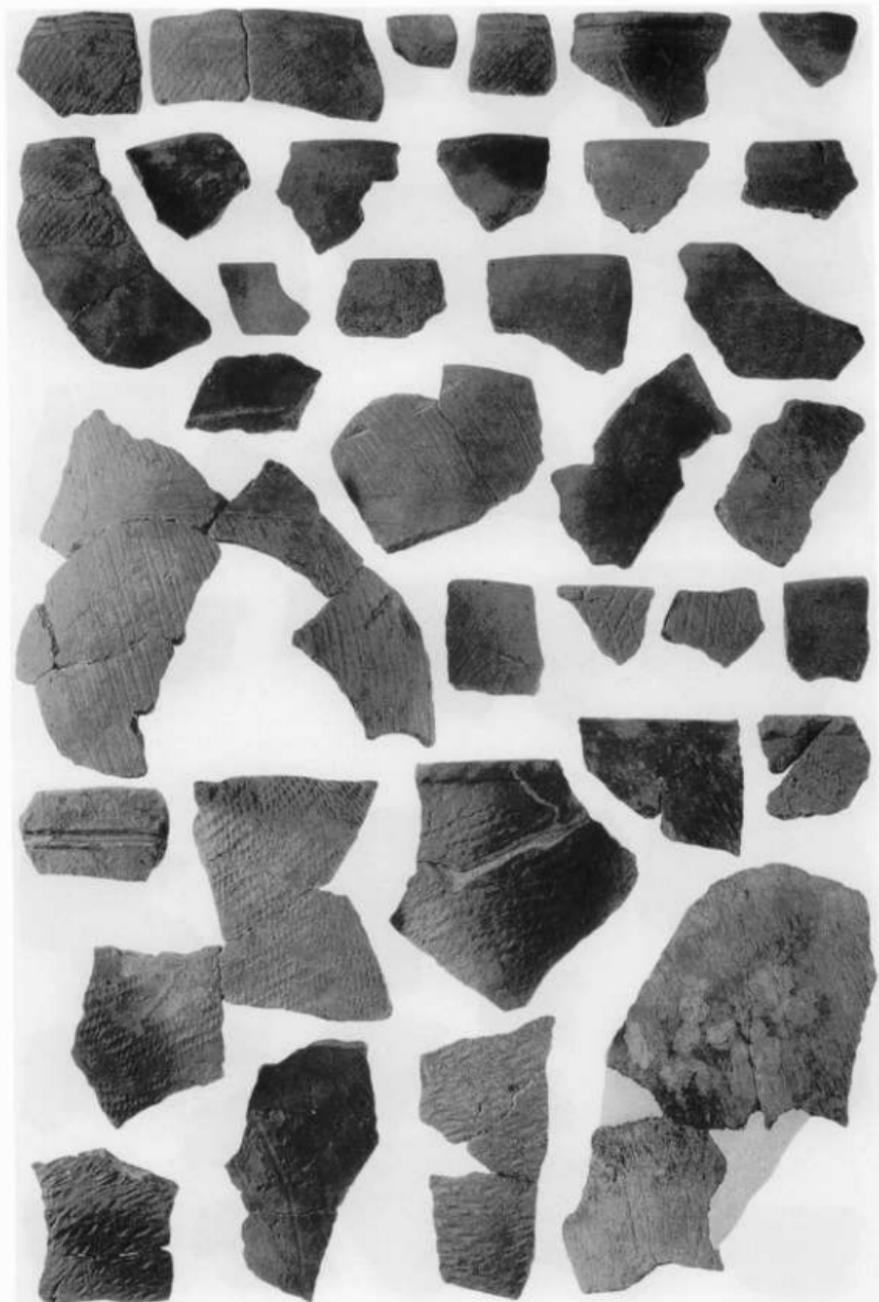
001・002陥穴、003土坑



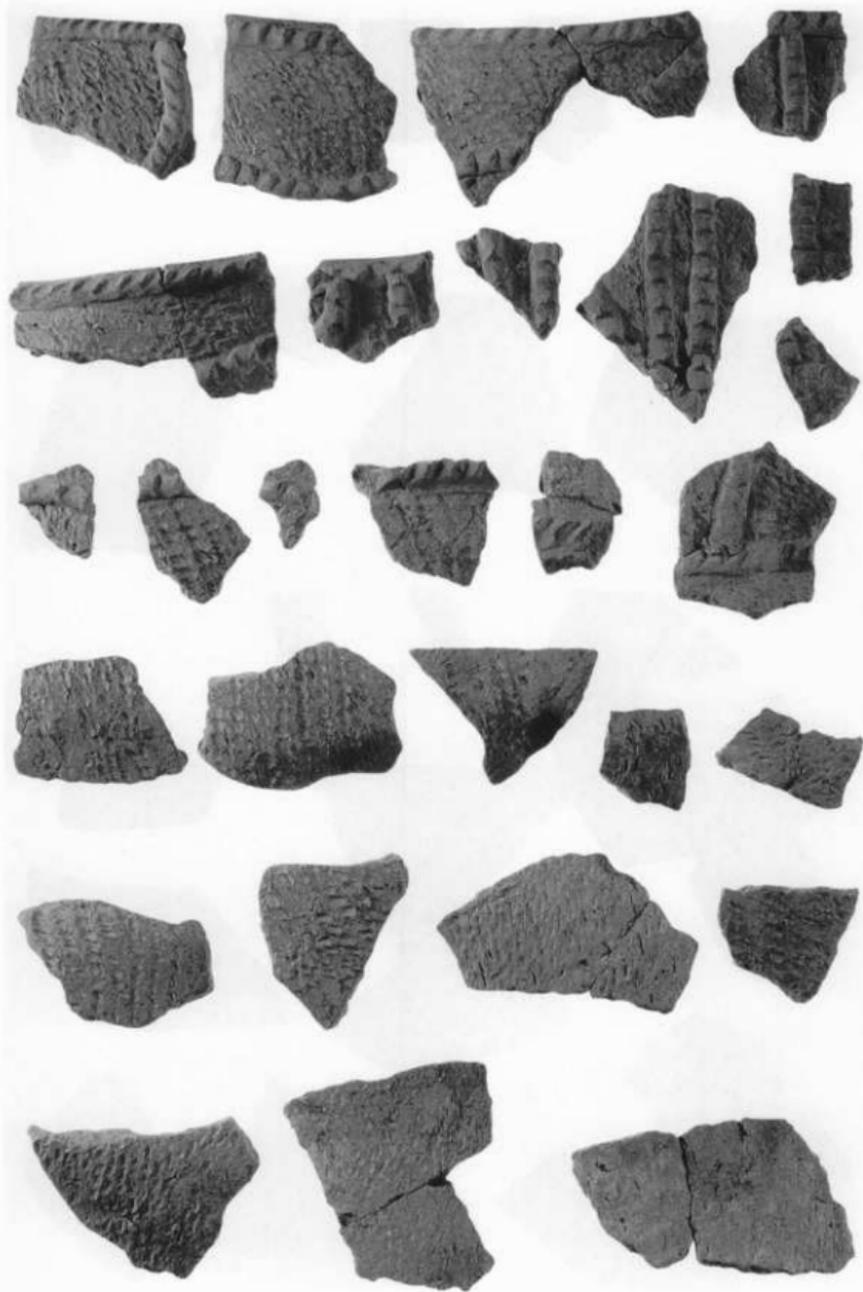
包含層出土土器(1)



包含層出土土器(2)



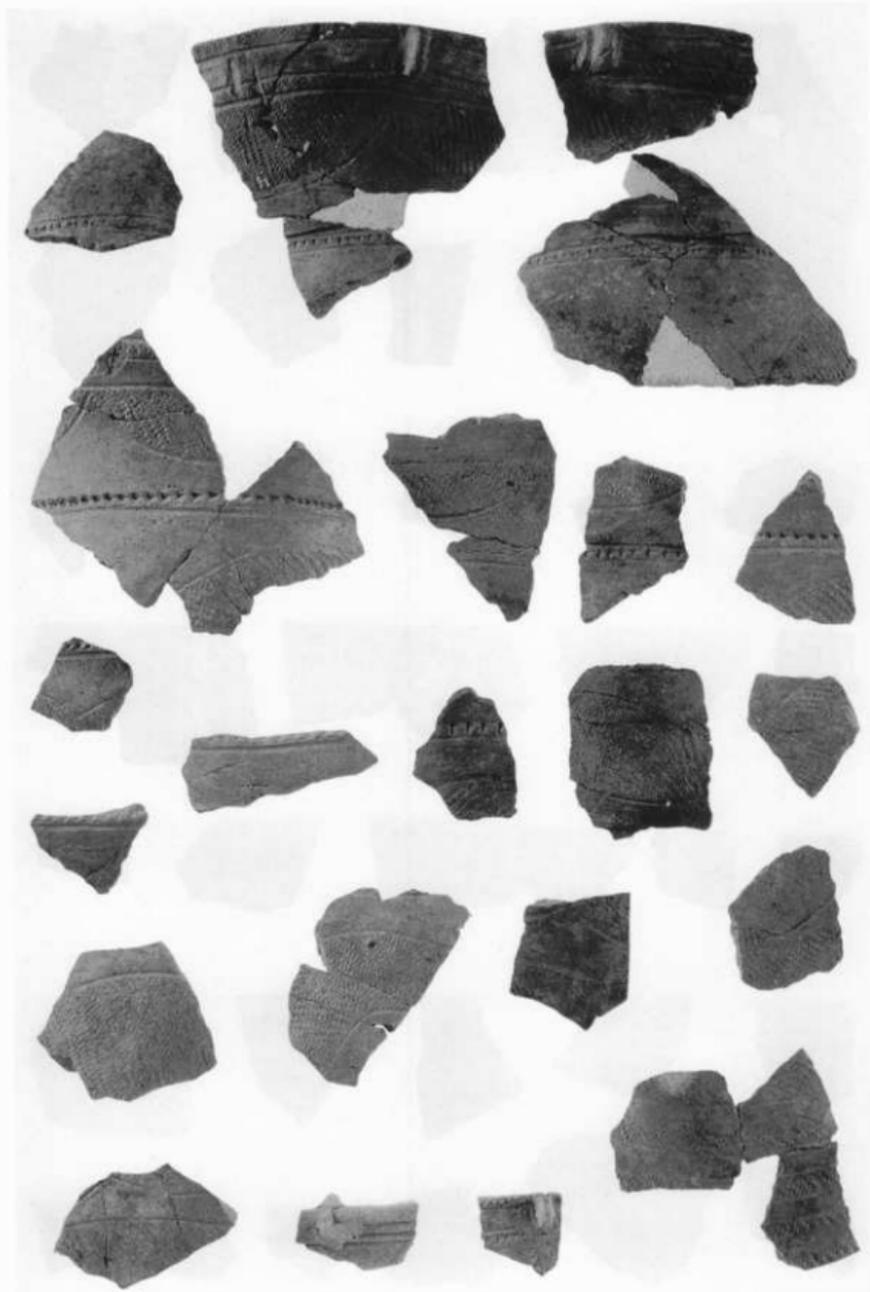
包含層出土土器(3)



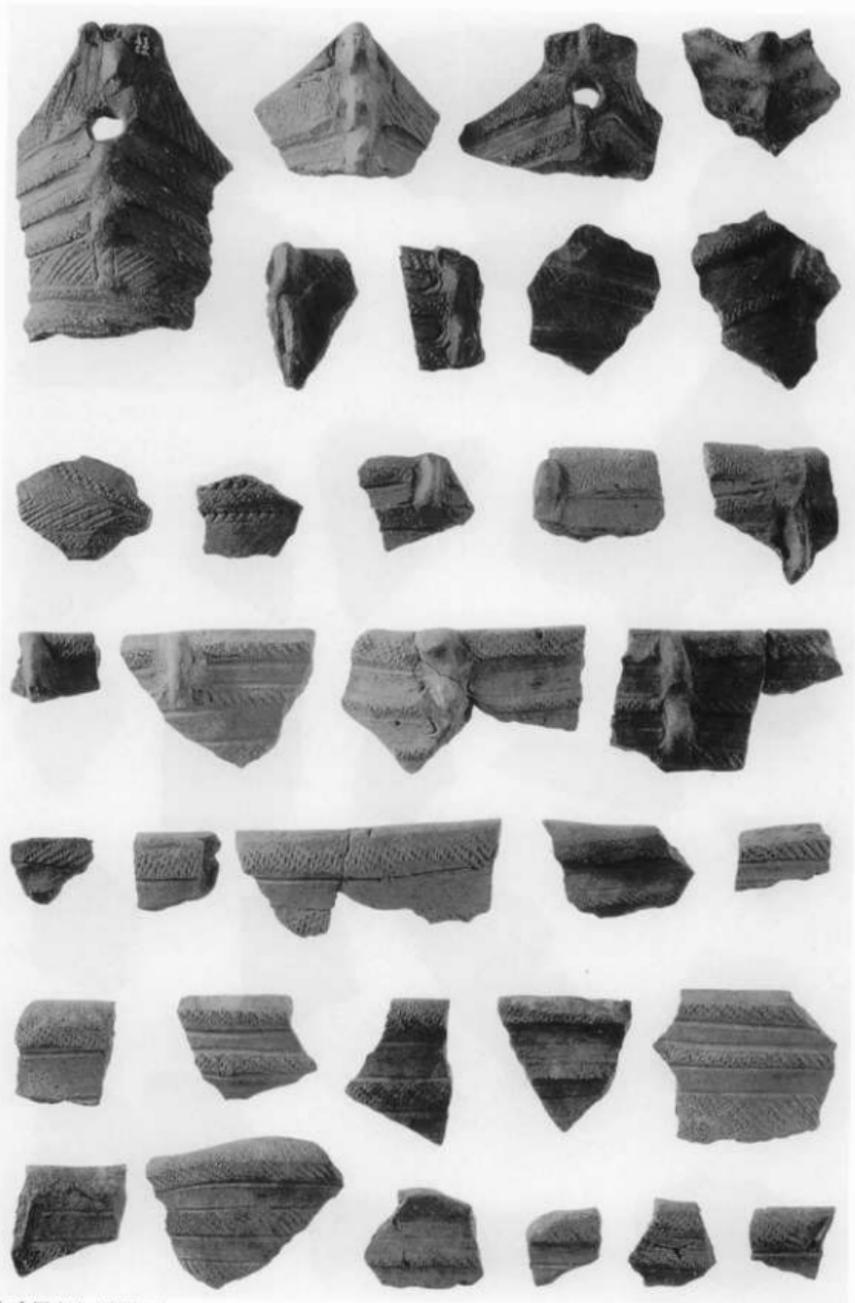
包含層出土土器(4)



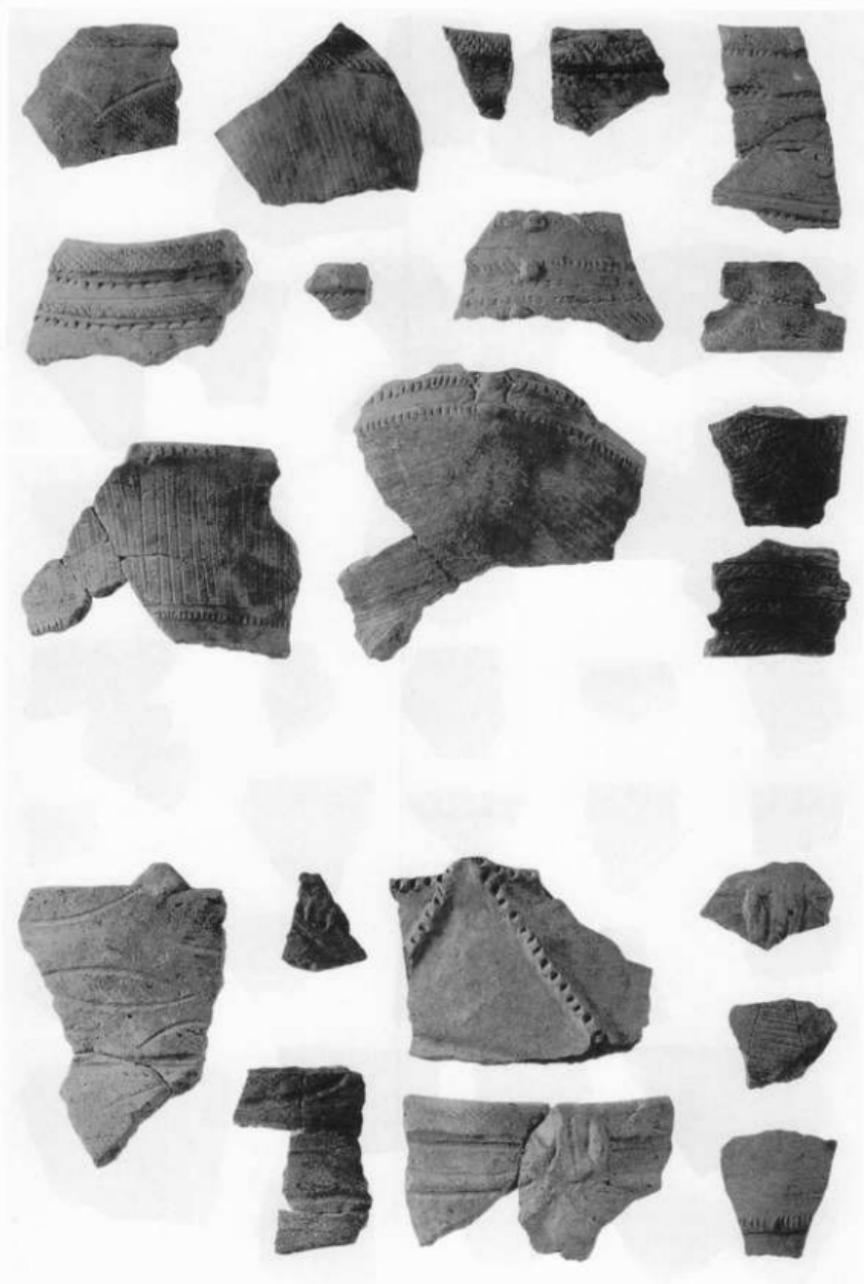
包含層出土土器(5)



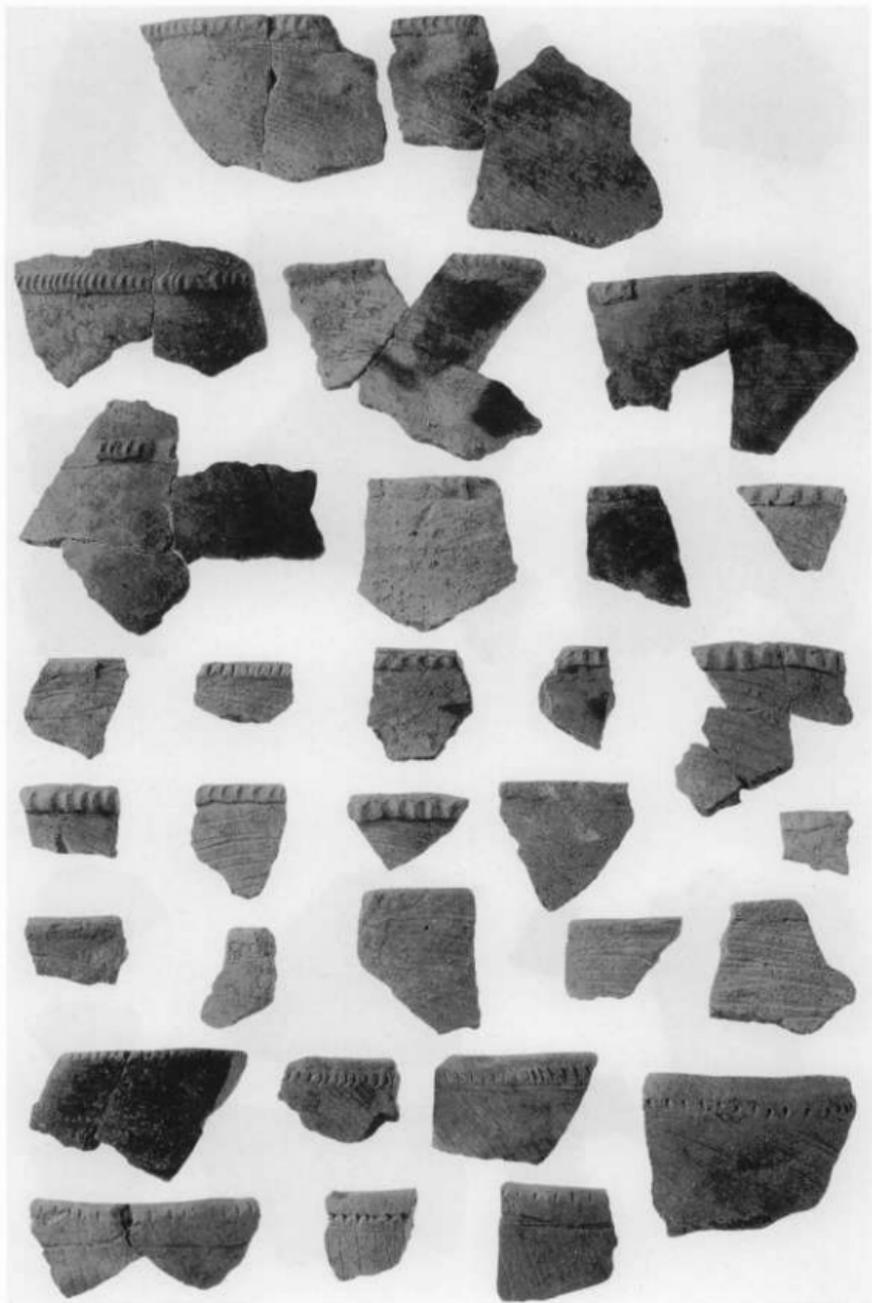
包含層出土土器(6)



包含層出土土器(7)



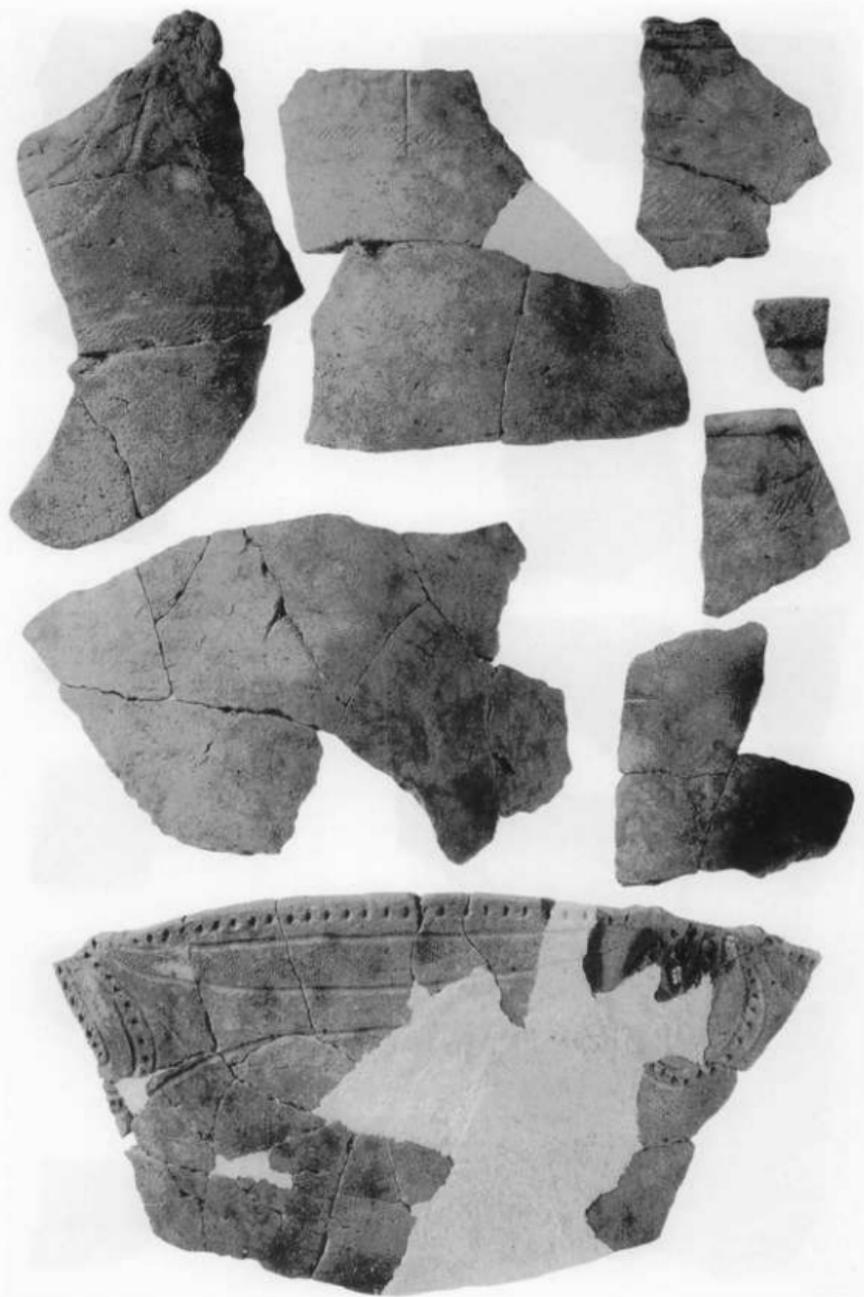
包含層出土土器(8)



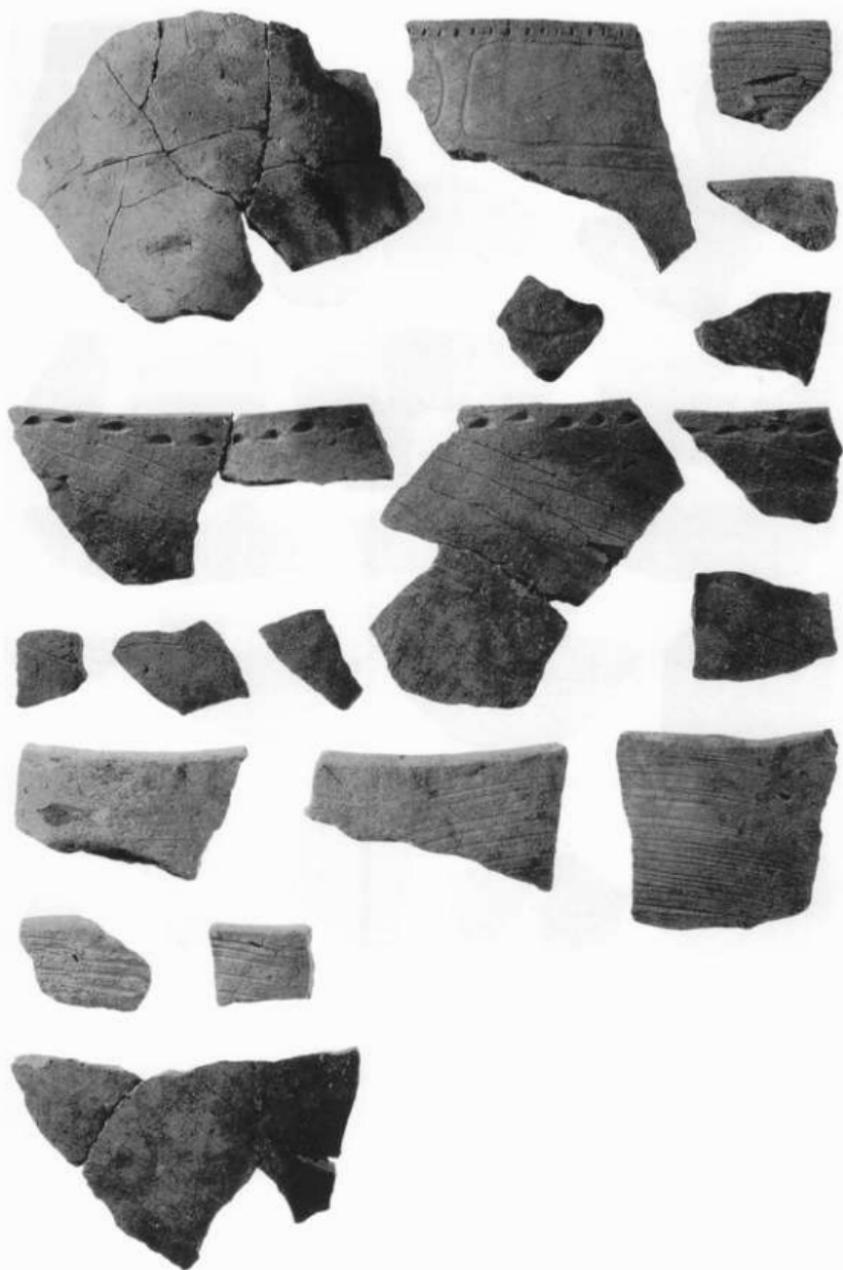
包含層出土土器(9)



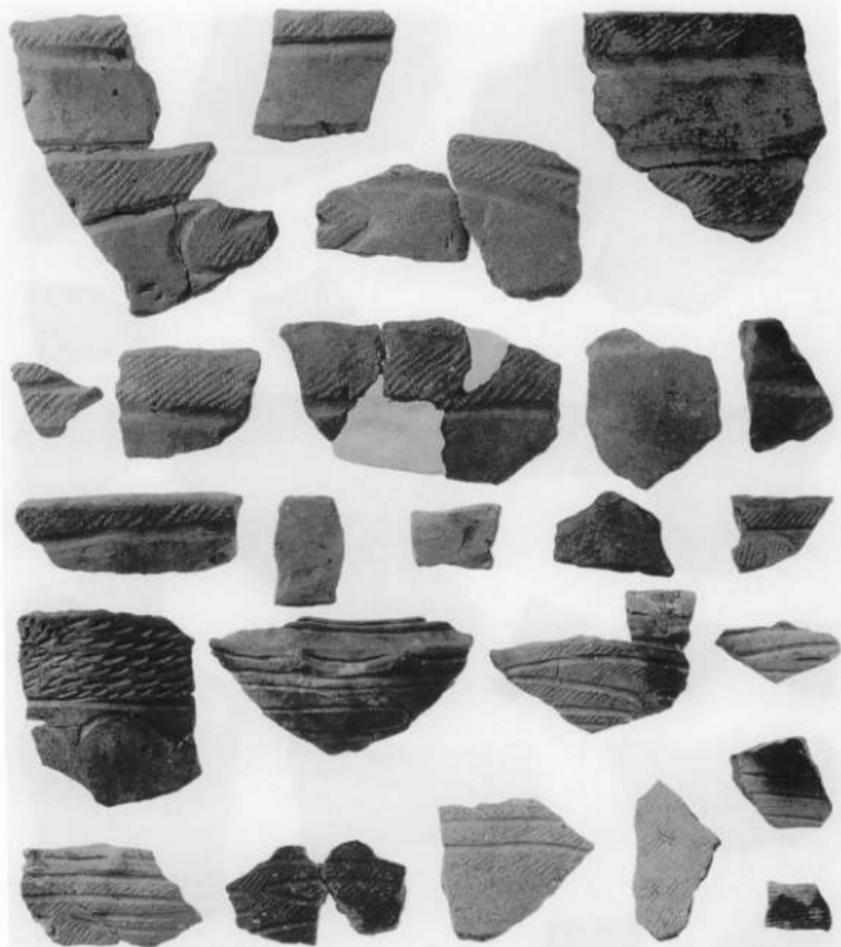
包含層出土土器(10)

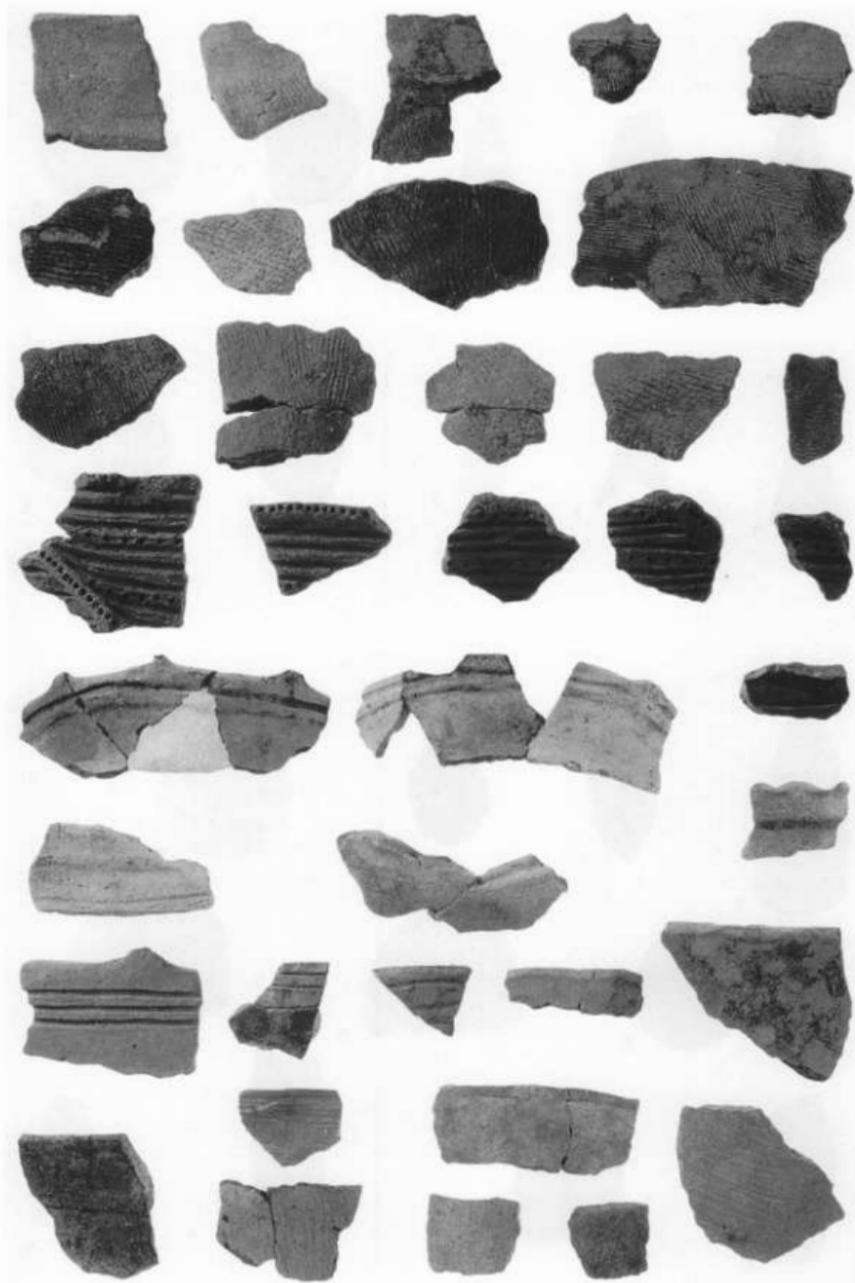


包含層出土土器(11)

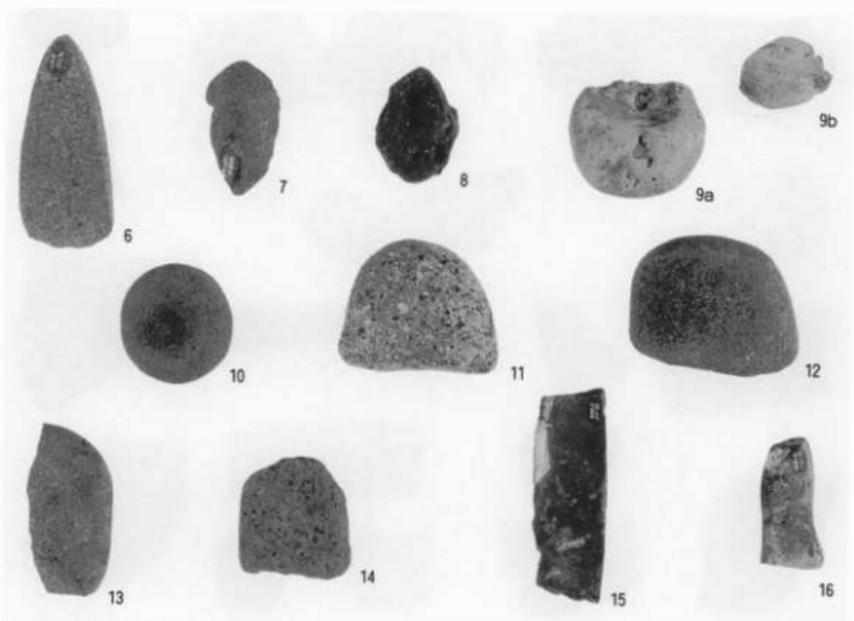
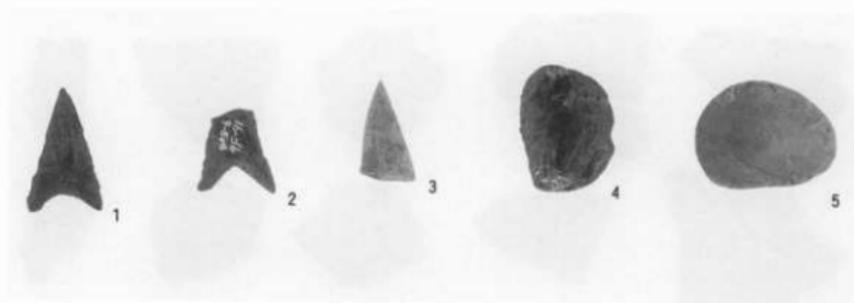
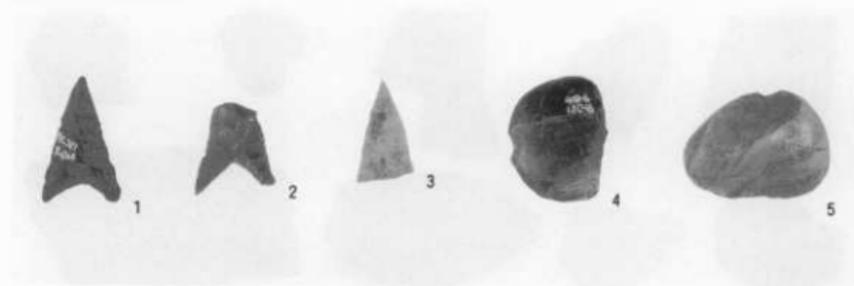


包含層出土土器(12)





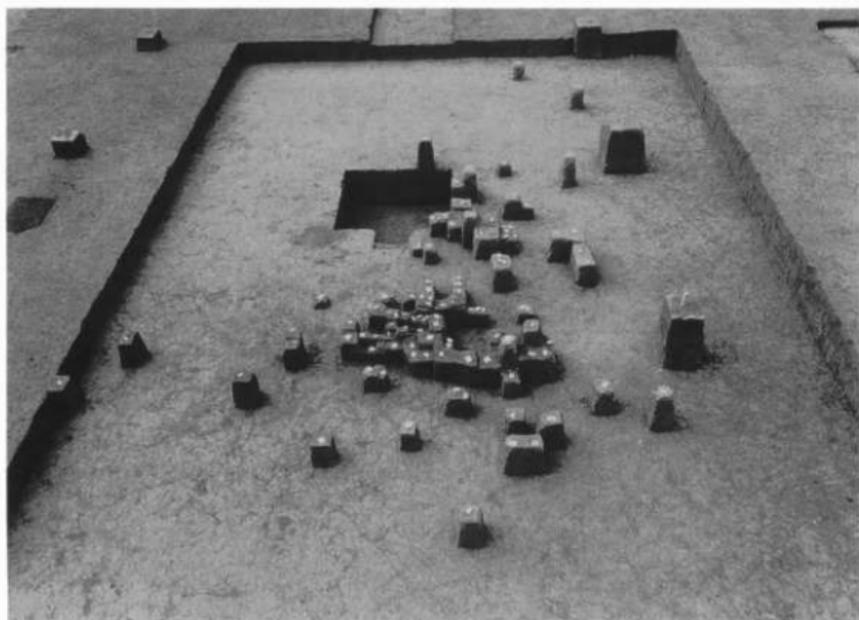
包含層出土土器(14)



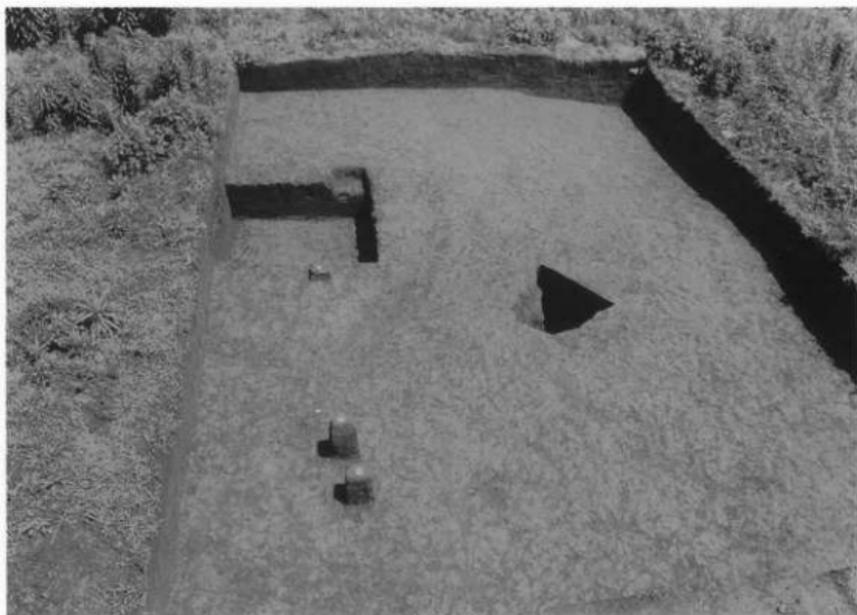
繩文時代以降出土石器(上(表)・中(裏)・下)



第1ブロック石器出土状況



第2・3ブロック石器出土状況



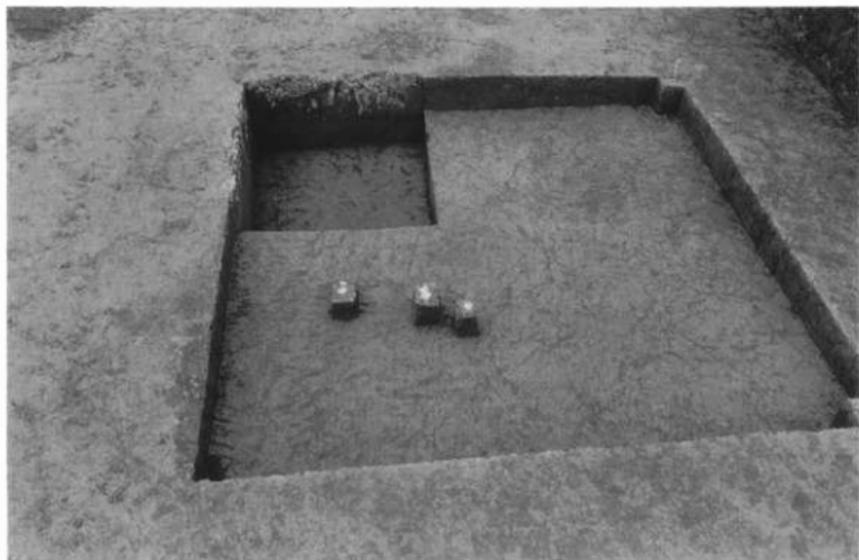
第4 ブロック石器出土状況



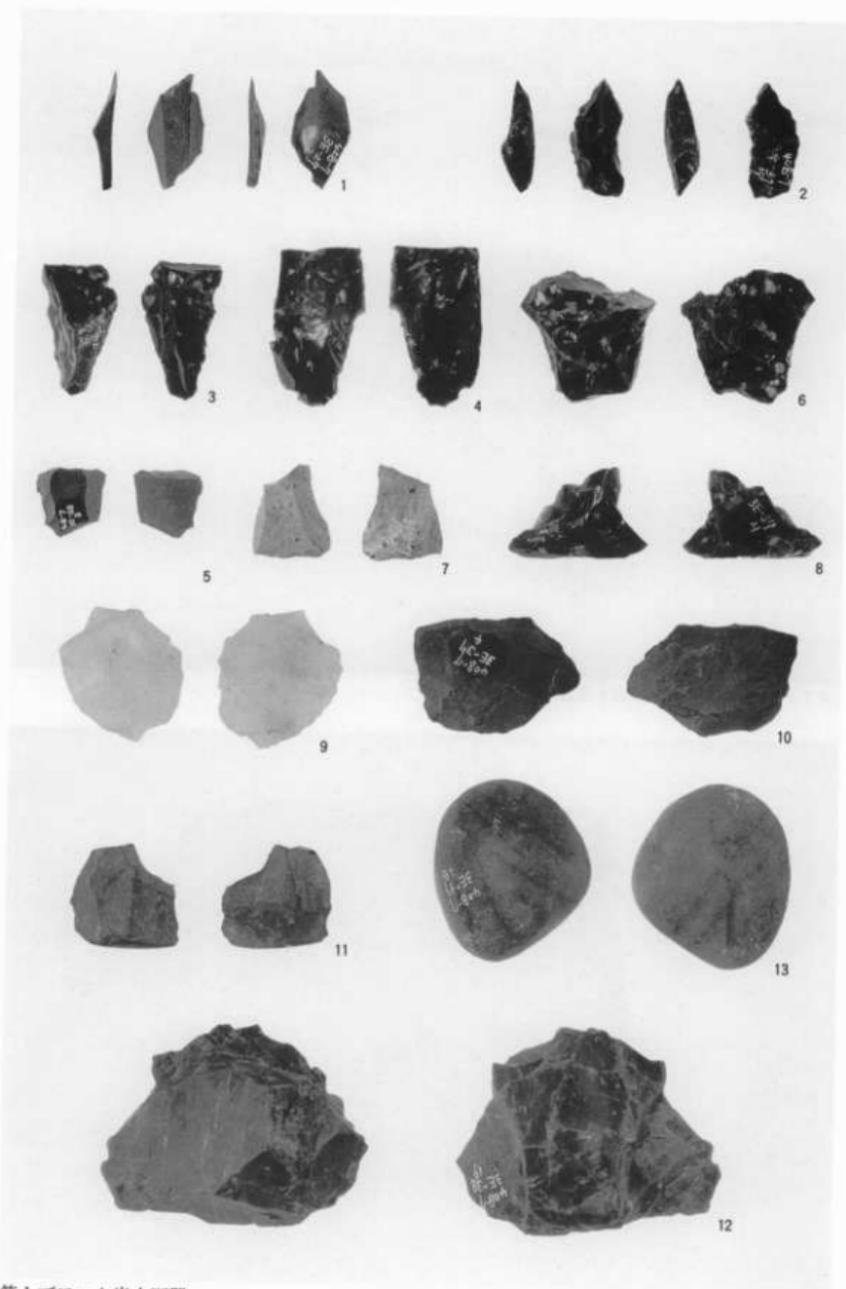
第6 ブロック石器出土状況



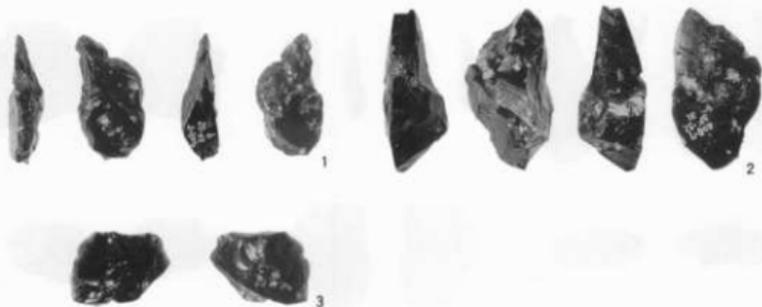
第7・8・9ブロック石器出土状況



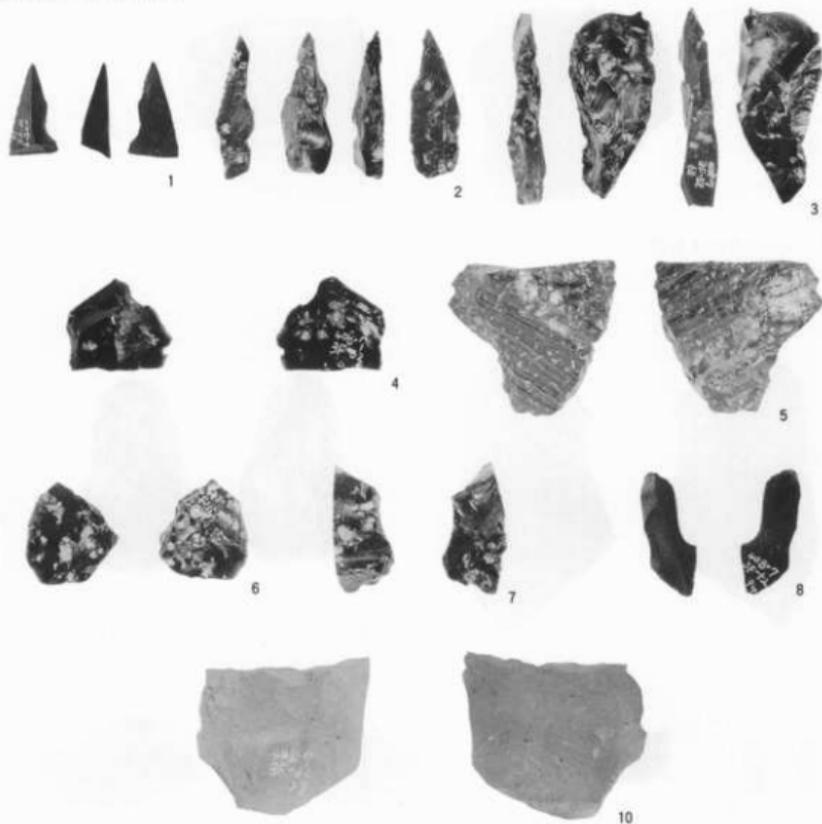
第11ブロック石器出土状況



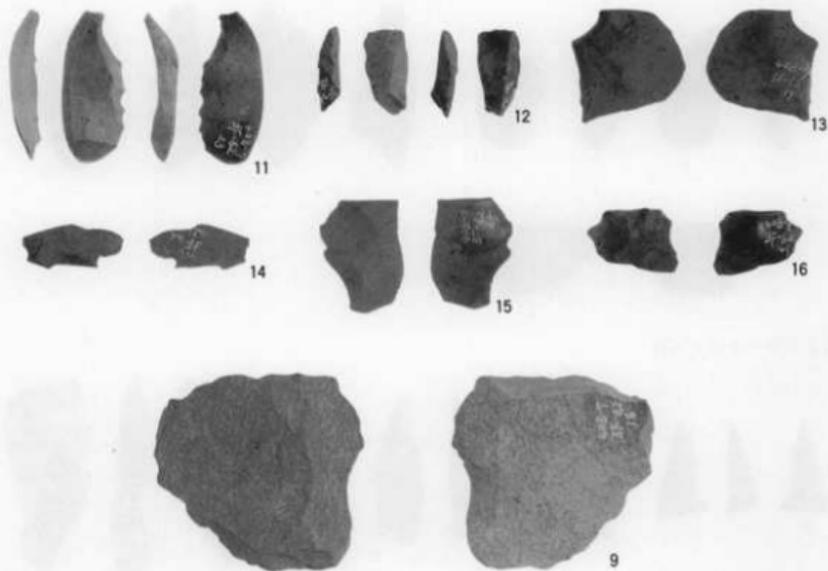
第1ブロック出土石器



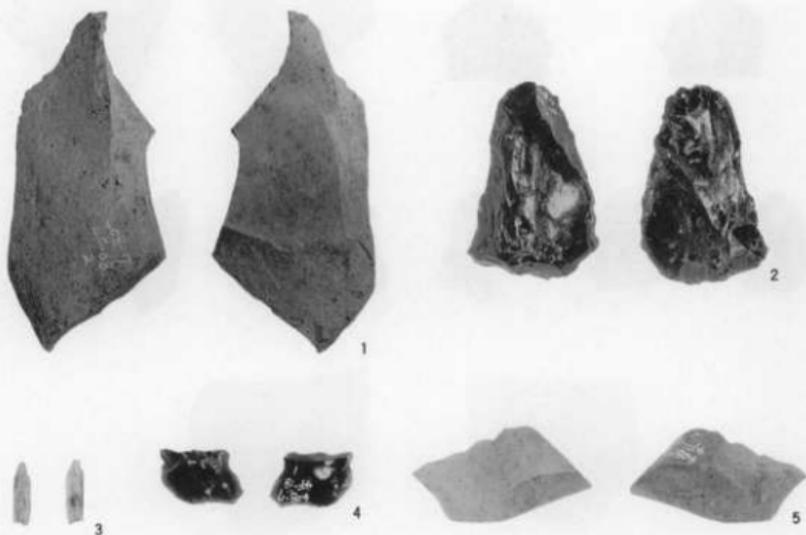
第2ブロック出土石器



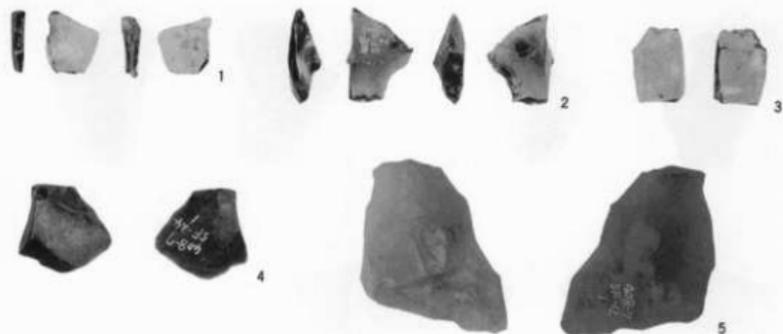
第3ブロック出土石器(1)



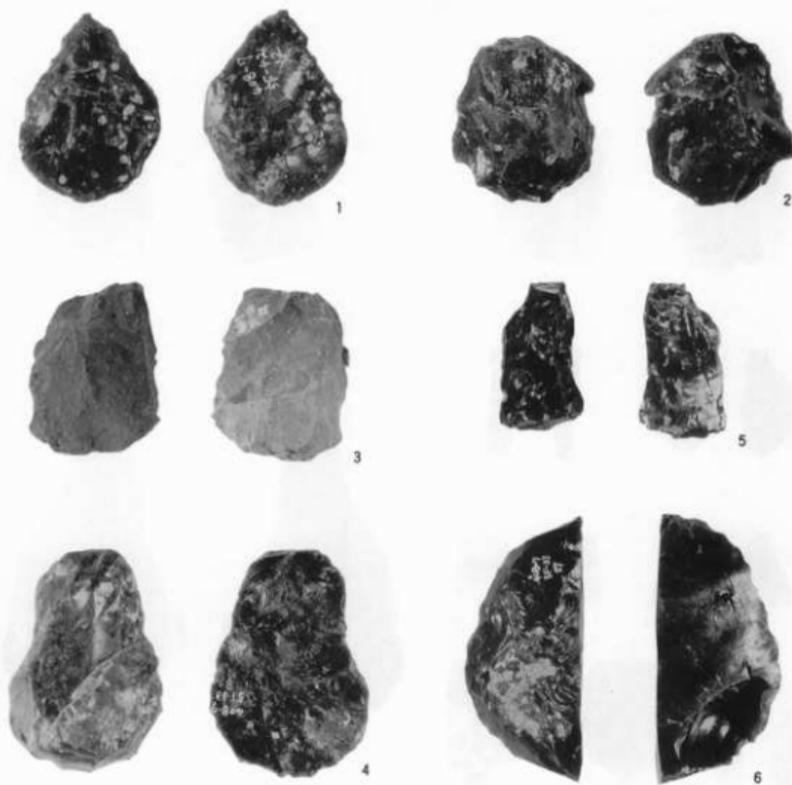
第3ブロック出土石器(2)



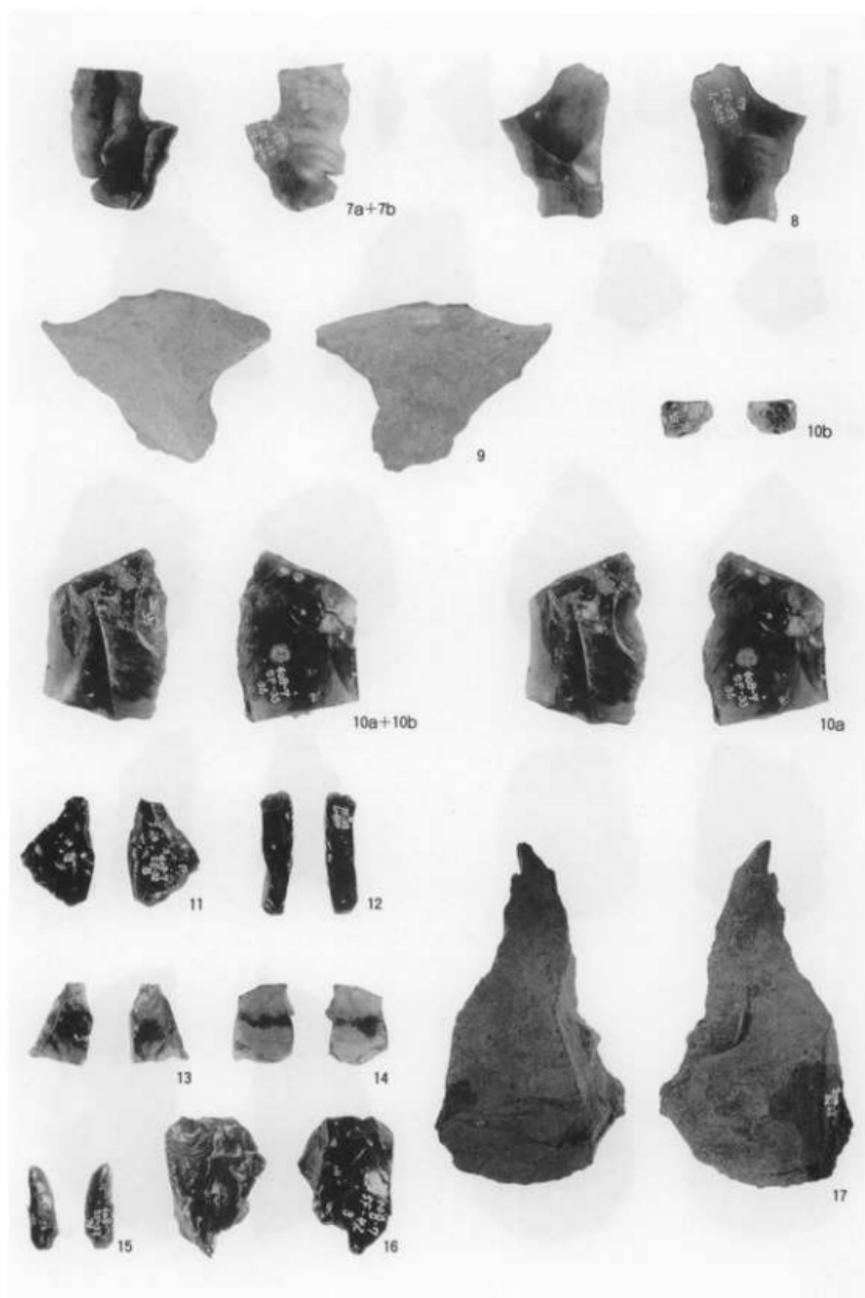
第4ブロック出土石器



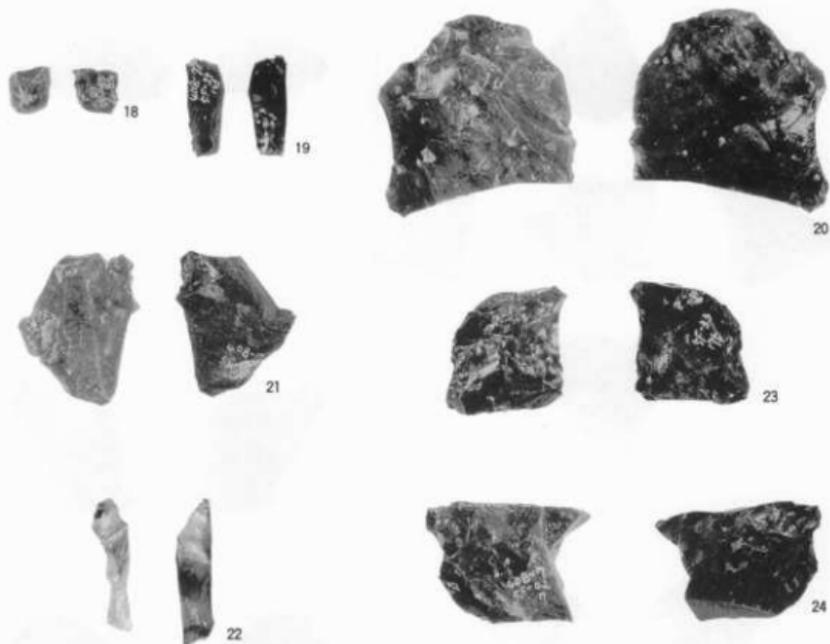
第5ブロック出土石器



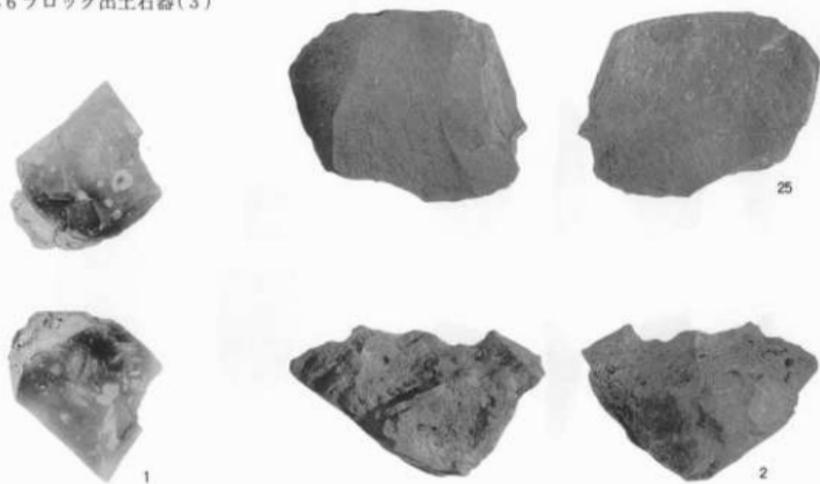
第6ブロック出土石器(1)



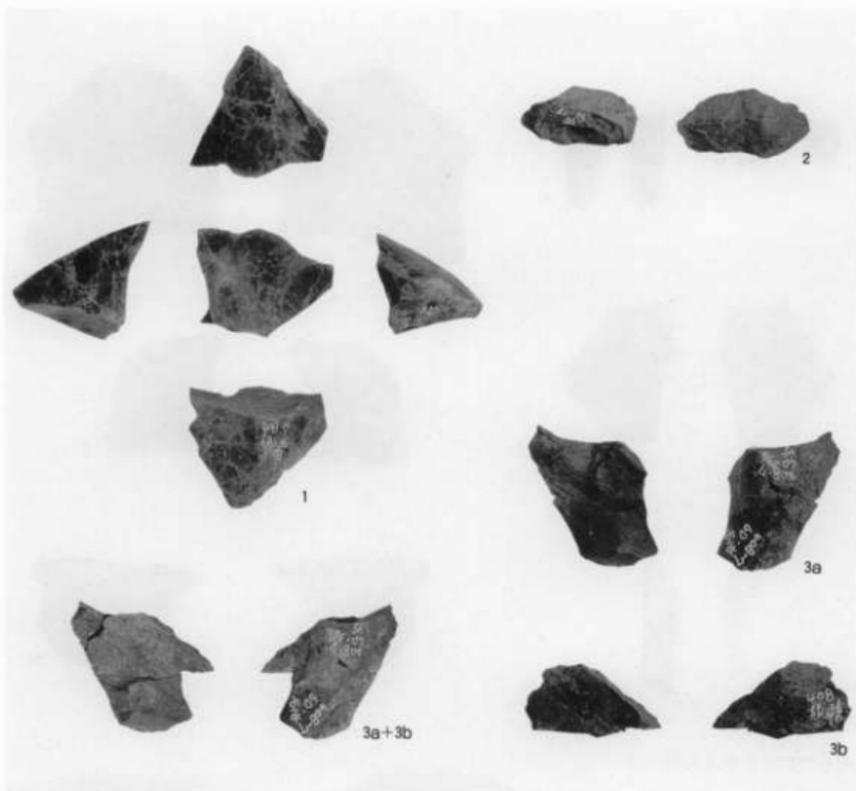
第6ブロック出土石器(2)



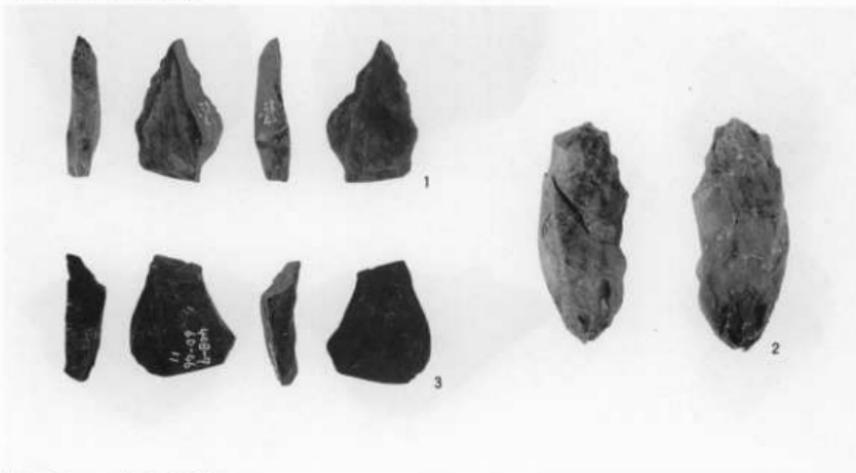
第6ブロック出土石器(3)



第7ブロック出土石器



第8ブロック出土石器



第9ブロック出土石器(1)



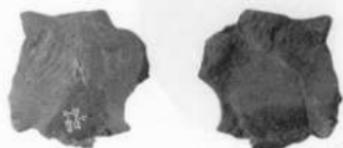
第9ブロック出土石器(2)



第9ブロック出土石器(3)



12a+12b

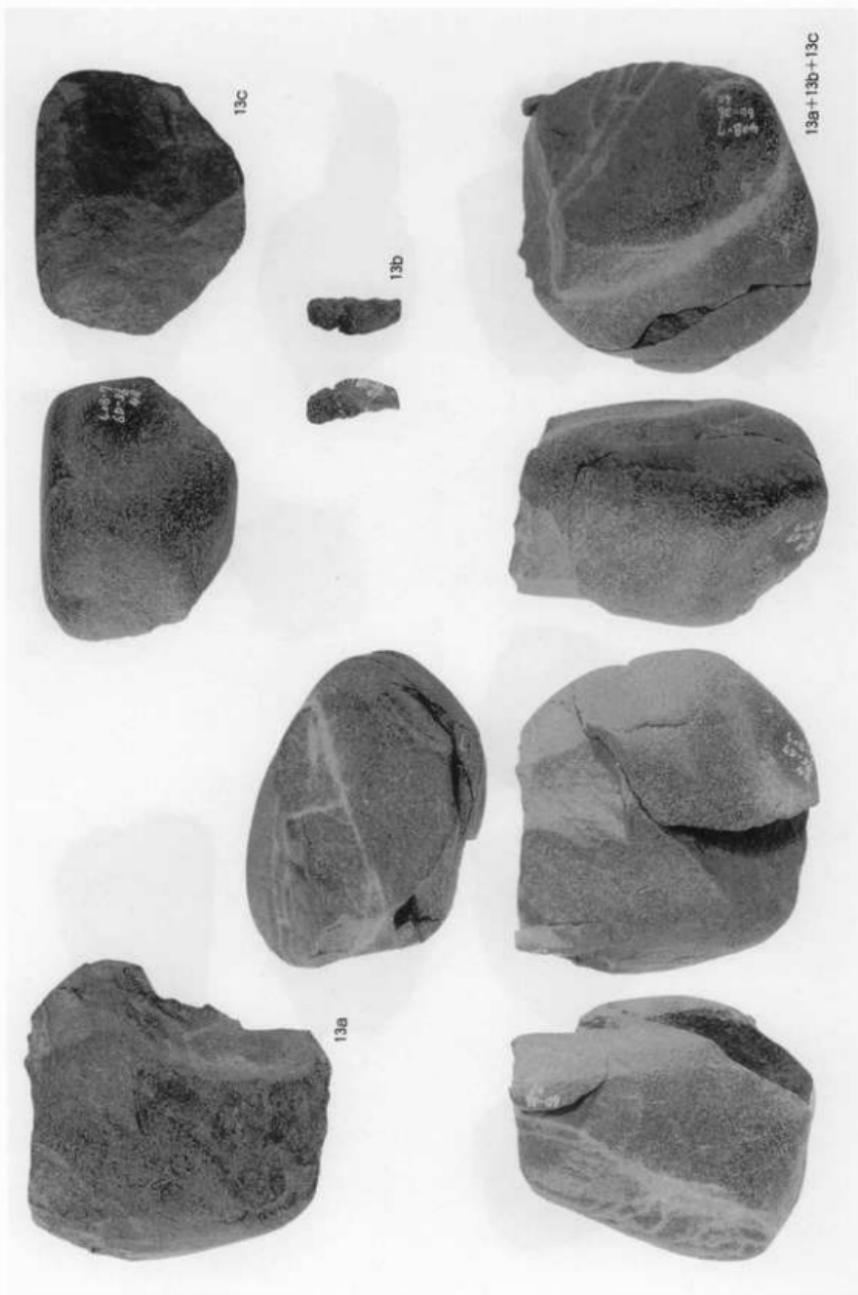


12b



12a





第9ブロック出土石器(5)



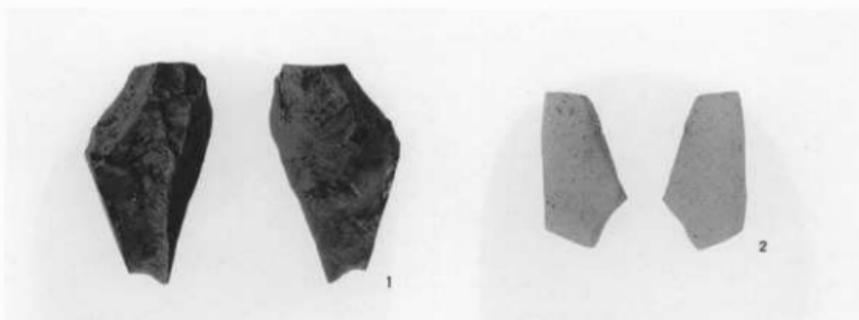
14a+14b+14c



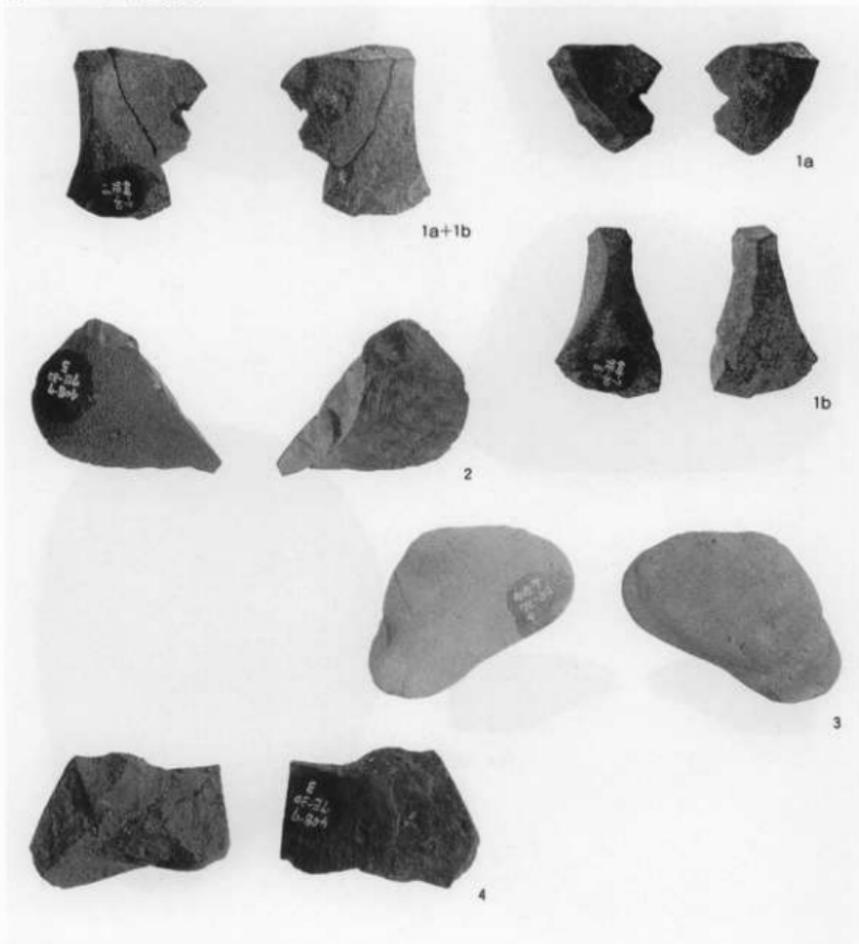
14b+14c



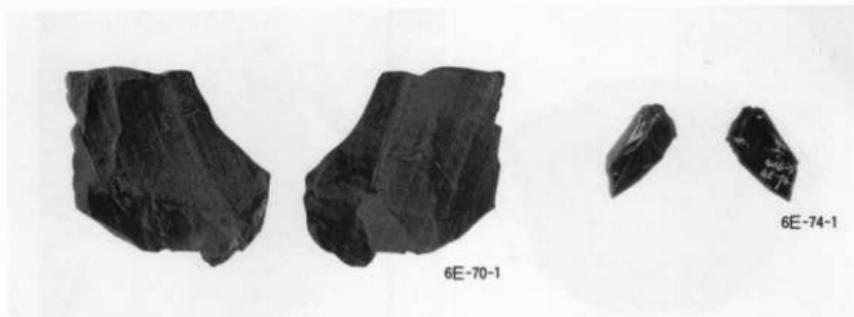
14a



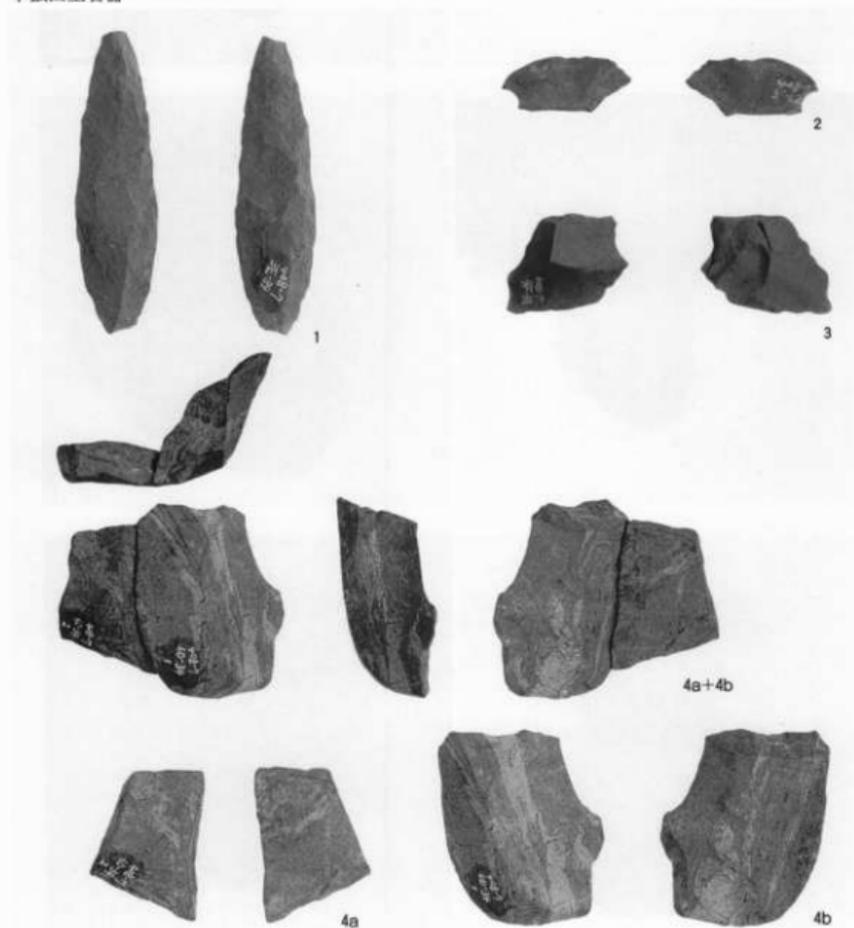
第10ブロック出土石器



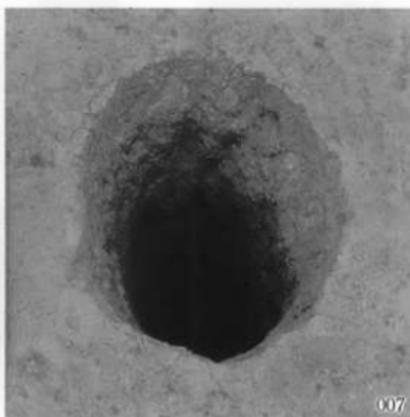
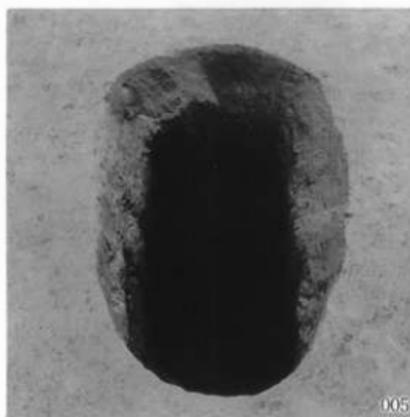
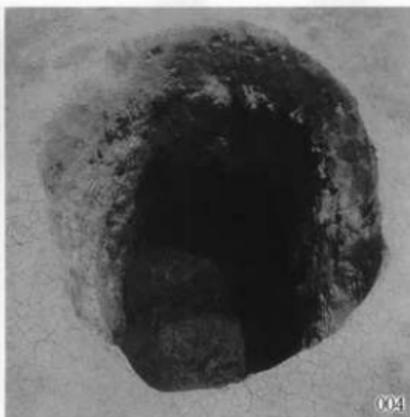
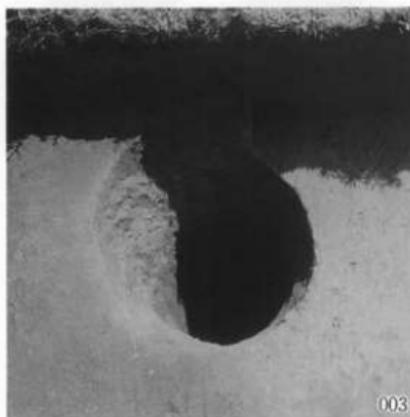
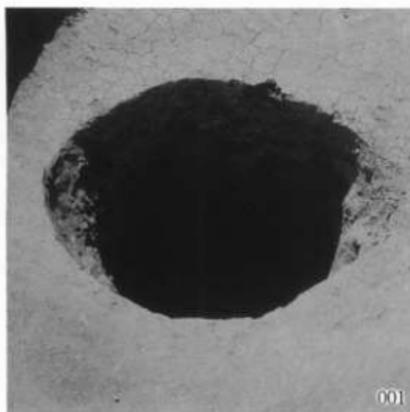
第11ブロック出土石器



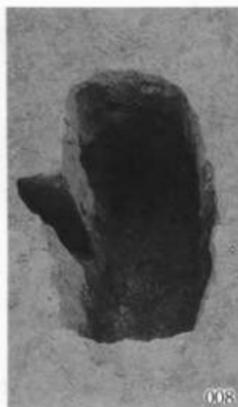
單獨出土石器



表採資料石器



001~005・007陥穴



008



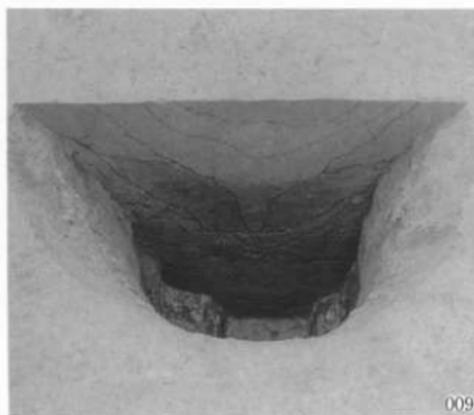
010



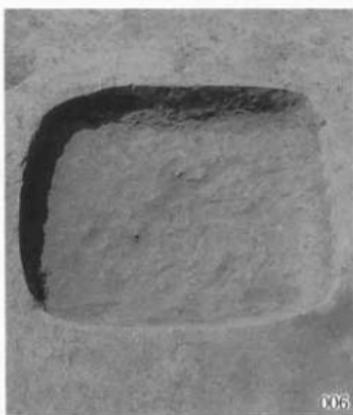
009



010



009



006

008・009陥穴、010炭窯、006土坑



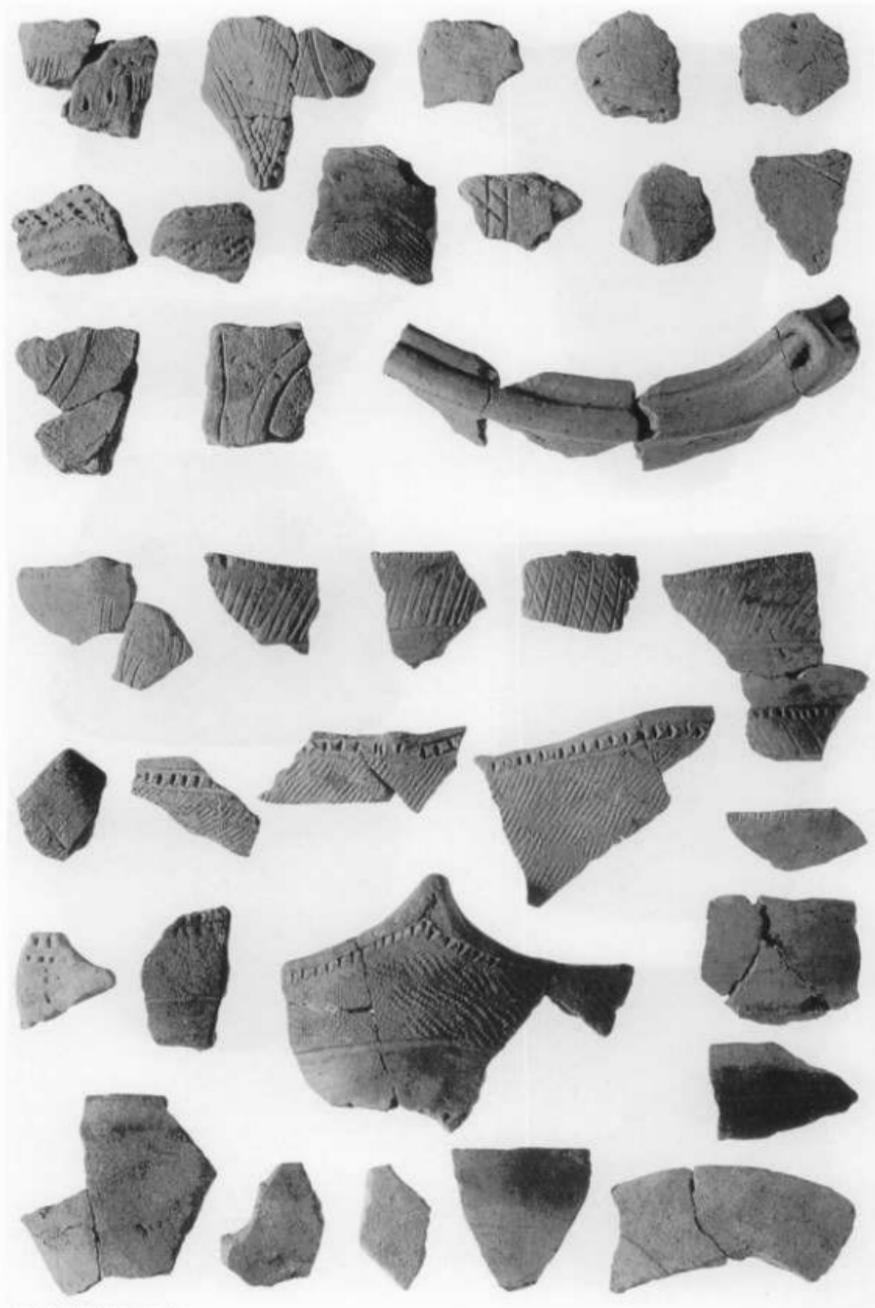
縄文包含層遺物出土状況(1)



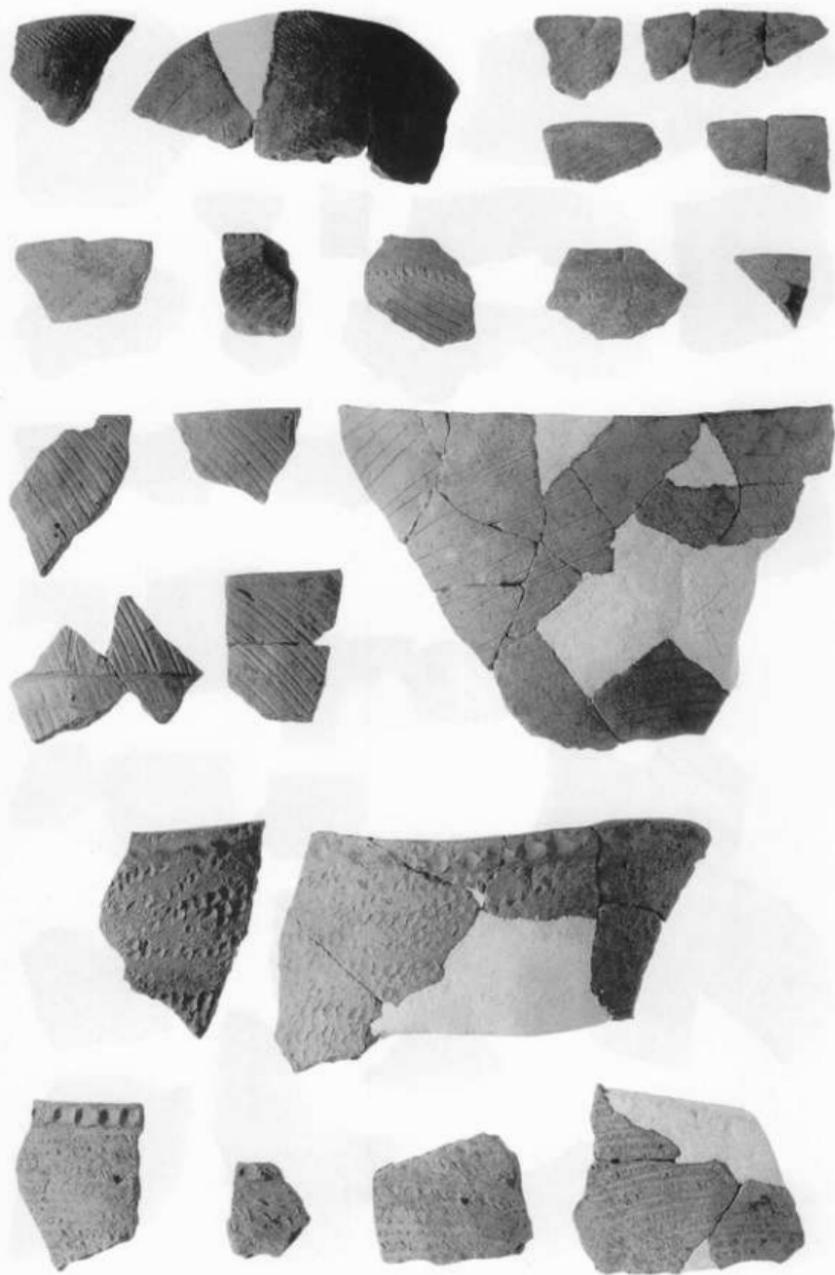
縄文包含層遺物出土状況(2)



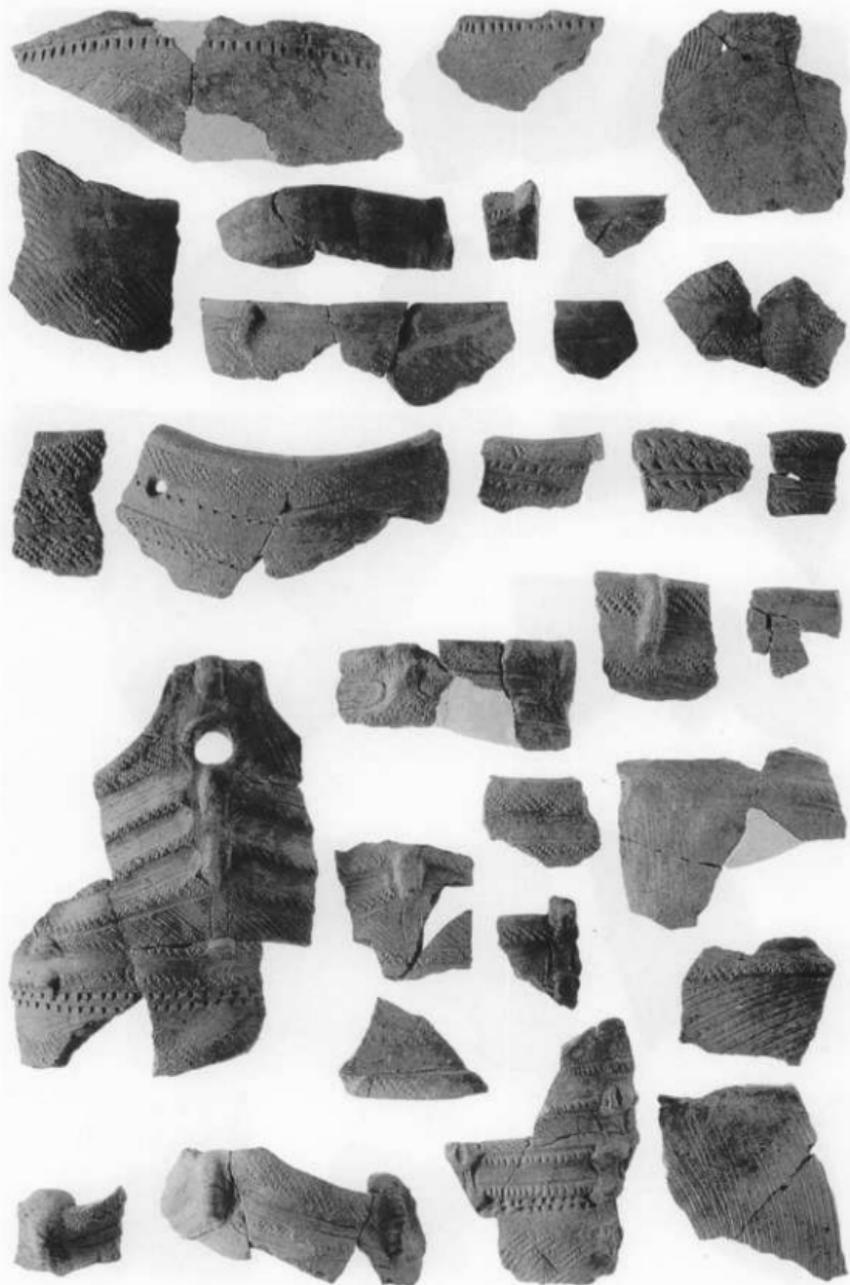
包含層出土土器(1)



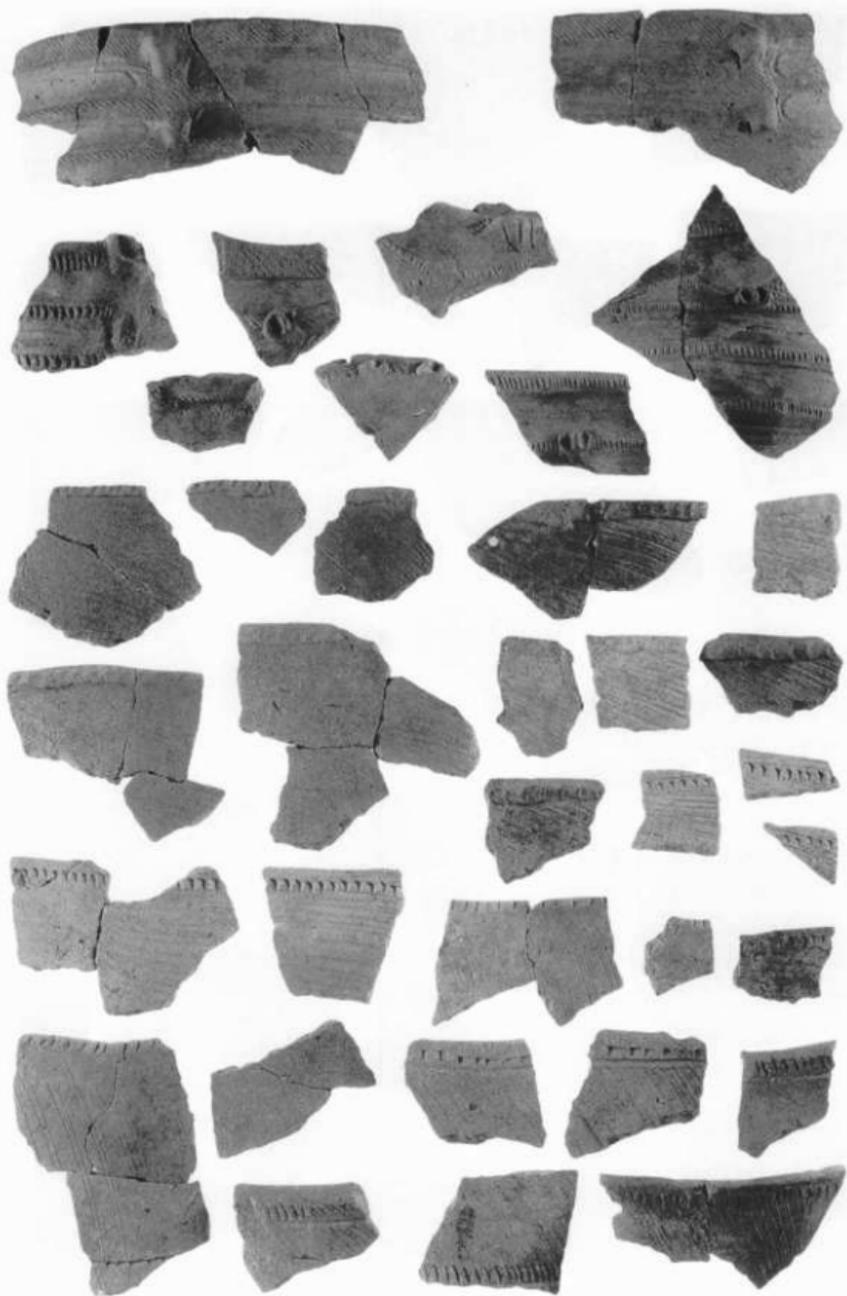
包含層出土土器(2)



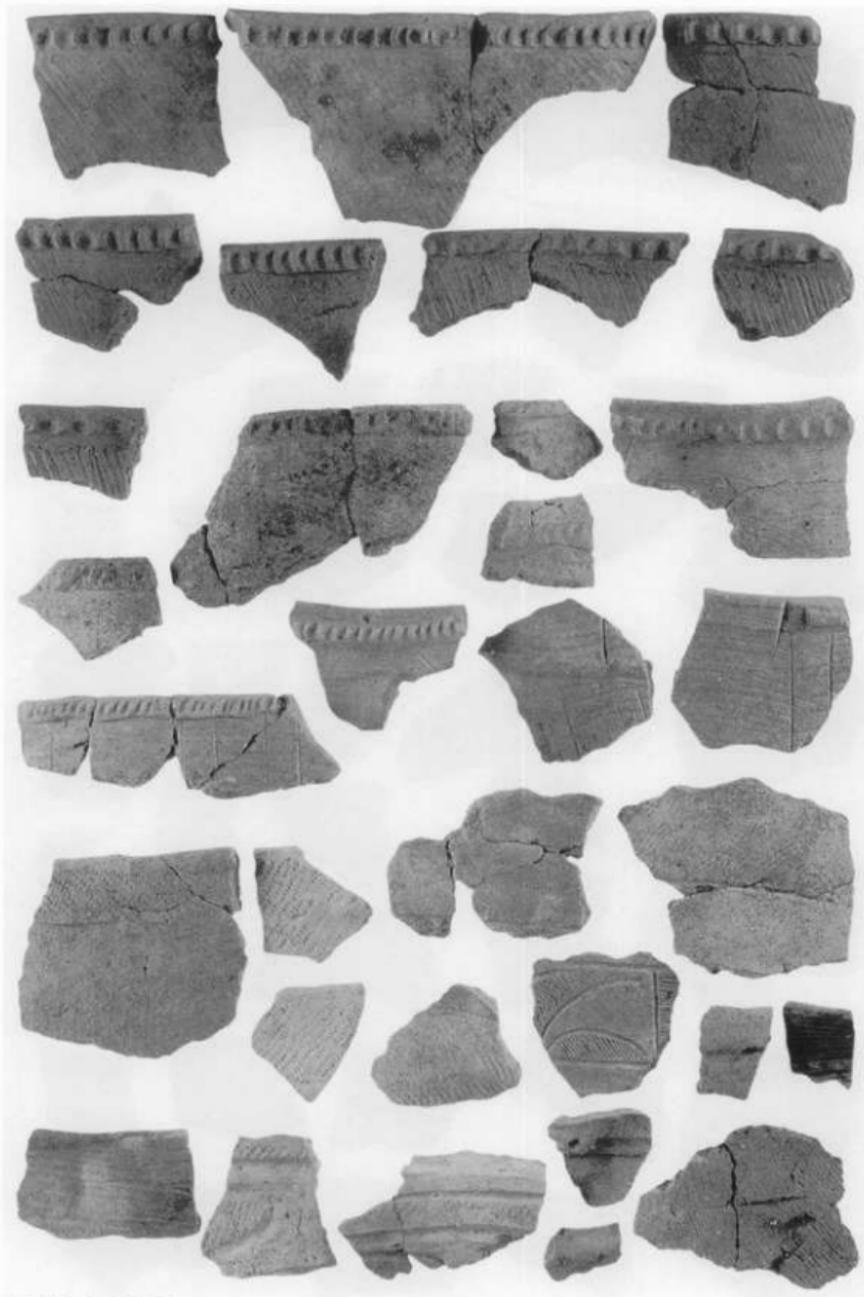
包含層出土土器(3)



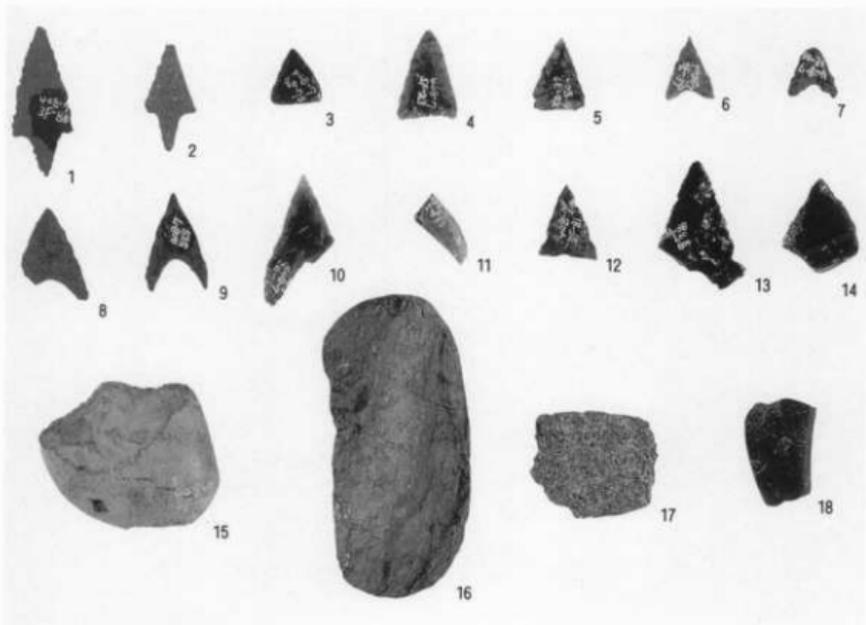
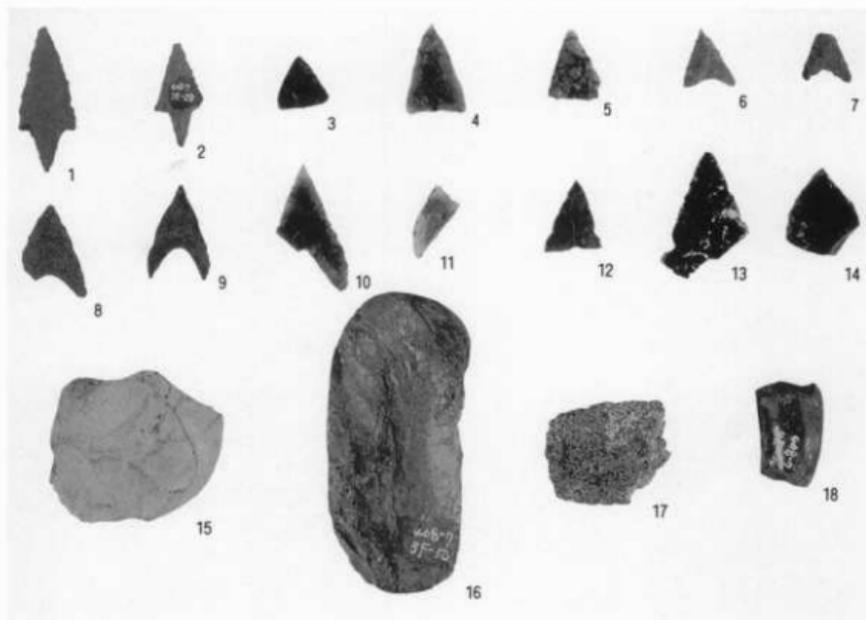
包含層出土土器(4)



包含層出土土器(5)



包含層出土土器(6)



縄文時代以降出土石器(上(表)・下(裏))

千葉県文化財センター調査報告第213集
上仁羅台遺跡・西長山野遺跡・東長山野遺跡
—横芝工業団地埋蔵文化財調査報告書—

平成4年3月25日 印刷
平成4年3月30日 発行

発行 千葉県企業庁
千葉県長洲1-9-1
編集 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡無番地
印刷 大和美術印刷株式会社
木更津市潮浜2-1-10
